岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第358集

宮沢遺跡発掘調査報告書

主要地方道戸呂町軽米線建設事業関連遺跡発掘調査

(財) 岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

宮沢（みやざわ）遺跡発掘調査報告書

主要地方道戸呂町軽米線建設事業関連遺跡発掘調査

序

豊かな自然に恵まれた岩手県には、縄文時代をはじめとする数多くの遺跡や重要な文化財が残されております。これら多くの先人達の創造してきた文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは県民に課せられた責務であります。

一方広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発に伴う社会資本の充実も重要な一施策であります。発掘調査により遺跡が消滅することは、まことに惜しいことではありますが、その反面それまで闇に包まれていた先人達の営みに光明があたるのも事実であります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日的な課題であり、財団法人岩手県文化振興事業団は埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、主要地方道戸呂町軽米線建設事業に関連して、平成11年度に発掘調査を行った軽米町の宮沢遺跡の調査結果をまとめたものであります。宮沢遺跡は、軽米町の西側を北流する雪谷川の支流である宮沢川右岸の丘陵地に立地しており、調査の結果、縄文時代前期・晩期の遺物、弥生時代の遺構と遺物、古代の遺構と遺物などが発見され、貴重な資料を提供することが出来ました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご援助・ご協力を賜りました二戸地方振興局土木部、軽米町教育委員会をはじめとする関係者各位に衷心より謝意を表します。

平成13年2月

財団法人　岩手県文化振興事業団

理事長　千　葉　浩　一

例　言

1．本報告書は岩手県九戸郡軽米町円子第９地割字茸沢13－36ほかに所在する宮沢遺跡の発掘調査の結果を収録したものである。

2．本遺跡の調査は、主要地方道戸呂町軽米線建設事業に関わる事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会文化課と二戸地方振興局土木部との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

3．本遺跡の調査成果は、先に、『現地公開会資料』（平成11年６月19日）、『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成11年度分）』（岩埋文第340集）に発表しているが、本書の内容が優先するものである。

4．岩手県遺跡台帳に登録される宮沢遺跡の遺跡番号と遺跡略号は次のとおりである。

遺跡番号　ＪＦ03－2256※

遺跡略号　ＭＹＺ－99

※調査時の遺跡番号は、ＪＦ03－2246、ＪＦ03－2267であり、調査に際して２遺跡を統合している。その後、軽米町との協議で遺跡台帳における宮沢遺跡の遺跡番号をＪＦ03－2256に変更している。

5．野外調査の調査面積・期間・担当者は次のとおりである。

調査面積：5,260㎡

調査期間：平成11年４月12日～６月30日、調査担当者：阿部勝則・平めぐみ

6．室内整理の期間・担当者は次のとおりである。

整理期間：平成11年11月１日～平成12年1月31日、整理担当者：阿部勝則・平めぐみ

7．遺物の鑑定にあたっては次の方々に依頼した。

石材鑑定：花崗岩研究会（代表矢内桂三）。　炭化材樹種鑑定：早坂松次郎（岩手県木炭協会）。

鉄製品の分析・保存処理：岩手県立博物館。　火山灰の分析：株式会社　古環境研究所。

8．基準点測量は岩手開発測量設計株式会社に委託した。

9．空中写真撮影は東邦航空株式会社に委託した。

10．発掘・整理・調査にあたっては次の方々に御協力・御指導をいただいた（順不同・敬称略）。

中村英俊・佐藤嘉広（文化課）、日下和寿（岩手県立博物館）、千葉啓蔵（久慈市教育委員会）
門嶋知二(二戸市教育委員会)、平内和男・中村恭博・藤田直行・大川茂樹（軽米町教育委員会）
井上雅孝(滝沢村教育委員会)、大崎トセ・大崎正・大崎清志・宮本清志（地権者）。

11．野外作業は次の方々が従事した。

古里幸雄、小野寺さき、福田スミ、高沢ノブ、福田ミツノ、三春ミヨ、日向タカノ、泉山ミサ、
蛇口優子、山田富孝、大清水愛子、横島さつ子、舘下ヨシ、大谷ヨシ、大鳥トキ、大谷敬子、
蒲生正恵、駒目ツエ、工藤テル、佐々木幸子、成山いと、畑沢トキ、日影クニ、荒川サメ、
大川久美子、奥 美智子、中野武男、中野ミヅノ、輪立トシ子、三田アサ、小西タミ、坂脇栄子。

12．室内整理は次の方々が従事した。

岩舘富士子、阿部桂子、千葉秀子、今宮さつき。

13．本報告書はⅠ章　調査に至る経過は二戸地方振興局に原稿を依頼し、Ⅱ～Ⅵ章は阿部勝則（Ⅳ章6･7、Ⅵ章1(7)）・平めぐみ（その他）が分担して執筆した。報告書の編集・校正は阿部が行った。

14．本遺跡の調査で得られた一切の資料は岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

凡　例

1．図版構成は遺構・遺物に分け、遺構図版は遺構の種類毎、遺物図版は出土遺構毎に各種遺物を掲載した。

2．掲載図版の縮尺は以下のとおりである。

　a．遺構図版の縮尺は以下を原則としたが、一部変更したところもあり、各図にスケール・縮尺を付した。
　住居跡の平・断面図：1/50、炉跡・カマドの平・断面図：１/25、土坑の平・断面図：１/40、
　掘立柱建物跡・溝跡・炭窯の平・断面図：1/80。

　b．遺物図版の縮尺は以下を原則としたが、一部変更したところもあり、各図にスケール・縮尺を付した。
　土器：1/3、剥片石器：1/2、礫石器：1/3、金属製品：1/2、銭貨：1/１。

3．写真図版の縮尺ついては、遺構写真図版の縮尺は不定とした。遺物写真図版の縮尺は、概ね図版と同一縮尺になることを基本として編集したが、一部変更したところもあり、各図に縮尺を付した。

4．遺物図版の掲載番号は出土地点ごとに連番とし、写真図版における掲載番号も図版と同一番号とした。

5．掲載遺物にはすべて観察表を付した。観察表内の（　）内の数値は残存値である。

6．層名は遺跡の基本土層をローマ数字（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）、遺構内埋土を算用数字（１・２・３）で表した。

7．土層の色調観察、土器の色調観察は『新版標準土色帖』1990年版（小山正忠・竹原秀雄編・著：1990）に基づいて行った。

8．本文の一部および図版中で、十和田火山起源の降下火山灰を『火山灰アトラス［日本列島とその周辺］』（町田　洋・新井房夫：1992）に従い、次のような略号を用いて表した。
　十和田ａ＝To-a、十和田中掫＝To-Cu、十和田南部＝To-Nb、十和田八戸＝To-H。

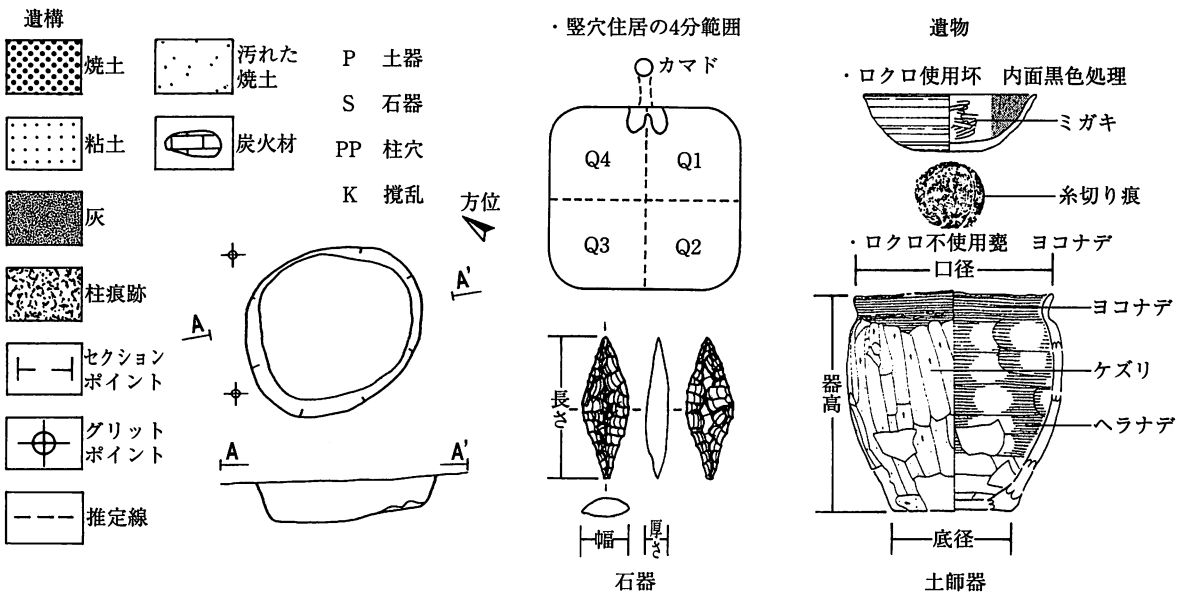
9．土器観察表（土師器）において調整は以下の略号を用いて表記した。
　Ｋ＝ケズリ、ＹＮ＝ヨコナデ、Ｎ＝ナデ、Ｍ＝ミガキ。

10．本書で使用した地形図は以下のとおりである。

　a．建設省国土地理院発行の２万５千分の１地形図「陸中軽米」（ＮＫ－54－18－11－1)・「伊保内」（NK－54－18－11－2)。同５万分の１地形図「一戸」（ＮＫ－54－18－11)・「陸中大野」(NK－54－18－７)。

　b．軽米町発行の５千分の１地形図「軽米町全図２７－２・３」。

11．遺構図版・遺物図版における成形痕、使用痕の図示、図中で使用した記号・スクリーントーンの凡例は下記に示したとおりである。



目　　次

序
例言
凡例
報告書抄録

〈本　　文〉

Ⅰ．調査に至る経過 …… 1
Ⅱ．遺跡の位置と立地 …… 1
　1．遺跡の位置と地理的環境 …… 1
　2．遺跡の立地と周辺の地形・地質 …… 1
　3．基本土層 …… 6
　4．周辺の遺跡 …… 7
Ⅲ．調査・整理の方法 …… 10
　1．野外調査 …… 10
　2．室内整理 …… 11
Ⅳ．検出遺構と出土遺物 …… 13
　1．竪穴住居跡 …… 13
　2．竪穴状遺構 …… 29
　3．土坑 …… 31
　4．焼土遺構 …… 39
　5．掘立柱建物跡 …… 42
　6．溝跡 …… 44
　7．炭窯跡 …… 44
Ⅴ．遺構外の出土遺物 …… 49
　1．土器 …… 49
　2．土製品 …… 49
　3．石器 …… 49
　4．銭貨 …… 49
Ⅵ．考察とまとめ …… 60
　1．遺構 …… 60
　2．遺物 …… 65
　3．総括 …… 72
Ⅶ．分析・鑑定 …… 74
　宮沢遺跡出土火山灰の分析･鑑定 …… 74
職員名簿 …… 109

〈　表　〉

第1表　周辺の遺跡 …… 9
第2表　竪穴住居跡観察表 …… 29
第3表　土坑観察表 …… 31
第4表　焼土遺構観察表 …… 39
第5表　縄文・弥生土器観察表 …… 58
第6表　土師器・須恵器観察表 …… 58
第7表　土製品観察表 …… 59
第8表　石器観察表 …… 59
第9表　金属製品観察表 …… 59
第10表　岩手県内出土の古代の小型土器観察表 …… 70

〈図　　版〉

第1図　岩手県における遺跡位置図 …… 2
第2図　遺跡位置図 …… 3
第3図　遺跡周辺の地形図 …… 4
第4図　周辺の地形分類図 …… 5
第5図　基本土層図 …… 6
第6図　周辺の遺跡 …… 8
第7図　宮沢遺跡遺構配置図 …… 15
第8図　RA01竪穴住居跡 …… 16
第9図　RA02竪穴住居跡 …… 17
第10図　RA03竪穴住居跡 …… 18

第11図　RA04竪穴住居跡 …… 20
第12図　RA05竪穴住居跡(1) …… 21
第13図　RA05竪穴住居跡(2) …… 22
第14図　RA06竪穴住居跡 …… 24
第15図　RA07竪穴住居跡 …… 25
第16図　RA08竪穴住居跡 …… 27
第17図　RA09竪穴住居跡 …… 28
第18図　RE01竪穴状遺構 …… 30
第19図　RD01～04土坑 …… 35
第20図　RD05～11土坑 …… 36
第21図　RD12～16土坑 …… 37
第22図　RD17～20土坑 …… 38
第23図　RF01～08焼土遺構 …… 41
第24図　RB01掘立柱建物跡 …… 42
第25図　RG01溝跡 …… 43
第26図　RZ01炭窯跡 …… 46
第27図　RZ02炭窯跡 …… 47
第28図　RZ03炭窯跡 …… 48
第29図　RA01・02・03出土遺物 …… 50
第30図　RA04・05(1)出土遺物 …… 51
第31図　RA05(2)出土遺物 …… 52
第32図　RA05(3)出土遺物 …… 53
第33図　RA06・07出土遺物 …… 54
第34図　RA08・09、RE01出土遺物 …… 55
第35図　RD02・16・18、RF02・06、8E・8M・9F(1)出土遺物 …… 56
第36図　9F(2)・10F・10G・11A・12B出土遺物、石器、銭貨 …… 57
第37図　宮沢遺跡遺構配置図 …… 61
第38図　炭窯(RZ01・02・03)位置図 …… 63
第39図　炭窯模式図 …… 64
第40図　岩手県内の古代の小型土器出土遺跡の位置図 …… 67
第41図　岩手県内出土の古代の小型土器集成① …… 68
第42図　岩手県内出土の古代の小型土器集成② …… 69

〈写　真　図　版〉

写真図版１　調査区全景 …… 79
写真図版２　調査区近景 …… 80
写真図版３　基本土層 …… 81
写真図版４　RA01竪穴住居跡 …… 82
写真図版５　RA02竪穴住居跡 …… 83
写真図版６　RA03竪穴住居跡 …… 84
写真図版７　RA04竪穴住居跡 …… 85
写真図版８　RA05竪穴住居跡 …… 86
写真図版９　RA06･07竪穴住居跡 …… 87
写真図版10　RA08竪穴住居跡 …… 88
写真図版11　RA09竪穴住居跡 …… 89
写真図版12　RE01竪穴状遺構 …… 90
写真図版13　RD01～04土坑 …… 91
写真図版14　RD05～09土坑 …… 92
写真図版15　RD10～13土坑 …… 93
写真図版16　RD14～17土坑 …… 94
写真図版17　RD18～20土坑 …… 95
写真図版18　RF01～04焼土遺構 …… 96
写真図版19　RF05～08焼土遺構 …… 97
写真図版20　RB01掘立柱建物跡・RG01溝跡 …… 98
写真図版21　RZ01炭窯跡 …… 99
写真図版22　RZ02炭窯跡 …… 100
写真図版23　RZ03炭窯跡 …… 101
写真図版24　RA01・02・03・04出土遺物 …… 102
写真図版25　RA05(1)出土遺物 …… 103
写真図版26　RA05(2)出土遺物 …… 104
写真図版27　RA05(3)・06出土遺物 …… 105
写真図版28　RA07・08(1)出土遺物 …… 106
写真図版29　RA08(2)・09、RE01、RD02・16・18、RF02・06、8E出土遺物 …… 107
写真図版30　8M・9F・10F・10G・11A・12B出土遺物、石器、銭貨 …… 108

報告書抄録

ふりがな	みやざわいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	宮沢遺跡発掘調査報告書
副書名	主要地方道戸呂町軽米線建設事業関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第358集
編著者名	阿部勝則・平めぐみ
編集機関	財団法人　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡11－185　　TEL019－638－9001・9002
発行年月日	西暦　2001年３月19日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
宮沢遺跡（みやざわいせき）	岩手県九戸郡（いわてけんくのへぐん）軽米町円子第（かるまいちょうまるこ）９地割字茸沢（ちわりあさきのこさわ）13－36ほか	3501	JF03 -2256	40度 14分 39秒	141度 28分 37秒	19990412～ 19990630	5,260㎡	主要地方道戸呂町軽米線建設事業に関わる緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮沢遺跡	集落跡	弥生 平安 近世以降 現代	竪穴住居跡　３棟 竪穴住居跡　６棟 竪穴状遺構　１棟 土坑　20基 焼土遺構　８基 掘立柱建物跡１棟 溝跡　１条 炭窯跡　３基	縄文土器 （前期･晩期） 弥生土器 土師器･須恵器 土製品 石器 金属製品 銭貨 鉄滓	平安時代の竪穴住居跡から小型の手づくね土器５点がまとまって出土 戦後～現在にわたって営まれた炭窯３基

Ⅰ．調査に至る経過

軽米町にある宮沢遺跡は「新幹線関連道路整備事業宮沢工区」の施工に伴って、その事業区間内に位置することから発掘調査を行うこととなった。

東北新幹線の二戸駅が開業に向けて工事着手された。新しい二戸駅は、県北地域の交通の結接点として位置づけられ、周辺地域から多くの人々が集まると予想されている。その中で主要地方道戸呂町軽米線は、久慈地域からのアクセス道路としておおきな役割を担うと期待されている。ところが本路線は途中円子地区において大きく迂回する形状となっていて、時間的、経済的に大きな損失が生じている。そこで、これからの交通量の増大や、交通の円滑化、安全確保のために、宮沢地区にバイパスを建設することになった。

本工事区域内の埋蔵文化財包蔵地については平成10年５月27日、文書にて岩手県教育委員会に分布調査を依頼し、同６月10日に岩手県教育委員会によって試掘調査が行われた。その結果相当量の土器の散布などが確認され、記録保存のための発掘調査が必要との結論に達した。本格的な発掘調査は平成11年4月12日から同６月30日までの予定で行い、報告書作成に係る室内整理作業は同年度の冬期間に行うこととした。

Ⅱ．遺跡の位置と立地

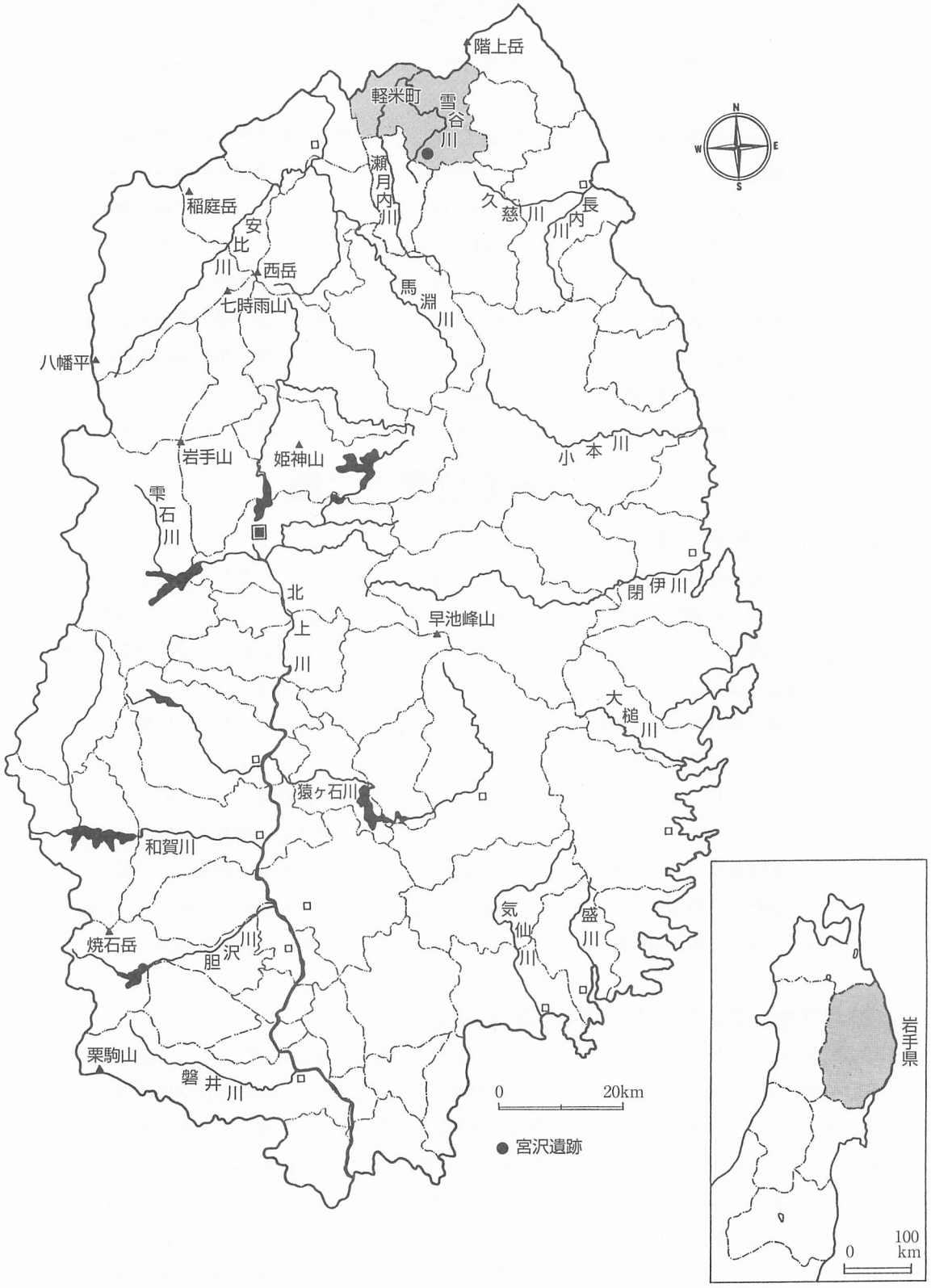
１．遺跡の位置と地理的環境（第１・２図）

本遺跡の所在する軽米町は岩手県の最北端に位置し、東は岩手県種市町と大野村、南は山形村と九戸村、西は二戸市と接し、北は青森県名川町、南郷村、階上町と接する。面積約242.574ｋ㎡、人口約１万２千人の県境の町である（註１）。町域の現況は山地率78%、林野率78%と自然に覆われ、農業・林業を主体としている。年間の平均気温は８℃～９℃で、最低月平均気温を示す１月は例外なく－３℃以下を示す冷温帯の気候である。年間の降水量は1,000㎜前後と岩手県内で最も少ない地域である。また夏には寒い東風が冷害をもたらす、いわゆるやませの多い地域で、江戸時代には凶作を度々もたらしている。宝暦５年（1755）には行方不明者・餓死者2,511人と『八戸藩日記』に記され（註２）、その惨状は今でも同町で言い伝えられている。近年では平成10年(1998年)の山林火災、平成11年(1999年)の大洪水と大規模災害の記憶も新しい。

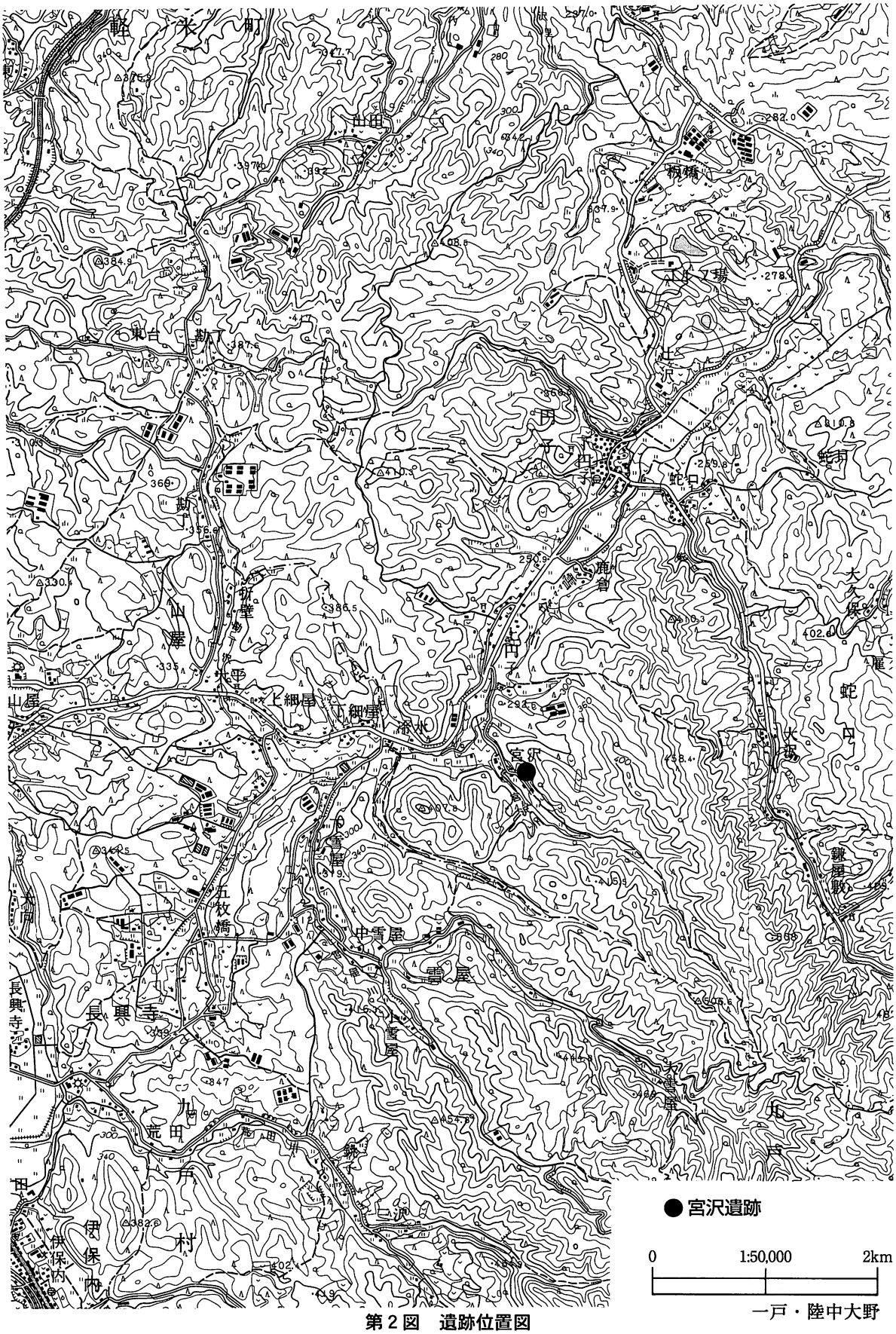
宮沢遺跡は九戸郡軽米町円子第９地割字茸沢13－36ほかに所在し、東北縦貫自動車道八戸線九戸インターチェンジの東約６㎞付近に位置する。同地点は北緯40度14分39秒、東経141度28分37秒付近に位置し、国土地理院発行２万５千分の１地形図「伊保内」、同５万分の１地形図「一戸」の図幅に属する。

２．遺跡の立地と周辺の地形・地質（第３・４図）

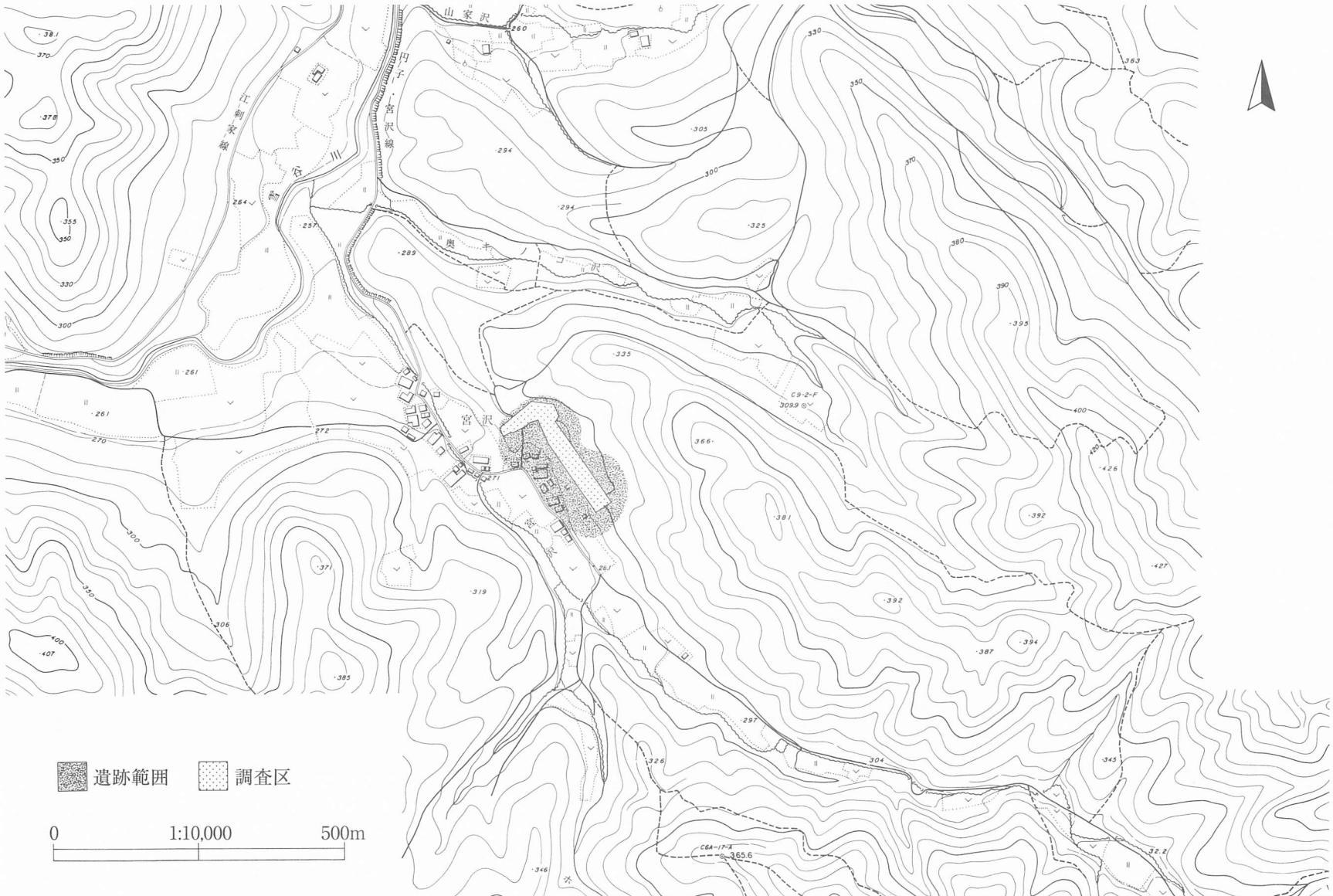
軽米町は、北上山地の北側中央部に位置しており、町域の北東端に階上岳（740m）、久慈平岳（706m）、南端に靄岳（567m）、西端に折爪岳（852m）などの低い山々が連なり、全域は標高200～400mの準平原的丘陵地帯となっている。平地は河川に沿って細長く発達した沖積地が僅かに見られる程度で、集落や耕地も同所に開けている。本遺跡の西側には標高852.2mの折爪岳を中心とする山地がほぼ南北に延び、東側はその山々とほぼ平行するかたちで瀬月内川と丘陵地を挟んで東側に雪谷川が北流する。この二つの河川は北方約12km先にある同町内の長倉地区において合流し八戸へと注ぐ。折爪岳の東麓は、裾野部分がより低い丘陵部に接しているが、この丘陵部は、古生層の粘板岩とチャートからなる崖錐性堆積物を基盤とする複合扇状地である。この基盤層の上には、火山灰土（八戸火山灰層）が厚く堆積し、更にその上には下位から、南部浮石・中掫浮石・十和田ｂ・十和田a・白頭山－苫小牧などの火山灰がのる。表層地質は、雪谷統・盆花



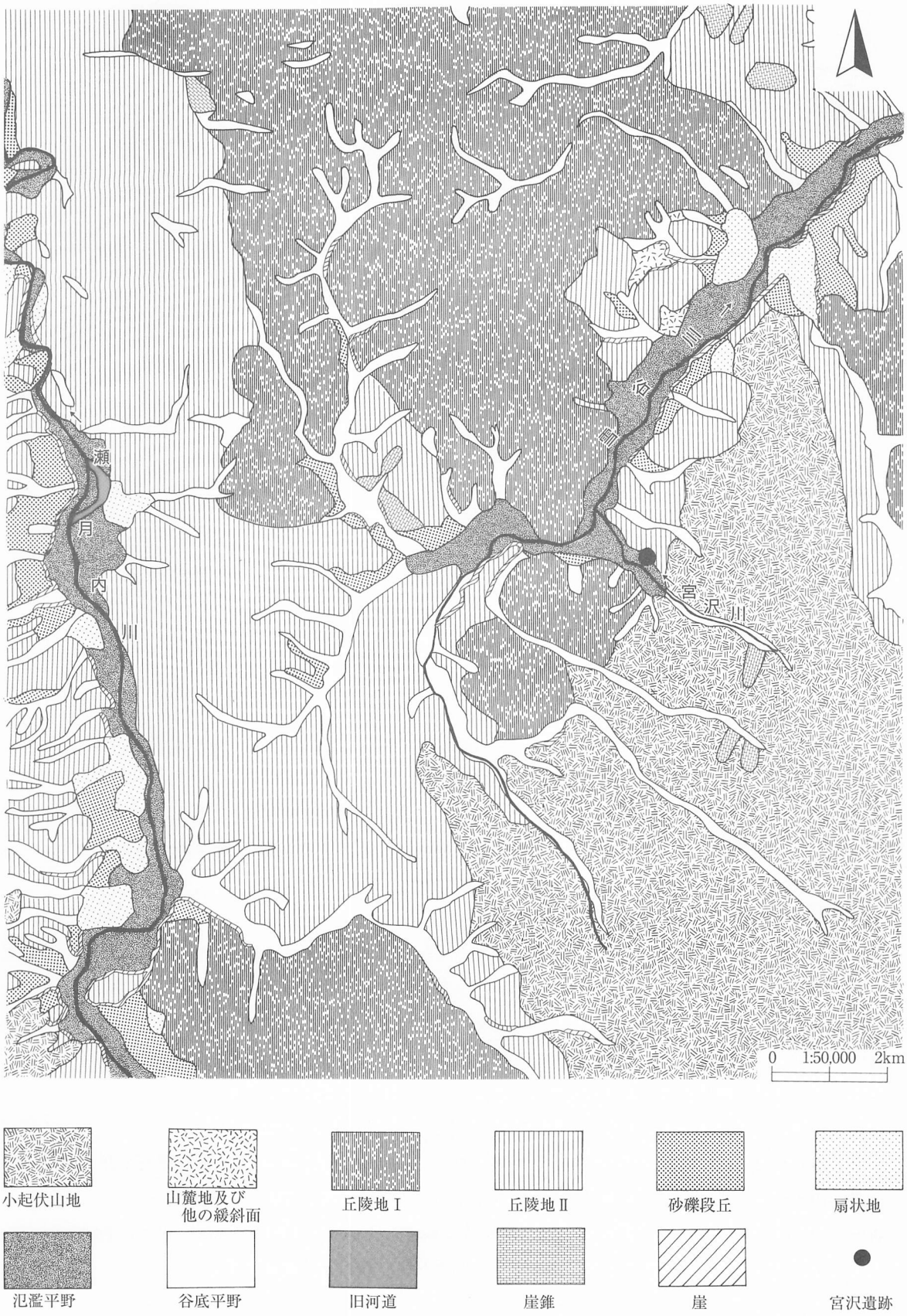
第１図　岩手県における遺跡位置図



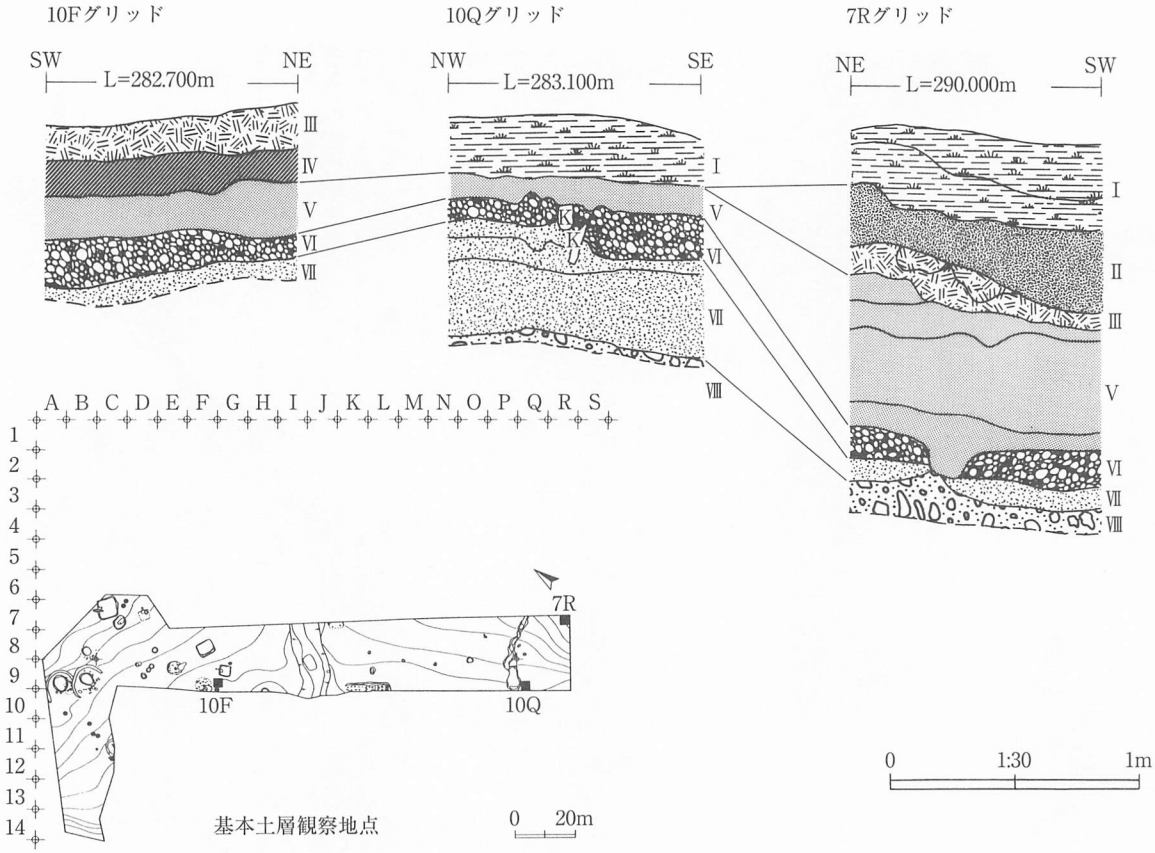
第２図　遺跡位置図



第３図　遺跡周辺の地形図



第４図　周辺の地形分類図



第５図　基本土層図

統と呼ばれる黒ボク土壌である。

宮沢遺跡は雪谷川の支流である宮沢川の右岸の丘陵地に立地する。標高は約280～290mで、雪谷川に向かって北流する宮沢川右岸の緩い南斜面である。周辺には宮沢川に流れ込む沢がいくつか見られ、調査区の中央にも沢跡が確認できる。遺跡の現況は山林と畑地である。遺跡の範囲は南北に約270m、東西に約130m、総面積は約32,100㎡である。今回の調査区は主要地方道戸呂町軽米線の建設道路路線部分5,260㎡である。

３．基本土層（第５図　写真図版３）

調査区が広範囲であるため３箇所で基本土層の確認を行った。地点により後世の改変を受け、堆積状況に若干の差がみられるが、下位に八戸火山灰層があり、基盤は八戸浮石流凝灰岩であることは共通している。

Ⅰ層　10YR2/3　黒 褐 色　層厚10～30cm　締まり疎、現表土で耕作土である。

Ⅱ層　10YR2/1　黒　　色　層厚10～20cm　締まり中、旧表土で遺物を包含する層である。

Ⅲ層　10YR3/3　暗 褐 色　層厚10～15cm　締まり中、中掘浮石層相当である。

Ⅳ層　10YR2/1　黒　　色　層厚0～15cm　締まり中、南部浮石を２％未満包含する。

Ⅴ層　10YR4/2　灰黄褐色　層厚10～40cm　締まり中、Ⅳ層からⅥ層の漸移層で、南部浮石を20～30％含む。

Ⅵ層　10YR5/6　黄 褐 色　層厚10～20cm　締まり中、南部浮石層である。

Ⅶ層　10YR3/4　暗 褐 色　層厚0～30cm　締まりやや密、Ⅵ層からⅧ層への漸移層で、若干粘性がある。

Ⅷ層　10YR5/4　にぶい黄褐色　層厚20cm以上　締まり密、八戸火山灰層である。

遺跡の現況は、東側が畑地、西側が山林と土地利用の境目の場所である。調査区の中央付近に北東から南西に向かって沢が１本流れており、現在も水が湧くことから、近隣の民家では池を造って鯉を飼っていた。畑地として利用されていた斜面西側では、地点により程度の差が若干あったもののⅢ～Ⅵ層まで削平されていることが確認された。遺構検出面は弥生・古代ともⅢ層上面で、遺物を包含する層はⅡ層である。

４．周辺の遺跡（第６図・第１表）

平成11年4月の時点で、軽米町では484遺跡、九戸村では94遺跡が確認されている（註３）。軽米町内における遺跡調査は昭和50年以降、八戸平原開拓建設事業、東北縦貫道八戸線建設や国道・県道の改良工事などに関連する緊急発掘調査が行われてきた。隣接する九戸村では、昭和55年以降、東北縦貫自動車道八戸線や国道・県道の改良工事、畑地帯総合土地改良事業などによる緊急発掘調査が行われている。

周辺地域の遺跡の概要については、『田代遺跡発掘調査報告書』（岩埋文第262集）・『江刺家Ⅳ遺跡発掘調査報告書』（岩埋文第277集）に詳しいので、参照していただきたい。ここでは、本遺跡に関わる弥生時代と古代の遺跡を中心に周辺遺跡を概観し、本報告の参考としたい。

遺跡の立地をみると、折爪岳東麓には縄文時代の遺跡が多く分布していることが判る。従来から指摘されてきたところであるが、同地区は陽光の良好な緩い東斜面で、折爪岳を源とする沢や湧水に恵まれ、生活に適した地形である。

過去の調査事例を見ると、昭和56年度調査の滝谷Ⅲ遺跡からは縄文時代の竪穴住居跡16棟（中期３棟、後期11棟、晩期２棟）が検出され、円筒下層d、上層d・e、大木8b式等の土器も出土している。同年に道地Ⅱ・Ⅲ遺跡、昭和56・57年度には嶽Ⅰ・Ⅱ遺跡が調査され、円筒下層a～d、上層c～d式期の集落が確認されている。平成２・３年度には田代Ⅳ遺跡が調査されている。平成５・７年度に調査された田代遺跡では縄文時代の竪穴住居跡が17棟（前期１棟、中期16棟）検出されており、折爪岳東山麓で、調査された遺跡のなかでは最大規模の集落遺跡であることが確認された。弥生時代の遺跡は、図幅内では軽米町側の狄塚Ⅳ遺跡から土器片が出土しているだけだが、県北部における弥生時代の遺跡は多く、図幅外だが、軽米町では馬場野Ⅱ遺跡、君成田Ⅳ遺跡・和当地Ⅰ遺跡で弥生時代の集落が確認されている。古代の遺跡は山家地区、伊保内地区に見られ、過去に調査された遺跡では、滝谷Ⅲ遺跡から平安時代の住居跡２棟、南田Ⅰ遺跡からも住居跡２棟が検出されている。

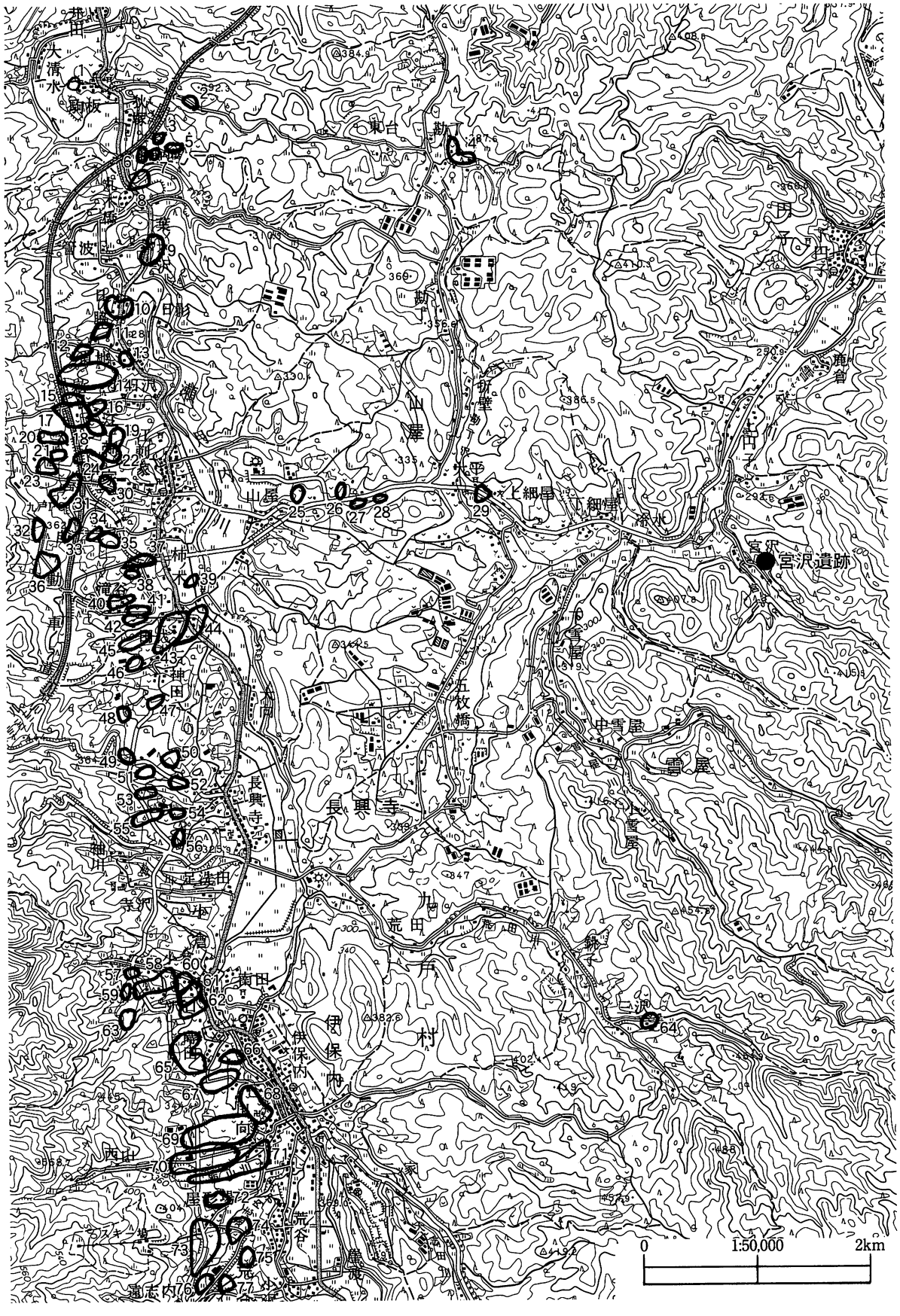
なお宮沢遺跡のある宮沢地区および周辺の円子地区ではこれまで発掘調査は行われておらず、今回の宮沢遺跡の調査が当地域における初めての発掘調査となる。

註

(1)岩手日報社　1999「軽米町」『岩手年鑑　平成12年度版』。
(2)その惨状は、富坂凉仙『耳目凶作録』、高山彦九郎『北方遊記』、菅江真澄『遊覧記』などの各書物に記されている。
(3)岩手県教育委員会　1999「軽米町」「九戸村」『H11.4遺跡台帳』。なお軽米町では平成８年度から平成12年度までの５年次計画で町内の遺跡分布調査が行われている（軽米町教育委員会1997）。

引用・参考文献

岩手県教育委員会 1999「軽米町」『H11.4遺跡台帳』。
岩手日報社 1999「軽米町」『岩手年鑑　平成12年度版』。
軽米町教育委員会 1997『軽米町内遺跡分布調査報告書Ⅰ（大字小軽米地区）』。
『角川日本地名大辞典』３　岩手県　1985。
（社法）農山漁村文化協会　1977「ヤマセ・凶作と百姓一揆」『日本農業全集２』
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1997『田代遺跡発掘調査報告書』岩埋文第262集。
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1998『江刺家Ⅳ遺跡発掘調査報告書』岩埋文第277集。
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1999『南田Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩埋文第307集。
内田武士・宮本常一編訳　1978『菅江真澄遊覧記五巻』
四津隆一1998「遠郊山村における開発―岩手県軽米町の例―」『東北学院大学論集　歴史学・地理学』第30号。



第６図　周辺の遺跡

第１表　周辺の遺跡

No.	遺跡名	種別	時代	所在地	備考	遺跡番号
1	まつっこ	散布地	縄文(晩期)	軽米町大字山内字駒板		IF92－1046
2	山内	集落跡	縄文(晩期)	軽米町大字山内字駒板		IF92－1166
3	狄塚Ⅰ	集落跡	縄文（晩期）・平安	軽米町大字狄塚字川向		IF92－1183
4	山田(1)	散布地	縄文（中期）	軽米町大字軽米第23地割		IF92－1090
5	狄塚Ⅳ	集落跡	縄文（晩期）・弥生	軽米町大字狄塚字川向		IF92－1194
6	狄塚Ⅲ	集落跡	縄文(晩期)	軽米町大字狄塚字川向		IF92－1191
7	狄塚Ⅱ	集落跡	縄文(晩期)	軽米町大字狄塚字川向		IF92－1192
8	丸木橋	散布地	縄文	九戸村大字江刺家第17地割	岩埋文第189集(1993)	IF92－2121
9	葉木沢	散布地	縄文・古代	九戸村大字江刺家字葉木沢		IF92－2182
10	管波Ⅰ	集落地	縄文（晩期）	九戸村大字江刺家第16地割	岩埋文第139集(1989)	JF02－0029
11	管波Ⅱ	集落地	縄文（晩期）・平安	九戸村大字江刺家第16地割		JF02－0048
12	道地Ⅱ	集落跡	縄文（晩期）	九戸村大字江刺家第14地割	岩埋文第64集(1983)	JF02－0066
13	道地Ⅰ	散布地	縄文（晩期）	九戸村大字江刺家第14地割		JF02－0170
14	道地Ⅲ	集落跡	縄文（晩期）	九戸村大字江刺家第14地割	岩埋文第64集(1983)	JF02－0087
15	嶽Ⅰ	集落跡	縄文（晩期）	九戸村大字江刺家第９地割	岩埋文第50集(1983)	JF02－1005
16	嶽Ⅲ	集落跡	縄文（晩期）	九戸村大字江刺家第12地割		JF02－1018
17	嶽Ⅱ	散布地	縄文	九戸村大字江刺家第13地割	岩埋文第78集(1984)	JF02－1025
18	嶽Ⅳ	集落跡	縄文（晩期）	九戸村大字江刺家第13地割		JF02－1038
19	嶽Ⅴ	集落跡	縄文（後・晩期）	九戸村大字江刺家第12地割		JF02－1049
20	江刺家Ⅱ	集落跡	縄文（後・晩期）	九戸村大字江刺家第13地割		JF02－1044
21	江刺家Ⅲ	集落跡	縄文（中･晩期）	九戸村大字江刺家第13地割		JF02－1054
22	江刺家Ⅰ	集落跡	縄文（晩期）・古代	九戸村大字江刺家第12地割	範囲拡大	JF02－1059
23	江刺家Ⅴ	集落跡	縄文（晩期）	九戸村大字江刺家第13地割	岩埋文第59集(1984)	JF02－1063
24	江刺家Ⅳ	集落跡	縄文（中･後・晩期）	九戸村大字江刺家第13地割	岩埋文第59集(1984)277集(1998)	JF02－1067
25	山屋Ⅰ	散布地	古代	九戸村大字山屋第３地割		JF02－2211
26	山屋Ⅱ	散布地	古代	九戸村大字山屋第３地割		JF02－2299
27	山屋Ⅲ	散布地	古代	九戸村大字山屋第３地割		JF02－2301
28	山屋Ⅳ	散布地	古代	九戸村大字山屋第３地割		JF02－2302
29	大平	散布地	縄文	九戸村大字山屋第５地割		JF03－1091
30	若宮Ⅱ	集落跡	縄文（晩期）	九戸村大字江刺家第８地割		JF02－1089
31	若宮Ⅰ	集落跡	縄文（晩期）	九戸村大字江刺家第８地割		JF02－1095
32	滝谷Ⅰ	集落跡	縄文（晩期）	九戸村大字江刺家第９地割		JF02－2012
33	滝谷Ⅱ	集落跡	縄文（晩期）	九戸村大字江刺家第６地割		JF02－2025
34	滝谷Ⅲ	集落跡	縄文（晩期）	九戸村大字江刺家第６地割	岩埋文第49集(1983)	JF02－2027
35	滝谷Ⅳ	集落跡	縄文（晩期）・平安	九戸村大字江刺家第６地割		JF02－2038
36	滝谷Ⅴ	集落跡	縄文（中・晩期）・平安	九戸村大字江刺家第５､６地割		JF02－2053
37	柿の木Ⅰ	散布地	縄文	九戸村大字江刺家第６地割		JF02－2142
38	柿の木Ⅱ	散布地	縄文・平安	九戸村大字江刺家第６地割		JF02－2151
39	田代Ⅰ	散布地	縄文	九戸村大字江刺家第４地割		JF02－2166
40	柿の木Ⅲ	散布地	縄文	九戸村大字江刺家第５地割		JF02－2180
41	田代Ⅱ	散布地	縄文	九戸村大字江刺家第５地割		JF02－2192
42	田代Ⅲ	散布地	縄文	九戸村大字江刺家第３地割		JF12－0102
43	田代	散布地	縄文（前・中期）	九戸村大字江刺家第２地割	岩埋文第41･262集(1982･1997)	JF02－2197
44	田代Ⅴ	散布地	縄文	九戸村大字江刺家第３地割		JF12－0124
45	田代Ⅳ	散布地	縄文	九戸村大字江刺家第３地割	岩埋文第223集(1995)	JF12－0111
46	石神田Ⅰ	散布地	縄文	九戸村大字江刺家第３地割		JF12－0141
47	石神田Ⅱ	散布地	縄文	九戸村大字江刺家第１地割		JF12－0173
48	石神田Ⅲ	散布地	縄文	九戸村大字江刺家第１地割		JF12－0180
49	長興寺Ⅰ	散布地	縄文	九戸村大字長興寺13地割		JF12－1110
50	長興寺Ⅱ	散布地	縄文	九戸村大字長興寺13地割		JF12－1124
51	長興寺Ⅲ	散布地	縄文	九戸村大字長興寺12地割		JF12－1132
52	長興寺Ⅳ	散布地	縄文	九戸村大字長興寺12地割		JF12－1145
53	長興寺Ⅴ	散布地	縄文	九戸村大字長興寺12地割		JF12－1162
54	長興寺Ⅶ	散布地	縄文	九戸村大字長興寺９地割		JF12－1175
55	長興寺Ⅵ	散布地	縄文	九戸村大字長興寺９地割		JF12－1172
56	長興寺Ⅷ	散布地	縄文	九戸村大字長興寺９地割		JF12－1195
57	小倉Ⅰ	集落跡	縄文（中・後期）	九戸村大字小倉第２地割		JF22－0111
58	小倉Ⅲ	集落跡	古代	九戸村大字小倉第３地割		JF22－0123
59	小倉Ⅱ	集落跡・キャンプ地	縄文（中・後期）	九戸村大字小倉第２地割		JF22－0120
60	蒔田Ⅳ	散布地	縄文	九戸村大字伊保内第26地割	Ｈ９新規	JF22－0126
61	南田Ⅱ	散布地	縄文（中・晩期）	九戸村大字伊保内第26地割		JF22－0147
62	南田Ⅰ	集落跡	縄文（晩期）	九戸村大字伊保内第26地割	岩埋文第307集(1999)	JF22－0130
63	小倉Ⅳ	散布地	縄文（中期）	九戸村大字小倉第３地割		JF22－0150
64	三沢	散布地	縄文（中期）	九戸村大字長興寺第５地割		JF23－0156
65	蒔田Ⅰ	散布地	縄文（晩期）	九戸村大字伊保内第24､25地割		JF22－0185
66	蒔田Ⅱ	散布地	縄文（中期）	九戸村大字伊保内第23､24地割		JF22－0199
67	蒔田Ⅲ	集落跡	古代	九戸村大字伊保内第22､24地割		JF22－1118
68	伊保内館Ⅱ	集落跡・城館跡	縄文(中･晩期)･古代･中世	九戸村大字伊保内第21地割		JF22－1231
69	伊保内館Ⅰ	集落跡	縄文（中期）・古代	九戸村大字伊保内第19､22地割		JF22－1158
70	伊保内館Ⅲ	集落跡・キャンプ地	縄文（中期）・古代	九戸村大字伊保内第16､17､19地割		JF22－1487
71	伊保内館Ⅳ	集落跡・キャンプ地	縄文（中期）・古代	九戸村大字伊保内15､16地割		JF22－1281
72	伊保内館Ⅵ	集落跡	古代	九戸村大字伊保内16地割		JF22－2118
73	屋形場Ⅱ	集落跡	縄文（中期）・古代	九戸村大字荒屋第３地割		JF22－2157
74	屋形場Ⅰ	集落跡・キャンプ地	縄文（中期）・古代	九戸村大字荒屋第４､５地割		JF22－2240
75	遠志内Ⅲ	散布地	縄文（中期）	九戸村大字荒屋第１地割		JF22－2261
76	遠志内Ⅰ	散布地	縄文（後期）	九戸村大字荒屋第４地割		JF22－2197
77	遠志内Ⅱ	散布地	縄文（中期）	九戸村大字荒屋第１地割		JF22－2199

Ⅲ. 調査・整理の方法

１．野外調査

(1) 調査区の設定と遺構の命名

調査区の地区割りにあたっては、平面直角座標（第Ｘ系）に合わせ基準点1を中心として時計回りに55度回転させ、北西から南東に延びた調査区に対して直交するメッシュがかかるようにグリッドを設定した。設定した基準点の座標は以下のとおりである。

基１　Ｘ＝27,350.000m　　Ｙ＝54,750.000m　　Ｈ＝284.434m

基２　Ｘ＝27,464.927m　　Ｙ＝54,670.051m　　Ｈ＝286.617m

この2点を基準としてグリッドの設定を行った。グリッドの設定に際しては同年、隣接する地点を軽米町教育委員会が調査を行うことから、遺跡全体をカバーするように設定した。原点（１Ａ）を北側隅にして、10m四方のグリッドに分割した。グリッド名は北東から南西に向かって１・２・３（算用数字）…、北西から南東に向かってＡ・Ｂ・Ｃ（アルファベット大文字）…とし、それぞれの組み合わせで1Ａ・１Ｂグリッドの区画名を付し、区画左上の杭をもって、その区画のグリッド名称を表した。

(2) 遺構の名称

検出された遺構の名称は以下の記号を用いて、検出順に命名を行った。

ＲＡ…竪穴住居跡、ＲＥ…竪穴状遺構、ＲＤ…土坑、ＲＦ…焼土遺構、

ＲＢ…掘立柱建物跡、ＲＧ…溝跡、ＲＺ…炭窯跡。

検出された遺構数と名称は次のとおりである。

竪穴住居跡（弥生時代３、古代６）：RA01～09（９棟）、竪穴状遺構：RE01（１棟）、

土坑：RD01～20（20基）、焼土遺構：RF01～09（９基）、掘立柱建物跡：RB01（１棟）、

溝跡：RG01（１条）、炭窯跡：RZ01～03（３基）。

(3) 調査の経過

調査期間は４月12日～６月30日であり、作業実働日数は48.5日であった。作業員の登録人数は32名で一日の平均稼動作業員数は25.7人ほどであった。以下に調査経過を簡略に記す。

４月12日（月）　資材搬入。調査開始。

４月14日（水）　基準点測量。

６月18日（金）　航空写真撮影。

６月19日（土）　現地公開：10:00～15:00。見学者50名。

６月24日（木）　終了確認：11:00～12:00。

６月30日（水）　調査終了。撤収。

具体的な調査の進行状況を記すと、調査開始時点で、12Ｂ・12Ｃグリッドより西側は立木が伐採されていなかった。調査区中央の沢跡には大崎正氏宅の池が設置され、鯉を飼育していたため、中央の沢は池の移設を待って調査を行うこととした。その他の区域は雑物撤去を行い、即日調査に入ることができた。現況で炭窯３基が北側斜面に窪地として確認された。現況で確認できた遺構はこれだけである。当初土捨場が調査区外に確保できなかったことから、調査区の南側斜面下側の表土剥ぎを行い、調査区斜面上側に仮置きした。この時点で、古代の竪穴住居跡、土坑、弥生時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡などを検出しており、先に確認された炭窯とともに精査を開始した。

5月に入り、調査区域外に土捨場が確保できたことから、残土を調査区域外に出し、全域の表土除去を行った。また、池の移設が行われたことから、調査区中央部の沢跡についても試掘を行い、Ⅵ層以上が流出していること、池はⅧ層を掘り込んで設置されていること、斜面部に遺構・遺物が無いことを確認した。12B・12Cグリッドより西側についても5月上旬に立木が伐採されたことから、この区域の調査も開始した。

調査は、6月上旬に概ね遺構数が確定し、18日に航空写真撮影、19日に現地公開、24日に終了確認を受けた。その後、調査終了日まで、斜面北側の竪穴住居跡の精査と炭窯の下位のだめ押しを行っている。

6月28日～30日は、調査区域外に仮置していた残土を調査区域内に戻し、現況に復旧して調査を終了した。

(4) 粗掘と遺構検出・遺構の精査と遺物の取り上げ

当初、2m幅のトレンチを地形に応じて任意の場所に入れ、遺跡の状況を把握した。その結果、8H・9Hグリッドは南部浮石層まで、その他はⅢ層まで削られていることが確認された。表土の厚さは30cm程あり、包含する遺物はほとんどないことを確認し、重機により表土除去を行い、遺構検出は人力で行った。

遺構の検出は各層位で試みているが、基本的にはⅢ層上面（中掫浮石層）が遺構の時期差にかかわらず遺構検出面である。

検出された遺構は、原則として住居跡の場合は4分法、土坑類は2分法で行ったが、必要に応じて他の方法も併用した。住居跡については4分割をした後Q1・Q2…と各エリアに名称をつけた。精査の各段階において必要図面の作成や写真撮影を適宜行っている。

遺構内出土の遺物は、埋土で可能なかぎり分層して取り上げ、床面出土の遺物は写真撮影・図面作成後に取り上げた。遺構外出土の遺物については、原則としてグリッドごとに出土した層位を記して取り上げ、適宜に写真撮影・図面作成をしている。

(5) 実測・写真撮影

平面実測はグリッドに合わせた1mメッシュを基本とした。平面・断面図の縮尺は竪穴住居跡・土坑類・掘立柱建物跡は1／20、炭窯跡・溝跡は1／40を基本とした。レベルは、基準点をもとに絶対高で測った。

写真撮影は35mmモノクロームとカラーリバーサル各1台、モノクローム6×9cm判1台を使用した。撮影に際しては、整理時の混乱を避けるために撮影カードを利用した。実際の撮影は各種の埋土堆積状況や遺物の出土状況、完掘状況、全景などについて行い、調査終了段階でセスナによる空中写真撮影を行っている。

2．室内整理

室内整理の期間は、平成11年11月1日～平成12年1月31日(延58日間)で、整理に従事した作業員は2名である。

野外調査で得られた遺物、実測図、写真などの各種資料は、室内整理の段階で次のように処理し、整理を行い、報告書作成とともに資料化を図った。

(1) 遺構に関わる記録

各実測図ごとに分類し、図面は点検のうえ、必要なものについては第二原図を作成し、トレースを行った。

撮影されたフィルムはネガアルバムに密着写真と一組にして収納した。カラースライドフィルムはスライドファイルに撮影順に収納した。

(2) 遺物の整理

遺物は野外及び当センター整理室で水洗した後、細片は別として、遺跡略号・出土地点・層位等を全破片について注記した。その後、出土地点・層位ごとに仕分けを行い、遺構ごと、遺構外出土についてはグリッ

ドごとに接合・復元作業を実施した。遺物の実測図は実大とし、トレースは遺物の状況に応じて実大あるいは縮尺して図化した。石材・炭化材・火山灰の分析・金属製品の保存処理は外部の専門家に委託した。遺物の写真撮影はセンター内の専門技師２名（村田憙鴻・福士昭夫）が撮影を行った。

遺物の整理・報告に当たっての作業・記録作成は以下の方針で進めた。

(3) 遺物の選別・図化の基準

報告書に掲載された遺物は出土した全ての遺物ではなく、整理のなかで設定した基準を基に選別した一部の資料である。以下に資料の選別基準を明示する。また、資料化は図化・写真が全てではない。不掲載資料についても可能なかぎり数的処理を行い、出土資料全体の傾向を把握するためのデータとした。

ａ．土器（縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器）

縄文土器・弥生土器

はじめに出土地点別に重量計測をおこなった。土器の接合と並行して、遺物の選別を進めた。接合した土器については、原則として計測値（器高・口径・底径）１点以上計測可能なもの（器形が把握できるもの）を立体土器として登録し、図化を進めた。図化しないものについては、計測値・型式・残存率などを記録するに留めた。

破片資料については、口縁部破片は、原則として頸部および胴部文様の組み合わせが把握できる破片とした。その他の口縁部破片については、該当すると思われる土器の型式名を記録し数的処理を行った。胴部破片は原則として不掲載とした。底部破片については、原則として完形品を図化することとし、破片でも底部圧痕・調整が認められる破片は選別し図化した。

土師器

はじめに出土地点別に重量計測をおこなった。土器を接合した後、底径・口径あるいは器形が推定できるものを立体土器として登録した。接合が叶わなかった破片については、口縁部破片、底部破片のみを選別し、遺構内出土のものを掲載資料とした。実測においては、立体・破片とも可能な限り反転して図化の段階で器形の推定を行っている。

須恵器

須恵器は破片のみで、すべて遺構内から出土している。すべて図化し、掲載した。

ｂ．土製品

円盤状土製品がある。すべて掲載した。

ｃ．石器

石器については、出土したすべてを対象として、個々に仕分け・登録作業・計測・分類を行い、さらに一部資料について図化を行った。図化の基準は、剥片石器・礫石器については原則として全点図化することにし、使用痕跡のない剥片類については計測・分類のみとした。

ｄ．金属製品

図化に耐えない破片資料や鉄滓等を割愛し、形状が分かる製品については図化し、掲載した。一部については保存処理を行った。成分分析等は行っていない。

ｅ．鉄滓

椀型鉄滓が出土している。図化し、掲載した。成分分析等は行っていない。

ｆ．自然遺物

炭化材と火山灰がある。炭化材は鑑定していただいた樹種名を掲載するに留めた。火山灰は分析結果を掲載することとした。

Ⅳ．検出遺構と出土遺物

検出された遺構について（第７図）

今回検出された遺構は、弥生時代の竪穴住居跡３棟、古代の竪穴住居跡６棟、竪穴状遺構１棟、土坑20基、焼土遺構８基、掘立柱建物跡１棟、溝跡１条、炭窯跡３基である。

住居跡を除くと、遺構内から出土している遺物が少ないため、特に土坑・焼土遺構の時期については詳細が不明な部分が多い。掘立柱建物跡・溝跡の時期は比較的新しい可能性が高い。炭窯跡については戦後に営まれたもので所有者が判明している。

遺構の占地をみると、住居跡、焼土遺構は沢を挟んで調査区の北側に多く見られる。弥生時代の住居跡と古代の住居跡はほぼ同じ占地にある。近世以降と思われる掘立柱建物跡は現在の集落に近接する調査区中央付近の斜面下位にある。炭窯跡は調査区北側でまとまって検出された。以下、各遺構毎に詳細を述べる。

１．竪穴住居跡（第８～17図、写真図版４～11）

RA01竪穴住居跡

遺構（第８図、写真図版４）

〈位置・検出状況〉９Ｆグリッドに位置する。表土除去時にⅢ層上面で石囲炉を検出したことから住居跡として認識した。西側が調査区域外にかかる。

〈重複関係〉風倒木痕とRD02土坑に切られている。

〈規模・平面形〉径5.25×（4.40）m。西側が調査区域外にかかること、壁の立ち上がりが確認できなかったため、推定の域を出ないが、柱穴の配置などから、平面形は円形基調と推定される。

〈埋土・堆積状況〉黒褐色土・暗褐色土を主体とする。

〈壁・床面〉Ⅲ層を掘り込み、壁とするものと思われるが、はっきりとした立ちあがりは確認できなかった。床面についても炉の位置からⅢ層面と思われるが、明瞭に確認はできなかった。

〈柱穴〉石囲炉を中心にPP1 ～ PP15の15基を検出した。

〈炉〉石囲炉を１基検出した。扁平な亜角礫を用いた石囲炉で、径62×60cmのほぼ円形を呈する。炉内に焼土の層はなく、暗褐色土に焼土粒が５％程混入した層がある。

遺物（第29図、写真図版24）

〈出土状況〉炉の北側で床面よりやや上位で高坏(1)が逆さまに潰れた状態で出土している。

〈土器〉立体(1)。１は高坏で、皿部にLR横回転の縄文が施され、脚部は上位と下位に３本の細い平行沈線が横位に施されている。

時期　弥生時代前期と思われる。

RA02竪穴住居跡

遺構（第９図、写真図版５）

〈位置・検出状況〉９Ｅグリッドに位置する。Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして検出した。

〈重複関係〉南側が風倒木痕に切られている。

〈規模・平面形〉径（4.7）×4.5m。平面形は円形と推定される。斜面下位にあたる南西側は壁を確認できていない。

〈埋土・堆積状況〉 To－Nbを含む黒褐色土と暗褐色土の２層で構成される。自然堆積と思われる。

〈壁・床面〉 III層を掘り込み壁・床としている。壁は外傾し、床面はほぼ平坦である。

〈柱穴〉 PP１～27の27基を検出した。東壁際に巡るPP３・４・７～23は壁柱穴、主柱穴はPP1・6・24・26・13と推定される。

〈炉〉 住居中央付近に石囲炉がある。径70×65cmでほぼ円形を呈する。焼土の厚さは最大で７cmである。火床面が住居床面より10cm下がり、低くなっている。炉の埋土から炭化材が出土しており、樹種はクリ老木であるとの鑑定結果を得ている。

遺物（第29図、写真図版24）

〈出土状況〉 埋土から出土したのは掲載した１点のみで、住居内の北西側から出土した。

〈土器〉 破片(2)。２は口縁部片で、口唇部に細い沈線を持ち、突起の先がわずかにV字状を呈する。

時期　弥生時代前期と思われる。

RA03竪穴住居跡

遺構（第10図、写真図版6）

〈位置・検出状況〉 ７Cグリッドに位置する。II層上面でTo－aを含む黒色土の広がりとして検出した。北側は木根が入る。壁面等確認のためにトレンチを入れており、炉跡を確認してから住居跡と認識した。

〈重複関係〉 なし。

〈規模・平面形〉 径4.25×3.60m。平面形は楕円形を呈する。

〈埋土・堆積状況〉 To－Nbを含む黒褐色土と暗褐色土で構成され、自然堆積の様相を呈する。住居西側の埋土中および床面から炭化材が出土している。樹種はクリであるとの鑑定結果を得ている。

〈壁・床面〉 VIII層を掘り込んでいる。南側は削平を受けているが北側に残存する壁高は約40cmで、外傾する。床面は東側にこの住居以前と思われる風倒木痕があり、その上に構築されているため多少凹凸がある。

〈柱穴〉 PP1の１基を検出した。

〈炉〉 住居のほぼ中央に地床炉がある。やや不整な形状で径35×30cm、焼土の厚さは最大で３cmである。

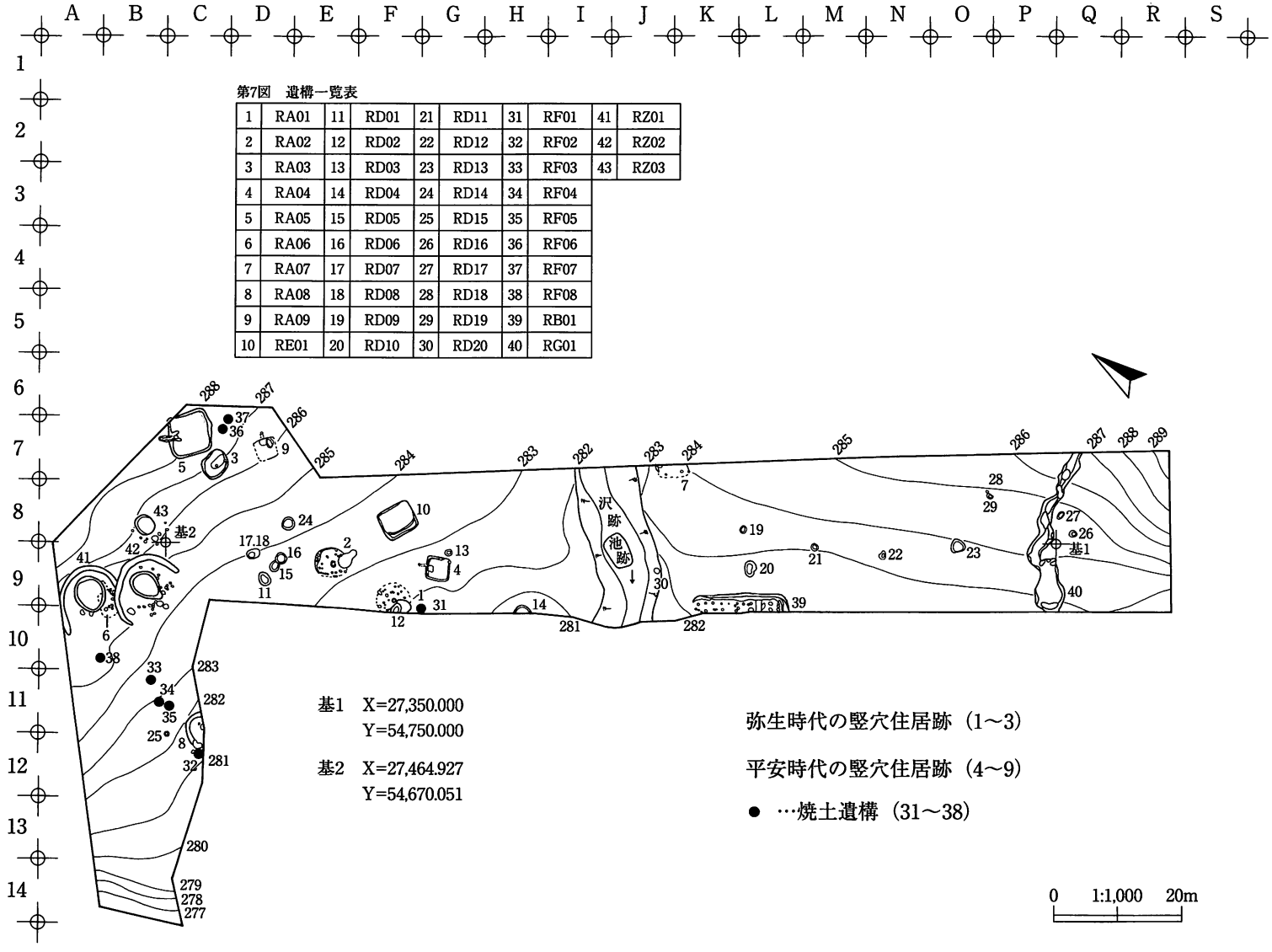
遺物（第29図、写真図版24）

〈出土状況〉 埋土中位～下位にかけて出土した。床面から石皿様の石器が出土している。

〈土器〉 立体（３・４）、破片（５・６・７）。３は蓋で、LR横回転の縄文が施されている。４は頸部に浅い沈線をもつ壺の口縁部片である。５・６・７は粗製土器の口縁部片で、いずれも別個体と思われる。

〈石器〉 石皿(8)。石材は赤色の頁岩で中央がやや窪む。

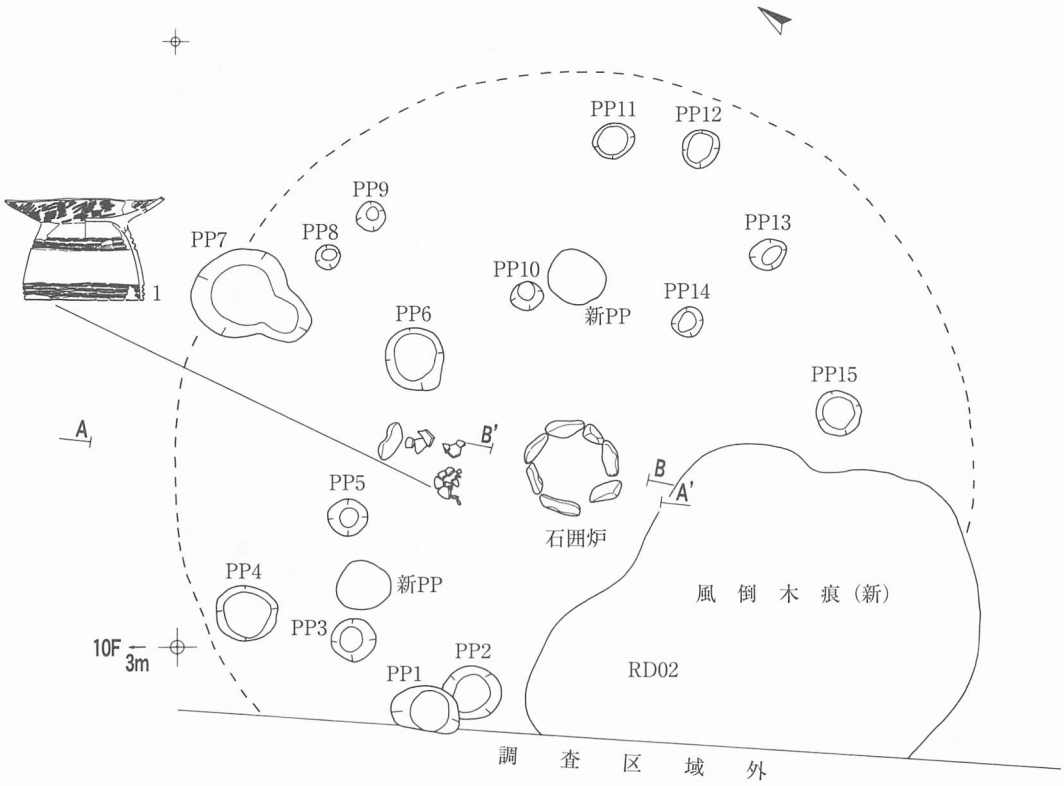
時期　弥生時代前期と思われる。



第7図　遺構一覧表

1	RA01	11	RD01	21	RD11	31	RF01	41	RZ01
2	RA02	12	RD02	22	RD12	32	RF02	42	RZ02
3	RA03	13	RD03	23	RD13	33	RF03	43	RZ03
4	RA04	14	RD04	24	RD14	34	RF04		
5	RA05	15	RD05	25	RD15	35	RF05		
6	RA06	16	RD06	26	RD16	36	RF06		
7	RA07	17	RD07	27	RD17	37	RF07		
8	RA08	18	RD08	28	RD18	38	RF08		
9	RA09	19	RD09	29	RD19	39	RB01		
10	RE01	20	RD10	30	RD20	40	RG01		

第７図　宮沢遺跡遺構配置図

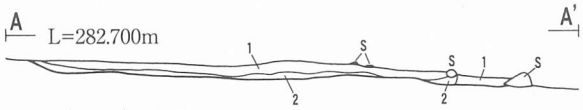


RA01

No.	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5
径(cm)	47×30	38×33	30×28	40×37	26×25
深さ(cm)	76.7	41.7	24.1	24.0	21.1

No.	PP6	PP7	PP8	PP9	PP10
径(cm)	43×40	85×62	16×15	20×19	20×19
深さ(cm)	24.4	28.0	23.3	13.5	26.0

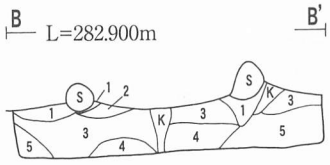
No.	PP11	PP12	PP13	PP14	PP15
径(cm)	25×23	25×23	25×20	20×18	30×27
深さ(cm)	22.4	28.7	18.1	19.1	21.7



RA01（A－A'）

層位		色調	土性		
1	10YR2/2	黒褐色	シルト	締まり中	To-Cu15%、To-aブロック2%混入
2	10YR3/3	暗褐色	シルト	締まり中	To-Cu30%、To-aブロック2%混入

0　1:50　2m

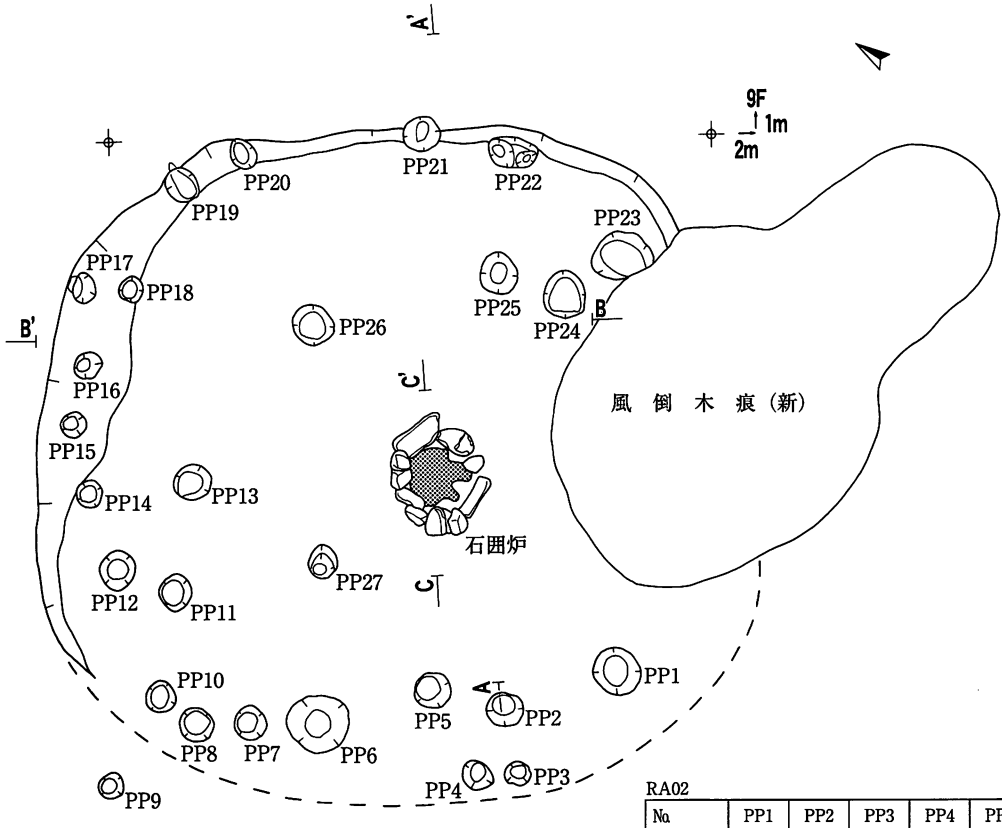


RA01（B－B'）

層位		色調	土性		
1	10YR2/3	黒褐色	シルト	締まり中	To-Cu10%、Nb-p2%混入
2	10YR3/4	暗褐色	シルト	締まり中	To-Cu7%、Nb-p2%、焼土粒5%混入
3	10YR2/3	黒褐色	シルト	締まりやや密	To-Nb5%混入
4	10YR4/4	褐色	シルト	締まりやや密	To-Nb10%混入
5	10YR2/2	黒褐色	シルト	締まりやや密	To-Nb15%混入

0　1:25　1m

第８図　ＲＡ01竪穴住居跡



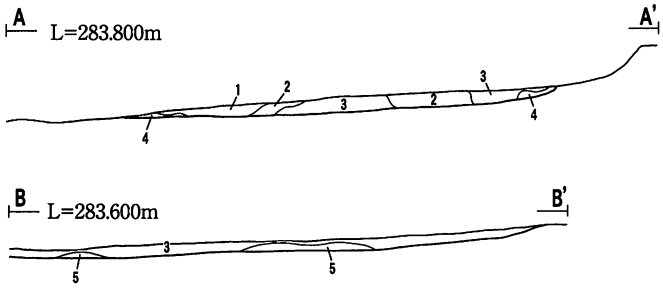
RA02

No	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6	PP7
径(cm)	33×29	23×23	18×17	21×17	24×22	40×40	22×20
深さ(cm)	33.2	20.1	21.1	20.8	39.2	18.5	19.6

No	PP8	PP9	PP10	PP11	PP12	PP13	PP14
径(cm)	23×21	16×15	20×20	22×21	24×22	26×23	18×17
深さ(cm)	26.7	20.0	24.7	22.2	15.5	28.4	8.7

No	PP15	PP16	PP17	PP18	PP19	PP20	PP21
径(cm)	17×15	18×17	18×17	17×16	22×20	21×16	24×22
深さ(cm)	11.3	12.0	9.1	12.5	27.7	12.0	18.3

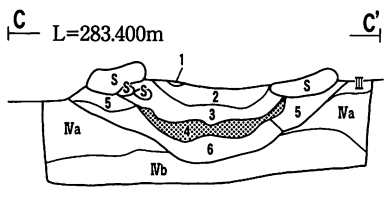
No	PP22	PP23	PP24	PP25	PP26	PP27
径(cm)	31×18	36×34	29×26	27×25	26×25	21×20
深さ(cm)	14.0	27.7	25.1	21.4	9.0	21.5



RA02 (A－A'・B－B')

層位		色調	土性	
1	10YR2/1	黒色	シルト	締まり中
2	10YR2/3	黒褐色	シルト	締まり中　To-Nb10%混入
3	10YR3/2	黒褐色	シルト	締まり中　To-Nb5%混入
4	10YR4/4	褐色	シルト	締まりやや疎　To-Nb20%混入
5	10YR3/3	暗褐色	シルト	締まりやや密　To-Nb15%混入

0　1:50　2m

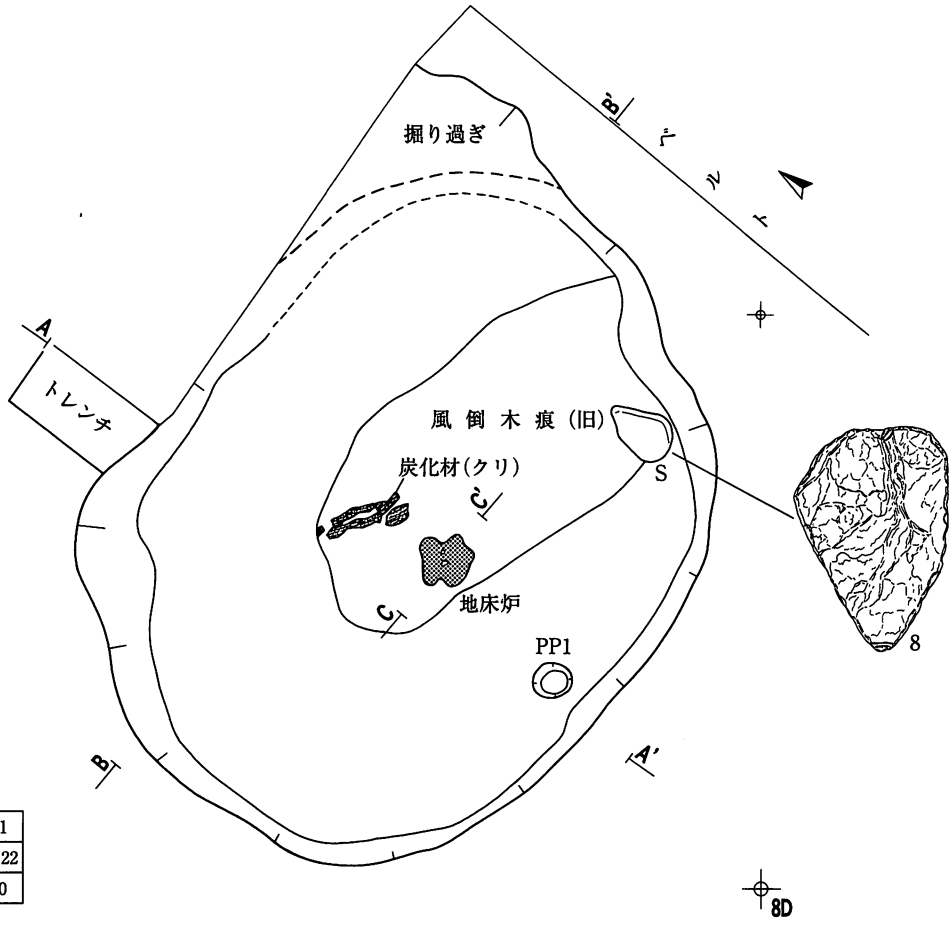


RA02 (C－C')

層位		色調	土性	
1	5 YR4/8	赤褐色	焼土	締まり中　黒色シルト混入
2	5 YR4/8	赤褐色	焼土と10YR2/1	黒褐色シルトの混合土　締まり中
3	10YR2/2	黒褐色	シルト	締まり中　赤褐色焼土ブロック5%、To-Nb3%混入
4	5 YR4/8	赤褐色	焼土	
5	10YR2/3	黒褐色	砂質シルト	締まり中　To-Nb2%混入
6	10YR3/2	黒褐色	シルト	締まり中　赤褐色焼土ブロック15%、To-Nb5%混入

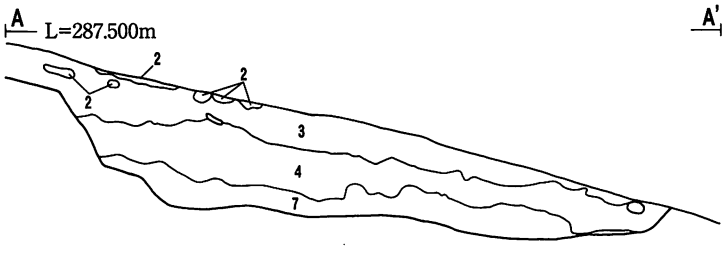
0　1:25　1m

第９図　ＲＡ02竪穴住居跡



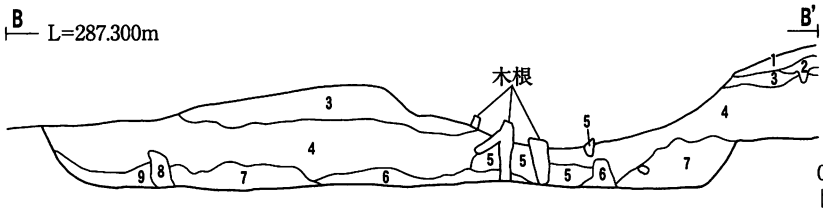
RA03

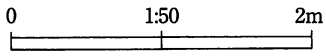
No	PP1
径(cm)	26×22
深さ(cm)	14.0

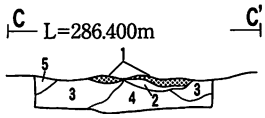


RA03 (A－A'・B－B')

層位		色調	土性
1	10YR3/4	暗褐色	シルト　締まり中　To-a7%混入
2	2.5YR6/8	明黄褐色	シルト　締まり中　To-a ?
3	10YR3/4	暗褐色	シルト　締まりやや密　To-Nb1%混入
4	10YR4/4	褐色	シルト　締まり中　To-Nb2%混入
5	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト　締まり中　To-Nb1%混入
6	10YR2/2	黒褐色	砂質シルト　締まり中　炭化材、To-Nb1%混入
7	10YR2/1	黒色	シルト　締まり中　炭化材、To-Nb3%混入
8	10YR3/3	暗褐色	シルト　締まり中　To-Nb3%混入
9	10YR5/8	黄褐色	粘土　締まりやや密　To-Nb30%混入

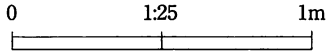






RA03 (C－C')

層位		色調	土性
1	7.5YR6/8	橙色	焼土　締まり中
2	10YR3/4	暗褐色	シルト　締まり中　橙焼土ブロック5%混入
3	10YR4/4	褐色	粘土　締まりやや密　礫30%混入（風倒木痕）
4	10YR5/8	黄褐色	粘土　締まり密　礫50%混入（風倒木痕）
5	10YR6/8	明黄褐色	粘土　締まり密（風倒木痕）



第10図　ＲＡ03竪穴住居跡

RA04竪穴住居跡

遺構（第11図、写真図版７）

〈位置・検出状況〉９Ｇグリッドに位置する。Ⅲ層上面でＴｏ－ａを含む黒褐土の広がりとして検出した。

〈重複関係〉なし。

〈規模・平面形〉径3.55×3.70m。平面形は隅丸方形を呈する。

〈埋土・堆積状況〉To－Nbを含む黒褐色土と暗褐色土で構成されている。Ｔｏ－ａはブロック状に含まれており、二次堆積したものと思われる。埋土から出土した炭化材の樹種はクリ老木との鑑定結果を得ている。

〈壁・床面〉Ｖ層を掘り込んでいる。壁は外傾し、壁高は最大35cmである。床は平坦で５～８cmの厚さで貼床がある。

〈柱穴〉なし。確認できていない。

〈カマド〉カマドの残りは悪く、崩壊した袖部と焼土が残存する。煙道は刳り貫き式で、緩やかに下がってから煙出しに立ちあがる。主軸方向はＮ－26°－Ｗである。

遺物（第30図、写真図版24）

〈出土状況〉住居東側の床面上から小型の手づくね土器がまとまって５点（９～13）出土した。その他にこの住居跡に伴う遺物は出土していない。埋土上位からは縄文土器片が出土している（不掲載）。

〈土器〉立体（９～13）。９～13は小型（ミニチュア）の手づくね土器で、９～12は指でナデ調整、13はナデ調整後にミガキ調整が施されている。いずれも完形品である。

時期　平安時代と思われる。

RA05竪穴住居跡

遺構（第12･13図、写真図版８）

〈位置・検出状況〉７Ｃグリッドに位置する。Ⅲ層上面で黒褐土の広がりとして検出した。

〈重複関係〉なし。

〈規模・平面形〉径6.80×6.60m。平面形はややいびつな隅丸方形を呈する。

〈埋土・堆積状況〉上～中位はＴｏ－Nbを含む黒褐色土、暗褐色土、炭化物層で構成され、自然堆積の様相を呈する。Ｔｏ－ａは焼土の上に堆積し、住居全体ではなくカマド付近と西側（斜面側）に堆積していた。下位には最大20cmの厚さの焼土と多量の炭の層があった。焼失した住居跡と考えられる。炭化材の樹種はクリ・ススキであるとの鑑定結果を得ている。Ｔｏ－ａは住居焼失後に降下したものと思われる。

〈壁・床面〉Ⅷ層を掘り込み、壁・床としている。壁は外傾し、床は平坦である。貼床は確認できなかった。

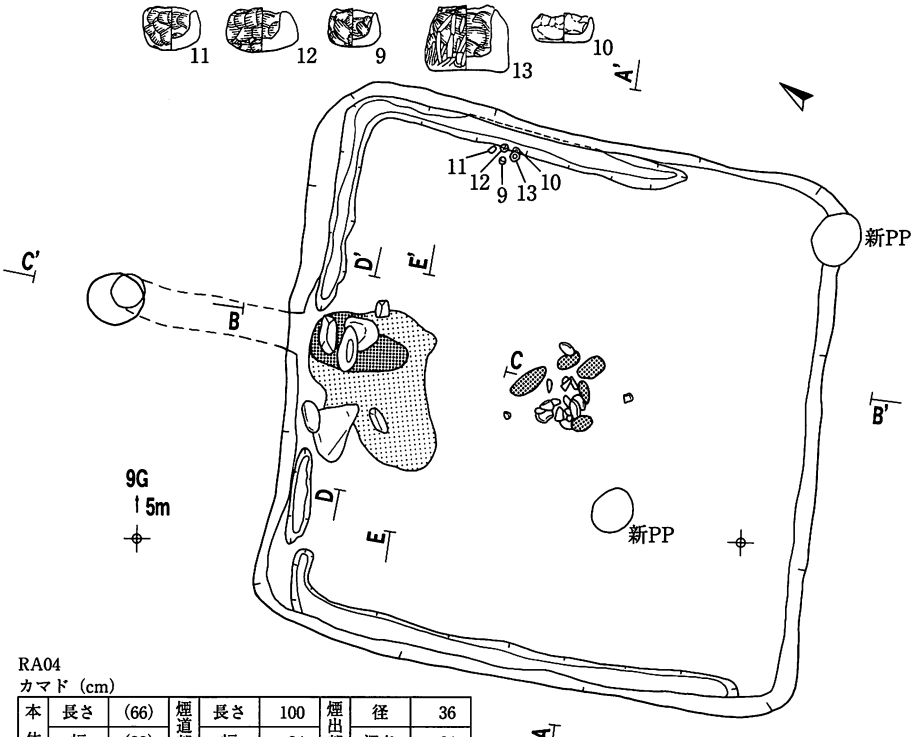
〈柱穴〉なし。

〈カマド〉残存状況は良好である。袖部には２個づつ礫を芯材とし、シルト質粘土で被覆してつくられている。炊口の手前には丸い礫が敷き詰められていた。煙道は掘り込み式で、煙道底面に粘土を貼り両側には礫が並べられている。それらの上には天井部のものと思われる板状の扁平な礫が崩落した跡があった。主軸はＮ－60°－Ｗである。

遺物（第30･31･32図、写真図版25･26･27）

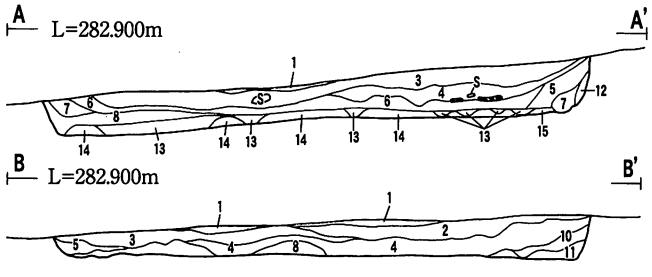
〈出土状況〉埋土の中位～下位、床面に亘って出土している。床面では南東側の壁際にまとまって出土している。鉄製品は住居の西側半分から出土している。

〈土師器〉立体（14～30）、破片（31～37）。14は脚付の坏である。15・17・18は底部が回転糸切りされて



RA04
カマド（cm）

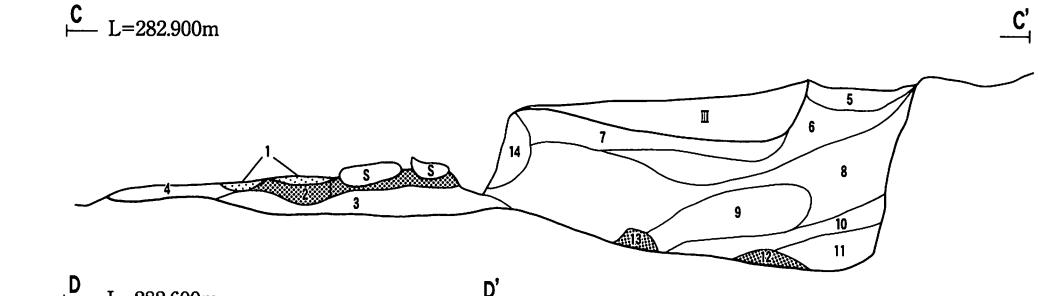
本体	長さ	(66)	煙道部	長さ	100	煙出部	径	36
	幅	(38)		幅	24		深さ	64

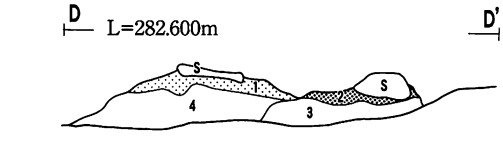


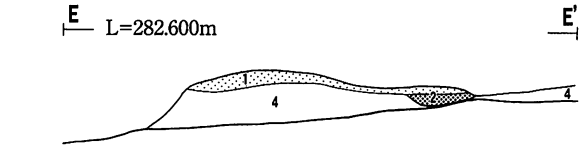
RA04（A－A'・B－B'）

層位	色調	土性
1	10YR2/2	黒褐色　シルト　締まり中
2	7.5YR2/1	黒色　シルト　締まり中
3	10YR2/3	黒褐色　シルト　締まり中　To-aブロック2%、To-Nb2%混入
4	10YR2/2	黒褐色　シルト　締まり中　炭化物1%、To-aブロック1%、To-Nb2%混入
5	10YR2/1	黒色　シルト　締まり中　黒褐色シルト、To-Nb2%混入
6	10YR3/2	黒褐色　シルト　締まりやや疎　To-aブロック2%、To-Nb2%混入
7	10YR2/3	黒褐色　シルト　締まりやや疎　黒色シルト、To-Nb2%混入
8	10YR2/2	黒褐色　シルト　締まり中　赤褐色焼土ブロック7%、炭化物10%混入
9	10YR2/1	黒色　シルト　締まりやや密　黄褐色粘土ブロック5%、赤褐色焼土1%、To-Nb2%混入
10	10YR1.7/1	黒色　シルト　締まり中　To-aブロック7%混入
11	10YR2/1	黒色　シルト　締まり中　To-aブロック20%混入
12	10YR4/4	褐色　粘土　締まりやや密　To-Nb30%混入
13	10YR2/2	黒褐色　シルト　締まり中　褐色粘土ブロック5%、To-Nb10%混入　貼床
14	10YR3/4	暗褐色　シルト　締まりやや密　黒褐色シルト、To-Nb15%混入　貼床
15	10YR5/8	黄褐色　粘土　締まりやや密　黒褐色シルト、To-Nb15%混入　貼床

0　1:50　2m







RA04（C－C'・D－D'・E－E'）

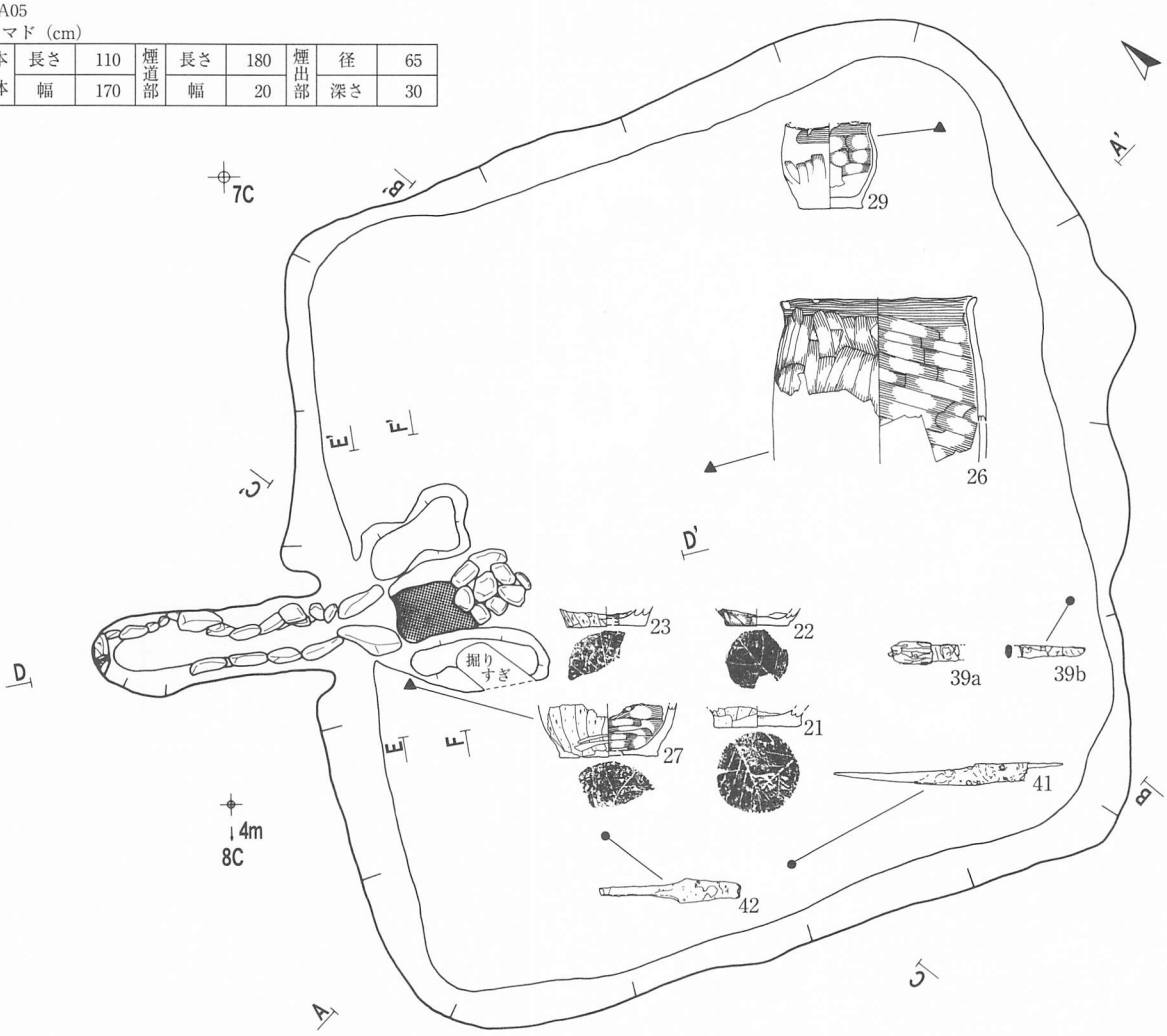
層位	色調	土性
1	2.5YR5/4	黄褐色　粘土　締まりやや密　黒褐色シルト混入
2	5YR4/8	赤褐色　焼土　締まりやや疎　粗砂混入
3	10YR3/4	暗褐色　シルト　締まり中　上層に黒褐色シルト混入
4	10YR2/2	黒褐色　シルト　締まりやや密　褐色粘土ブロック15%混入
5	2.5YR5/4	黄褐色　粘土　締まりやや密　黒褐色土、To-Nb2%混入
6	10YR2/2	黒褐色　シルト　締まりやや疎　黄褐色粘土ブロック5%、To-Nb1%混入
7	10YR2/1	黒色　シルト　締まり中　To-Nb5%混入
8	10YR2/3	黒褐色　シルト　締まり中　黄褐色粘土ブロック7%、赤褐色粘土ブロック5%混入
9	10YR3/4	暗褐色　砂質シルト　締まりやや疎　黒褐色土混入
10	10YR2/3	黒褐色　シルト　締まりやや密　黄褐色粘土ブロック5%、To-Nb10%混入
11	10YR2/1	黒色　シルト　締まりやや疎　To-Nb5%混入
12	5YR4/6	赤褐色　焼土　締まりやや疎　To-Nb15%混入
13	5YR4/6	赤褐色　焼土　締まり中　粗砂混入
14	10YR2/1	黒色　シルト　締まりやや疎　褐灰土、To-Nb2%混入

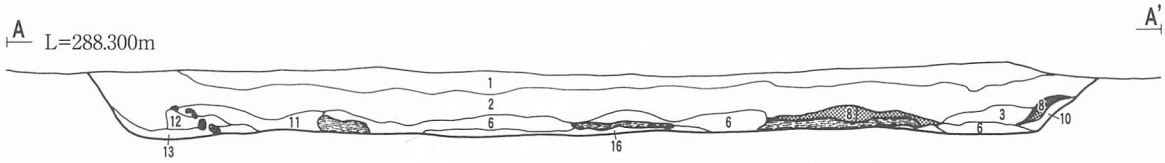
0　1:25　1m

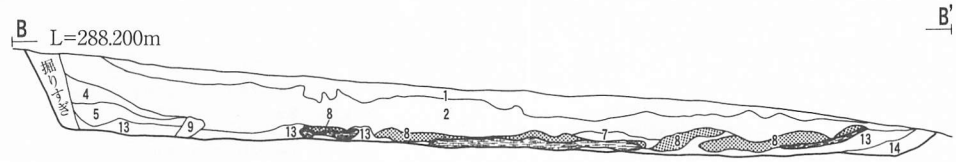
第11図　ＲＡ04竪穴住居跡

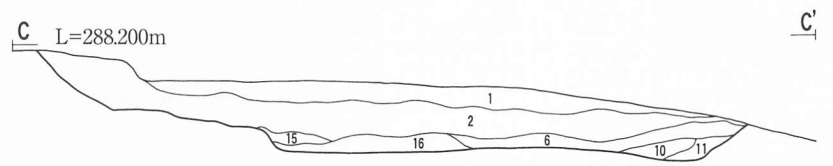
RA05
カマド（cm）

本体	長さ	110	煙道部	長さ	180	煙出部	径	65
	幅	170		幅	20		深さ	30







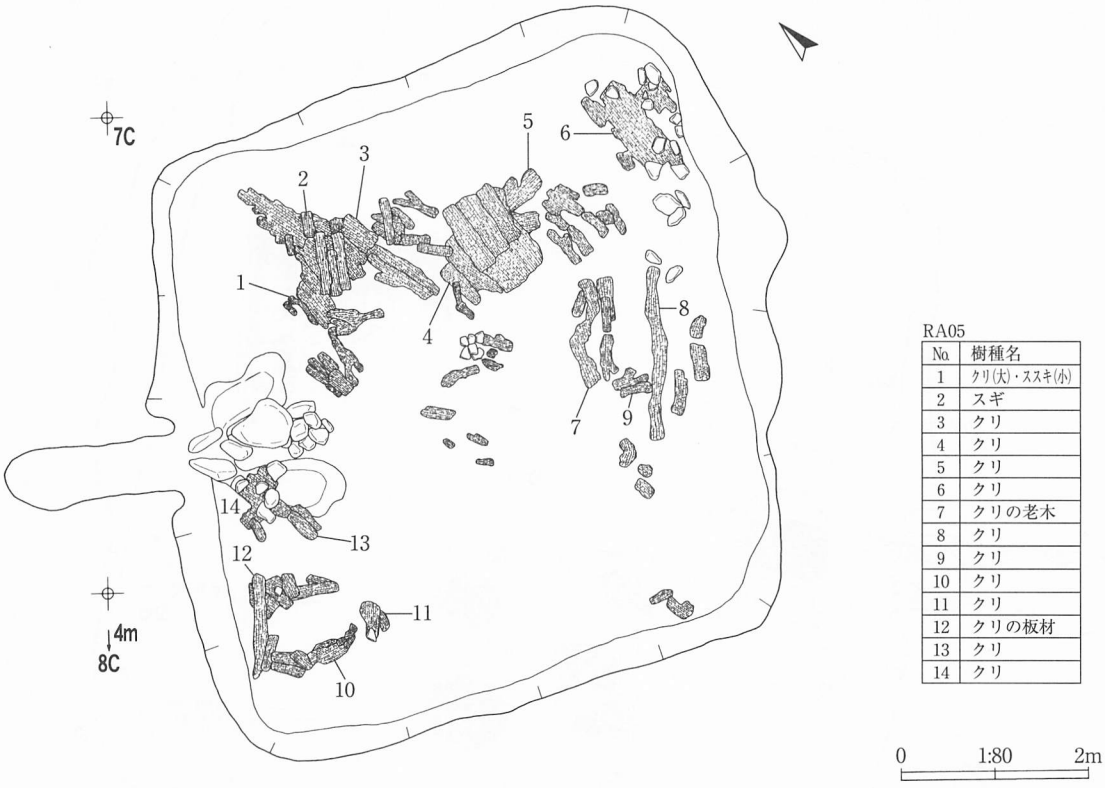


0　1:60　2m

RA05（A－A'・B－B'・C－C'）

層位	色調	土性
1	10YR2/1	黒色　シルト　締まり中　To-Nb1%混入
2	10YR3/3	暗褐色　シルト　締まり中　To-Nb1%混入
3	10YR4/4	褐色　シルト　締まり中　To-Nb1%混入
4	10YR3/4	暗褐色　シルトと10YR4/4　褐色シルト混合土　締まり中　To-Nb7%混入
5	10YR4/4	褐色　シルト　締まり中　黄褐色土ブロック7%混入
6	10YR3/3	暗褐色　シルト　締まりやや密　炭、明赤褐色焼土ブロック10%混入
7	10YR4/1	褐灰色　シルト　締まり中　To-aブロック5%混入
8	7.5YR5/8	明褐色　焼土　締まり中
9	10YR7/4	にぶい黄橙色　シルト　締まり中　To-a混入
10	10YR3/3	暗褐色　シルト　締まり中　炭20%混入
11	10YR4/4	褐色　シルト　締まり中　明褐色焼土混入
12	10YR2/1	黒色　シルト　締まりやや疎　炭混入
13	10YR2/1	黒色　シルト　締まりやや疎　炭、褐色シルト混入
14	10YR3/3	暗褐色　シルト　締まり中　灰黄褐色シルト混入
15	2.5YR7/6	明黄褐色　粘土　締まり密
16	7.5YR6/6	橙色　粘土　締まり密

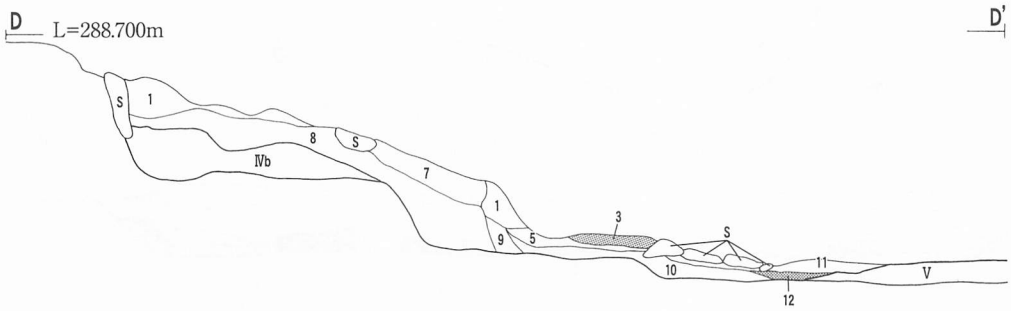
第12図　ＲＡ05竪穴住居跡（１）

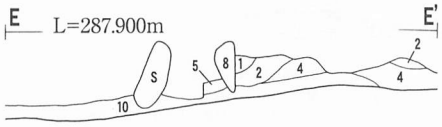


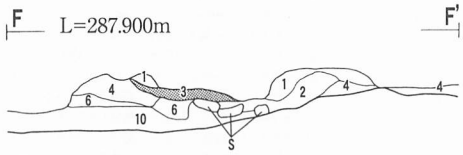
RA05

No.	樹種名
1	クリ(大)・ススキ(小)
2	スギ
3	クリ
4	クリ
5	クリ
6	クリ
7	クリの老木
8	クリ
9	クリ
10	クリ
11	クリ
12	クリの板材
13	クリ
14	クリ

＜炭化材検出状況＞







RA05（D－D'・E－E'・F－F'）

層位	色調	土性
1	10YR6/4	にぶい黄橙色　粘土　締まり中　炭、粗砂、To-Nb（熱を受け赤変している）10%混入
2	10YR6/8	明黄褐色　粘土　締まりやや密　暗褐色シルト混入
3	5YR4/8	赤褐色　焼土　締まり中
4	10YR3/3	暗褐色　シルト　締まり中　To-Nb（熱を受け赤変している）5%、礫10%混入
5	10YR6/8	明黄褐色　粘土　締まり中　暗褐色シルト、炭、赤褐色焼土ブロック5%混入
6	10YR3/3	暗褐色　シルト　締まりやや密　赤褐色焼土、炭混入
7	10YR4/2	灰黄褐色　シルト　締まりやや疎
8	10YR4/3	にぶい黄褐色　シルト　締まり中　炭混入
9	10YR5/8	黄褐色　粘土　締まり中　To-Nb20%混入
10	10YR6/8	明黄褐色　粘土　締まりやや密
11	10YR2/1	黒色　シルト　締まりやや密　炭、To-aブロック3%、赤褐色焼土ブロック5%混入
12	5YR5/8	明赤褐色　焼土　締まりやや密　熱を受け赤変している

0　1:40　2m

第13図　ＲＡ05竪穴住居跡（２）

いる。16は糸切り後にケズリ調整されている。19・21～25・27は甕の底部破片で、底部には木葉痕がある。20は外面ケズリ調整、内面ナデ調整が施され、26は内外面ともナデ調整の甕である。29は頸部のくびれがない小型の甕で、30も小型の甕の胴部上半の破片である。31～37は甕の口縁部破片である。

〈須恵器〉破片（38）。38は須恵器で甕の口縁部破片である

〈鉄製品〉39～43。39・40・41は刀子で、39a・39ｂは同一個体、42は鉋で刃部となる先端が屈曲する。内側の鍋は明瞭でなく、外側の中央に浅い溝がある。43は鉄製の釘のようである。断面は方形である。

時期　平安時代と思われる。

RA06竪穴住居跡

遺構（第14図、写真図版９）

〈位置・検出状況〉９Ｂグリッドに位置する。RZ01炭窯跡の窯底下（地下施設の確認のため）を精査中、土師器片が多く出たことから住居跡の存在を想定して精査を行い、カマドや遺物の分布から住居跡と認定した。

〈重複関係〉RZ01炭窯跡に住居全体が切られ、壊されている。

〈規模・平面形〉径（4.00）×（3.50）m。平面形は隅丸方形を呈していたものと推定される。

北側に煙出しらしき部分と平面形内に袖部のような粘土痕があった。主軸はN－12°－Eである。

〈埋土・堆積状況〉消失しており、確認できていない。

〈壁・床面〉壁はRZ01炭窯跡の構築時に破壊されている。床面も同様であるが、To－Hが堅く締まり、色調の違う部分から床面を推定した。

〈柱穴〉なし。

〈カマド〉煙道部分から煙出部分についてはRZ01・02炭窯の間に位置していたことから、比較的残っていたもののカマド本体の遺存状態は悪い。袖部と天井部の礫が散乱しており、原位置を留めていない。袖に貼られていた粘土も本来の形状を留めていなかった。カマドは住居跡の北東側壁の中央に構築されたものと推定される。主軸方向はN－12°－Eである。煙道部は刳り貫き式で底面はほぼ水平に延びて立ちあがる。検出面からの深さは約45cmである。

遺物（第33図、写真図版27）

〈出土状況〉RZ01炭窯の窯底下の精査中（掘り下げ中）に出土した土師器がほとんどである。カマド付近にも甕の破片があったが、散乱した状態であった。

〈土師器〉立体(44・45)。44・45は甕で、器形は口縁が外反し、胴部は丸みを帯び、外面にケズリ調整が入る。

〈須恵器〉破片（46）。46は須恵器の口縁部破片である。

時期　平安時代と思われる。

RA07竪穴住居跡

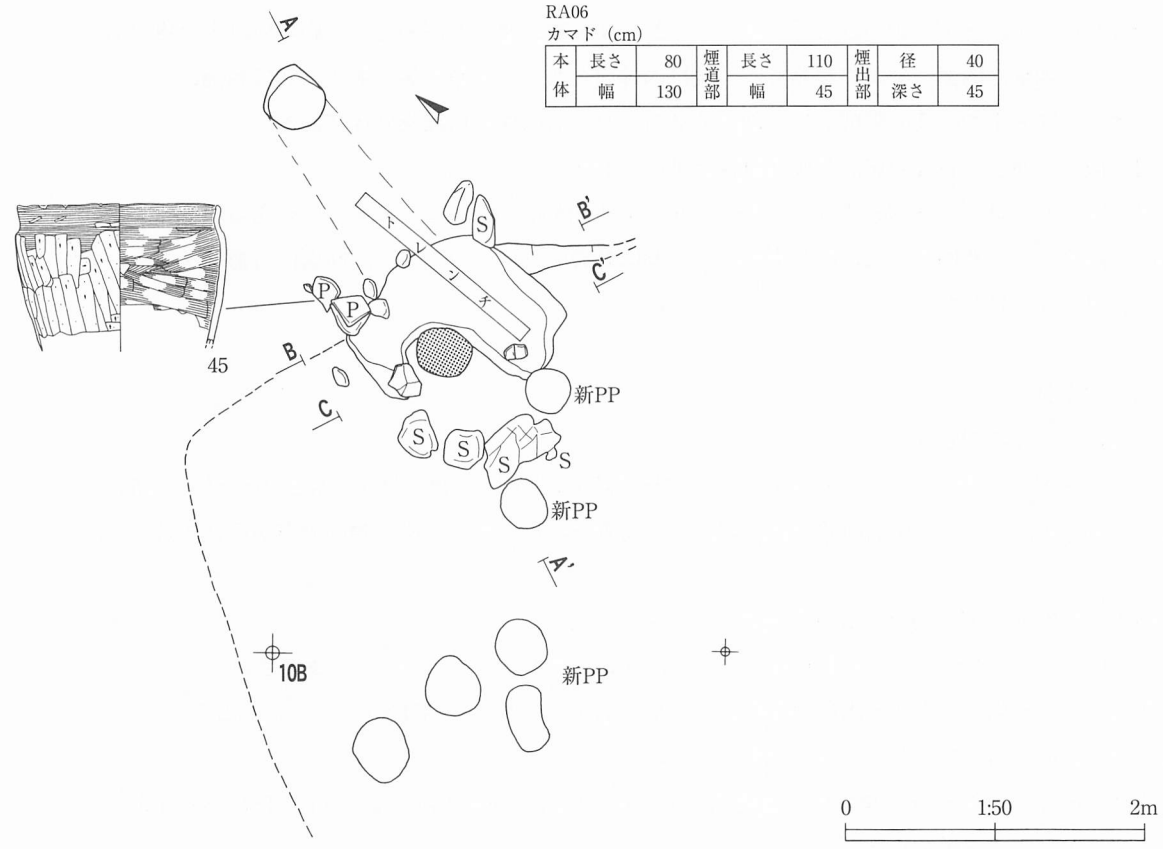
遺構（第15図、写真図版９）

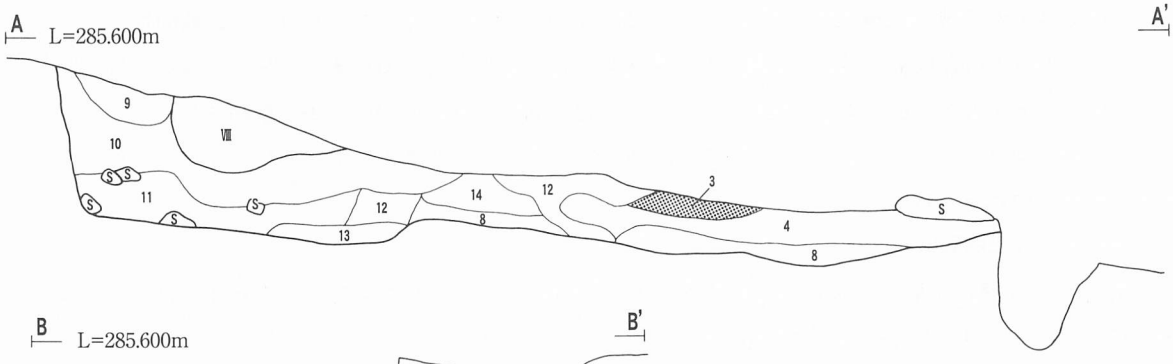
〈位置・検出状況〉調査区東側７Ｋグリッドに位置する。表土除去後、Ⅲ層で焼土粒と黒褐色土の広がりとして検出した。東側が調査区域外にかかる。

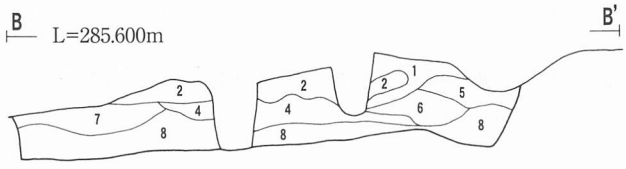
〈重複関係〉なし。

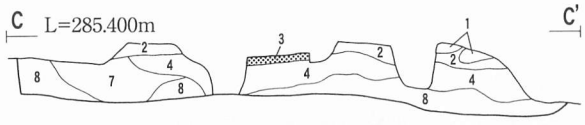
RA06
カマド（cm）

本体	長さ	80	煙道部	長さ	110	煙出部	径	40
	幅	130		幅	45		深さ	45







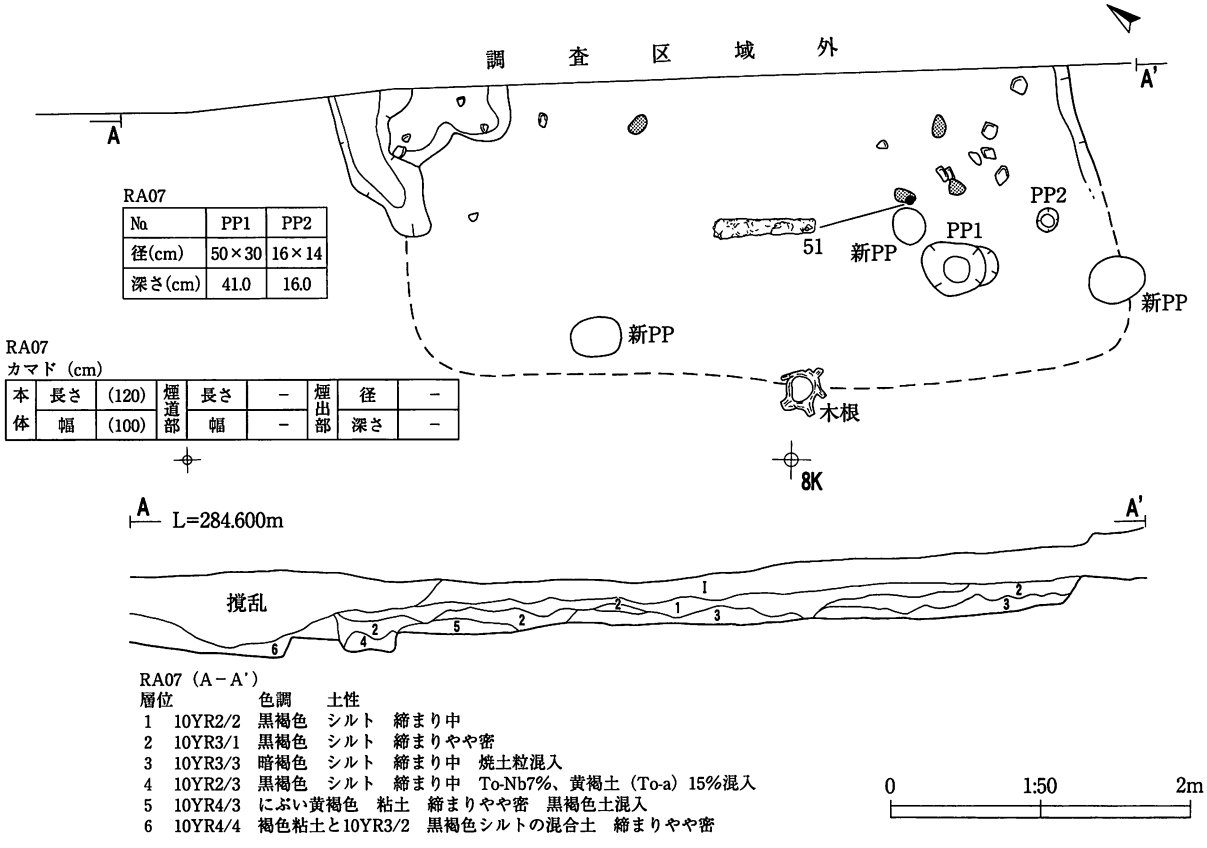


RA06（A－A'・B－B'・C－C'）

層位	色調	土性
1	10YR5/4	にぶい黄褐色　粘土　締まりやや密　To-Nb15%混入
2	7.5YR5/6	明褐色　粘土　締まり中　To-Nb5%混入
3	7.5YR6/8	橙色　焼土　締まりやや疎
4	10YR3/3	暗褐色　砂質シルト　締まりやや疎　褐色シルト、To-Nb5%混入
5	10YR3/3	暗褐色　砂質シルト　締まりやや疎　にぶい黄褐色粘土ブロック15%、To-Nb5%混入
6	10YR3/2	黒褐色　シルト　締まり中　暗褐色シルト、To-Nb2%混入
7	10YR5/6	黄褐色　シルト　締まりやや密　暗褐色シルト、To-Nb10%混入
8	10YR4/4	褐色　シルト　締まりやや疎　黒褐色シルト、To-Nb20%混入
9	10YR6/6	明黄褐色　粘土　締まりやや密
10	10YR4/6	褐色　シルト　締まり中　To-Nb10%混入
11	10YR6/6	明黄褐色　粘土　締まりやや密　暗褐色シルト、礫15%混入
12	10YR4/6	褐色　シルト　締まり中　To-Nb5%混入
13	10YR4/4	褐色　粘土　締まりやや密　細砂10%混入
14	10YR3/3	暗褐色　シルト　締まりやや疎　To-Nb1%混入

0　1:25　1m

第14図　ＲＡ06竪穴住居跡



第15図　ＲＡ07竪穴住居跡

〈規模・平面形〉調査区域外にかかっているため、全容はつかめないが、径4.7×（2.1）m。隅丸方形を呈すると推定される。主軸方向はN－35°－Wかと推定される。

〈埋土・堆積状況〉焼土粒やTo－Nbを含む黒褐色シルトで構成される。一部撹乱を受けているが自然堆積と思われる。

〈壁・床面〉壁はⅢ層を掘り込んでいるが、この付近はⅢ層より上位が削平されており、本来の掘り込み面は不明である。残存する壁高は約20cmで外傾して立ちあがる。床面はほぼ平坦である。貼床などの痕跡は確認できなかった。

〈柱穴〉PP1・PP2の２基が検出された。

〈カマド〉調査区外にあるものと思われる。袖の残存部らしき粘土痕があることから、北西壁の中央付近に位置する可能性がある。その場合の主軸方向はN－35°－Wになる。

遺物（第33図、写真図版28）

〈出土状況〉住居の南側で土師器が出土した。鉄製品も同一の地点で出土している。

〈土師器〉立体（47）、破片（48～50）。47は底部に木葉痕を持った甕の底部破片である。48～50は口縁部破片である。胎土が粗く、器壁が非常にもろい。

〈鉄製品〉刀子（51）、輪（52）。

時期　平安時代と思われる。

RA08竪穴住居跡

遺構（第16図、写真図版10）

〈位置・検出状況〉12Cグリッドに位置する。南東側半分が調査区域外にかかる。Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして検出した。

〈重複関係〉なし。

〈規模・平面形〉径5.10×（2.50）m。南東側半分は調査区域外にかかっているため全容は不明であるが、やや曲線がかる不整な方形を呈している。

〈埋土・堆積状況〉To－Nbを含む黒褐色シルトで構成される。一部撹乱を受けているが自然堆積と思われる。

〈壁・床面〉壁はⅢ層を掘り込みⅣ層を床面としている。床面は多少凹凸があり、壁は外傾する。

〈柱穴〉2基を検出した。

〈カマド〉住居の南西側に粘土質の袖部を持ち芯材に土師器片を使用していることからカマドと推定したが、はっきりとした煙道は確認できていない。カマド部分から細長い粘土質土が延びており、煙道の残骸ではないかと推定される。粘土質土は斜面の下方に向かって延び、先端に土師器片（55）がまとまって検出された。主軸方向はW－25°－Sである。

遺物（第34図、写真図版28･29）

〈出土状況〉53・54・56・57・58・59は袖部や袖部を構成する粘土の中から出土した。60・61は埋土中から出土した土師器片である。

〈土師器〉立体（53～58）、破片（59～61）。53はロクロを使用し内面にミガキ調整が施されている。55は外面ケズリ調整、内面ナデ調整の甕の胴部である。焼成は良好であるが、胎土が粗い。54・56～59は、55と同様に胎土が粗く、外面器壁の剥落が多い。

時期　平安時代と思われる。

RA09竪穴住居跡

遺構（第17図、写真図版11）

〈位置・検出状況〉7Dグリッドに位置する。Ⅶ層で黄褐色粘土の広がりとして検出した。

〈重複関係〉なし。

〈規模・平面形〉3.30×（3.15）m。平面形は隅丸方形を呈する。

〈埋土・堆積状況〉表土除去後、すでに床面だけであったため不明である。

〈壁・床面〉Ⅶ層を床面とする。一部To－Nbで薄く固められているため床面は平坦である。

〈柱穴〉なし。

〈カマド〉住居の北側壁にカマドを持つ。遺存状態は悪く、袖部などの部位は確認できなかった。芯材には礫を用いたようで、焼土の上に礫を含んだ粘土が広がっていた。煙道はかろうじて残っており、刳り貫き式でカマドから平坦に続いて煙出しに直立につながる。主軸方向はN－40°－Eである。

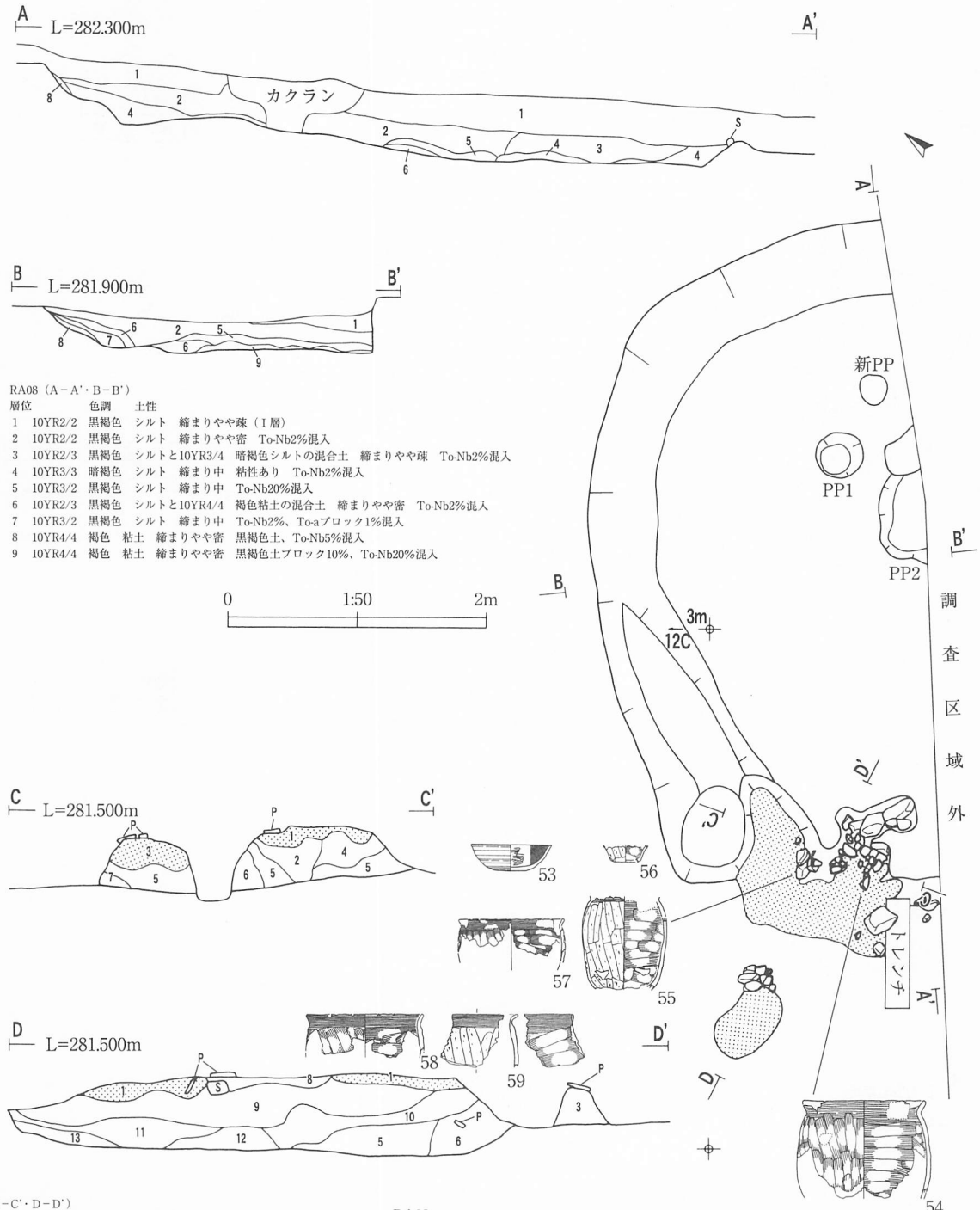
〈付属施設〉カマドの東側に開口部径135×100cm、深さ15cmのピットが検出された。出土遺物はなく、埋土はTo－Nbを含んだ黒色土が主体であった。

遺物（第34図、写真図版29）

〈出土状況〉カマドの西側から椀形鉄滓が出土した。

〈鉄滓〉椀型鉄滓（62）。

時期　平安時代と思われる。



RA08（A－A'・B－B'）

層位	色調	土性
1	10YR2/2 黒褐色	シルト　締まりやや疎（Ⅰ層）
2	10YR2/2 黒褐色	シルト　締まりやや密　To-Nb2%混入
3	10YR2/3 黒褐色	シルトと10YR3/4　暗褐色シルトの混合土　締まりやや疎　To-Nb2%混入
4	10YR3/3 暗褐色	シルト　締まり中　粘性あり　To-Nb2%混入
5	10YR3/2 黒褐色	シルト　締まり中　To-Nb20%混入
6	10YR2/3 黒褐色	シルトと10YR4/4　褐色粘土の混合土　締まりやや密　To-Nb2%混入
7	10YR3/2 黒褐色	シルト　締まり中　To-Nb2%、To-aブロック1%混入
8	10YR4/4 褐色	粘土　締まりやや密　黒褐色土、To-Nb5%混入
9	10YR4/4 褐色	粘土　締まりやや密　黒褐色土ブロック10%、To-Nb20%混入

RA08（C－C'・D－D'）

層位	色調	土性
1	10YR4/4 褐色	粘土　締まりやや密　To-Nb1%、焼土粒7%混入
2	10YR3/3 暗褐色	シルト　締まりやや密　To-Nb3%混入
3	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土　締まりやや密　To-Nb1%、炭化物5%混入
4	10YR3/2 黒褐色	シルト　締まり中
5	10YR3/3 暗褐色	シルト　締まり中　To-Nb5%混入
6	10YR3/3 暗褐色	シルトと10YR3/2　黒褐色シルトの混合土　締まりやや疎　To-Nb1%混入
7	10YR3/2 黒褐色	シルト　締まりやや疎　To-Nb2%混入
8	7.5YR3/4 暗褐色	シルト　締まりやや密　炭化物10%混入
9	7.5YR2/3 極褐色	シルト　締まり中　To-Nb5%、褐色土粒3%混入
10	10YR3/3 暗褐色	シルトと10YR4/4　褐色シルトの混合土　締まり中　To-Nb5%混入
11	10YR3/3 暗褐色	シルト　締まり中　To-Nb3%、褐色土粒2%混入
12	10YR4/4 褐色	シルト　締まりやや密　To-Nb10%混入
13	10YR4/4 褐色	シルト　締まりやや密　To-Nb1%、粗砂混入

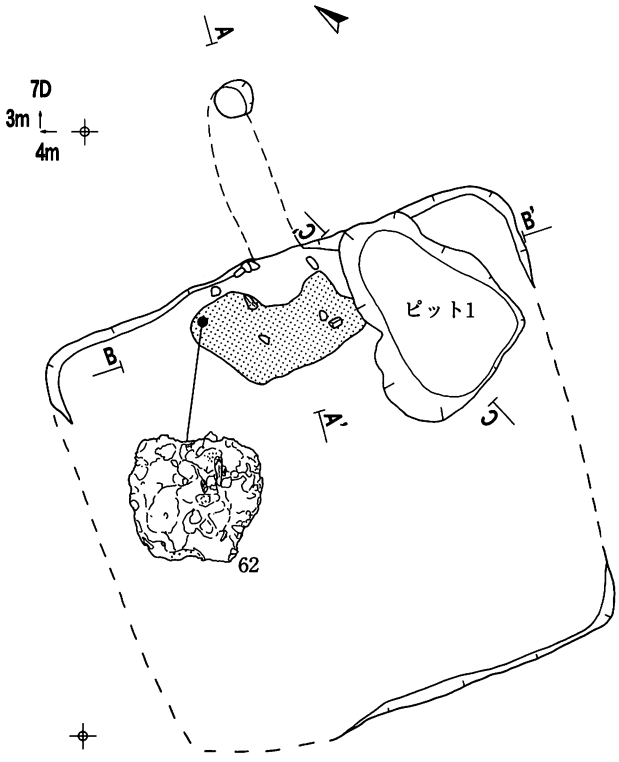
RA08
カマド（cm）

本体	長さ	(125)	煙道部	長さ	－	煙出部	径	－
	幅	(110)		幅	－		深さ	－

RA08

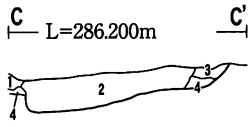
No.	PP1	PP2
径(cm)	36×33	(68)×(38)
深さ(cm)	25.8	15.6

第16図　ＲＡ08竪穴住居跡



RA09
カマド（cm）

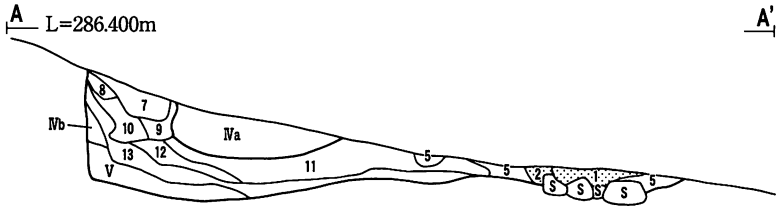
本体	長さ	(75)	煙道部	長さ	95	煙出部	径	25
	幅	(110)		幅	35		深さ	35

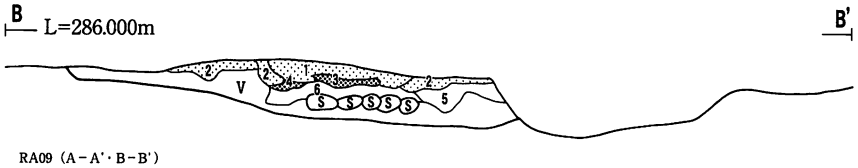


RA09　ピット1　断面（C－C'）

層位	色調	土性
1	10YR4/4	褐色　シルト　締まり中　黄褐粘土ブロック5%、To-Nb30%混入
2	10YR3/2	黒褐色　シルト　締まり中　炭、赤褐色焼土ブロック5%、To-aブロック10%混入
3	10YR3/1	黒褐色　シルト　締まり中　To-Nb2%混入
4	10YR3/1	黒褐色　シルト　締まり中　To-aブロック1%、To-Nb3%混入

0　1:50　2m





RA09（A－A'・B－B'）

層位	色調	土性
1	7.5YR7/6	橙　粘土　締まりやや密
2	10YR5/8	黄褐色　粘土　締まり密
3	10YR5/8	黄褐色　粘土と10YR2/3　黒褐色シルトの混合土　締まりやや密　明赤褐色焼土、炭混入
4	5YR5/8	明赤褐色　焼土　締まりやや疎
5	10YR3/3	暗褐色　シルト　締まりやや密　炭、灰黄褐土、明赤褐色焼土混入
6	10YR5/8	黄褐色　粘土　締まり中　明赤褐色焼土ブロック5%混入
7	10YR3/3	暗褐色　シルト　締まり中　黄褐色粘土ブロック10%、明赤褐色焼土ブロック5%混入
8	10YR2/3	黒褐色　シルト　締まり中　褐色シルト混入
9	10YR3/3	暗褐色　シルト　締まり中　To-Nb3%混入
10	10YR4/4	褐色　シルト　締まり中
11	10YR2/3	黒褐色　シルト　締まり中
12	10YR2/3	黒褐色　シルト　締まり中　褐色粘土ブロック10%混入
13	10YR3/2	黒褐色　シルト　締まり中　炭混入

0　1:25　1m

第17図　ＲＡ09竪穴住居跡

2．竪穴状遺構（第18図、写真図版12）

掘り方や平面形・規模は、竪穴住居跡に類似するが、炉跡・カマドが確認できなかったことから住居跡としての痕跡が弱いため、竪穴状遺構として報告する。

RE01竪穴状遺構

遺構（第18図、写真図版12）

〈位置・検出状況〉８Ｆグリッドに位置する。Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして検出された。

〈重複関係〉なし。

〈規模・平面形〉6.80×5.80m。平面形は長方形を呈する。

〈埋土・堆積状況〉To－Nbを含む黒褐色土を主体とする。埋土中から炭化材が出土している。樹種はクリであるとの鑑定結果を得ている。

〈壁・床面〉Ⅲ層を床面とする。北側から東側にかけて帯状にTo－Nbで薄く固められている個所がある。床面は北東から南西方向に傾斜している。

〈柱穴〉PP1・2の2基が検出された。PP1の柱穴の周囲に厚さ５㎝程の粘土塊が柱穴に沿うようにして貼ってあったのを確認された。

遺物（第34図、写真図版29）

〈出土状況〉住居の西側床面から鉄製品が出土した。

〈鉄製品〉鉄製品（63）。不明である。

時期　平安時代の可能性がある。

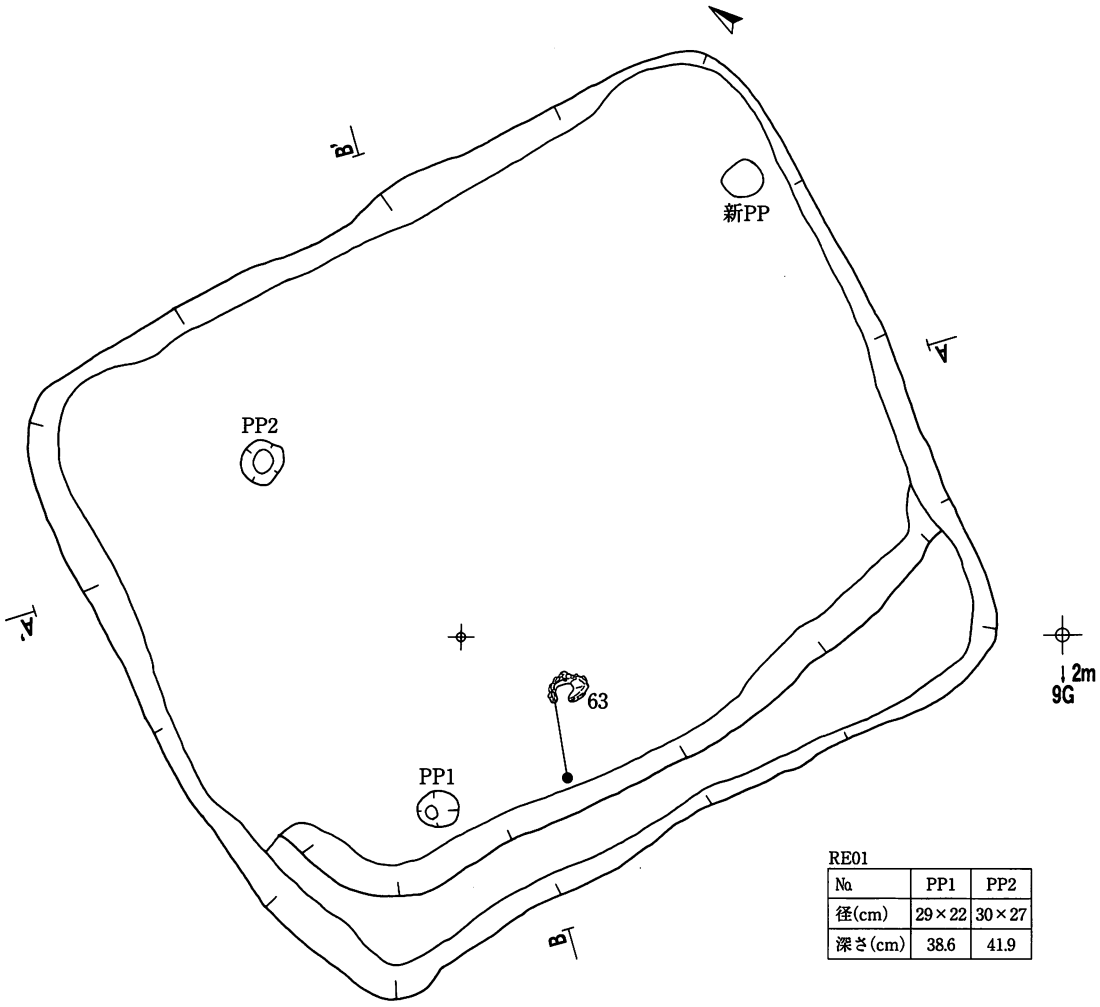
第２表　竪穴住居跡観察表

a　弥生時代の竪穴住居跡観察表　　（　）数値：残存値

遺構名	平面形	規模（m）	炉の形態	炉の規模(㎝)	焼土の厚さ(㎝)	柱穴・柱配置	付属施設	遺物（掲載No.）	時　代
RA01	円形？	5.25×(4.40)	石囲炉	62×60	不明	15・壁柱穴	なし	土器(1)	弥生時代前期
RA02	円形	(4.70)×4.50	石囲炉	70×65	7	27・壁柱穴	なし	土器(2)	弥生時代前期
RA03	楕円形	4.25×3.60	地床炉	35×30	3	1	なし	土器（３～７）、石皿（８）	弥生時代前期

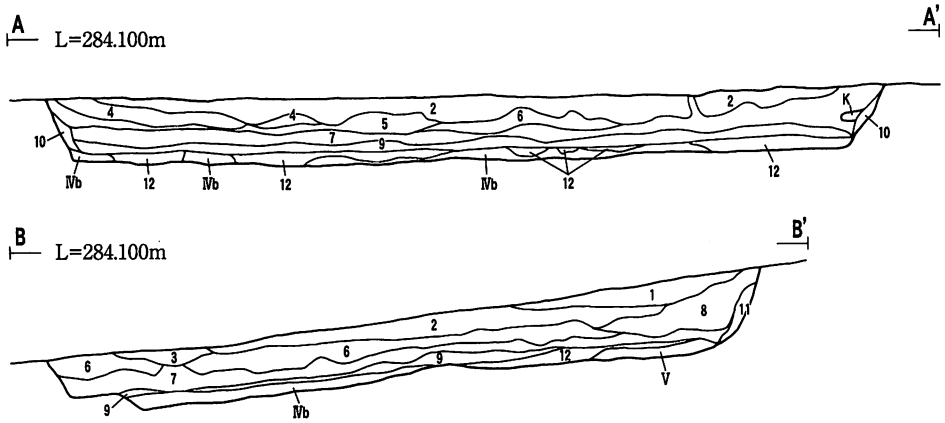
b　平安時代の竪穴住居跡観察表　　（　）数値：残存値

遺構名	平面形	規模（m）	主柱穴	カマド位置	煙　道	主軸方向	付属施設	遺物（掲載No.）	備考	時期
RA04	隅丸方形 （いびつ）	3.55×3.70	なし	北壁中央	刳り貫き式	N-26°-W	なし	土師器（９～13） ※小型手づくね土器	－	平安
RA05	隅丸方形 （いびつ）	6.86×6.60	なし	北西壁中央	掘り込み式	N-60°-W	なし	土師器(14～37) 須恵器(38) 金属製品(39～43)	焼失住居	平安
RA06	隅丸方形？	4.00×(3.50)	不明	北壁中央	刳り貫き式	N-12°-E	なし	土師器(44～45) 須恵器(46)	－	平安
RA07	隅丸方形	4.70×(2.10)	2	北西壁？	不明	N-35°-W	なし	土師器(47～50) 金属製品(51･52)	－	平安
RA08	不整な方形	5.10×(2.50)	2	南西壁？	不明	W-25°-S?	なし	土師器(53～61)	－	平安
RA09	隅丸方形	3.30×(3.15)	なし	北壁？	刳り貫き式	N-40°-E	カマド東側にピット	鉄滓(62)	－	平安
RE01	長方形	6.80×5.80	2	なし	なし	－	なし	金属製品(63)	－	平安



RE01

No	PP1	PP2
径(cm)	29×22	30×27
深さ(cm)	38.6	41.9



RE01（A－A'・B－B'）

層位		色調	土性
1	10YR2/1	黒色	シルト　締まり中　To-Nb1%混入
2	10YR2/1	黒色	砂質シルト　締まり中　To-Nb3%混入
3	10YR4/4	褐色	シルト　締まりやや密　黒褐色土、To-Nb7%混入
4	10YR2/2	黒褐色	砂質シルト　締まり中　To-Nb1%混入
5	10YR2/2	黒褐色	シルト　締まり中　To-Nb5%混入
6	10YR2/3	黒褐色	シルト　締まり中　To-Nb3%混入
7	10YR3/2	黒褐色	シルト　締まり中　To-Nb3%混入
8	10YR2/2	黒褐色	シルト　締まり中　暗褐色土、To-Nb3%混入
9	10YR3/4	暗褐色	シルト　締まりやや密　To-Nb20%混入
10	10YR3/2	黒褐色	シルト　締まりやや疎　To-Nb1%混入
11	10YR3/3	暗褐色	シルト　締まり中　黒褐色土ブロック10%、To-Nb1%混入
12	10YR2/3	黒褐色	シルト　締まり中　To-Nb30%混入　貼床

0　1:50　2m

第18図　ＲＥ01竪穴状遺構

3．土　坑（第19～22･35図、写真図版13～17・29）

土坑は全部で20基(RD01～20)を検出している。形状は円形が11基、楕円形が３基、長楕円形が3基、不整形が3基である。規模は、開口部径の最大232×150cm、最小88×72cm、深さは最大70cm、最小10cmである。断面形は、椀形・皿形・ビーカー形がある。土坑の底部に焼土をもつものや、灰の塊などが検出されたものはない。

占地は、調査区の中央にある沢跡の北側で10基検出され、その内６基は緩斜面になった所にまとまっている。南側でも10基検出されているが、集中してあるのではなく、緩斜面に沿うように散在する。一列に並んでいるようにもみえるが、個々の土坑の規模・形状・埋土は異なるもので、陥し穴としての可能性はない。全体として深さが浅いのは後世の削平を受けているためである。

出土遺物は少なく、遺物が出土した土坑は３基で、ＲＤ02土坑は弥生土器(64･65)、ＲＤ16土坑は縄文土器(66)、ＲＤ18土坑は土師器(67･68)が出土している。遺物が出土していない土坑は、詳細な時期が不明である。各土坑の規模・形状などについては第３表　土坑観察表に示した。

第３表　土坑観察表

（　）数値：残存値

遺構名	ＲＤ０１			
図版	遺構	19	遺物	－
写真図版	遺構	13	遺物	－
位置	９Ｄグリッド西側			
検出状況	Ⅲ層			
重複関係	なし			
形状・規模 平面形	楕円形			
形状・規模 断面形	椀形			
形状・規模 開口部	184×157cm			
形状・規模 底部	167×112cm			
形状・規模 深さ	32cm			
埋　土	To-Nbを含む暗褐色土と黒褐色土を主体とする。			
底　面	ほぼ平坦			
壁	ほぼ直立			
出土遺物	なし			
時　期	不明			

遺構名	ＲＤ０２			
図版	遺構	19	遺物	35
写真図版	遺構	13	遺物	29
位置	９Ｆグリッド南側			
検出状況	Ⅲ層上面			
重複関係	ＲＡ０１→ＲＤ０２			
形状・規模 平面形	不整楕円形			
形状・規模 断面形	椀形			
形状・規模 開口部	(200)×156cm			
形状・規模 底部	(166)×100cm			
形状・規模 深さ	35cm			
埋　土	To-aを含む黒褐色土と褐色土の２層からなる。			
底　面	丸味をもつ			
壁	外傾			
出土遺物	土器:破（64･65）			
時　期	弥生？			

遺構名	ＲＤ０３			
図版	遺構	19	遺物	－
写真図版	遺構	13	遺物	－
位置	９Ｇグリッド北側			
検出状況	Ⅲ層上面			
重複関係	なし			
形状・規模 平面形	円形			
形状・規模 断面形	椀形			
形状・規模 開口部	98×82cm			
形状・規模 底部	80×70cm			
形状・規模 深さ	40cm			
埋　土	To-Nbを含む黒色土～黒褐色土を主体とする。人為堆積。			
底　面	丸味をもつ			
壁	ほぼ直立			
出土遺物	なし			
時　期	不明			

（　）数値：残存値

遺構名	ＲＤ０４			
図版	遺構	19	遺物	－
写真図版	遺構	13	遺物	－
位置	10Hグリッド東側			
検出状況	Ⅲ層			
重複関係	なし			
形状・規模 平面形	円形？			
形状・規模 断面形	皿形			
形状・規模 開口部	215×(134)cm			
形状・規模 底部	190×(120)cm			
形状・規模 深さ	20cm			
埋　土	To-Nbを含む黒褐色土と黒色土を主体とする。			
底　面	平坦			
壁	ほぼ直立			
出土遺物	なし			
時　期	不明			

遺構名	ＲＤ０５			
図版	遺構	20	遺物	－
写真図版	遺構	14	遺物	－
位置	９Ｄグリッド東側			
検出状況	Ⅲ層			
重複関係	ＲＤ０６に切られている			
形状・規模 平面形	円形			
形状・規模 断面形	皿形			
形状・規模 開口部	132×112cm			
形状・規模 底部	108×95cm			
形状・規模 深さ	15cm			
埋　土	To-Nbを含む黒褐色土を主体とする。			
底　面	平坦			
壁	外傾			
出土遺物	なし			
時　期	不明			

遺構名	ＲＤ０６			
図版	遺構	20	遺物	－
写真図版	遺構	14	遺物	－
位置	９Ｄグリッド西側			
検出状況	Ⅲ層			
重複関係	ＲＤ０５を切っている。			
形状・規模 平面形	やや方形がかる楕円形			
形状・規模 断面形	皿形			
形状・規模 開口部	170×140cm			
形状・規模 底部	140×108cm			
形状・規模 深さ	28cm			
埋　土	To-Nbを含む黒褐色土～暗褐色土を主体とする。			
底　面	平坦			
壁	外傾			
出土遺物	なし			
時　期	不明			

遺構名	ＲＤ０７			
図版	遺構	20	遺物	－
写真図版	遺構	14	遺物	－
位置	９Ｄグリッド北側			
検出状況	Ⅲ層			
重複関係	ＲＤ０８を切っている			
形状・規模 平面形	円形			
形状・規模 断面形	ほぼ直立			
形状・規模 開口部	100×92cm			
形状・規模 底部	75×60cm			
形状・規模 深さ	23cm			
埋　土	To-Nbを含む黒褐色土の単層。			
底　面	平坦			
壁	ほぼ直立			
出土遺物	なし			
時　期	不明			

遺構名	ＲＤ０８			
図版	遺構	20	遺物	－
写真図版	遺構	14	遺物	－
位置	９Ｄグリッド北側			
検出状況	Ⅲ層			
重複関係	ＲＤ０７に切られている			
形状・規模 平面形	楕円形			
形状・規模 断面形	皿形			
形状・規模 開口部	200×160cm			
形状・規模 底部	180×130cm			
形状・規模 深さ	25cm			
埋　土	To-Nbと褐色粘土を含む黒褐色土を主体とする。			
底　面	平坦			
壁	外傾			
出土遺物	なし			
時　期	不明			

遺構名	ＲＤ０９			
図版	遺構	20	遺物	－
写真図版	遺構	14	遺物	－
位置	８Ｌグリッド西側			
検出状況	Ⅲ層上面			
重複関係	なし			
形状・規模 平面形	円形			
形状・規模 断面形	皿形			
形状・規模 開口部	87×86cm			
形状・規模 底部	77×77cm			
形状・規模 深さ	10cm			
埋　土	To-Nbを含む暗褐色土の単層。			
底　面	平坦			
壁	やや外傾			
出土遺物	なし			
時　期	不明			

（　）数値：残存値

遺構名	ＲＤ１０			
図版	遺構	20	遺物	－
写真図版	遺構	15	遺物	－
位置	９Ｌグリッド北側			
検出状況	Ⅵ層			
重複関係	なし			
形状・規模 平面形	長楕円形			
形状・規模 断面形	不整椀形			
形状・規模 開口部	232×150cm			
形状・規模 底部	170×65cm			
形状・規模 深さ	55cm			
埋　土	To-Nbを含む暗褐色土を主体とする。			
底　面	一部凹凸を持つが平坦			
壁	外傾			
出土遺物	なし			
時　期	不明			

遺構名	ＲＤ１１			
図版	遺構	20	遺物	－
写真図版	遺構	15	遺物	－
位置	９Ｍグリッド北側			
検出状況	Ⅲ層			
重複関係	なし			
形状・規模 平面形	円形			
形状・規模 断面形	Ⅲ形			
形状・規模 開口部	102×110cm			
形状・規模 底部	93×80cm			
形状・規模 深さ	30cm			
埋　土	To-Nbを含む黒褐色土を主体とする。			
底　面	ほぼ平坦			
壁	やや外傾			
出土遺物	なし			
時　期	不明			

遺構名	ＲＤ１２			
図版	遺構	20	遺物	－
写真図版	遺構	15	遺物	－
位置	９Ｎグリッド北側			
検出状況	Ⅲ層			
重複関係	なし			
形状・規模 平面形	ほぼ円形			
形状・規模 断面形	逆台形			
形状・規模 開口部	126×115cm			
形状・規模 底部	108×100cm			
形状・規模 深さ	30cm			
埋　土	To-Nbを含む暗褐色土を主体とする。			
底　面	ほぼ平坦			
壁	外傾			
出土遺物	なし			
時　期	不明			

遺構名	ＲＤ１３			
図版	遺構	21	遺物	－
写真図版	遺構	15	遺物	－
位置	９Ｏグリッド北側			
検出状況	Ⅲ層			
重複関係	なし			
形状・規模 平面形	不整な五角形			
形状・規模 断面形	逆台形			
形状・規模 開口部	200×188cm			
形状・規模 底部	180×160cm			
形状・規模 深さ	36cm			
埋　土	To-Nbを含む褐色土と暗褐色土からなる。人為堆積。			
底　面	平坦			
壁	外傾			
出土遺物	なし			
時　期	不明			

遺構名	ＲＤ１４			
図版	遺構	21	遺物	－
写真図版	遺構	16	遺物	－
位置	８Ｄグリッド南側			
検出状況	Ⅲ層			
重複関係	なし			
形状・規模 平面形	不整円形			
形状・規模 断面形	Ⅲ形			
形状・規模 開口部	180×175cm			
形状・規模 底部	170×165cm			
形状・規模 深さ	22cm			
埋　土	To-Nbを含む黒色土を主体とする。			
底　面	ほぼ平坦			
壁	外傾			
出土遺物	なし			
時　期	不明			

遺構名	ＲＤ１５			
図版	遺構	21	遺物	－
写真図版	遺構	16	遺物	－
位置	12Ｃグリッド北側			
検出状況	Ⅳ層			
重複関係	なし			
形状・規模 平面形	円形			
形状・規模 断面形	椀形			
形状・規模 開口部	85×75cm			
形状・規模 底部	73×60cm			
形状・規模 深さ	20cm			
埋　土	To-Nbを含む黒褐色土を主体とする。			
底　面	平坦			
壁	外傾			
出土遺物	なし			
時　期	不明			

（　）数値：残存値

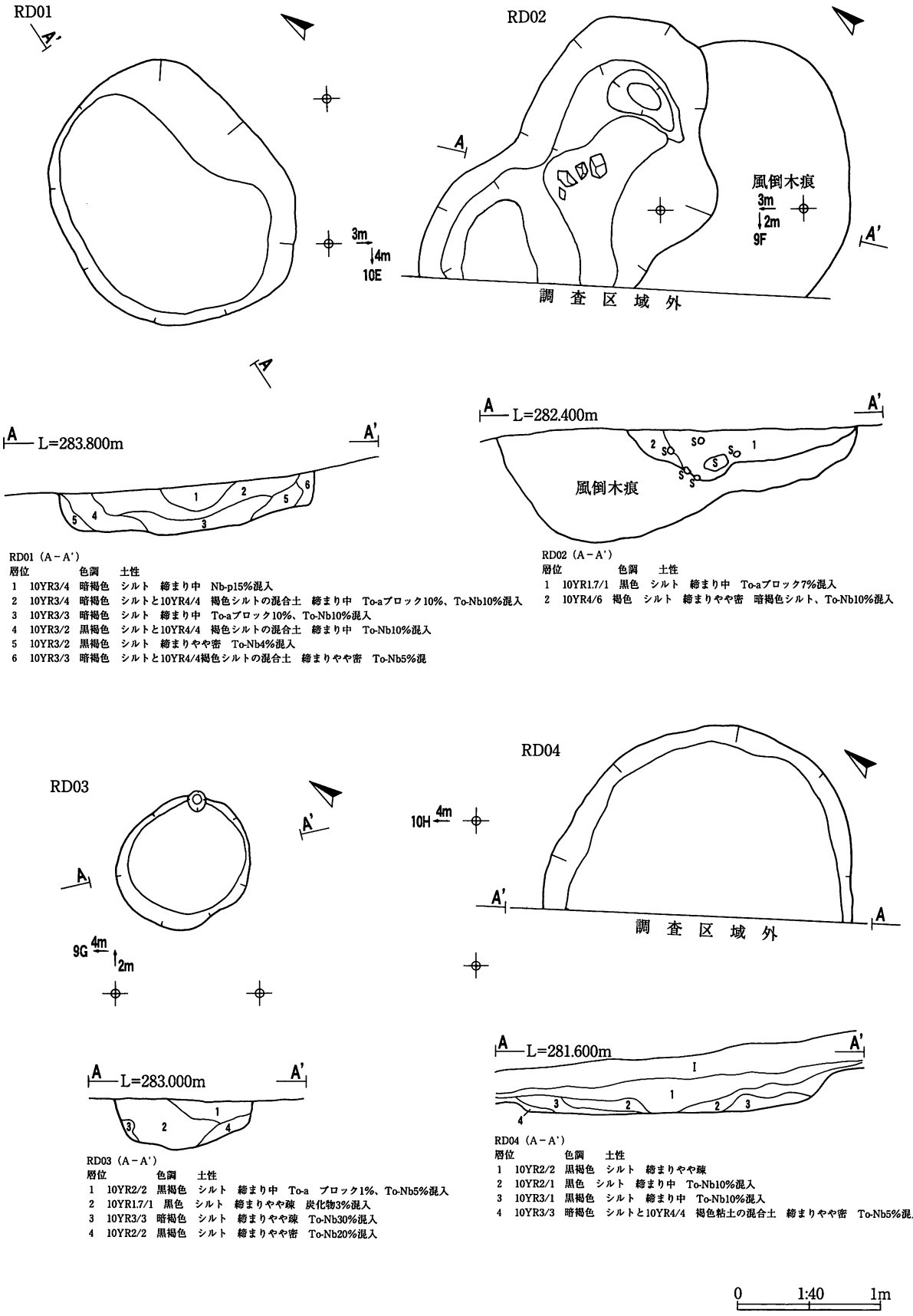
遺構名	ＲＤ１６			
図版	遺構	21	遺物	35
写真図版	遺構	16	遺物	29
位置	８Ｑグリッド西側			
検出状況	Ⅵ層			
重複関係	なし			
形状・規模 平面形	円形			
形状・規模 断面形	フラスコ形？			
形状・規模 開口部	118×115cm			
形状・規模 底部	92×85cm			
形状・規模 深さ	45cm			
埋　土	To-Nbを含む黒色土～灰黄褐色土を主体とする。			
底　面	やや凹凸あり			
壁	一部内湾するが、その他の壁は外傾する。			
出土遺物	土器:立(66)			
時　期	縄文時代			

遺構名	ＲＤ１７			
図版	遺構	22	遺物	－
写真図版	遺構	16	遺物	－
位置	８Ｑグリッド北側			
検出状況	Ⅵ層			
重複関係	なし			
形状・規模 平面形	長楕円形			
形状・規模 断面形	椀形			
形状・規模 開口部	190×90cm			
形状・規模 底部	140×45cm			
形状・規模 深さ	30cm			
埋　土	To-Nbを含む黒色土を主体とする。			
底　面	丸味をもつ			
壁	外傾			
出土遺物	なし			
時　期	不明			

遺構名	ＲＤ１８			
図版	遺構	22	遺物	35
写真図版	遺構	17	遺物	29
位置	８Ｏグリッド東側			
検出状況	Ⅲ層			
重複関係	ＲＤ19を切っている			
形状・規模 平面形	円形			
形状・規模 断面形	皿形			
形状・規模 開口部	88×72cm			
形状・規模 底部	72×40cm			
形状・規模 深さ	18cm			
埋　土	To-Nbと暗褐色土を含む褐色土を主体とする。礫混入。			
底　面	平坦			
壁	外傾			
出土遺物	土師器:破(67･68)			
時　期	平安時代			

遺構名	ＲＤ１９			
図版	遺構	22	遺物	－
写真図版	遺構	17	遺物	－
位置	８Ｏグリッド東側			
検出状況	Ⅲ層			
重複関係	ＲＤ18に切られている			
形状・規模 平面形	不整な長楕円形			
形状・規模 断面形	皿形			
形状・規模 開口部	177×105cm			
形状・規模 底部	145×75cm			
形状・規模 深さ	25cm			
埋　土	To-Nb・焼土を含む暗褐色土と褐色土が堆積する。			
底　面	やや西側に傾斜する			
壁	外傾			
出土遺物	なし			
時　期	不明			

遺構名	ＲＤ２０			
図版	遺構	22	遺物	－
写真図版	遺構	17	遺物	－
位置	９Ｊグリッド北側			
検出状況	Ⅵ層			
重複関係	なし			
形状・規模 平面形	円形			
形状・規模 断面形	ビーカー形			
形状・規模 開口部	100×90cm			
形状・規模 底部	78×75cm			
形状・規模 深さ	70cm			
埋　土	黒色土が上層、下層に焼土・礫が堆積する。投げ込み。			
底　面	平坦			
壁	ほぼ直立			
出土遺物	なし			
時　期	不明			



RD01（A－A'）

層位	色調	土性
1	10YR3/4 暗褐色	シルト 締まり中 Nb-p15%混入
2	10YR3/4 暗褐色	シルトと10YR4/4 褐色シルトの混合土 締まり中 To-aブロック10%、To-Nb10%混入
3	10YR3/3 暗褐色	シルト 締まり中 To-aブロック10%、To-Nb10%混入
4	10YR3/2 黒褐色	シルトと10YR4/4 褐色シルトの混合土 締まり中 To-Nb10%混入
5	10YR3/2 黒褐色	シルト 締まりやや密 To-Nb4%混入
6	10YR3/3 暗褐色	シルトと10YR4/4褐色シルトの混合土 締まりやや密 To-Nb5%混

RD02（A－A'）

層位	色調	土性
1	10YR1.7/1 黒色	シルト 締まり中 To-aブロック7%混入
2	10YR4/6 褐色	シルト 締まりやや密 暗褐色シルト、To-Nb10%混入

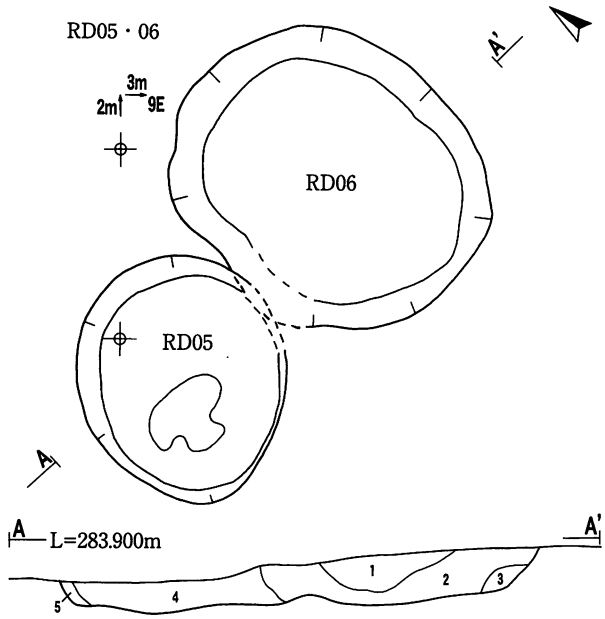
RD03（A－A'）

層位	色調	土性
1	10YR2/2 黒褐色	シルト 締まり中 To-a ブロック1%、To-Nb5%混入
2	10YR1.7/1 黒色	シルト 締まりやや疎 炭化物3%混入
3	10YR3/3 暗褐色	シルト 締まりやや疎 To-Nb30%混入
4	10YR2/2 黒褐色	シルト 締まりやや密 To-Nb20%混入

RD04（A－A'）

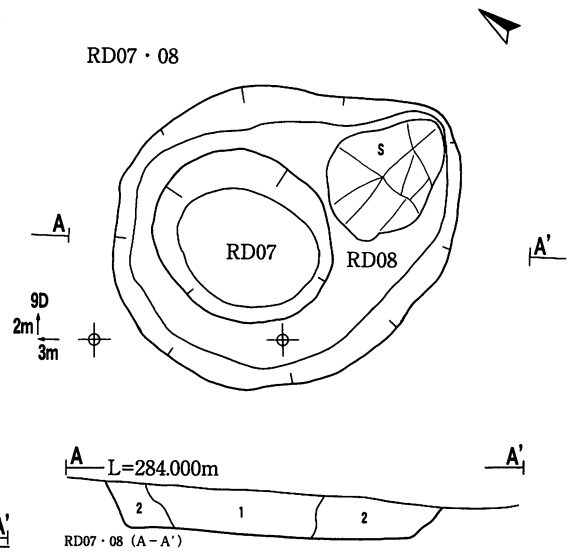
層位	色調	土性
1	10YR2/2 黒褐色	シルト 締まりやや疎
2	10YR2/1 黒色	シルト 締まり中 To-Nb10%混入
3	10YR3/1 黒褐色	シルト 締まり中 To-Nb10%混入
4	10YR3/3 暗褐色	シルトと10YR4/4 褐色粘土の混合土 締まりやや密 To-Nb5%混入

第19図　ＲＤ01～04土坑



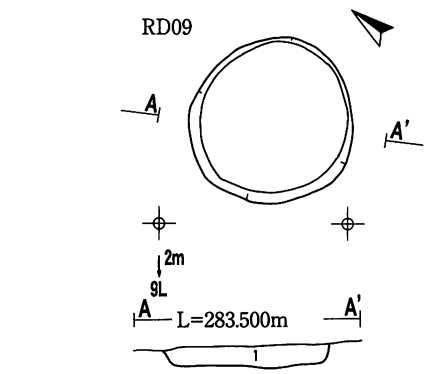
RD05・06（A－A'）

層位	色調	土性	
1	10YR3/1	黒褐色	シルト　締まり中　暗褐色シルト、To-Nb5%混入
2	10YR3/3	暗褐色	シルト　締まり中　To-Cu20%、To-Nb10%混入
3	10YR3/2	黒褐色	シルト　締まり中　To-Cu7%、To-Nb3%混入
4	10YR3/1	黒褐色	シルト　締まり中　褐色粘土ブロック5%、To-Nb10%混入
5	10YR3/2	黒褐色	シルト　締まりやや密　褐色粘土ブロック20%、To-Nb15%混入



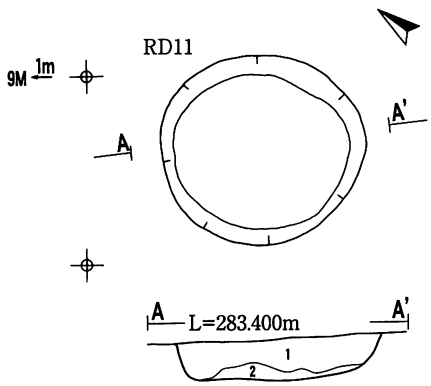
RD07・08（A－A'）

層位	色調	土性	
1	10YR2/2	黒褐色	シルト　締まり中　褐色粘土ブロック3%、To-Nb10%混入
2	10YR3/1	黒褐色	シルト　締まり中　褐色粘土ブロック20%、To-Nb5%混入



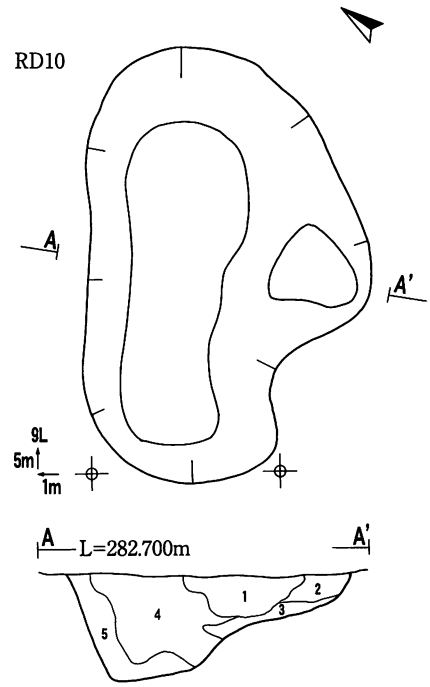
RD09（A－A'）

層位	色調	土性	
1	10YR2/3	黒褐色	シルト　締まり中　Nb-p5%混入



RD11（A－A'）

層位	色調	土性	
1	10YR2/3	黒褐色	シルト　締まり中　黒色シルト、To-Nb5%混入
2	10YR2/3	黒褐色	シルト　締まり中　To-Nb7%混入

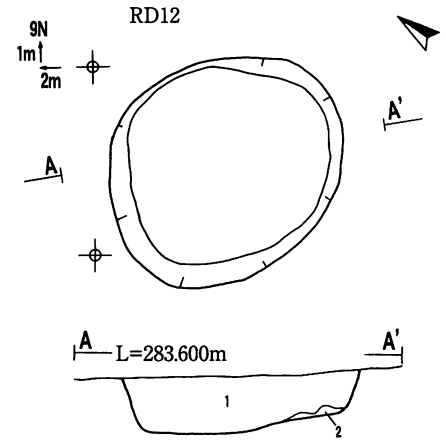


RD10（A－A'）

層位	色調	土性	
1	10YR3/4	暗褐色	シルト　締まり中　黒色シルト、To-Nb15%混入
2	10YR3/4	暗褐色	シルト　締まり中　To-Nb5%混入
3	10YR3/3	暗褐色	シルト　締まりやや密　黒色シルト、To-Nb5%混入
4	10YR2/3	黒褐色	シルト　締まり中　黒色シルト、褐色粘土ブロック10%、To-Nb5%混入
5	10YR4/4	褐色	粘土　締まり密　To-Nb50%混入（V層）

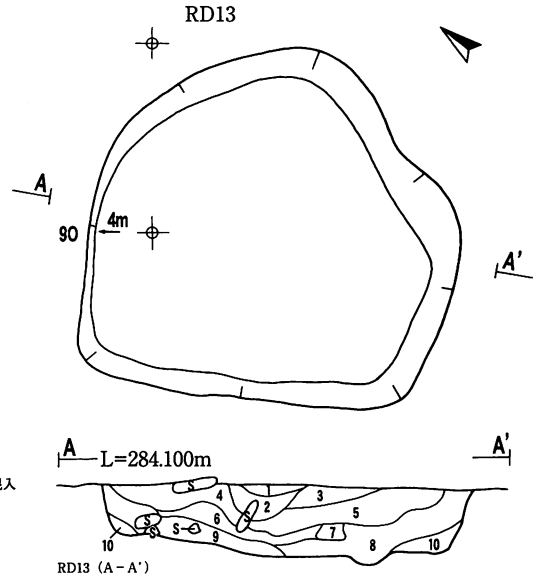
0　1:40　1m

第20図　ＲＤ05～11土坑



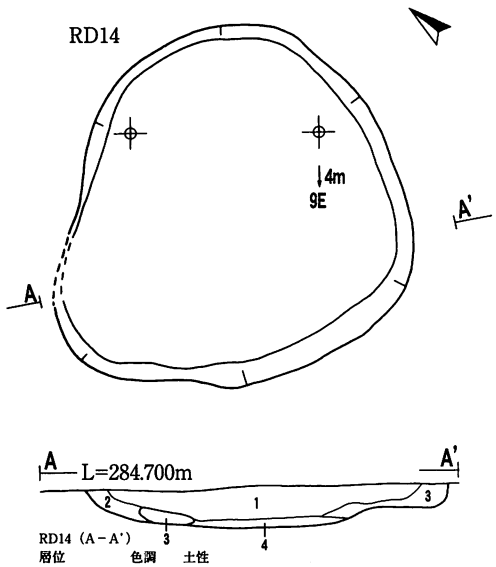
RD12（A－A'）

層位	色調	土性
1	10YR3/4 暗褐色	シルト　締まり中　褐色粘土ブロック3%、To-Nb3%混入
2	10YR2/3 黒褐色	シルト　締まり中　To-Nb7%混入



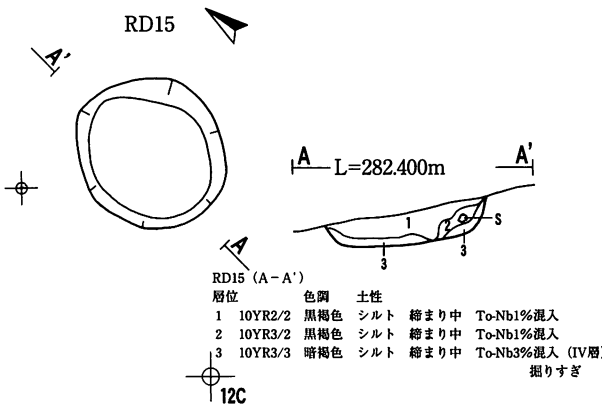
RD13（A－A'）

層位	色調	土性
1	10YR4/4 褐色	シルト　締まり中
2	10YR4/4 褐色	シルトと10YR3/3 暗褐色シルトの混合土　締まり中　To-Nb5%混入
3	10YR3/3 暗褐色	シルト　締まり中　To-Nb1%混入
4	10YR3/4 暗褐色	シルト　締まり中　褐色シルト、To-Nb3%混入
5	10YR3/4 暗褐色	シルトと10YR2/1 黒色シルトの混合土　締まりやや疎　To-Nb5%混入
6	10YR4/4 褐色	シルト　締まり中　暗褐色シルト、To-Nb2%混入
7	10YR7/6 明黄褐色	粘土　締まり密
8	10YR3/3 暗褐色	シルト　締まり中　褐色シルト、黒色シルト、To-Nb7%混入
9	10YR3/3 暗褐色	シルト　締まり中
10	10YR4/6 褐色	粘土　締まり密



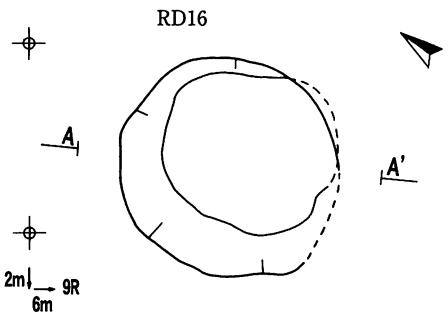
RD14（A－A'）

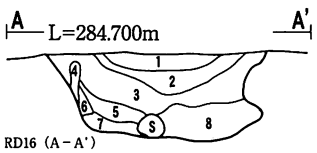
層位	色調	土性
1	10YR1.7/1 黒色	シルト　締まりやや疎　To-Nb1%混入
2	10YR3/3 暗褐色	シルト　締まり中　To-Nb10%混入
3	10YR4/4 褐色	シルト　締まり中　黒色シルト　To-Nb15%混入
4	10YR5/6 黄褐色	粘土　締まりやや密　（V層）掘りすぎ



RD15（A－A'）

層位	色調	土性
1	10YR2/2 黒褐色	シルト　締まり中　To-Nb1%混入
2	10YR3/2 黒褐色	シルト　締まり中　To-Nb1%混入
3	10YR3/3 暗褐色	シルト　締まり中　To-Nb3%混入（IV層）掘りすぎ



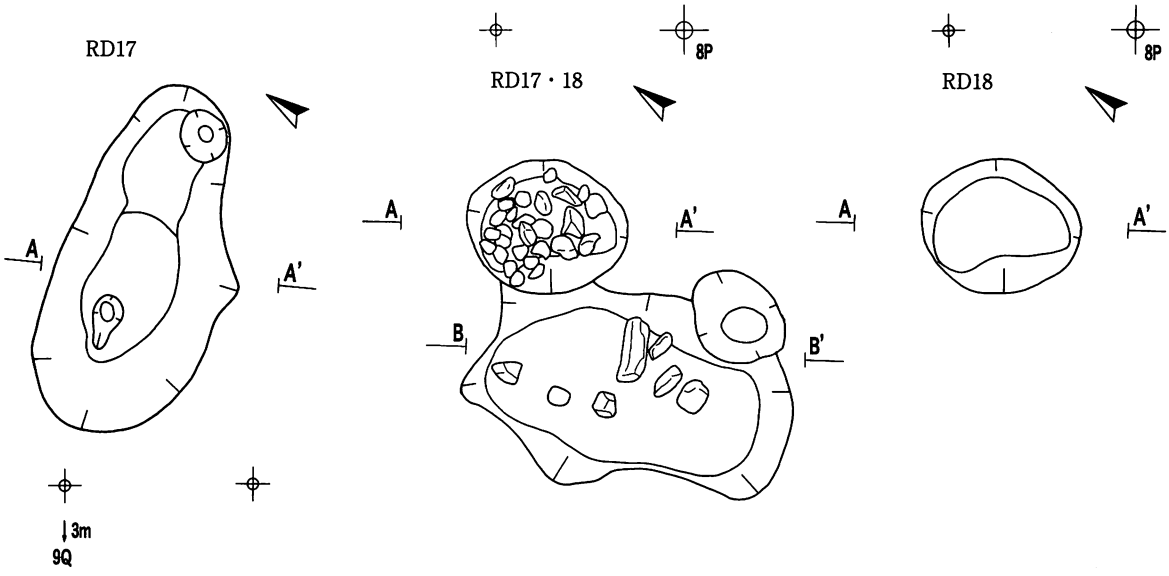


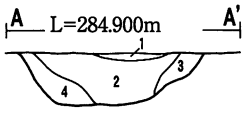
RD16（A－A'）

層位	色調	土性
1	10YR2/1 黒色	シルト　締まり中　To-Cu7%、To-Nb3%混入
2	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	シルト　締まりやや疎　To-Cu3%、To-Nb1%混入
3	10YR2/1 黒色	シルト　締まり中　To-Nb10%混入
4	2.5Y5/6 黄褐色	火山灰　締まり中　To-a
5	10YR3/3 暗褐色	シルト　締まり中　明黄褐色粘土ブロック10%、To-Nb15%混入
6	10YR4/6 褐色	粘土　締まりやや密
7	10YR3/3 暗褐色	シルト　締まり中　To-Nb5%混入
8	10YR4/2 灰黄褐色	シルト　締まりやや密　To-Nb2%混入

0　1:40　1m

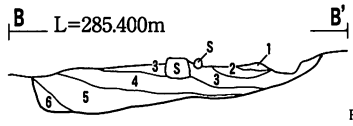
第21図　ＲＤ12～16土坑





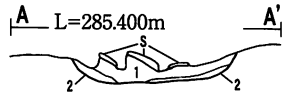
RD17（A－A'）

層位	色調	土性
1	10YR3/2	黒褐色　シルト　締まり中
2	10YR2/2	黒褐色　シルト　締まり中　暗褐色シルト、To-Nb10%混入
3	10YR4/4	褐色　シルト　締まりやや密　黒褐色シルト、To-Nb7%混入
4	10YR5/8	黄褐色　粘土　締まりやや密（V層）



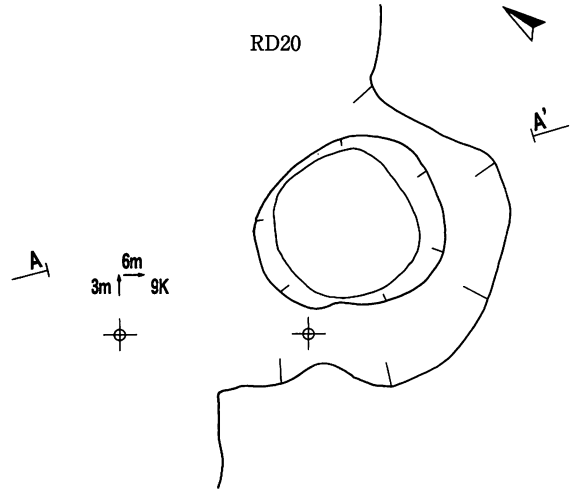
RD19（B－B'）

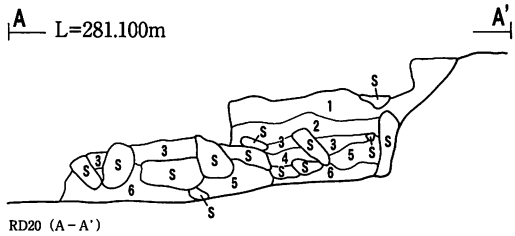
層位	色調	土性
1	10YR3/3	暗褐色　シルト　締まり中　To-Nb3%混入
2	10YR4/4	褐色　シルト　締まり中　To-Nb7%混入
3	10YR3/3	暗褐色　シルト　締まり中　焼土ブロック、To-Nb3%混入
4	10YR4/4	褐色　粘土　締まりやや密　炭化物5%、To-Nb2%混入
5	10YR3/4	暗褐色　シルト　締まり中　褐色粘土ブロック7%、炭化物5%混入
6	10YR4/4	褐色　シルト　締まり密（V層）　掘りすぎ



RD18（A－A'）

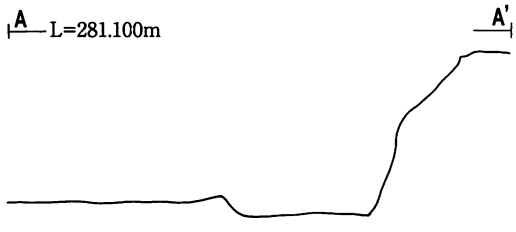
層位	色調	土性
1	10YR3/3	暗褐色　シルトと10YR4/4　褐色シルトの混合土　締まり中　To-Nb7%混入
2	10YR4/4	褐色　シルト　締まり中　To-Nb2%混入





RD20（A－A'）

層位	色調	土性
1	10YR2/1	黒色　シルト　締まりやや疎（撹乱層）
2	10YR2/1	黒色　シルト　締まりやや疎　黄褐色粘土ブロック7%、To-Nb5%混入
3	10YR3/4	暗褐色　シルト　締まり中　To-Nb5%混入
4	5YR5/8	明赤褐色　焼土　締まりやや密
5	5YR5/8	明赤褐色　焼土と10YR2/1　黒色シルトの混合土　締まり中
6	10YR2/1	黒色　シルト　締まり中　黄褐色粘土ブロック10%



0　1:40　1m

第22図　ＲＤ17～20土坑

４．焼土遺構（第23･35図、写真図版18･19･29）

調査区北側で8基（ＲＦ01～08）を検出した。検出された場所は、７Ｂグリッドで２基、10Ａ・11Ｂ・12Ｃグリッドで５基、９Ｆグリッドで1基である。焼土遺構の占地をみると、７ＢグリッドはRA05住居跡、10Ａ・11Ｂ・12ＣグリッドはRA08住居跡、９ＦグリッドではRA04住居跡と、いずれの焼土遺構も古代の住居跡に近接して位置していることが特徴として挙げられる。いずれの焼土遺構の検出面も住居跡と同じⅢ層上面である。

形状は円形を基調とするものの不整であり、規模は、最大径62×60cm、最小径42×20cm、厚さは最大10cm、最小４cmである。焼土の色調は、明赤褐色と明褐色のものがある。

出土遺物は少なく、遺物が出土したのはRF02・06焼土遺構で、いずれも土師器の甕の口縁部片である。その他の焼土遺構は出土遺物がなく、時期を明確に特定するに至らなかったが、検出面や占地等を考慮すると、他の出土遺物を伴わない焼土遺構も古代の可能性がある。RF02・06焼土遺構などは破壊されたかまどの残骸である可能性が高い。各焼土遺構の規模・形状などについては、第４表　焼土遺構観察表に示した。

第４表　焼土遺構観察表

（　）数値：残存値

遺構名	ＲＦ０１			
図版	遺構	23	遺物	－
写真図版	遺構	18	遺物	－
位置	９Ｇグリッド			
検出状況	Ⅲ層上面			
重複関係	なし			
平面形	不整形			
規模 平面	60×43cm			
規模 厚さ	５cm			
状　況	明赤褐色の焼土 撹乱を一部に受けている			
出土遺物	なし			
時　期	不明			

遺構名	ＲＦ０２			
図版	遺構	23	遺物	35
写真図版	遺構	18	遺物	29
位置	12Ｃグリッド			
検出状況	Ⅲ層上面			
重複関係	なし			
平面形	不整な円形			
規模 平面	60×(55)cm			
規模 厚さ	10cm			
状　況	明褐色の焼土			
出土遺物	土師器:破（69）			
時　期	平安時代			

遺構名	ＲＦ０３			
図版	遺構	23	遺物	－
写真図版	遺構	18	遺物	－
位置	11Ｂグリッド			
検出状況	Ⅲ層上面			
重複関係	なし			
平面形	不整形			
規模 平面	40×33cm			
規模 厚さ	５cm			
状　況	明褐色土の焼土			
出土遺物	なし			
時　期	不明			

（　）数値：残存値

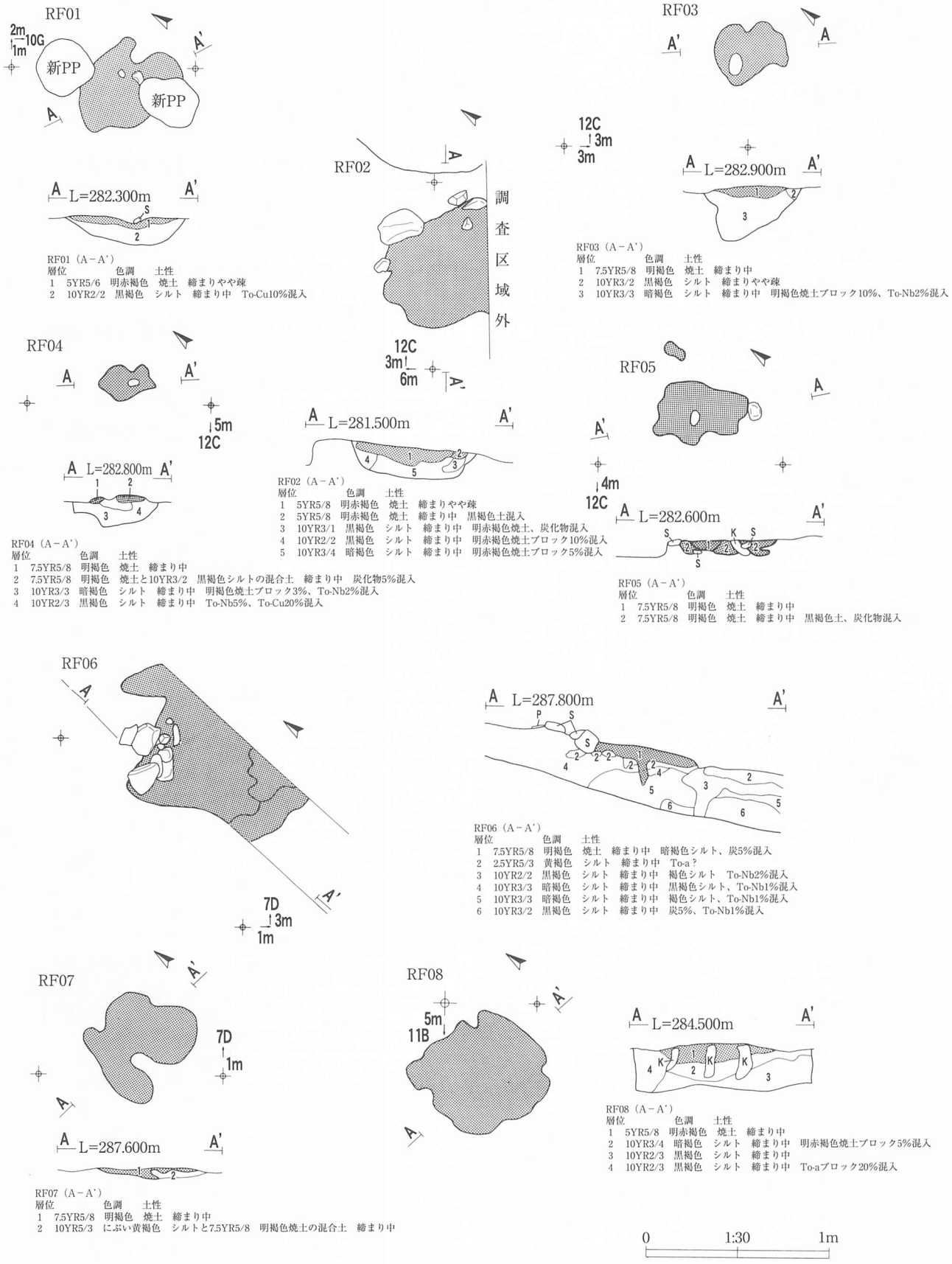
遺構名	ＲＦ０４			
図版	遺構	23	遺物	－
写真図版	遺構	18	遺物	－
位置	11Bグリッド			
検出状況	Ⅲ層上面			
重複関係	なし			
平面形	不整円形			
規模 平面	42×20cm			
規模 厚さ	4cm			
状　況	明褐色の焼土			
出土遺物	なし			
時　期	不明			

遺構名	ＲＦ０５			
図版	遺構	23	遺物	－
写真図版	遺構	19	遺物	－
位置	11Cグリッド			
検出状況	Ⅲ層上面			
重複関係	なし			
平面形	不整楕円形			
規模 平面	50×35cm			
規模 厚さ	8cm			
状　況	明褐色の焼土			
出土遺物	なし			
時　期	不明			

遺構名	ＲＦ０６			
図版	遺構	23	遺物	35
写真図版	遺構	19	遺物	29
位置	７Cグリッド			
検出状況	Ⅲ層上面			
重複関係	なし			
平面形	不明			
規模 平面	112×(60)cm			
規模 厚さ	7cm			
状　況	明褐色の焼土 To-aより新しい？			
出土遺物	土師器破:破（70･71）			
時　期	平安時代			

遺構名	ＲＦ０７			
図版	遺構	23	遺物	－
写真図版	遺構	19	遺物	－
位置	６Cグリッド			
検出状況	Ⅲ層上面			
重複関係	なし			
平面形	不整形			
規模 平面	50×48cm			
規模 厚さ	5cm			
状　況	明褐色の焼土			
出土遺物	なし			
時　期	不明			

遺構名	ＲＦ０８			
図版	遺構	23	遺物	－
写真図版	遺構	19	遺物	－
位置	10Bグリッド			
検出状況	Ⅲ層上面			
重複関係	なし			
平面形	不整な円形			
規模 平面	62×60cm			
規模 厚さ	10cm			
状　況	明赤褐色の焼土			
出土遺物	なし			
時　期	不明			



第23図　ＲＦ01～08焼土遺構

5．掘立柱建物跡（第24図、写真図版20）

ＲＢ01掘立柱建物跡

遺構（第24図、写真図版20）

〈位置・検出状況〉10K・10Lグリッド付近に位置する。南西側は調査区域外にかかる。周辺は削平されており、Ⅷ層で黒色土の広がりとして検出した。

〈重複関係〉なし。

〈平面型式・規模〉不明である。検出した範囲で、12.5mあるが、全体の規模は不明である。

〈建物方位〉PP1～12の並ぶ軸線はN—33°—Wで、斜面に対して平行している。

〈柱間寸法〉PP1～PP23の23基が検出された。規模は径72～38cm、深さ46～82cmである。柱間はPP11-14間で１m(3.3尺)。PP18-21間で2.4m(８尺)である。

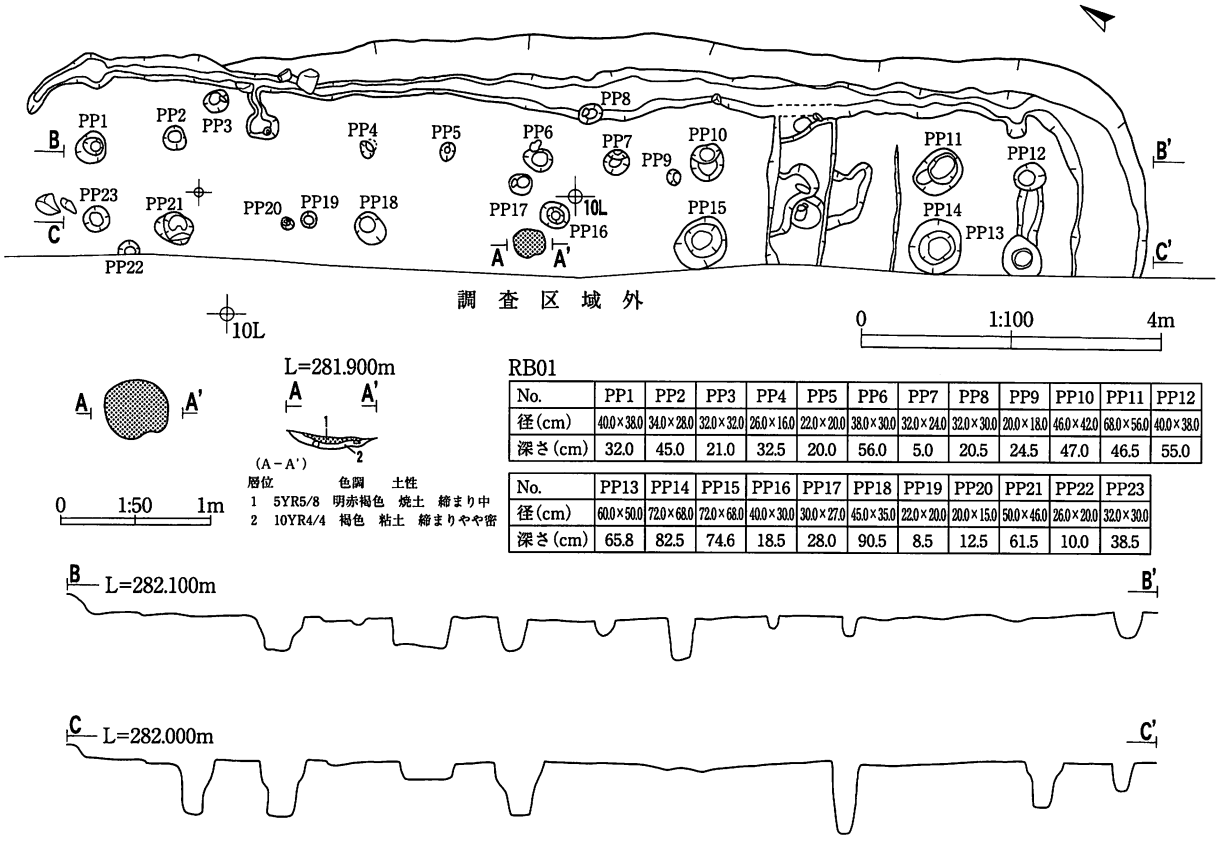
〈付属施設〉建物の周囲で斜面上位に上幅0.25～0.8m、深さ0.2mの周溝が廻る。建物内の中央付近には径42×38cmのほぼ円形を呈する焼土が１基検出されている。焼土の厚さは最大８cmである。この建物跡に伴うものかどうかは不明である。

〈建物の性格〉不明。

遺物（第－図、写真図版－）

〈出土状況〉溝・柱穴の埋土中から遺物は出土していない。ただし、周辺で検出作業をした際に銭貨(寛永通寶：93・94)が出土している。

時期　詳細は不明だが、近世以降の可能性がある。

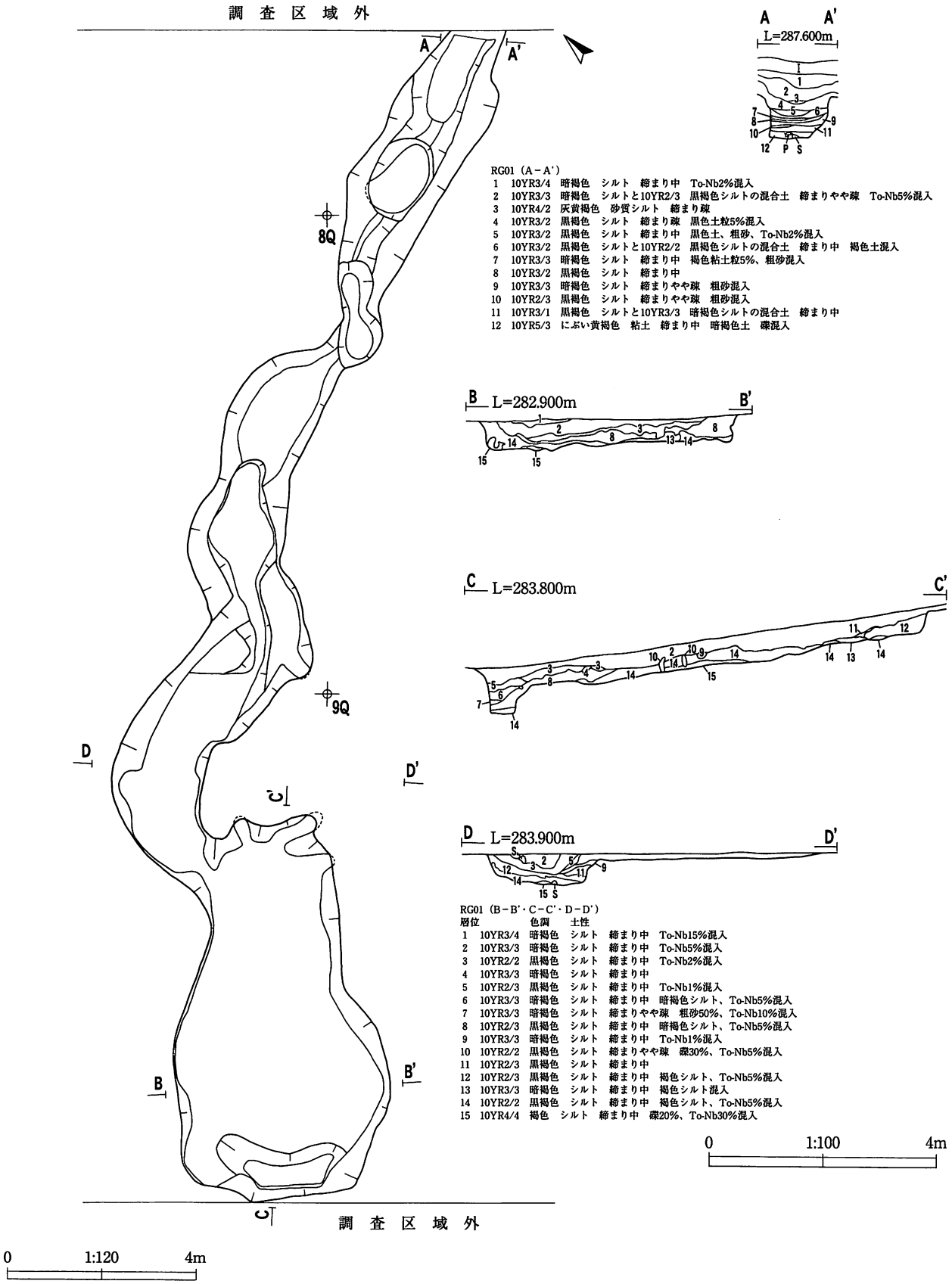


RB01

No.	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6	PP7	PP8	PP9	PP10	PP11	PP12
径(cm)	40.0×38.0	34.0×28.0	32.0×32.0	26.0×16.0	22.0×20.0	38.0×30.0	32.0×24.0	32.0×30.0	20.0×18.0	46.0×42.0	68.0×56.0	40.0×38.0
深さ(cm)	32.0	45.0	21.0	32.5	20.0	56.0	5.0	20.5	24.5	47.0	46.5	55.0

No.	PP13	PP14	PP15	PP16	PP17	PP18	PP19	PP20	PP21	PP22	PP23
径(cm)	60.0×50.0	72.0×68.0	72.0×68.0	40.0×30.0	30.0×27.0	45.0×35.0	22.0×20.0	20.0×15.0	50.0×46.0	26.0×20.0	32.0×30.0
深さ(cm)	65.8	82.5	74.6	18.5	28.0	90.5	8.5	12.5	61.5	10.0	38.5

第24図　ＲＢ01掘立柱建物跡


調 査 区 域 外
A
A'
8Q
9Q
D
D'
B
B'
C
C'
A A'
L=287.600m
B L=282.900m B'
C L=283.800m C'
D L=283.900m D'
RG01 (A－A')
1 10YR3/4 暗褐色 シルト 締まり中 To-Nb2%混入
2 10YR3/3 暗褐色 シルトと10YR2/3 黒褐色シルトの混合土 締まりやや疎 To-Nb5%混入
3 10YR4/2 灰黄褐色 砂質シルト 締まり疎
4 10YR3/2 黒褐色 シルト 締まり疎 黒色土粒5%混入
5 10YR3/2 黒褐色 シルト 締まり中 黒色土、粗砂、To-Nb2%混入
6 10YR3/2 黒褐色 シルトと10YR2/2 黒褐色シルトの混合土 締まり中 褐色土混入
7 10YR3/3 暗褐色 シルト 締まり中 褐色粘土粒5%、粗砂混入
8 10YR3/2 黒褐色 シルト 締まり中
9 10YR3/3 暗褐色 シルト 締まりやや疎 粗砂混入
10 10YR2/3 黒褐色 シルト 締まりやや疎 粗砂混入
11 10YR3/1 黒褐色 シルトと10YR3/3 暗褐色シルトの混合土 締まり中
12 10YR5/3 にぶい黄褐色 粘土 締まり中 暗褐色土 礫混入
RG01 (B－B'・C－C'・D－D')
層位 色調 土性
1 10YR3/4 暗褐色 シルト 締まり中 To-Nb15%混入
2 10YR3/3 暗褐色 シルト 締まり中 To-Nb5%混入
3 10YR2/2 黒褐色 シルト 締まり中 To-Nb2%混入
4 10YR3/3 暗褐色 シルト 締まり中
5 10YR2/3 黒褐色 シルト 締まり中 To-Nb1%混入
6 10YR3/3 暗褐色 シルト 締まり中 暗褐色シルト、To-Nb5%混入
7 10YR3/3 暗褐色 シルト 締まりやや疎 粗砂50%、To-Nb10%混入
8 10YR2/3 黒褐色 シルト 締まり中 暗褐色シルト、To-Nb5%混入
9 10YR3/3 暗褐色 シルト 締まり中 To-Nb1%混入
10 10YR2/2 黒褐色 シルト 締まりやや疎 礫30%、To-Nb5%混入
11 10YR2/3 黒褐色 シルト 締まり中
12 10YR2/3 黒褐色 シルト 締まり中 褐色シルト、To-Nb5%混入
13 10YR3/3 暗褐色 シルト 締まり中 褐色シルト混入
14 10YR2/2 黒褐色 シルト 締まり中 褐色シルト、To-Nb5%混入
15 10YR4/4 褐色 シルト 締まり中 礫20%、To-Nb30%混入
0 1:100 4m
調 査 区 域 外
0 1:120 4m

第25図 ＲＧ01溝跡

６．溝跡（第25図、写真図版20）

ＲＧ01溝跡

遺構（第25図、写真図版20）

〈位置・検出状況〉８Ｑ～９Ｑグリッドに位置する。調査区に直交するように検出され、両端は調査区域外にかかる。Ｖ層で黒褐色土の広がりとして検出された。

〈重複関係〉なし。

〈規模・平面形〉北東から南西方向に小さく蛇行して東から西へ下る。長さ26m以上。上端幅0.9～1.9m、深さ0.4～0.7m。溝の斜面上位と下位での高低差は4.4mである。南端部では径7.8×4.5mの不整な形状の広がりを示し、深さは0.5mほどになる。溝跡はさらに南側の調査区域外に続いている。

〈埋土・堆積状況〉黒褐色、暗褐色シルトと砂層の互層で、水成堆積である。壁面の崩落はほとんどない。

〈壁・底面〉壁はⅧ層を掘り込んで、外傾して立ちあがる。底面は、斜面下位でⅧ層を掘り込んでいるが、斜面上位ではⅧ層下位の礫層まで掘り込まれている。

遺物（第－図、写真図版－）

出土していない。

時期　出土遺物はなく、詳細は不明だが、近現代の可能性が高い。水路の跡か否か、性格は不明である。

７．炭窯跡（第26～28図、写真図版21～23）

ＲＺ01炭窯跡

遺構（第26図、写真図版21）

〈位置・検出状況〉９Ａグリッド。補点２の南側、現況で窯本体と周溝が凹みとして検出された。

〈重複関係〉ＲＺ01炭窯跡の周溝が東側でRZ02炭窯跡の周溝と重複する。また下位でRA06住居跡と重複し、ＲＺ01炭窯跡が切っている。これらの新旧関係（旧→新）は、RA06住居跡→ＲＺ01炭窯跡、ＲＺ02炭窯跡→ＲＺ01炭窯跡である。

〈規模・平面形〉開口部径5.4×5.4m、床面4.9×4.3m、円形基調である。

〈埋土・堆積状況〉上屋の崩落土からなる。自然堆積と思われる。

〈壁・底面〉壁はⅧ層を掘り込んでおり、ほぼ垂直に立ちあがる。壁高1.2m、底面はⅧ層を掘り込んでつくられており、ほぼ平坦で、堅く締まっている。全体的に焚口に近い方は、焼成を受け赤変し、排煙口に近い方は、黒くすすけた状態であった。面積は16.68㎡である。

〈焚口･排煙口･煙道〉焚口は斜面下方、排煙口は斜面上方に設置される。焚口部は特に施設は残っていない。窯の焚口付近の外側にコンクリート片70×40×10㎝１枚が置かれていた。現位置を留めているかは不明である。排煙口は底面より若干窪み、幅60㎝、高さ10㎝の隙間から煙が出る構造である。排煙口の上には、長さ70㎝、巾５㎝の鉄の棒が横に渡してあった。煙道は径25㎝の方形、深さ170㎝の末広がりの角柱状を呈する。煙出口は33.5×26×0.3㎝の鉄板１枚で覆われていた。

〈その他の付属施設〉窯本体の内部の壁際にPP1～PP24の柱穴24基が検出された。規模は、径8.0～16.0㎝、深さ4.4～16.6㎝である。窯の周囲にはPP25～PP35の柱穴11基が検出された。規模は径28～80㎝、深さ32～76㎝である。上屋に伴うものと思われる。PP27・35には柱材が遺っていた。窯本体の上方に最大幅0.8m、

深さ1.2mの周溝が径9.5mの弧を描いて廻る。

遺物（第－図、写真図版－）

鉄板１枚（不掲載）。

時期　現代である。

ＲＺ02炭窯跡

遺構（第27図、写真図版22）

〈位置・検出状況〉９Ｂグリッドに位置する。基２の南側で、現況で窯本体部分が凹みとして確認された。周溝は完全に埋没していた。

〈重複関係〉ＲＺ02炭窯跡の周溝が西側でＲＺ01炭窯跡の周溝と重複し、ＲＺ01炭窯跡の周溝を切っている。新旧関係（旧→新）はＲＺ02炭窯跡→ＲＺ01炭窯跡である。

〈規模・平面形〉開口部4.5×3.6m、床面4.4×3.4m、楕円形で卵形に近い。

〈埋土・堆積状況〉上屋の崩落土からなる。自然堆積と思われる。

〈壁・底面〉壁はⅧ層を掘り込んで、ほぼ垂直にたちあがる。壁高は1.1mである。底面はⅧ層を掘り込んでつくられており、ほぼ平坦で堅く締まる。面積は11.68㎡である。窯底の下位での斜面上方側部分に炭化した材が敷き詰められた状態で検出された。樹種はイタヤカエデであるとの鑑定結果を得ている。

〈焚口・排煙口・煙道〉焚口は斜面下方、排煙口は斜面上方に設置される。焚口付近には焼土の広がりが確認された。排煙口付近の底面は周囲より若干凹んでいる。煙道は径25㎝の方形、深さ90㎝で、崩落土により埋没していた。

〈その他の付属施設〉窯本体の周囲にPP1～PP24の24基の柱穴が検出された。規模は径26～52㎝、深さ10～63㎝である。上屋に伴うものと思われる。PP5は燠を確保しておくために使用された穴である。窯本体の上方に最大幅１m、深さ1.2mの周溝が径11mの弧を描いて廻る。Ⅷ層を掘り込んでいる。

遺物（第－図、写真図版－）

出土していない。

時期　現代である。

ＲＺ03炭窯跡

遺構（第28図、写真図版23）

〈位置・検出状況〉８Ｂグリッド。ＲＺ02炭窯跡の東側3.5mに位置する。

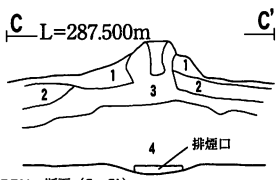
〈重複関係〉なし。

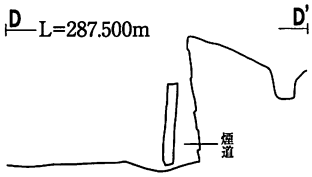
〈規模・平面形〉開口部3.1×2.8m、底面3.0×2.4m、深さ0.5m、円形基調である。

〈埋土・堆積状況〉上屋の崩落土からなる。自然堆積と思われる。

〈壁・底面〉壁はⅧ層を掘り込んでおり、ほぼ垂直にたちあがる。壁高は50㎝である。底面はⅧ層を掘り込んでつくられており、ほぼ平坦で、堅く炭化し、入り口付近は焼けて堅くしまっている。底面は20㎝の高低差をもって２面確認された。２回目は粘土と壁土を貼って底上げをしている。床面積は5.8㎡である。

〈焚口･排煙口･煙道〉焚口は斜面下方、排煙口は斜面上方に設置される。焚口部の斜面下方に径120×55㎝の範囲で焼土が広がる。排煙口は１回目の床面では径15×８㎝の煉瓦を両端に２列配している。２度目は窯底を上げた後に排煙口をつくっている。煙道は一辺３０㎝の方形で、深さ４０㎝で、内部は崩落土で埋没していた。

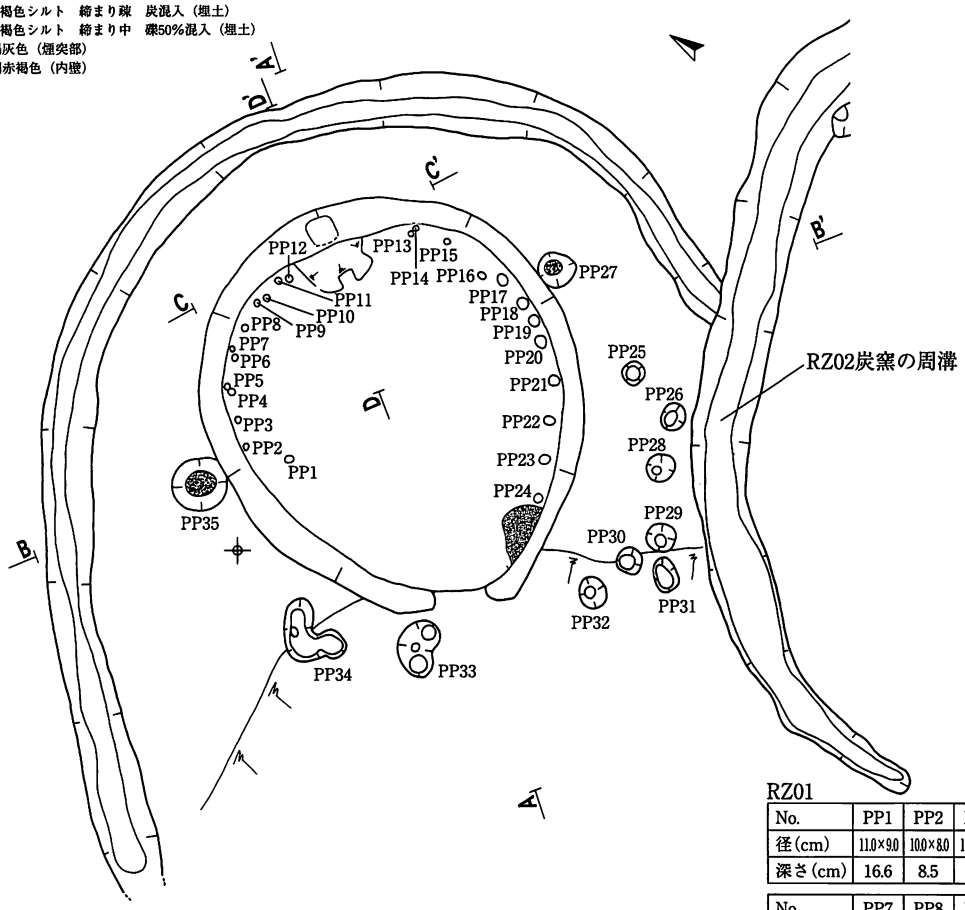




9B
2m
4m

RZ01 断面（C－C'）

層位	色調	土性
1	10YR3/4	暗褐色シルト　締まり疎　炭混入（埋土）
2	10YR3/2	黒褐色シルト　締まり中　礫50%混入（埋土）
3	7.5YR4/2	褐灰色（煙突部）
4	2.5YR5/8	明赤褐色（内壁）



RZ01

No.	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6
径(cm)	11.0×9.0	10.0×8.0	10.0×8.0	11.0×8.0	8.0×7.0	8.0×8.0
深さ(cm)	16.6	8.5	8.0	10.5	6.0	8.4

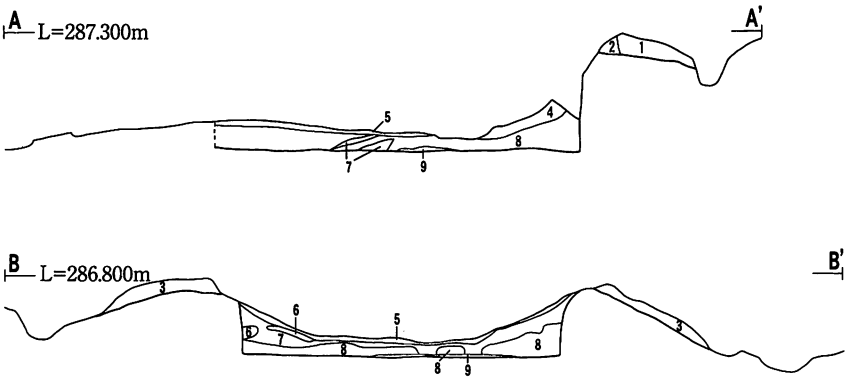
No.	PP7	PP8	PP9	PP10	PP11	PP12
径(cm)	8.0×7.0	10.0×10.0	10.0×8.0	10.0×10.0	12.0×10.0	10.0×10.0
深さ(cm)	8.0	12.2	7.8	6.3	5.8	4.7

No.	PP13	PP14	PP15	PP16	PP17	PP18
径(cm)	8.0×6.0	8.0×6.0	8.0×6.0	12.0×8.0	16.0×14.0	16.0×15.0
深さ(cm)	6.7	4.4	6.4	4.9	14.1	14.2

No.	PP19	PP20	PP21	PP22	PP23	PP24
径(cm)	16.0×16.0	16.0×16.0	16.0×16.0	16.0×16.0	16.0×16.0	10.0×8.0
深さ(cm)	14.5	12.3	10.4	8.7	23.0	12.8

No.	PP25	PP26	PP27	PP28	PP29	PP30
径(cm)	28.0×28.0	32.0×28.0	52.0×48.0	38.0×34.0	34.0×30.0	40.0×34.0
深さ(cm)	32.8	36.4	42.6	61.0	58.4	65.0

No.	PP31	PP32	PP33	PP34	PP35
径(cm)	44.0×30.0	40.0×38.0	76.0×50.0	90.0×80.0	80.0×70.0
深さ(cm)	45.5	66.0	76.4	48.4	51.7

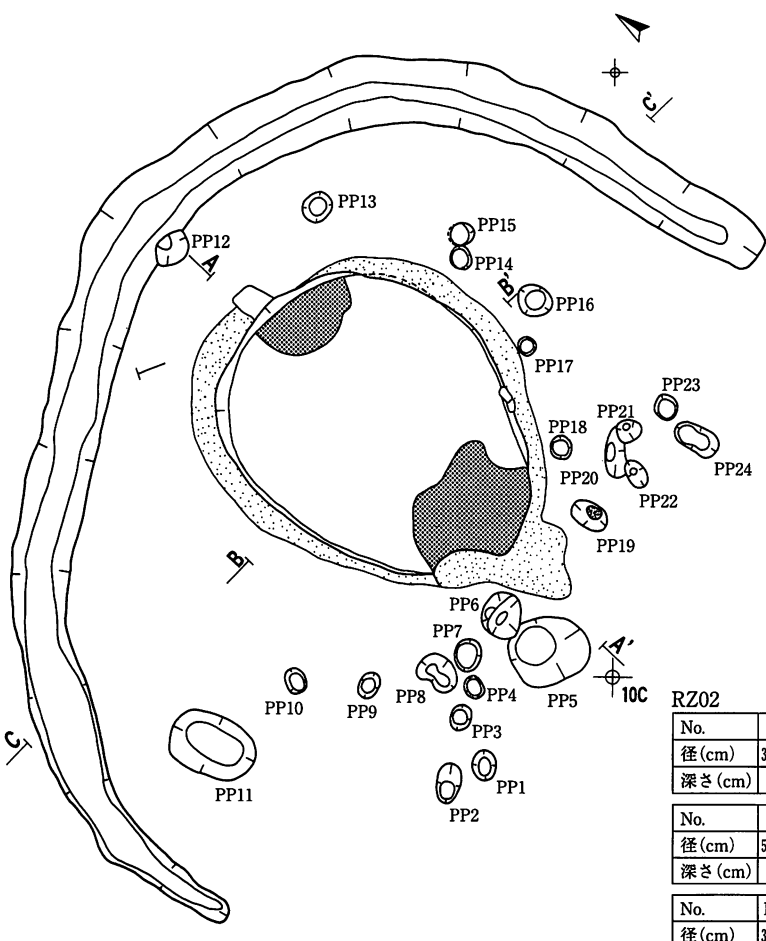


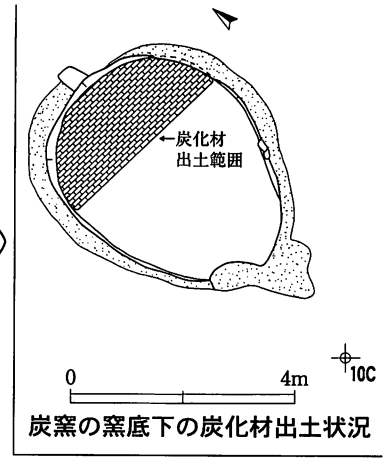
RZ01 断面（A－A'・B－B'）

層位	色調	土性
1	10YR3/4	暗褐色　シルト　締まり疎　炭混入（埋土）
2	10YR1.7/1	黒色　褐灰色（煙突部の瓦礫）
3	10YR3/2	黒褐色　シルト　締まり中　礫50%混入（埋土）
4	7.5YR4/2	褐灰色（煙突部の瓦礫）
5	7.5YR4/3	褐色（上屋の崩落土）
6	7.5YR6/8	橙色（外壁の崩落土）
7	7.5YR3/1	黒褐色（外壁の瓦礫）
8	2.5YR5/8	明赤褐色（内壁の瓦礫）
9	10YR1.7/1	黒色（内壁の瓦礫）

0　1:100　4m

第26図　ＲＺ01炭窯跡





炭窯の窯底下の炭化材出土状況

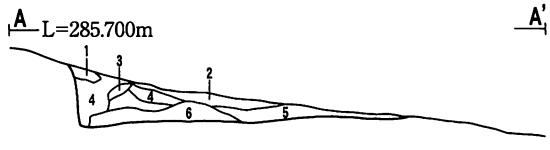
RZ02

No.	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6	PP7
径(cm)	36.0×30.0	52.0×28.0	34.0×26.0	34.0×24.0	106.0×96.0	62.0×52.0	44.0×34.0
深さ(cm)	40.1	49.9	53.0	46.8	36.9	47.7	47.0

No.	PP8	PP9	PP10	PP11	PP12	PP13	PP14
径(cm)	56.0×34.0	36.0×30.0	36.0×26.0	120.0×76.0	50.0×40.0	42.0×40.0	36.0×26.0
深さ(cm)	48.0	45.5	49.2	63.9	47.8	18.0	38.2

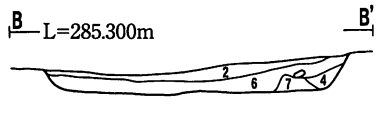
No.	PP15	PP16	PP17	PP18	PP19	PP20	PP21
径(cm)	30.0×28.0	44.0×38.0	26.0×24.0	30.0×30.0	50.0×32.0	60.0×30.0	32.0×30.0
深さ(cm)	36.5	22.4	12.6	9.7	83.1	60.0	42.2

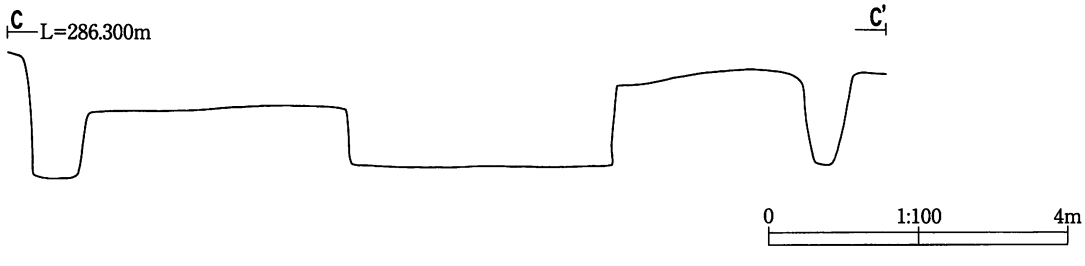
No.	PP22	PP23	PP24
径(cm)	40.0×22.0	30.0×30.0	60.0×30.0
深さ(cm)	63.1	49.9	53.5



RZ02　断面（A－A'・B－B'）

層位	色調	土性
1	10YR1.7/1　黒色	褐灰色（煙突部の瓦礫）
2	10YR2/3　黒褐色	シルト　締まり中（崩落土）
3	5YR5/8　明赤褐色	（上屋の瓦礫）
4	10YR1.7/1　黒色	（内壁の瓦礫）
5	7.5YR4/3　褐色	（煙突部の瓦礫）
6	5YR5/8　明赤褐色	炭混入
7	10YR5/1　灰色	（内壁の崩落）





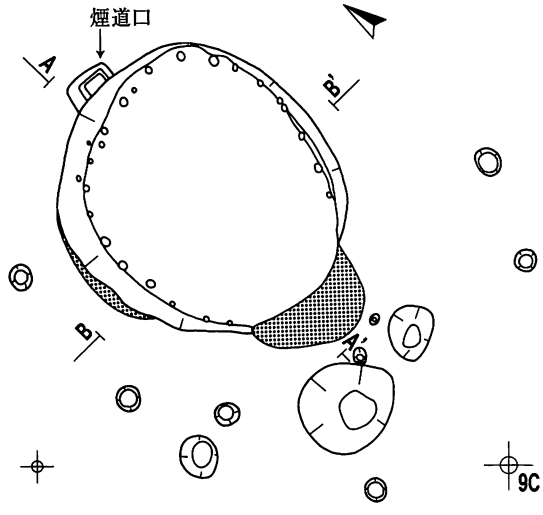
第27図　ＲＺ02炭窯跡

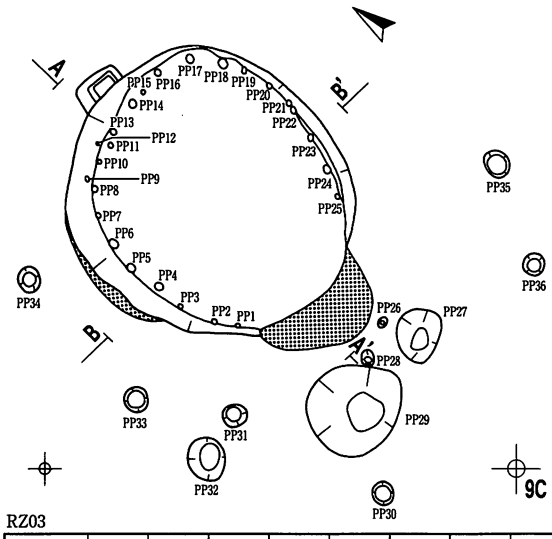
〈その他の付属施設〉窯内部の壁際にPP1～PP25の柱穴25基が検出された。規模は径4.4～16.6cm、深さ5cm前後である。窯の周囲にはPP26～36の柱穴11基が検出された。規模は径14～40cm、深さ12～55cmで、上屋に伴うものと思われる。PP27・29は燠を確保しておくために使用された穴である。

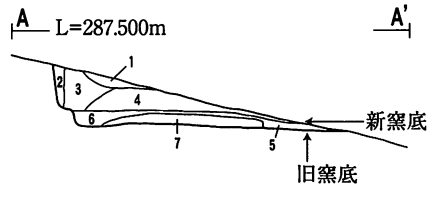
遺物（第一図、写真図版一）

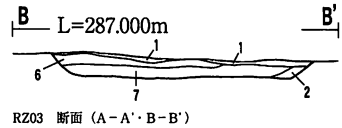
出土していない。

時期　現代である。窯底の作り替えから２時期の使用痕跡が認められる。









RZ03　断面（A－A'・B－B'）

層位	色調	土性	
1	10YR2/3	黒褐色シルト	締まり中　（崩落土）
2	10YR1.7/1	黒色	（内壁の瓦礫）
3	7.5YR4/3	褐色	（煙突部の瓦礫）
4	5YR5/8	明赤褐色	（上屋の瓦礫）
5	10YR1.7/1	黒色	（炭　新床面の底上部分）
6	10YR1.7/1	黒色	（黒変した瓦礫、新床面の底上部分）
7	5YR5/8	明赤褐色	（赤変した瓦礫、新床面の底上部分）

RZ03

No	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6	PP7	PP8	PP9	PP10	PP11	PP12	PP13	PP14
径(cm)	4.0×4.0	5.0×4.0	4.0×4.0	10.0×8.0	10.0×8.0	14.0×10.0	5.0×5.0	8.0×6.0	5.0×7.0	6.0×6.0	8.0×6.0	4.0×4.0	8.0×7.0	10.0×8.0
深さ(cm)	3.0	3.0	5.0	34.0	30.0	45.0	3.5	32.5	11.5	5.0	20.5	3.0	20.0	15.5

No	PP15	PP16	PP17	PP18	PP19	PP20	PP21	PP22	PP23	PP24	PP25	PP26	PP27	PP28
径(cm)	5.0×5.0	8.0×6.0	9.0×8.0	12.0×10.0	8.0×5.0	6.0×6.0	6.0×6.0	8.0×6.0	8.0×7.0	10.0×8.0	6.0×4.0	14.0×10.0	56.0×48.0	18.0×13.0
深さ(cm)	10.5	33.5	9.5	33.0	30.0	28.5	10.0	15.0	20.0	18.0	5.0	20.5	37.0	22.0

No	PP29	PP30	PP31	PP32	PP33	PP34	PP35	PP36
径(cm)	106.0×96.0	23.0×22.0	30.0×26.0	44.0×40.0	28.0×26.0	28.0×24.0	32.0×25.0	25.0×24.0
深さ(cm)	45.0	28.5	36.5	23.5	32.0	12.0	55.0	13.0

0　1:80　2m

第28図　ＲＺ03炭窯跡

Ⅴ．遺構外の出土遺物

遺構外からの出土遺物には、土器、石器、銭貨がある。いずれも量は少ない。総量は大コンテナ(40×30×30㎝)２箱分である。縄文時代前期の土器は西側斜面を中心に、縄文時代晩期の土器は９Ｆグリッドを中心に出土しているなど、出土地点に時期的なまとまりがみられる。

１．土器（第35・36図、写真図版29・30：72～84）

土器には縄文土器、弥生土器がある。72は土器の底部で四足で、時期は縄文時代の晩期である。73は深鉢の口縁部片で、結束第一種RL・LRの横回転による羽状縄文が施されている。時期は縄文時代の前期である。74～79は９Ｆグリッドからの出土である。同地点はRA01竪穴住居跡が検出されており、隣接する９Ｅグリッドからは RA02住居跡が検出されている。いずれも弥生時代の住居跡が位置する地点に近接する。

74は台付鉢の胴部～脚部片で、胴部にはRL横回転の地文が施され、脚部の上部と下部に浅く太い平行沈線が廻る。75は胴部下半～底部破片で、LR横回転が施された後に浅く太い沈線が施される。76・77は深鉢の口縁部片で口唇部が凹状に窪み、頸部に平行沈線が廻っている。胴部はRL縦回転の地文が施されている。頸部付近の縄文は一部磨り消されている。78は瘤付きの変形工字文が施され、79は浅い沈線で変形工字文が施されている。80は小型の底部破片で、地文はＲＬ縦回転である。81は口縁部下に多少括れをもち、その括れに浅く太い沈線が廻る。胴部はLR横回転の地文が施される。82・83はⅡ層から出土した土器の口縁部片で、口唇部には刺突が巡り、小突起をもつ。地文は１段Ｒを横回転で施文した後に沈線で文様を描いている。弥生時代後期に属するものと思われる。

84は12Bグリッドの Ⅱ層直下から出土した土器片で、胎土に繊維の混入がみられる。縄文時代前期に属するものと思われる。

２．土製品（第36図、写真図版30：85）

１点出土している。85は円盤状土製品と思われる。薄手で摩滅が著しく、地文も明瞭でない。

３．石器（第36図、写真図版30：86～92）

石鏃（86～88）は３点出土している。88・89はほぼ同地点から出土した。周辺から出土した土器から弥生時代の可能性がある。88は未製品かもしれない。石材は頁岩である。

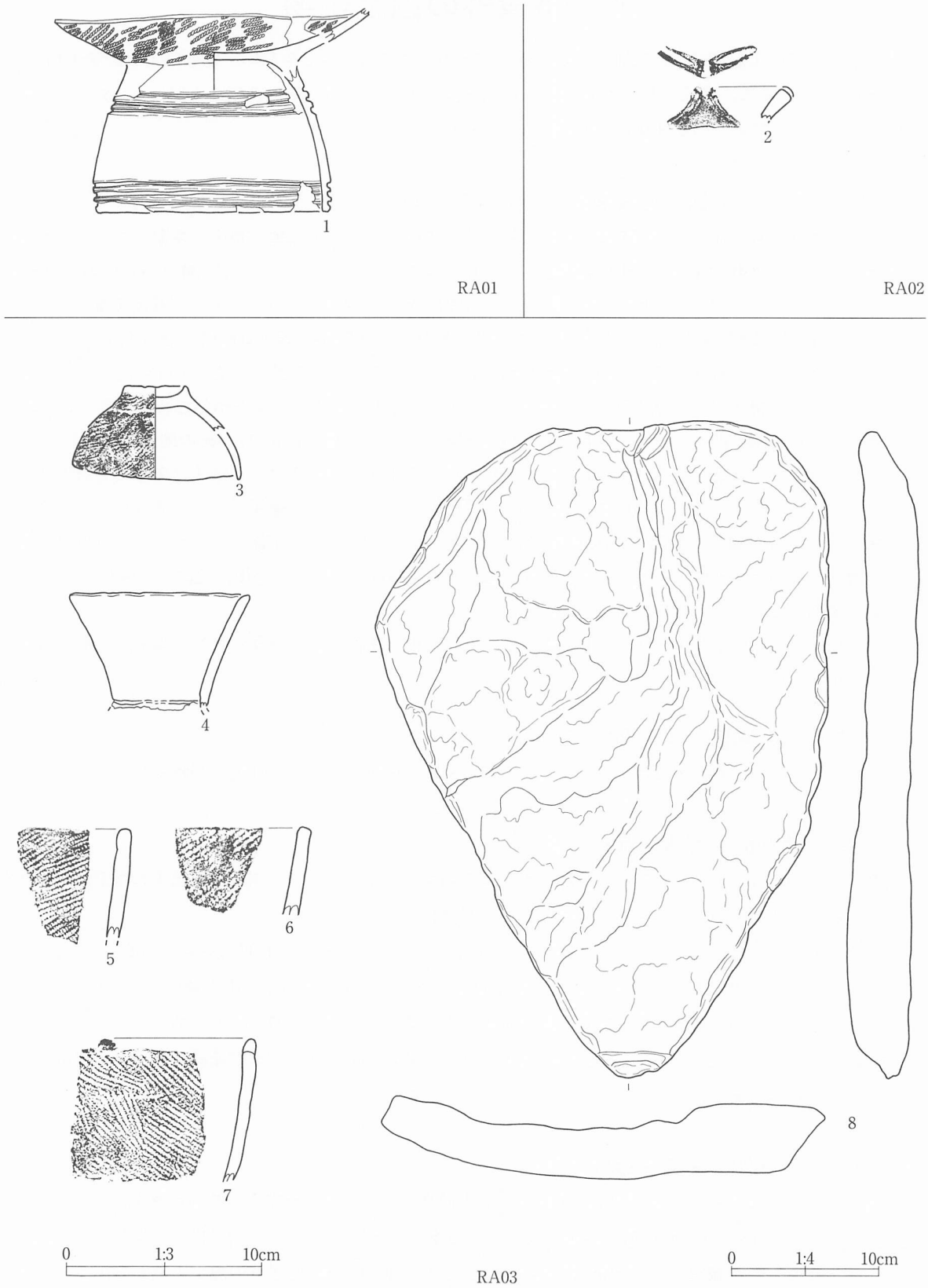
不定形石器（89）は1点出土している。尖頭状の石器で、欠損品である。石材は頁岩である。

尖頭器（90）は１点出土している。丁寧に両面加工を施した尖頭器である。出土地点は14Cグリッドで、周辺から出土している土器から縄文時代前期の可能性がある。石材はいずれも頁岩である。

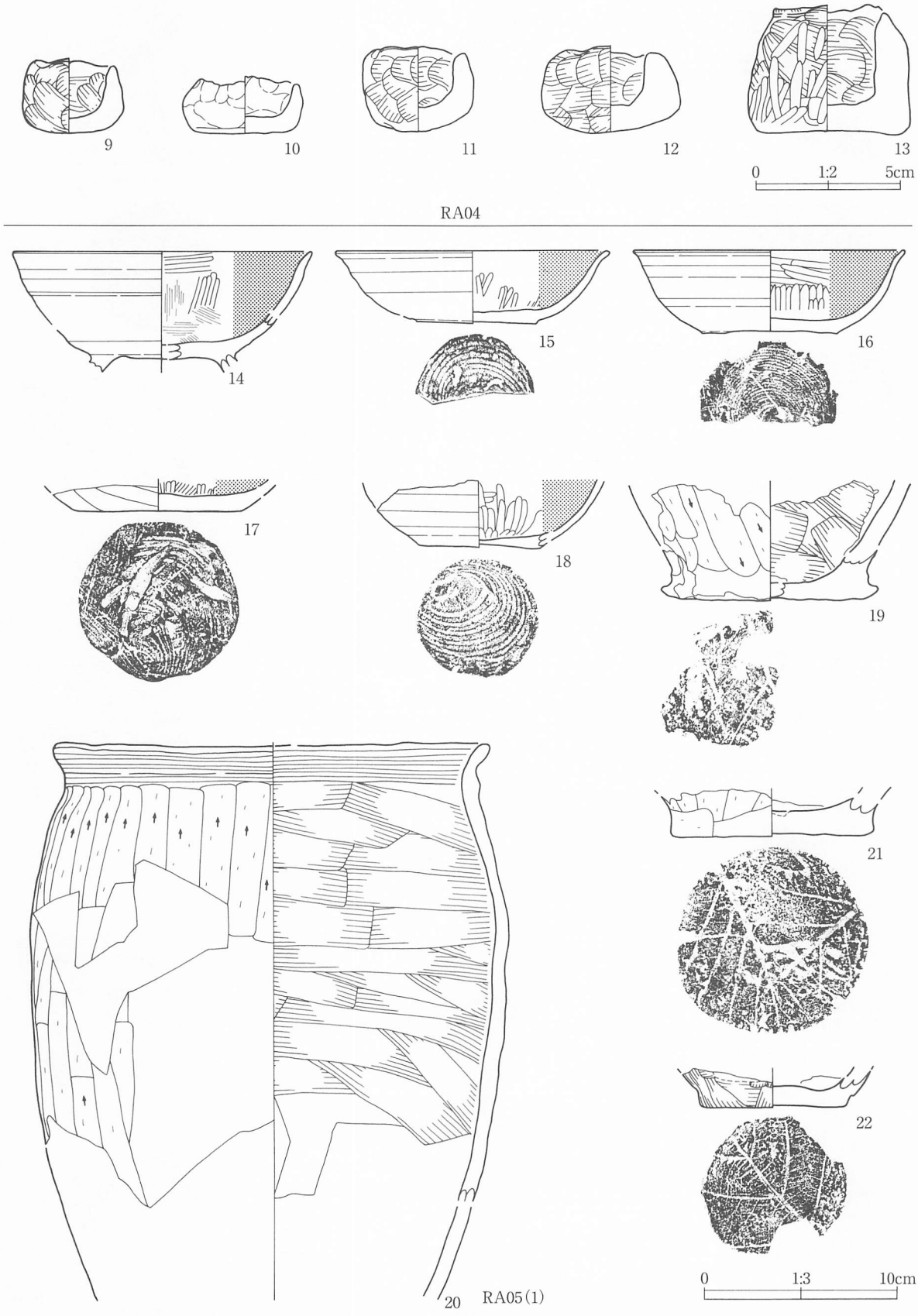
凹石（91・92）は２点出土している。91は両面に凹み、92は片面に浅い凹みが確認できる。石材はホルンフェルス・斑糲岩である。

４．銭貨（第36図、写真図版30：93～95）

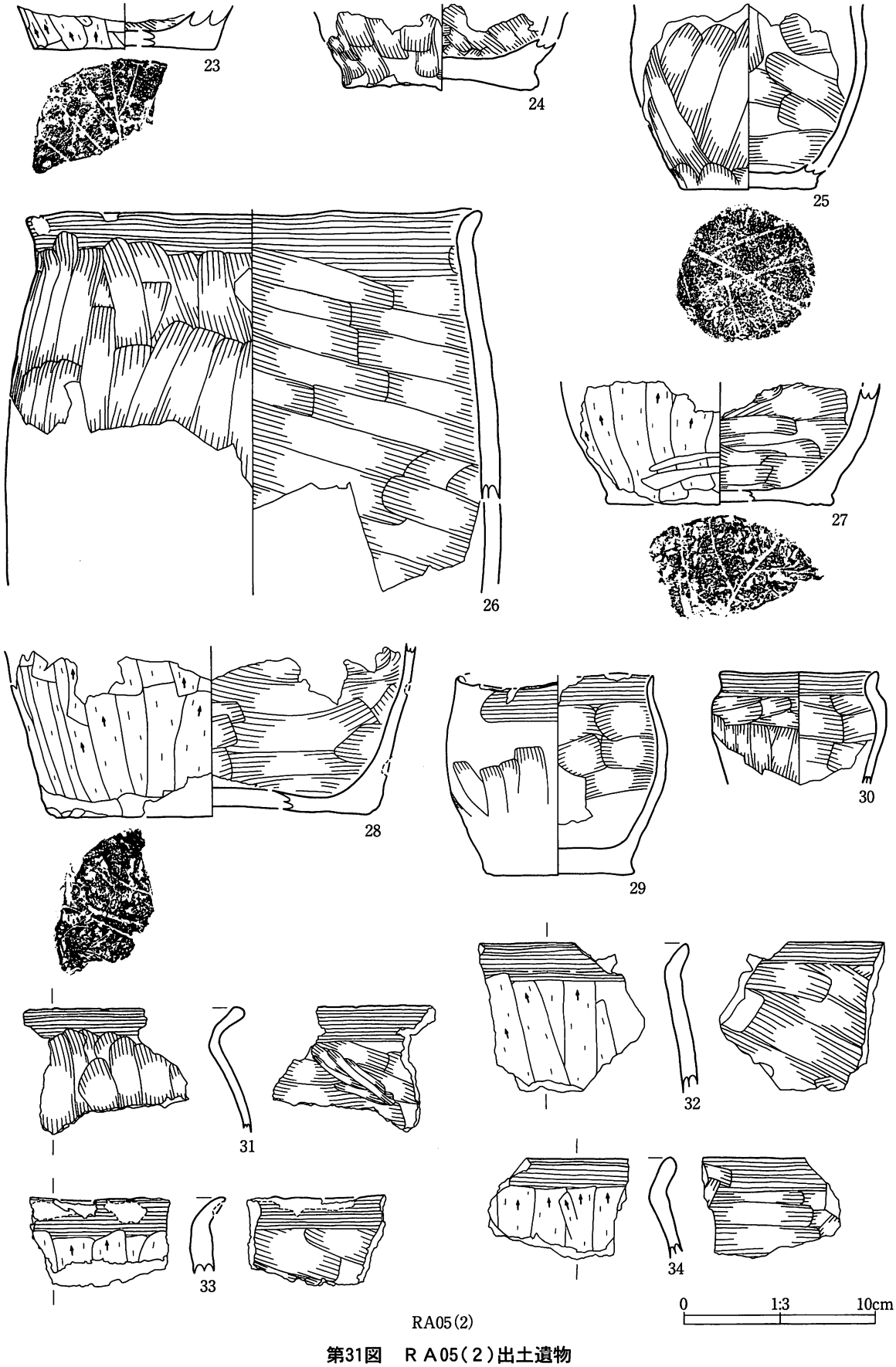
銭貨（93～95）が３点出土している。３点とも寛永通寶で、93・94は古寛永、95は新寛永である。93・94は９Ｋ・９Ｌグリッドの表土除去時に出土したものである。同グリッドからはRB01掘立柱建物跡が検出されていることから、この遺構に伴う可能性も考えられる。95はRA05竪穴住居跡の埋土上位から出土したが、撹乱を受けた１層に混在していたものと思われる。



第29図　ＲＡ01・02・03出土遺物

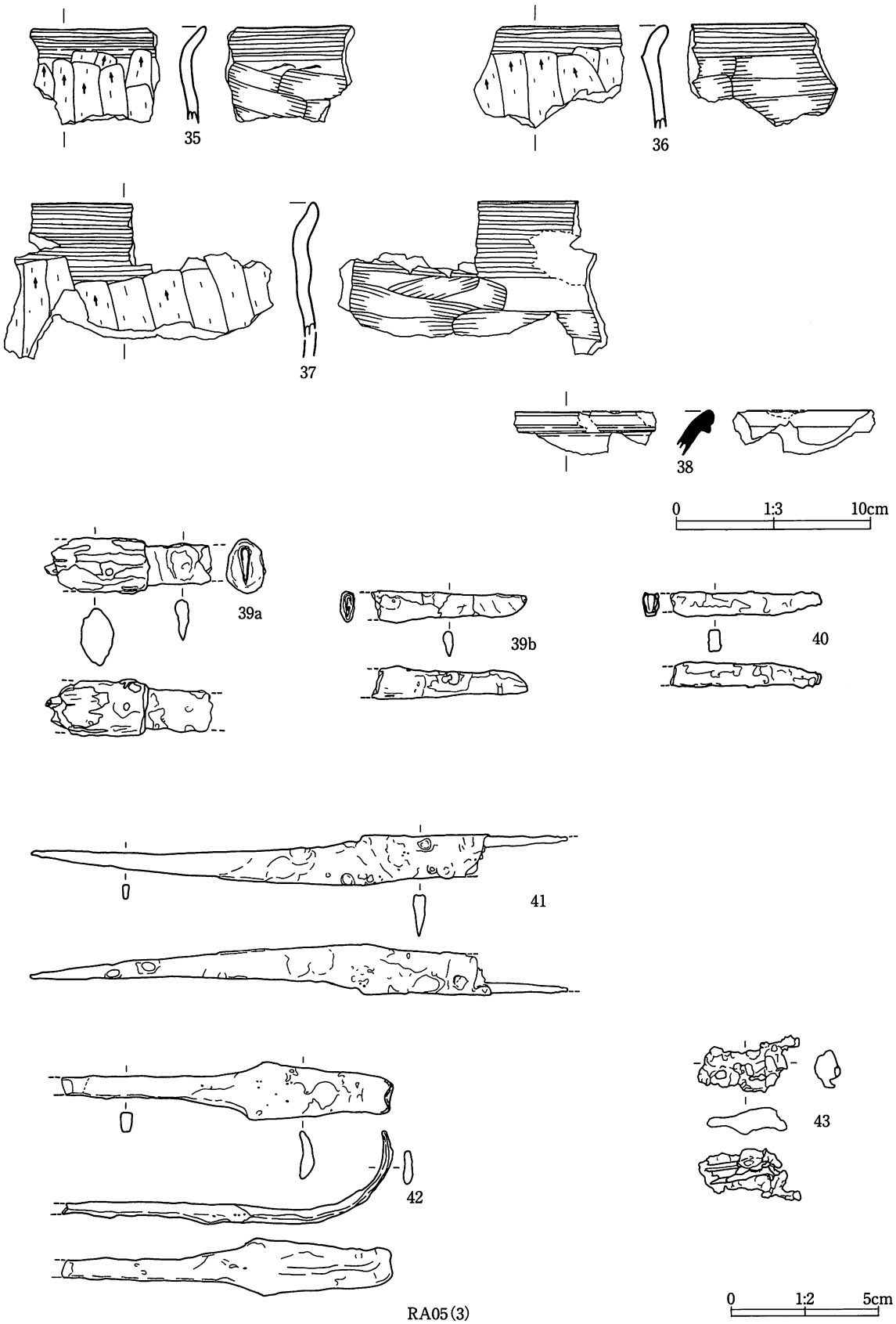


第30図　ＲＡ04･05（１）出土遺物

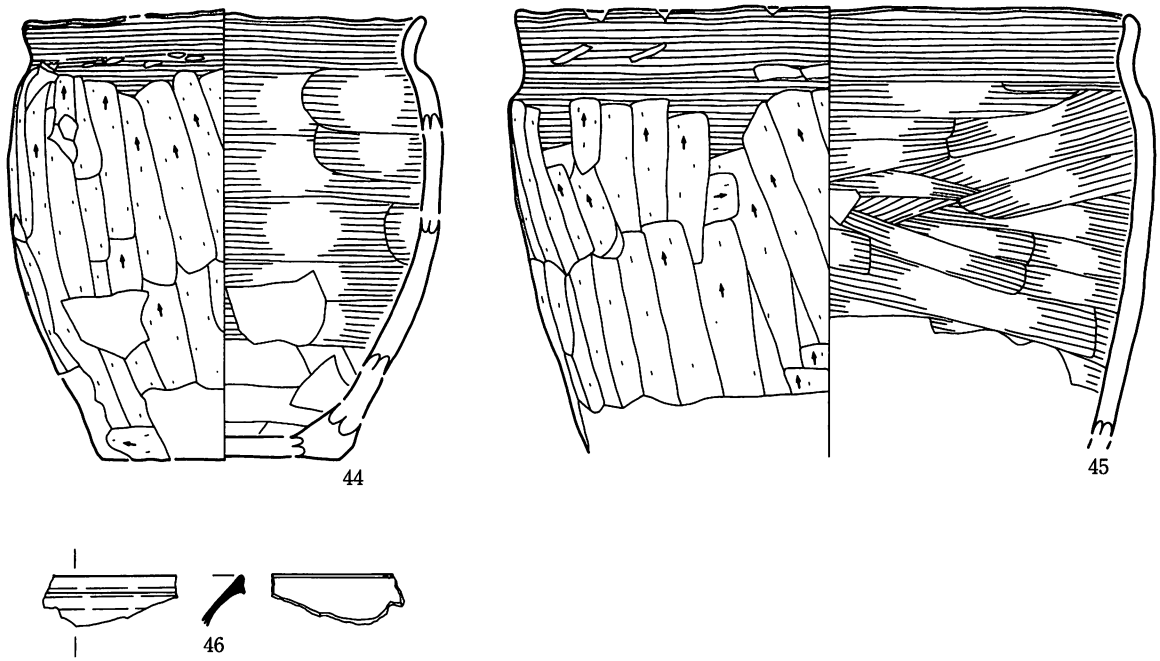


RA05(2)

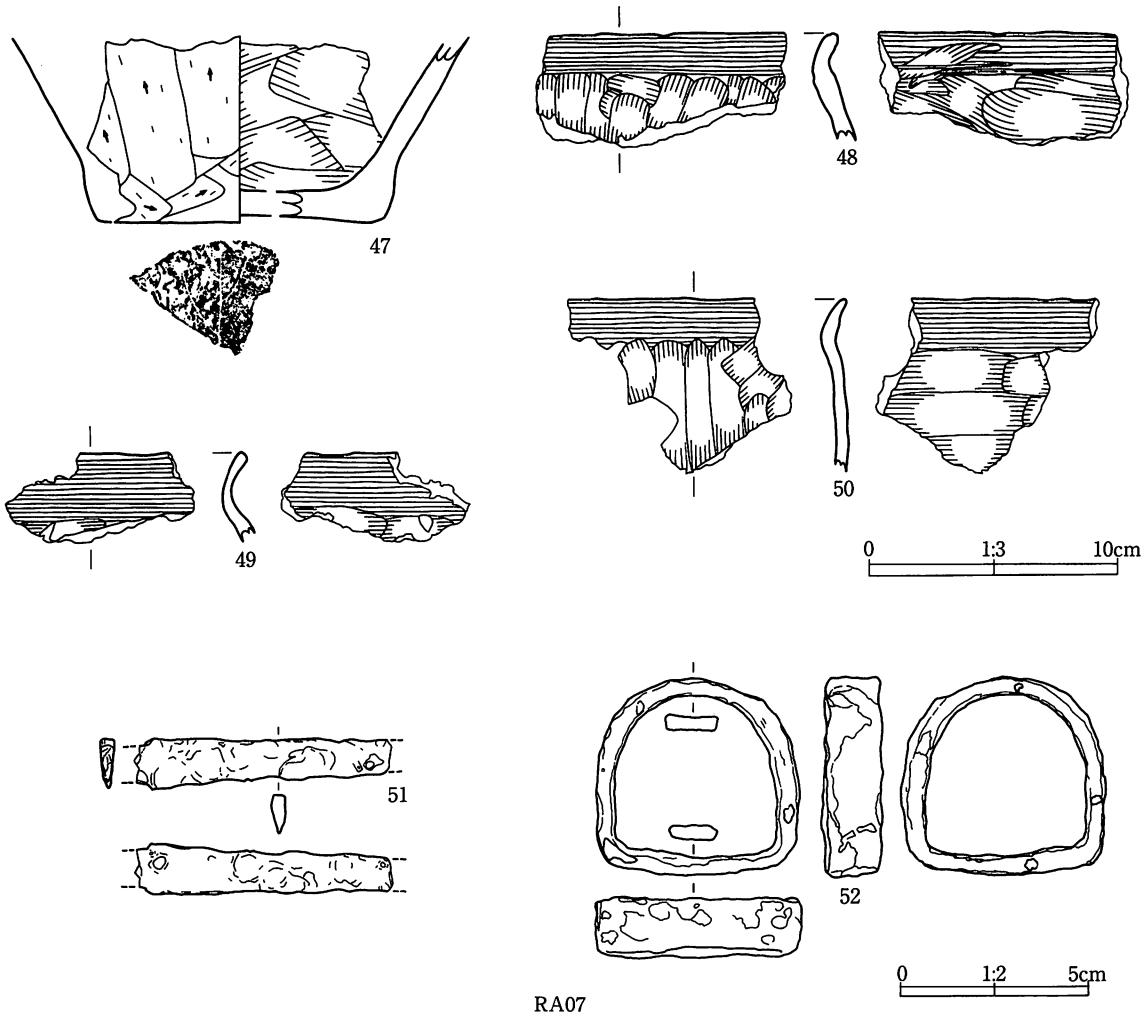
第31図　ＲＡ05（２）出土遺物



第32図　ＲＡ05（３）　出土遺物

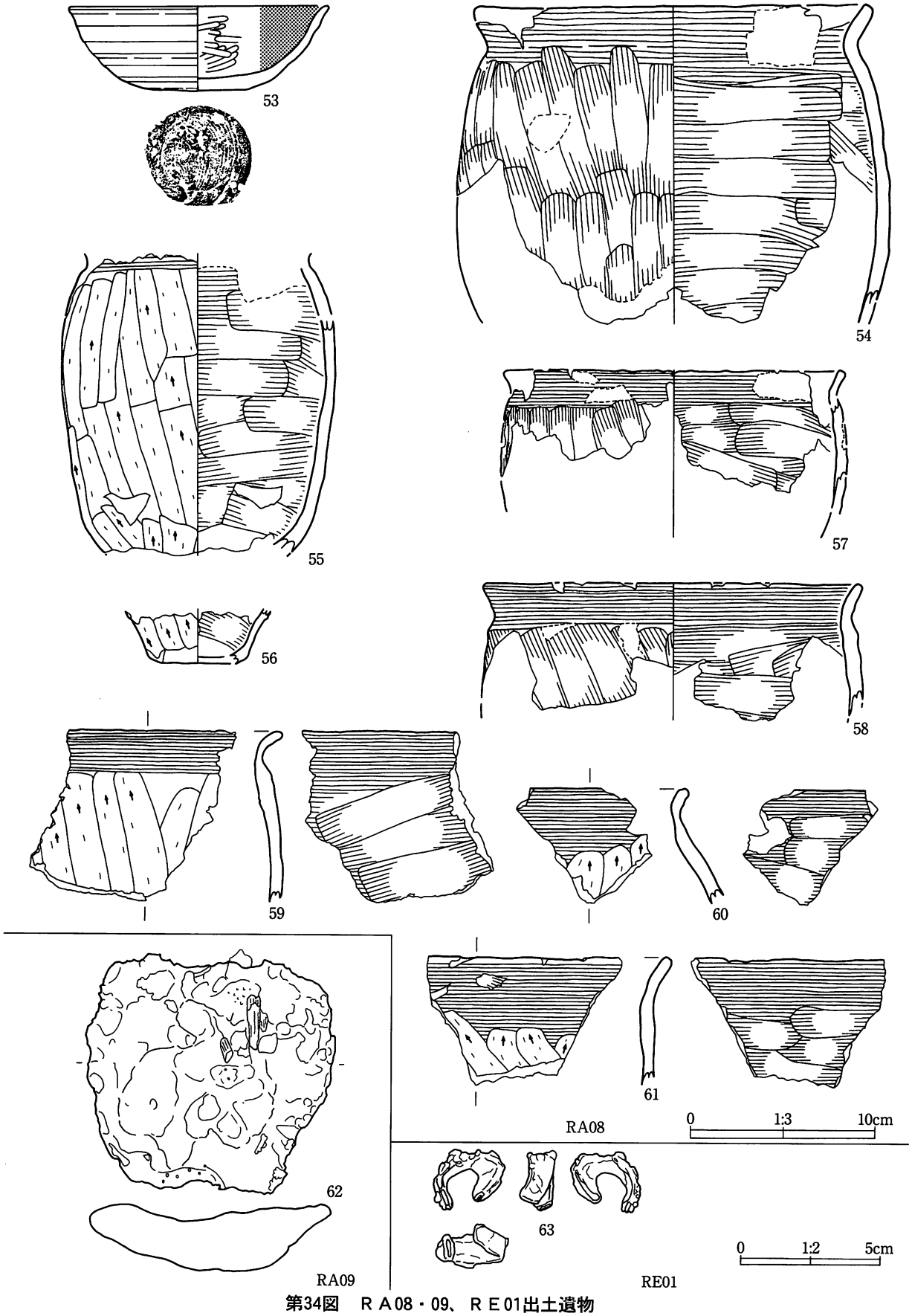


RA06

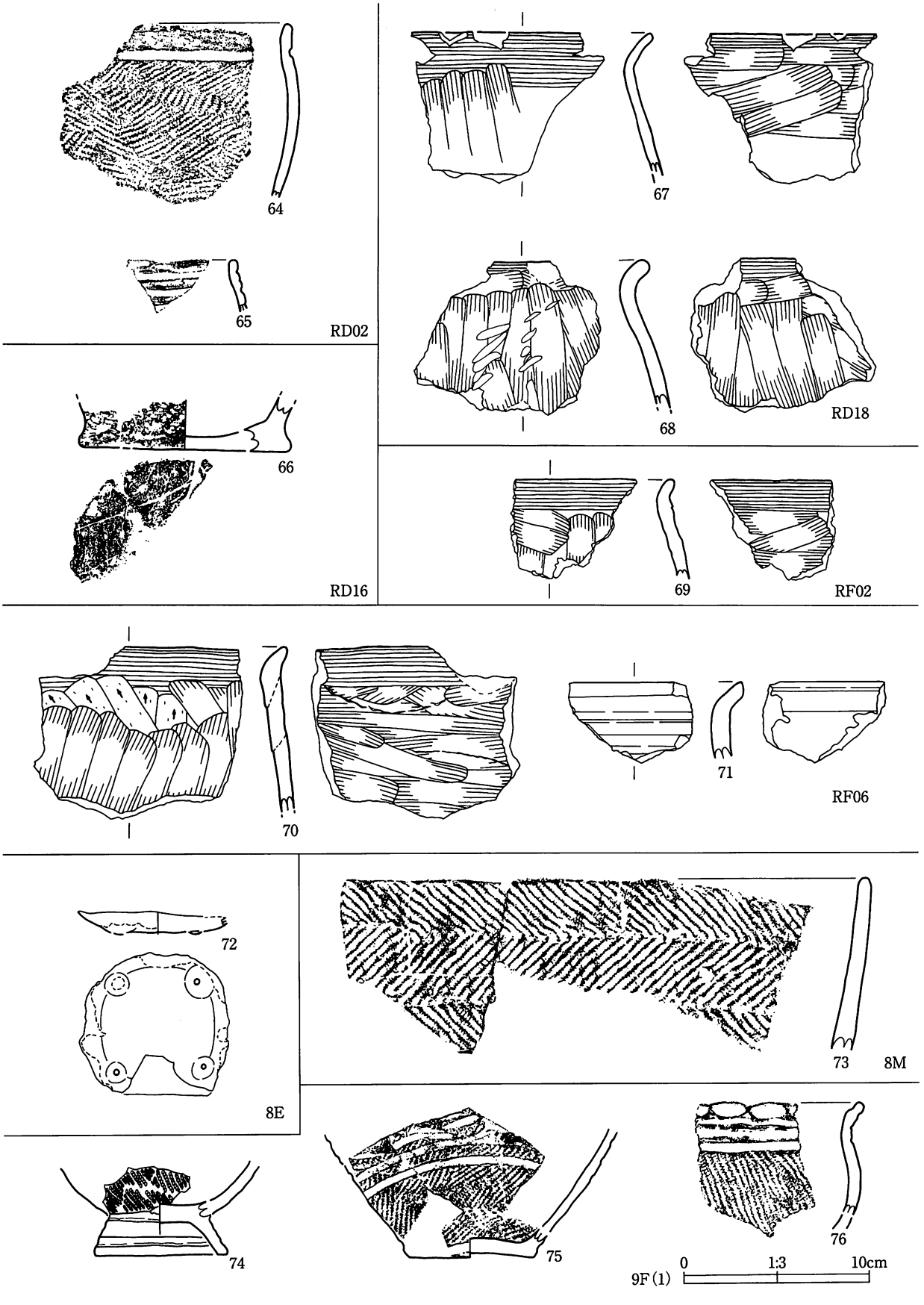


RA07

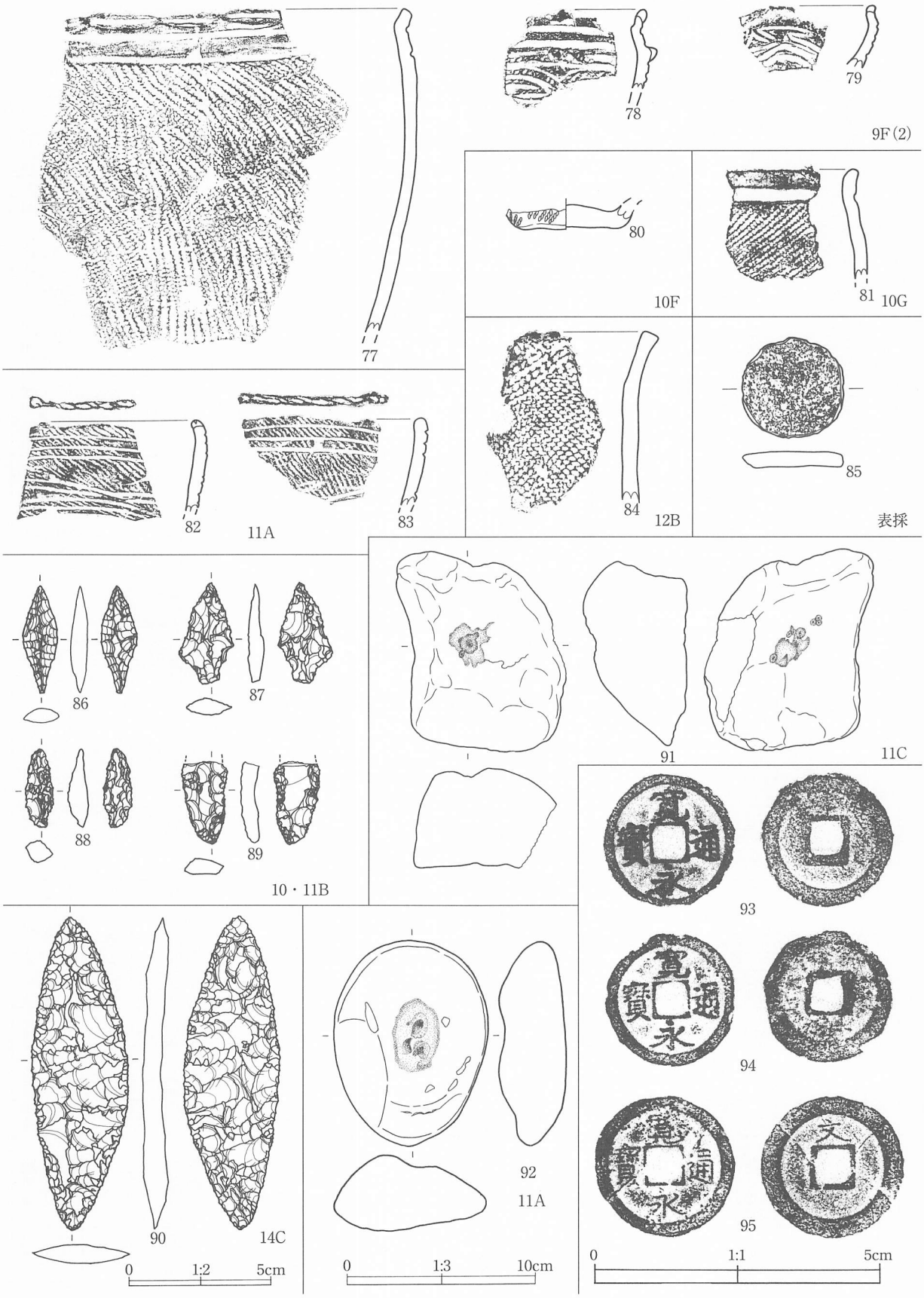
第33図　ＲＡ06・07出土遺物



第34図　ＲＡ08・09、ＲＥ01出土遺物



第35図　ＲＤ02・16・18、ＲＦ02・06、8Ｅ・8Ｍ・9Ｆ（1）出土遺物



第36図　9F（2）・10F・10G・11A・12B出土遺物、石器、銭貨

第５表　縄文・弥生土器観察表

掲載No.	出土地点	層　位	器　種	文様（原体）の特徴	内面調整	胎土	図版	写真
1	ＲＡ０１	埋土	高坏	胴:LR横,脚:上部と下部に細い沈線が３本ずつ巡る、輪積痕	Ｍ・横	1	29	24
2	ＲＡ０２	東側埋土下位	高坏？	口縁突起部、口唇：沈線	—	1	29	24
3	ＲＡ０３	埋土下位	蓋	蓋：LR横	—	1	29	24
4	ＲＡ０３	Ｑ３埋土下位	壷	ミガキ、頸：沈線	Ｍ・横	3	29	24
5	ＲＡ０３	埋土下位７層	深鉢	口：LR横	Ｎ・横	3	29	24
6	ＲＡ０３	Ｑ３埋土下位	深鉢	口：LR横	Ｎ・横	3	29	24
7	ＲＡ０３	３層	深鉢	口唇：小突起、口：RL横	Ｎ・横	3	29	24
64	ＲＤ０２	北半埋土上位	深鉢	口：太くて浅い沈線が１本巡る、胴：RL縦･横･斜	Ｎ・横	3	35	29
65	ＲＤ０２	南半埋土２層	深鉢？	口：太くて浅い沈線が３本巡る	—	3	35	29
66	ＲＤ１６	埋土	深鉢	胴：RL縦、底面：木葉痕	—	3	35	29
72	８Ｅ	Ⅱ層	深鉢？	底：四足	—	4	35	29
73	８Ｍ	Ⅲ層遺物集中区	深鉢	胴：結束第１種ＬＲ・ＲＬ横	Ｎ・横	3	35	30
74	９Ｆ	遺物出土Ⅱ―Ⅲ	台付鉢	胴：RL横、脚：浅い沈線が１本巡る	—	1	35	30
75	９Ｆ	遺物出土Ⅱ―Ⅲ	鉢	胴：RL縦→浅い沈線	—	3	35	30
76	９Ｆ	Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	小波状口縁、口唇：圧痕、頸：２本の沈線、胴：ＲＬ横	—	3	35	30
77	９Ｆ	Ⅲ層上層	深鉢？	波状口縁,突起部を除く口唇部に沈線,口:沈線（２本）,胴:ＲＬ横	Ｎ・横	3	36	30
78	９Ｆ	Ⅲ～Ⅳ層	浅鉢？	口唇：小突起、口：２本沈線、変形口字文→瘤付	—	3	36	30
79	９Ｆ	Ⅲ～Ⅳa層	浅鉢？	口～：変形工字文？浅い沈線	—	3	36	30
80	１０Ｆ	Ⅲ層	鉢？	胴：LR横	—	3	36	30
81	１０Ｇ	Ⅲ層	深鉢	口：沈線、胴：LR横	—	3	36	30
82	１１Ａ	Ⅱ層	鉢？	口唇：小突起？・刺突、口～：Ｒ横→沈線	—	3	36	30
83	１１Ａ	Ⅱ層	鉢？	口唇：小突起？・刺突、口～：Ｒ横→沈線	—	3	36	30
84	１２Ｂ	Ⅲ層	深鉢	口～：組縄縄文	—	3	36	30

※部位名、口：口縁部、頸：頸部、胴：胴部、底：底部、底面。※内面調整、Ｍ：ミガキ、Ｎ：ナデ。※胎土、１：緻密である。２：砂を含む。３：小礫を含む。
４：礫を多量に含む。

第６表　土師器・須恵器観察表

―数値:推定値、(　)数値:残存値

掲載No.	出土地点	層　位	種　類	器　種	部　位	外面調整		内面調整		成　形	法　量(cm)			底　面	図版	写真
						口縁部	胴部	口縁部	胴部		口径	器高	底径			
9	ＲＡ０４	床直出土Ｑ１	土師器	ミニチュア	完形	Ｎ	Ｎ	Ｎ	Ｎ	手づくね	2.7	2.6	2.7	丸底	30	24
10	ＲＡ０４	床直出土Ｑ１	土師器	ミニチュア	完形	—	—	—	—	手づくね	3.4	2.2	3.6	丸底	30	24
11	ＲＡ０４	床直出土Ｑ１	土師器	ミニチュア	完形	Ｎ	Ｎ	Ｎ	Ｎ	手づくね	3.0	2.9	3.2	丸底	30	24
12	ＲＡ０４	床直出土Ｑ１	土師器	ミニチュア	完形	Ｎ	Ｎ	Ｎ	Ｎ	手づくね	3.5	3.0	4.5	丸底	30	24
13	ＲＡ０４	床直出土Ｑ１	土師器	ミニチュア	完形	Ｎ	Ｎ→Ｍ	Ｎ	Ｎ	手づくね	4.0	4.5	4.9	丸底	30	24
14	ＲＡ０５	西側隅一括	土師器	高台坏	ほぼ完形	—	—	—	Ｍ	ロクロ・内黒	15.7	6.2	—	台付き?	30	25
15	ＲＡ０５	カマド付近	土師器	坏	ほぼ完形	—	—	—	Ｍ	ロクロ・内黒	14.0	3.9	6.0	回転糸切り	30	25
16	ＲＡ０５	南西ベルト焼土	土師器	坏	半欠損	—	—	Ｍ	Ｍ	ロクロ・内黒	14.1	4.3	7.5	回転糸切り	30	25
17	ＲＡ０５	西側隅一括	土師器	坏	底部	—	—	Ｍ	Ｍ	ロクロ・内黒	—	(1.6)	8.4	回転糸切り後ケズリ	30	25
18	ＲＡ０５	Q1埋土下	土師器	坏	底部	—	—	—	Ｍ	ロクロ・内黒	—	(3.5)	6.0	回転糸切り	30	25
19	ＲＡ０５	カマド構成	土師器	甕	底部	—	Ｋ	—	Ｎ	—	—	(6.1)	-11.2	木葉痕	30	25
20	ＲＡ０５	壁際６層一括	土師器	甕	口縁部～胴部	ＹＮ	Ｋ	ＹＮ	Ｎ	—	22.5	(28.5)	—	—	30	25
21	ＲＡ０５	カマド構成	土師器	甕	底部	—	Ｋ	—	—	—	—	(2.5)	10.4	木葉痕	30	25
22	ＲＡ０５	カマド構成	土師器	甕	底部	—	Ｎ	—	—	—	—	(2.0)	7.4	木葉痕	30	25
23	ＲＡ０５	カマド構成	土師器	甕	底部	—	Ｋ	—	Ｎ	—	—	(2.3)	9.2	木葉痕	31	26
24	ＲＡ０５	西側隅一括	土師器	甕	底部	—	Ｎ	—	Ｎ	—	—	(4.5)	10.0	—	31	26
25	ＲＡ０５	西側隅一括	土師器	甕	胴部～底部	—	Ｎ	—	Ｎ	—	—	(9.5)	7.2	木葉痕	31	26
26	ＲＡ０５	住居中央一括	土師器	甕	口縁部～胴部	ＹＮ	Ｎ	ＹＮ	Ｎ	—	23.4	(19.7)	—	—	31	26
27	ＲＡ０５	南側隅一括	土師器	甕	底部	—	Ｋ	—	Ｎ	—	—	(6.3)	—	木葉痕	31	26
28	ＲＡ０５	東側土器集中	土師器	甕	底部	—	Ｋ	—	Ｎ	—	—	(8.8)	-16.0	木葉痕	31	26
29	ＲＡ０５	南東土器集中	土師器	小型甕	ほぼ完形	ＹＮ	Ｎ	ＹＮ	Ｎ	—	10.3	10.2	7.6	—	31	26
30	ＲＡ０５	Ｑ５焼土下	土師器	小型甕	口縁部～胴部	ＹＮ	Ｎ	ＹＮ	Ｎ	—	8.0	(5.8)	—	—	31	26
31	ＲＡ０５	埋土中位	土師器	甕	口縁部	ＹＮ	Ｎ	ＹＮ	Ｎ	—	—	(6.5)	—	—	31	26
32	ＲＡ０５	Ｑ５壁際下位	土師器	甕	口縁部	ＹＮ	Ｋ	ＹＮ	Ｎ	—	—	(7.6)	—	—	31	26
33	ＲＡ０５	Ｑ６埋土中位	土師器	甕	口縁部	ＹＮ	Ｋ	ＹＮ	Ｎ	—	—	(4.7)	—	—	31	26
34	ＲＡ０５	壁際・埋土下位	土師器	甕	口縁部	ＹＮ	Ｋ	ＹＮ	Ｎ	—	—	(7.1)	—	—	31	26
35	ＲＡ０５	Ｑ５壁際	土師器	甕	口縁部	ＹＮ	Ｋ	ＹＮ	Ｎ	—	—	(4.8)	—	—	32	26
36	ＲＡ０５	Ｑ２焼土下	土師器	甕	口縁部	ＹＮ	Ｋ	ＹＮ	Ｎ	—	—	(5.2)	—	—	32	26
37	ＲＡ０５	南側住居埋土	土師器	甕	口縁部	ＹＮ	Ｋ	ＹＮ	Ｎ	—	—	(7.7)	—	—	32	26

－数値:推定値、( )数値:残存値

掲載No.	出土地点	層位	種類	器種	部位	外面調整		内面調整		成形	法量(cm)			底面	図版	写真
						口縁部	胴部	口縁部	胴部		口径	器高	底径			
38	ＲＡ０５	Ｑ２焼土内	須恵器	長頸壺	口縁部	—	—	—	—	ロクロ	—	(2.1)	—	－	32	26
44	ＲＡ０６	床面一括	土師器	甕	口縁部～胴部	ＹＮ	Ｋ	ＹＮ	Ｎ	—	15.5	17.8	9.4	－	33	27
45	ＲＡ０６	カマド構成	土師器	甕	口縁部～胴部	ＹＮ	Ｋ	ＹＮ	Ｎ	—	24.0	(17.5)	—	－	33	27
46	ＲＡ０６	Q5焼土埋土	須恵器	長頸壺	口縁部	—	—	—	—	ロクロ	—	(12.0)	—	－	33	27
47	ＲＡ０７	床面一括Ａ	土師器	甕	底部	—	Ｋ	—	Ｎ	—	—	(7.4)	-11.4	木葉痕	33	28
48	ＲＡ０７	床面一括Ａ	土師器	甕	口縁部	ＹＮ	Ｎ	ＹＮ	Ｎ	—	—	(4.6)	—	－	33	28
49	ＲＡ０７	埋土	土師器	甕	口縁部	ＹＮ	—	ＹＮ	—	—	—	(3.5)	—	－	33	28
50	ＲＡ０７	埋土	土師器	甕	口縁部	ＹＮ	Ｎ	ＹＮ	Ｎ	—	—	(6.8)	—	－	33	28
53	ＲＡ０８	カマド構成	土師器	坏	ほぼ完形	—	—	—	Ｍ	ロクロ・内黒	13.9	4.5	6.0	回転糸切り	34	28
54	ＲＡ０８	煙道上部	土師器	甕	口縁部～胴部	ＹＮ	Ｎ	ＹＮ	Ｎ	—	21.4	(16.9)	—	－	34	28
55	ＲＡ０８	カマド構成	土師器	甕	胴部	—	Ｋ	—	Ｎ	—	—	(16.1)	—	－	34	28
56	ＲＡ０８	カマド構成	土師器	小型甕	底部	—	Ｋ	—	Ｎ	—	—	(2.9)	4.0		34	29
57	ＲＡ０８	カマド構成	土師器	甕	口縁部～胴部	ＹＮ	Ｎ	ＹＮ	Ｎ	—	18.0	(8.9)	—	－	34	29
58	ＲＡ０８	カマド構成	土師器	甕	口縁部～胴部	ＹＮ	Ｎ	ＹＮ	Ｎ	—	(20.4)	(7.3)	—	－	34	29
59	ＲＡ０８	カマド構成	土師器	甕	口縁部	ＹＮ	Ｋ	ＹＮ	Ｎ	—	—	(9.1)	—	－	34	29
60	ＲＡ０８	煙道上部	土師器	甕	口縁部	ＹＮ	Ｋ	ＹＮ	Ｎ	—	—	(6.1)	—	－	34	29
61	ＲＡ０８	南側埋土下	土師器	甕	口縁部	ＹＮ	Ｋ	ＹＮ	Ｎ	—	—	(6.8)	—	－	34	29
67	ＲＤ１８	南半埋土	土師器	甕	口縁部	ＹＮ	ＹＮ	Ｎ	Ｎ	—	—	(8.0)	—	－	35	29
68	ＲＤ１８	北半埋土１層	土師器	甕	口縁部	ＹＮ	ＹＮ	Ｎ	Ｎ	—	—	(8.1)	—	－	35	29
69	ＲＦ０２	床直	土師器	甕	口縁部	ＹＮ	Ｎ	ＹＮ	Ｎ	—	—	(5.4)	—	－	35	29
70	ＲＦ０６	焼土内	土師器	甕	口縁部	Ｎ	Ｋ→Ｎ	Ｎ	Ｎ	輪積痕	—	(9.1)	—	－	35	29
71	ＲＦ０６	焼土内	土師器	甕	口縁部	—	—	—	—	ロクロ	—	(4.3)	—	－	35	29

第７表　土製品観察表

( )数値:残存値

掲載No.	出土地点	層位	器種	計測値（cm）			重量(g)	特徴・備考	図版	写真
				長さ	幅	厚さ				
85	表採	－	円盤状土製品	3.5	3.6	0.6	9.0	摩滅著しい	36	30

第８表　石器観察表

( )数値:残存値

掲載No.	出土地点	層位	器種	計測値（cm）			重量(g)	特徴・備考	石材	産地	図版	写真
				長さ	幅	厚さ						
8	ＲＡ03	床直	石皿	43.7	30.9	4.7	9000.0	片面に浅い窪み	珪質頁岩	北上山地	29	24
86	試掘トレンチ	Ⅱ層	石鏃	3.8	1.3	0.5	1.9	尖基鏃	頁岩	北上山地	36	30
87	10Ｂ	To－a下位	石鏃	3.5	1.9	0.6	2.84	凸基有茎鏃	頁岩	北上山地	36	30
88	10･11Ｂ	To－a下位	石鏃？	2.8	0.9	0.6	2.84	未製品？	頁岩	北上山地	36	30
89	10･11Ｂ	To－a下	不定形石器	(2.9)	1.5	0.6	(3.0)	刃部：片面周縁加工	頁岩	北上山地	36	30
90	14Ｃ	Ⅱ層	尖頭器	11.0	3.3	0.9	30.9	両面加工	頁岩	北上山地	36	30
91	11Ｃ	Ⅲ層	凹石	10.3	9.2	(6.0)	(645.0)	両面に凹あり	斑糲岩	北上山地	36	30
92	11Ａ	表土	凹石	10.1	8.3	4.0	470.0	片面に凹あり	ホルンフェルス	北上山地	36	30

第９表　金属製品観察表

( )数値:残存値

掲載No.	出土地点	層位	器種	計測値（cm）			重量(g)	特徴・備考	図版	写真
				長さ	幅	厚さ				
39a	ＲＡ０５	南側壁際	刀子	(6.0)	2.0	1.6	(9.90)	39b同一個体	32	27
39b	ＲＡ０５	南側壁際	刀子	(5.3)	0.9	0.4	(3.40)	39a同一個体	32	27
40	ＲＡ０５	床面①	刀子？	(5.0)	0.8	0.5	(3.27)		32	27
41	ＲＡ０５	Q2焼土埋土	刀子	(18.2)	1.75	0.4	(47.60)		32	27
42	ＲＡ０５	Q2焼土埋土		(13.5)	2.1	3.5	(22.47)		32	27
43	ＲＡ０５	埋土	鉄釘？	2.1	1.3	1.7	(2.10)		32	27
51	ＲＡ０７	床面一括Ａ	刀子？	(6.9)	1.2	0.6	(10.42)		33	28
52	ＲＡ０７	埋土	鉄輪	5.6×5.5	1.4	0.6	57.54		33	28
62	ＲＡ０９	床面燃焼部西側	椀型滓	(8.7)	(8.7)	2.3	(183.10)		34	29
63	ＲＥ０１	Q4床面	不明	2.1	1.3	1.7	5.70		34	29
93	９Ｋ	表土	銭貨	2.5	2.5	0.2	2.03	寛永通寶（古寛永）	36	30
94	９Ｌ	表土	銭貨	2.3	2.3	0.1	1.59	寛永通寶（古寛永）	36	30
95	ＲＡ０５	Q2焼土埋土	銭貨	2.7	2.8	0.2	2.10	寛永通寶（新寛永）	36	30

Ⅵ. 考察とまとめ

1．遺構（第37図）

(1) 弥生時代の竪穴住居跡

弥生時代の竪穴住居跡（以下住居跡と略記する）は3棟検出された。

〈占地〉いずれも調査区北側の緩斜面にある。RA01住居跡は標高約282m、RA02住居跡は標高約283.5mでほぼ同じ面にあり、いずれも石囲炉をもつ。地床炉をもつRA03住居跡は標高約287mとやや高い位置にある。住居間の距離はRA01・02住居跡間が６m、RA02・03住居跡間が19mと離れた位置にある。

〈平面形〉比較的残りのよいRA03住居跡は楕円形である。他の２棟は明確に形状を把握できていないが、RA02住居跡は斜面上位の西側半分しか壁がないものの、円形を基調とするものと推定される。

〈炉〉住居内の炉の形態は石囲炉２棟、地床炉1棟で、石囲炉の２棟（RA01とRA02）は近い場所にあるが、時期差がないように思われる。RA02住居跡では石囲炉内の焼土の厚さは最大７㎝で、火床面が床面より10㎝低い。炉跡は穴を掘った後に周囲に炉石を設置して造られたものと思われる。RA01住居跡はブロック状に焼土が入り込んでいるだけで、焼土の層はなかった。RA03住居跡の地床炉の焼土は最大で３㎝と薄い。

〈壁・床面〉RA01・02はⅢ層を床面としており、平坦である。RA03住居跡はⅧ層を床面としている。

〈重複関係〉３棟の住居跡は距離をもって存在しており、重複はない。

〈時期〉出土した遺物は、滝沢村湯舟沢遺跡や軽米町馬場野Ⅱ遺跡など県北地区に多く見られる弥生時代前期（小田野編年Ⅰb期、須藤編年山王Ⅲ層式）に属するものと思われる（註１）。他の遺構も含めて同時期の出土遺物は少なく、集落の規模は比較的小さかったものと思われる。

(2) 古代の竪穴住居跡

平安時代の住居跡は6棟検出された。ここではRE01竪穴状遺構も含めて、住居跡を概観する。

〈占地〉調査区の北側に集中する。最も規模の大きいRA05住居跡が標高約288mで他の住居跡より高く、RA09住居跡が286m、RA07住居跡が285m、RA04・06住居跡とRE01竪穴状遺構が283m、RA08住居跡が282mに位置する。住居跡同士の重複はなく、住居間の距離は一番近いもので6m、他は20m以上離れている。

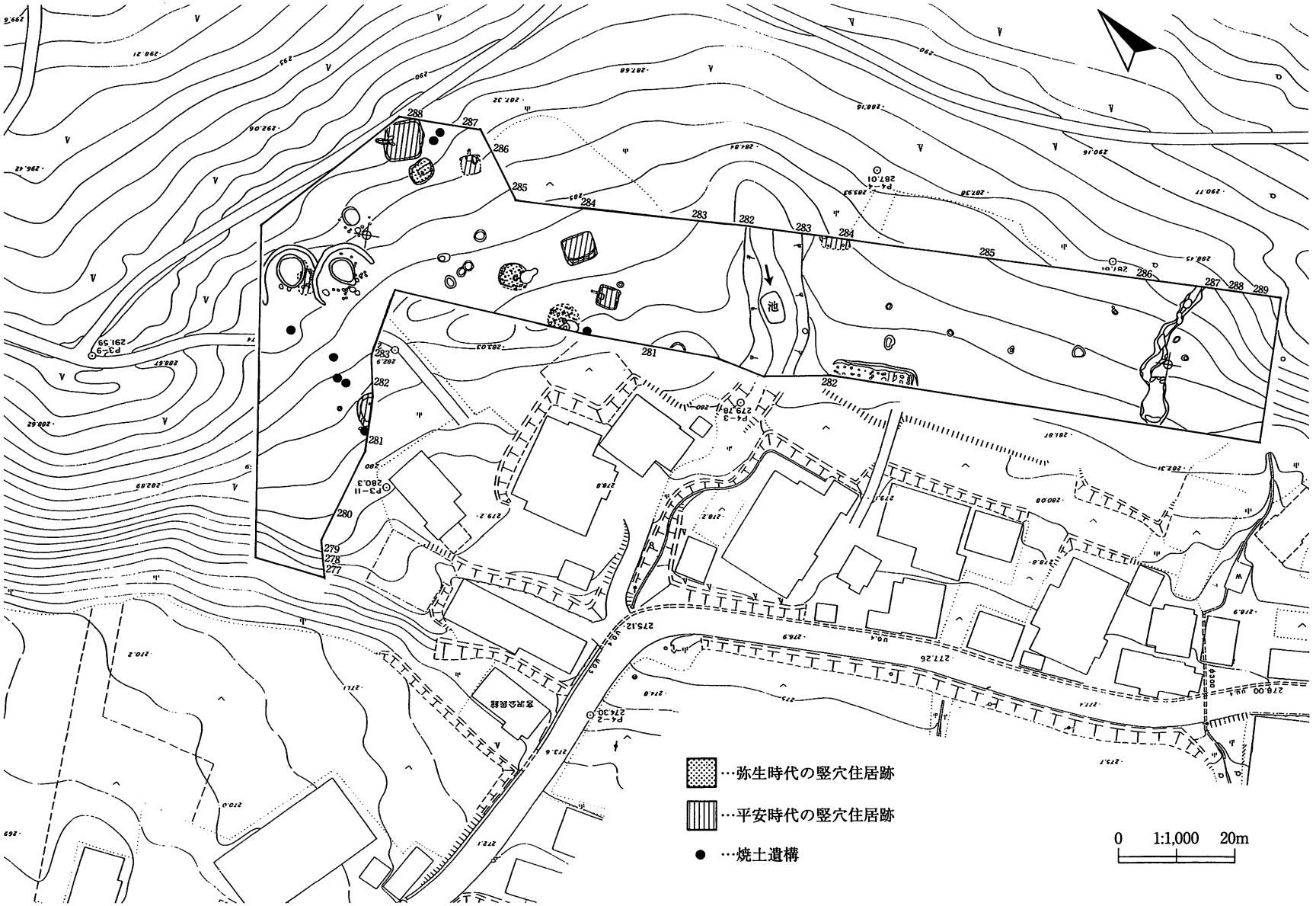
〈平面形〉平面形が把握できたものはRA04・05・09住居跡、RE01竪穴状遺構の4棟で、いずれも隅丸方形を基本とするが、整った形態ではなく、若干の歪みがある。RA08住居跡は東側が調査区外にかかるため西側のみの部分調査となったが、壁の掘り方が直線的ではなく、やや丸みを帯びている。RA06・07住居跡については壁がなく推定で図示したもので、方形基調と思われるが、詳細は不明である。

〈規模〉各住居跡の床面積は、計測できたのは４棟で、RA04住居跡は13.1㎡(3.55×3.70m)、RA05住居跡は44.9㎡(6.80×6.60m)で最大、RA09住居跡は10.4㎡(径3.30×3.15m)で最小、RE01竪穴状遺構は39.4㎡(6.8×5.8m)で、ややばらつきが見られる。

〈主軸方向〉カマドとカマドが設置された壁面が直交する線（煙道の方向）と座標軸の北側との角度から表した。ほぼ北西を向いているものが3棟（RA04・05、07は推定）、ほぼ北を向いているもの２棟（RA06推定・09）、ほぼ南西を向いているもの1棟（RA08推定）である。推定されているものを除くと、北西、北の２方向が見られる。またRE01竪穴状遺構の長軸は西北西を向き、いずれの住居とも軸方向がずれている。

〈柱穴〉RA07・RA08住居跡・RE01竪穴状遺構からそれぞれ２基検出されている。

〈カマド・煙道〉カマド、煙道は残存状態が良好とはいえず、RA05住居跡以外は本来の形態を留めていない。形態は掘り込み式1基（RA05）、刳り貫き式3基（RA04・06・09）である。残る２棟のうち、1棟（R



第37図　宮沢遺跡遺構配置図

A07）は調査区外にあるものと推定され、１棟（RA08）はカマドの袖らしき粘土跡があるが、明瞭に確認することができなかった。カマドの位置は北西側壁が３棟（推定1棟含む）、北側壁が２棟、南西側壁が１棟である。袖部の芯材として使用されていた礫は粘板岩が多いが、RA08住居跡のように土師器片を使用したものもある。また、RA05住居跡では燃焼部の前に丸い礫が敷き詰められていた。

〈付属施設〉RA09住居跡のカマドの東側からピットが検出された。規模は、開口部径135×100cm、深さ20cmである。埋土は黒褐色土の単層で、出土遺物はない。

〈時期〉９世紀後半（八木編年Ｇ類）に属するものと思われる（註２）。

(3) 土　坑

検出された土坑は20基で、平面形は円形11基、楕円形３基、長楕円形３基、不整形3基である。規模は110～150cm大のものが多い。出土遺物からRD02土坑は弥生時代、ＲＤ16・18土坑は古代の可能性がある。後世に削平されているものが多く、詳細は不明である。

(4) 焼土遺構

検出された焼土遺構は８基である。焼土内から遺物が出土しているのはRF02・06焼土遺構で、いずれも土師器が出土している。規模は最大径が62×60cm、最小径が42×20cm、厚さは4～10cmである。出土遺物が少なく、時期決定が困難であるが、分布や出土遺物から古代に属する可能性が高いものと思われる。

(5) 掘立柱建物跡

建物跡は、斜面東側に続いており、現大崎清志氏宅に続く。直接の出土遺物はないが、周辺から寛永通寶が出土しており、近世以降の可能性が高い。現宮沢の集落の起源となる建物跡の可能性がある。

(6) 溝　跡

調査区南側から１条が検出された。斜面上方の山側から少し蛇行しながら、斜面下方の民家に向かって走っている。埋土の状態から水が流れていた痕跡が窺えた。出土遺物はなく、時期・性格は不明である。

現在、ＲＧ01溝跡の北側にほぼ並行した形で、東側（斜面上位）から西側（斜面下位）の民家に地下にパイプを通して用水を引いており、旧時代の集落における同様の遺構の可能性がある。ただし聞き取り調査では明らかにできなかった。詳細は不明だが、近世以降に属するものと考えたい。

(7) 炭　窯

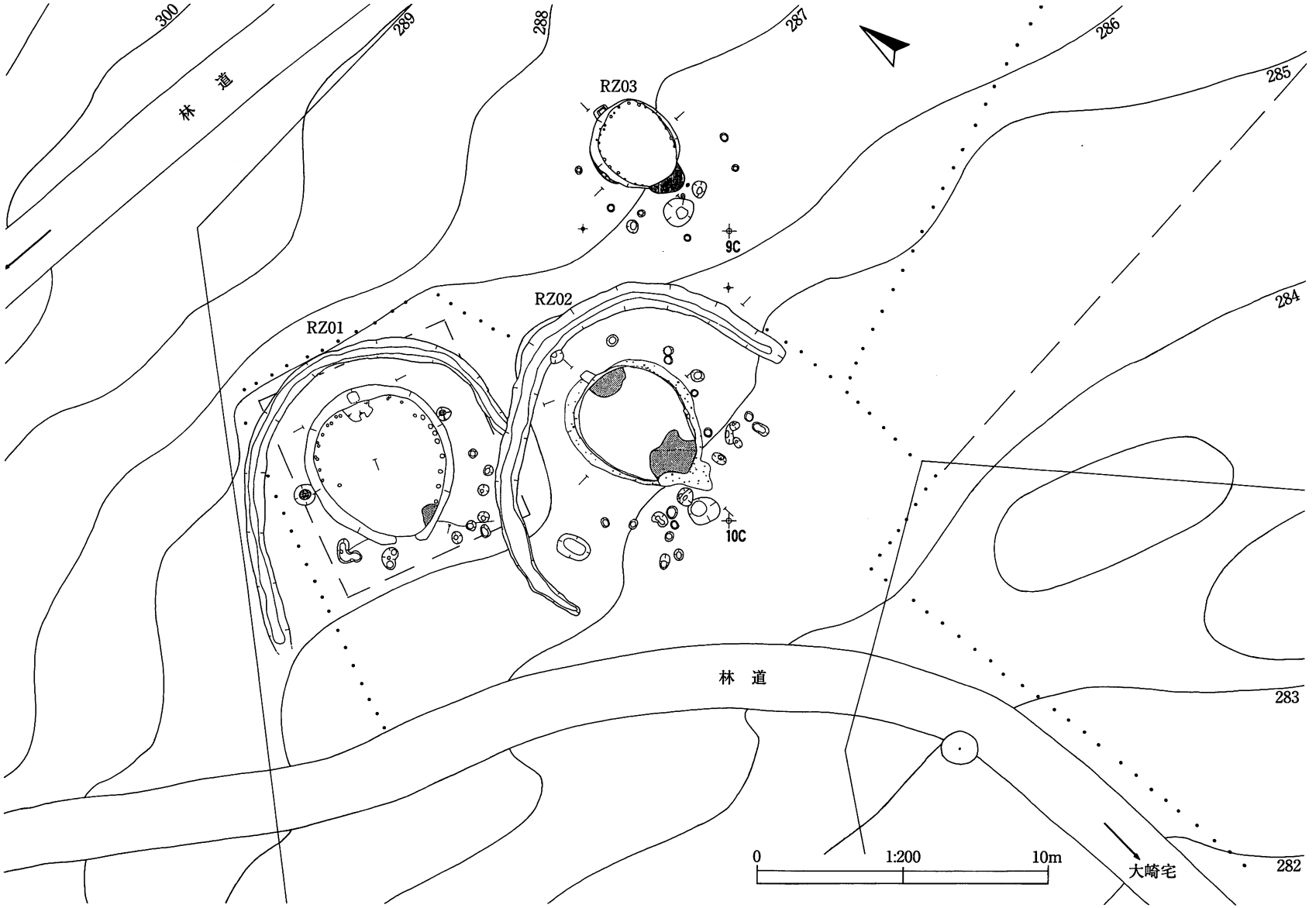
a. 炭窯の位置と立地（第38図）

炭窯が３基検出された。地主の大崎氏への聞き取りによると、昭和50年代頃より３年前（土地買収前）まで炭焼を行っており、ＲＺ03炭窯→ＲＺ02炭窯→ＲＺ01炭窯の変遷が確認された（ＲＺ03は所有者が不明）。３基の炭窯は標高285～287mの南向きの斜面に立地しており、排煙口を北側の斜面上方に、焚口を南側の斜面下方に向けて炭窯を構築している。南側斜面下位に大崎家があることから、大崎家の裏山（庭）に構築された炭窯ということになる。周囲は山林で、窯の後方には林道が走り、作業の跡を偲ぶことができる。

ｂ．炭窯の構造と構築方法（第39図）

窯の構造は、本体の炭化室が内部と外部に大別され、内部は窯壁・窯底、外部の施設として点火室・排気管・排煙口がある。今回の調査では、炭化室内部の窯壁・窯底と外部の排煙口が確認できた。

炭窯の構築方法は、聞き取りによれば、窯の本体にあたる部分は地山＝かべ土（Ｔｏ－Ｈ）を掘り込んで構築し、上屋（覆い）は、枝木（ジャーラ）を上げて渡した後に薦（こも）で覆い、その後、ゴロタ（Ｔｏ－Ｎｂ）を潰して壁土（粘土）とつきかためたものを叩いて乗せたとのことである。窯の内部の壁柱は、窯壁を造る際の支柱の痕跡である。煙道部分には木製の箱形（木柱）を作成し埋めた後、燃焼させて箱形を消滅させ煙道部分を確保したようである。



第38図　炭窯(R Z 01･02･03)位置図

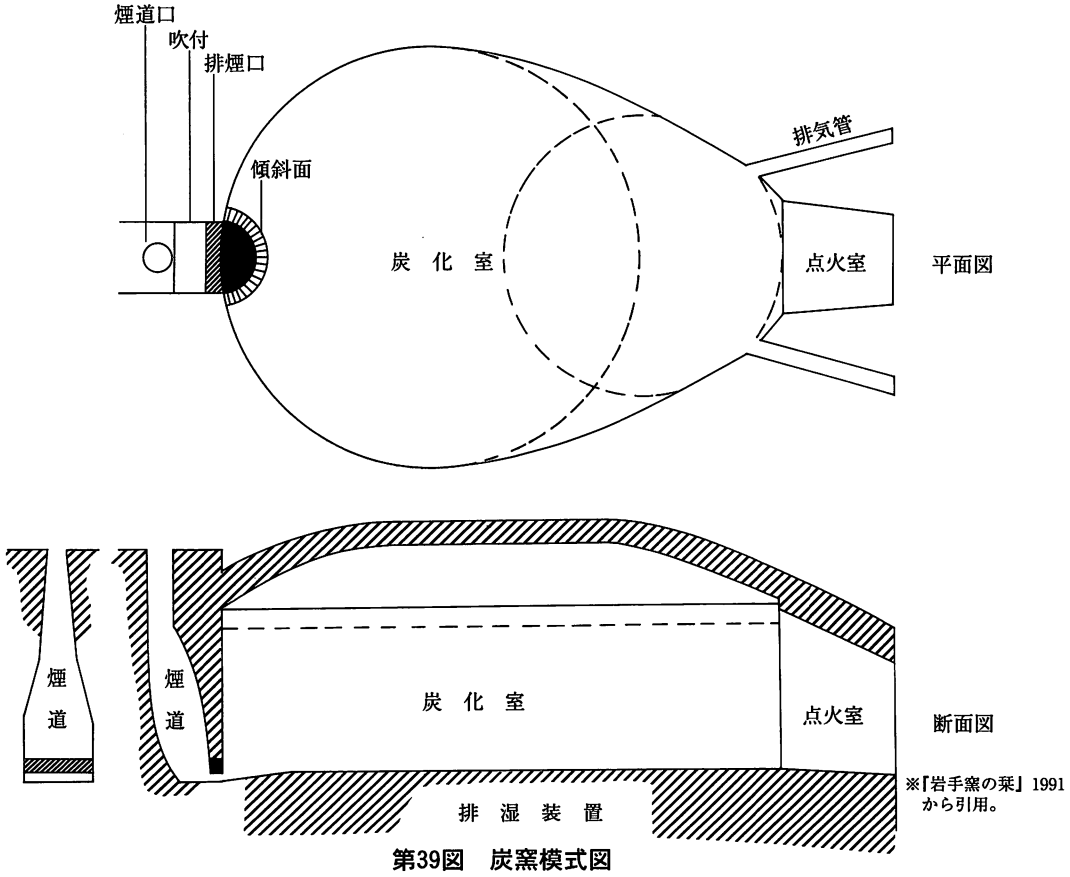
c．炭窯の変遷と特徴

検出された３基の炭窯をみると、時間の経過とともに、①規模の大型化、②規模の複雑化が指摘できる。①規模の大型化は、窯底の面積を算出すると、ＲＺ03炭窯(5.8㎡)→ＲＺ02炭窯(11.68㎡)→ＲＺ01炭窯(16.68㎡）となり、ＲＺ02炭窯はＲＺ03炭窯の約２倍、ＲＺ01炭窯はＲＺ03炭窯の約３倍、ＲＺ02炭窯の約1.5倍である。最初の窯跡（ＲＺ03炭窯）を１として２倍（ＲＺ02炭窯）、３倍（ＲＺ01炭窯）と構築を重ねる度に炭窯の規模を拡大していったようにみえる。ただし、ＲＺ01・02炭窯は大崎氏所有で、昭和50年代頃から炭焼きを行ったとのことであるが、ＲＺ03炭窯の所有者は不明で、年代は昭和40年代以前ではないか、ということしか解らない。ＲＺ01・02炭窯とＲＺ03炭窯は所有者が異なるため、直接の関係はないが、時間差があることは確実であり、偶然にも一定規模での拡大がみられたことは、それぞれの炭窯が造られた時期差に係わってもたらされた結果ではないかと推測される。

②規模の複雑化とは、具体的には排水・排湿・保温を目的とした付属施設の構築である。例えば、ＲＺ01・02炭窯には排水のために斜面上位に周溝が掘られており、ＲＺ02炭窯の窯底の下位には排湿のために木材：イタヤカエデ（註３）を敷いている。ＲＺ03炭窯には、窯底の底上げ（註４）が確認できたが、ＲＺ01・02炭窯のような付属施設は確認できていない。良質の炭を効率的に生産するために窯を構築するたびに工夫を重ねていった様子を知ることができる。今回の調査では周囲に土取穴と考えられる施設は検出されていない。

d. まとめ

今回、調査した炭窯は、黒炭を焼いた炭窯で、ＲＺ01炭窯では１回の炭焼きで、１俵15kgで、40俵の黒炭が出来たそうである。宮沢地区の近隣の家では今なお炭焼きが行われているが、調査された炭窯３基は、当地における戦後から現在にいたる炭窯の変遷を知ることができる良好な資料である。



第39図　炭窯模式図

2．遺物

(1) 縄文時代

土器は前期と晩期の土器が出土している。いずれも遺構外であるが、出土地点にまとまりがみられる。

(2) 弥生時代

弥生時代と思われる遺物は少なく、小コンテナ(30×40×10cm)1箱分で、住居跡とその周辺から出土している。高坏、蓋、壺の頸部、深鉢の口縁部が出土している。弥生時代前期と後期に属するものと思われる。

(3) 古代

遺構内を中心に土師器、須恵器、鉄製品、鉄滓がある。土師器の種類は坏、甕が主体で、坏はすべてロクロを使用しており、甕はロクロ不使用が卓越し、ロクロ使用の甕は1点のみである。甕の胎土はロクロを使用したもの1点を除けば、すべて砂粒を含み内外面ともざらつきがあり、調整も粗く、粗雑である。またRA04住居跡から小型手づくね土器5点がまとまって出土している。これについては別項で考えてみたい。

鉄製品はRA05・06・07・09竪穴住居跡から出土しており、刀子4点と鉈・釘・輪状鉄製品などがある。RA09住居跡からは鉄滓も出土しており、小鍛冶が行われていた可能性がある。

(4) RA04住居跡から出土した小型手づくね土器について

ここでは、RA04住居跡からまとまって出土した5点（9・10・11・12・13）の小型の手づくね土器について検討する。工具の使用は13でミガキ調整の痕跡があったが、その他は指頭圧痕、指ナデと思われる痕跡のみである。胎土は若干の砂粒を含むが同遺跡出土の甕ほど粗くはなく、焼成は良好である。

問題点として、1．RA04住居跡ではこの小型手づくね土器以外に出土遺物が無く、これだけでは所属時期を明確に判断することができないため、遺構の時期を類推すること。2．5点がまとまって出土したという特異な出土状況が何を意味しているのか。この2点について、岩手県における同様の事例を概観することから考えてみたい。

従来、各報告書での記載は、「手づくね土器」（飛鳥台地Ⅰ）、「手ごね土器」（長者屋敷・駒板遺跡）、「小型鉢型土器」（大久保遺跡、上の山Ⅶ遺跡）など様々な名称を付して分類しているが、ここでは器高が10cm以下で小型の手づくね土器を採り上げることにする。実際の報告では、「非ロクロ」の記載が多く、「手づくね」の記載が少ないため、集成資料では、手づくねの可能性のあるもの、巻き上げ痕や輪積痕を持つ小型土器も含めており、また宮沢遺跡と同様に住居内出土の資料を対象としている(註5)。

a．出土遺跡の分布

岩手県内で古代の住居内の小型手づくね土器の出土遺跡は19遺跡ある。内訳は県北部・北部沿岸10遺跡：長瀬B・中曽根II・駒焼場（二戸市）、飛鳥台地Ⅰ（浄法寺町）、上の山Ⅶ・扇畑II（安代町）、駒板・宮沢（軽米町）、江刺家（九戸村）、長者屋敷（松尾村）、県北部沿岸2遺跡：鼻舘跡（久慈市）、上村貝塚（宮古市）、県央部1遺跡：台太郎（盛岡市）、県南部6遺跡：膳性・石田II（水沢市）、松川（江刺市）、岩崎台地（北上市）、高瀬Ⅰ・蓬田（遠野市）の遺跡である。

b．出土した住居跡の形態

小型手づくね土器が出土した住居跡の規模は、最小2.4×3.0m（江刺家ⅠII-3住）、最大8.2×8.1m（膳性D-8住-2）と偏差が広い。地域ごとに住居面積を見ると、県北部の住居面積は30㎡以上のものが少なく、10㎡大やそれ以下のものが見られる。県南部の住居跡は30～50㎡の広さを持つが、これはこの地域の住居跡に総じて見られる傾向で、他の地域はやはり県北部と同じ程度の広さを持つ。カマドの煙道の形態には掘り込み・刳り貫きの両者がある。住居内のカマドの位置も一辺の中央部にあるもの、片側に偏るものの

両者がある。これらの特徴は、該期の住居跡に一般的に見られる時期的な傾向が反映されているようである。

c．住居内の出土位置

住居内の出土地点について触れているものが少ないが、事実記載から分けてみると、埋土、床面直上、カマド付近、住居内の土坑内の埋土などから出土している。駒板遺跡ⅣD39住・中曽根Ⅱ遺跡43号址については、宮沢遺跡と同様に住居のカマド側半分の空間からまとまって出土している。

小型の手づくね土器が一住居からまとまって出土した例としては、軽米町駒板遺跡のⅣD39住から４点、二戸市長瀬Ｃ遺跡のＤｄ53住、江刺市松川遺跡のＡ28住-１、水沢市膳性遺跡のＣ-３住-１から３点、その他２点以上出土した住居跡が７棟ある。まとまって出土する場合は類似する器形であることが多い。

d．小型土器の形態

小型土器を成形からみると、手づくねの土器の他に、輪積痕、巻き上げ痕を残すものがある。

器種から見ると、甕形・坏形・壷形・片口の大きく４タイプが見られる。底部の形態は丸底風・平底風があり、その他に四足が１点ある。坏形は多くが丸底で、伴出した坏（小型ではない物）も丸底を呈するものが多く見られた。同時期の坏が小型化し、丸底のものが多くなってくる変化と一致する。

成形と器形の関係では、甕の長胴形のものに輪積み、巻き上げ痕が残されているものが多いが、他は手づくねで製作されているようである。輪積み痕や巻き上げ痕があるもの７点中６点の器高は５㎝以上である。手づくね土器は他の小型土器より厚手で、いびつな形で、丸底のものが多い。

工具を使用した調整はケズリ調整とナデ調整が主体で、外面全体にはっきりと施されるものは少ない。外面にミガキが入るものは３点（膳性・中曽根）あり、その内２点は平安時代初頭に属す可能性がある住居跡から出土している。工具を使用しないものは、指ナデ痕が顕著に見られるものもあり器面に多少の凹凸がある。

土器そのものに残された痕跡としては、扇畑Ⅱ遺跡のＨⅡｃ６住出土の小型土器（坏形）が内面に油脂状の付着物があるとの指摘がある。また、宮沢遺跡のRA04住居跡出土の５点はすべて完形品であるが、他の事例をみても小型手づくね土器の欠損率は低いようである。

e．時　期

従来の二戸地方における土師器の編年を参考にすれば、小型手づくね土器は概ね奈良時代末～平安時代初頭：８世紀後半～９世紀初頭に属するものが多く、出現する時期がほぼ限定されるようである（註６）。ただし宮沢遺跡のRA04住居跡からは同時期に比定される遺物は出土していない。

f．まとめ

岩手県における古代の住居跡から出土した小型土器についてまとめると以下のようになる。

①小型土器が出土した住居跡の規模・形態・カマドの形態には一定の特徴をみいだすことはできず、小型土器の出土していない住居跡との違いは明瞭でない。住居内における出土位置も様々だが、宮沢遺跡同様に住居跡のカマド側半分の空間から出土している事例が２例(駒板･中曽根Ⅱ)ある。

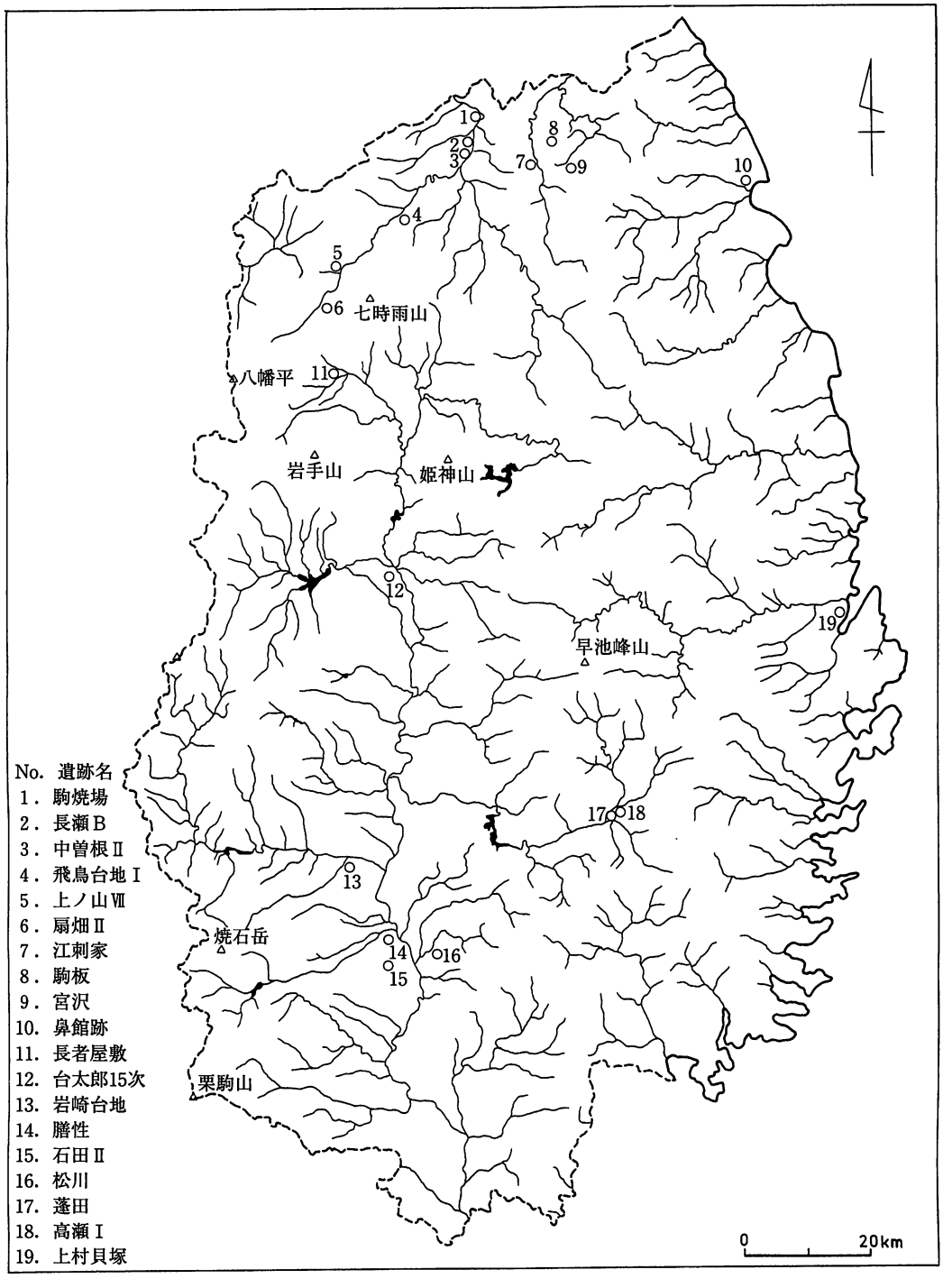
②１住居からの出土事例としては、宮沢遺跡のRA04住居跡５点が最も多い。また、従来出土した小型手づくね土器のなかでも宮沢遺跡のRA04住居跡出土の小型手づくね土器は小型の部類に属する。

③小型土器の器形には、甕・坏・壷・片口などがある。底部は平底風・丸底風・四足等がある。

ケズリ調整が入るものは、ロクロ使用の坏が伴出する住居跡から出土している傾向がある。その他にヘラナデ調整が入る小型手づくね土器が出土する住居跡は非ロクロの坏が伴出している。調整は簡略で、工具を使ったものでも全面にはっきりした調整は見られない。また、指でナデ調整していると思われるものもあり、鼻館跡、上村貝塚、岩崎台地から出土したものは指頭圧痕が残っている。概ね併存する通常の実用的な土器

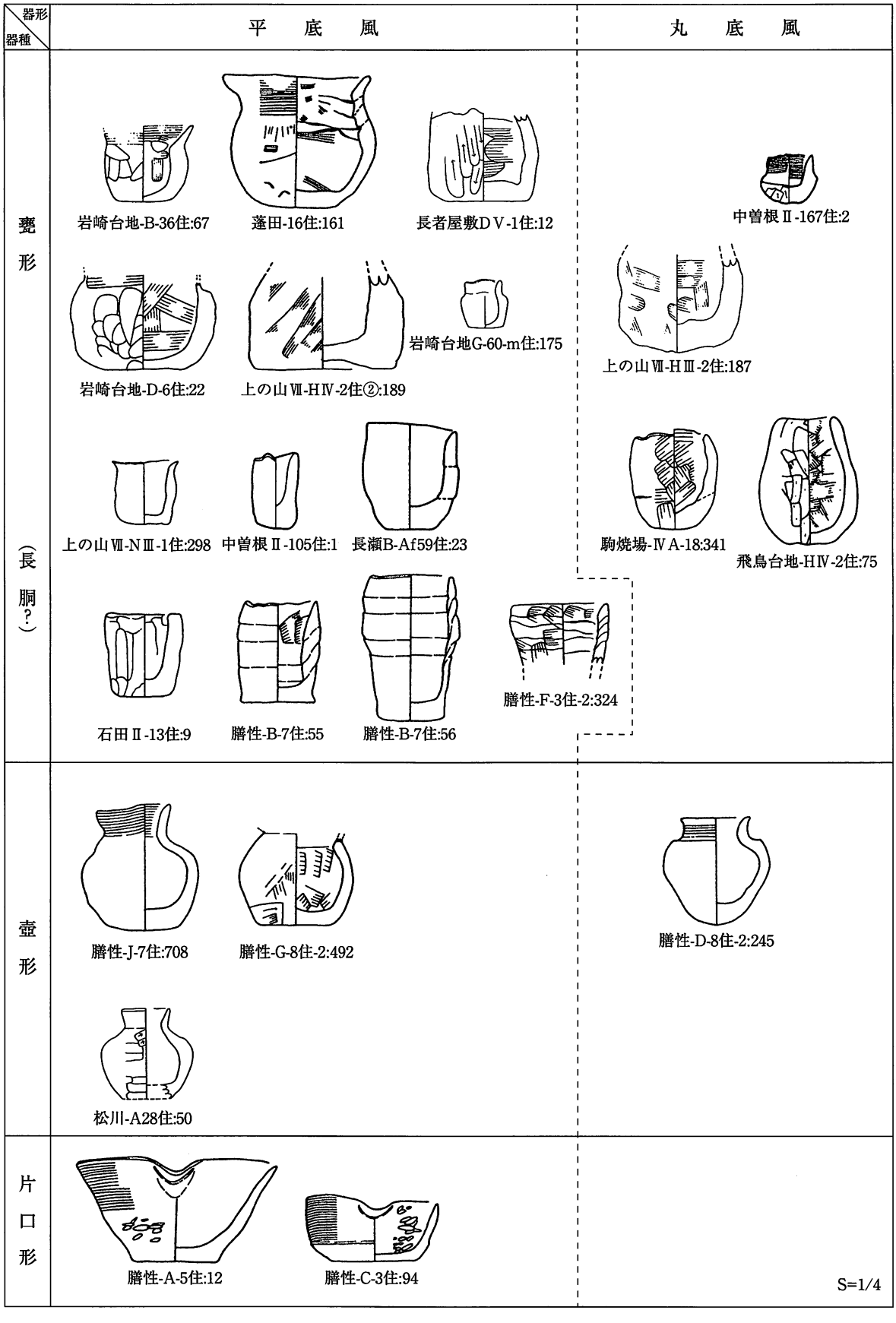
の器形・調整の流れを汲んで製作されたものであることを窺い知ることができる。

④小型手づくね土器が伴出する時期は、概ね奈良時代末～平安時代初頭(奈良〔II-2〕～平安時代〔III-1〕)(註7)であるが、それ以降の時期も10世紀代まで出土事例がある。宮沢遺跡RA04住居跡出土の小型手づくね土器も併行する時期が上限になると思われるが、住居の形態や出土遺物を比較して、他の住居跡と同様に9世紀後半代のものである可能性がある。



第40図　岩手県内の古代の小型土器出土遺跡の位置図

第41図　岩手県内出土の古代の小型土器集成①



第42図　岩手県内出土の古代の小型土器集成②

第10表　岩手県内出土の小型土器観察表（１）

市町村	遺跡名	小型土器が出土した住居跡について					小型土器について　計測値(cm)/調整				器種	成形、その他	時期（編年、報告書分類、実年代）
		遺構名：掲載No.	規模(m)	床面積(㎡)	煙道型式	出土地点	口径	器高	底径	調整（外／内）			
浄法寺町	飛鳥台地Ⅰ	ＪⅣ－３住：668	4.4×4.2	15.4　〃	掘り込み	床面･直上	2.1	2.2	丸底	-/-	甕	手づくね？	平安〔Ⅲ－１〕、平安Ⅱ群
〃	飛鳥台地Ⅰ	ＨⅢ－5住：613	3.3×3.1	9.1	掘り込み	床面･埋土	8.2	5.9	5.8	ナデ/ナデ	甕	手づくね	平安〔Ⅲ－１〕、平安Ⅱ群
〃	飛鳥台地Ⅰ	ＨⅣ－2住：75	4.7	－	掘り込み	埋土	3.4	5.6	2.0	ヘラケズリ/ナデ	甕	手づくね？	平安〔Ⅲ－１〕、平安Ⅱ群
二戸市	長瀬Ｂ	Ｂｇ50住：14	6.5×6.1	30.7	掘り貫き	埋土	6.3	2.7	丸底	指頭圧痕/指頭圧痕	坏	手づくね	奈良〔Ⅱ－２〕～、ロクロ不使用
〃	長瀬Ｂ	Ｂｇ50住：15	6.5×6.1	30.7	掘り貫き	埋土	5.1	2.0	丸底	指頭圧痕/指頭圧痕	坏	手づくね	奈良〔Ⅱ－２〕～、ロクロ不使用
〃	長瀬Ｂ	Ａｆ59住：23	6.3×5.9	32.4	刳り貫き	埋土	5.0	5.7	2.6	-/-	甕	輪積み痕あり	奈良〔Ⅱ－２〕～、ロクロ不使用
〃	長瀬Ｂ	Ｄｄ53住：42	5.7×5.0	19.2	掘り貫き	埋土	5.2	3.2	2.8	ハケメ/ハケメ?	甕	手づくね	ロクロ不使用
〃	長瀬Ｂ	Ｄｄ53住：43	5.7×5.0	19.2	掘り貫き	埋土	5.0	2.7	丸底	-/-	坏	手づくね	ロクロ不使用
〃	長瀬Ｂ	Ｄｄ53住：44	5.7×5.0	19.2	掘り貫き	床面	5.3	2.9	丸底	ナデ・ハケメ/-	坏	手づくね	奈良〔Ⅱ－2〕～平安〔Ⅲ－1〕､ロクロ不使用
〃	中曽根Ⅱ	8号址：1	3.6×3.8	12.5	掘り込み	埋土	6.9	4.0	丸底	ケズリ/ケズリ	甕	手づくね？	奈良〔Ⅱ－２〕～
〃	中曽根Ⅱ	43号址：5	3.8×3.2	12.6	刳り貫き	床上カマド左脇	6.2	3.5	4.2?	ヘラナデ/ヘラナデ	坏	手づくね？	奈良〔Ⅱ－２〕～
〃	中曽根Ⅱ	43号址：6	3.8×3.2	12.6	刳り貫き	カマド焚口	4.6	3.1	3.0?	ヘラナデ/ヘラナデ	坏	手づくね？	奈良〔Ⅱ－２〕～
〃	中曽根Ⅱ	60号址：3	5.4×5.3	26.6	掘り込み	カマド左側ソデ	5.8	4.2	3.3?	ケズリ	甕	手づくね？	奈良〔Ⅱ－２〕～
〃	中曽根Ⅱ	64号址：18	8.4	(65.0)	刳り貫き	床上	5.0	3.0	3.0?	-/-	坏	手づくね？	奈良〔Ⅱ－２〕～
〃	中曽根Ⅱ	105号址：1	4.0×3.8	14.1	刳り貫き	床上	2.5	4.0	1.6?	-/-	甕	手づくね？	奈良〔Ⅱ－２〕～
〃	中曽根Ⅱ	167号址：2	5.0×4.6	21.2	刳り貫き	埋土	3.0	2.5	丸底	ヨコナデ・ケズリ/ヨコナデ	甕	手づくね？	奈良〔Ⅱ－２〕～
〃	中曽根Ⅱ	191号址：6	3.3×3.3	10.9	刳り貫き	床上	4.7	2.3	丸底	指ナデ/指ナデ	坏	手づくね？	奈良〔Ⅱ－２〕～
〃	中曽根Ⅱ	191号址：7	3.3×3.3	10.9	刳り貫き	埋土	4.8	2.3	丸底	指ナデ/指ナデ	坏	手づくね？	奈良〔Ⅱ－２〕～
〃	駒焼場	ⅣＡ－18住：341	2.9×3.4	8.1	掘り込み？	床面	(3.6)	5.2	(2.6)	ナデ/ヨコナデ・ナデ	甕	輪積み痕あり	平安
九戸村	江刺家	ⅠⅡ－3住：3	2.4×3.0	5.6	刳り貫き？	床上	2.9	2.0	1.8	指ナデ/-	坏	手づくね？	平安、（１０ｃ後～１１ｃ）
軽米町	駒板	ⅣＤ39住：3	3.5×3.2	8.4	刳り貫き	竈付近の床面	6.0	3.0	丸底	-/-	坏	手づくね	奈良〔Ⅱ－２〕～平安〔Ⅲ－１〕（８ｃ中～後）
〃	駒板	ⅣＤ39住：1	3.5×3.2	8.4	刳り貫き	竈付近の床面	2.8	3.3	四足	ナデ/-	甕？	手づくね	奈良〔Ⅱ－２〕～平安〔Ⅲ－１〕（８ｃ中～後）
〃	駒板	ⅣＤ39住：2	3.5×3.2	8.4	刳り貫き	竈付近の床面	3.5	2.4	3.9	ヨコナデ/-	甕？	手づくね	奈良〔Ⅱ－２〕～平安〔Ⅲ－１〕（８ｃ中～後）
〃	駒板	ⅣＤ39住：3	3.5×3.2	8.4	刳り貫き	竈付近の床面	－	－	2.9	-	坏	手づくね	奈良〔Ⅱ－２〕～平安〔Ⅲ－１〕（８ｃ中～後）
〃	駒板	ⅣＥ37住：1	4.2×4.2	11.9	刳り貫き	床面	6.7	2.7	4.3	ヨコナデ/ヨコナデ	坏	手づくね	奈良〔Ⅱ－２〕～平安〔Ⅲ－１〕（８ｃ中～後）
〃	宮沢	ＲＡ04住：9	3.6×3.7	11.2	刳り貫き	床面出土Ｑ１	2.7	2.6	2.7	指ナデ/指ナデ	甕	手づくね	
〃	宮沢	ＲＡ04住：10	3.6×3.7	11.2	刳り貫き	床面出土Ｑ１	3.4	2.2	3.6	-/-	坏	手づくね	
〃	宮沢	ＲＡ04住：13	3.6×3.7	11.2	刳り貫き	床面出土Ｑ１	4.0	4.5	4.9	指ナデ→ミガキ/ナデ	甕	手づくね	
〃	宮沢	ＲＡ04住：11	3.6×3.7	11.2	刳り貫き	床面出土Ｑ１	3.0	2.9	3.2	指ナデ/指ナデ	坏	手づくね	
〃	宮沢	ＲＡ04住：12	3.6×3.7	11.2	刳り貫き	床面出土Ｑ１	3.5	3.0	4.5	指ナデ/指ナデ	坏	手づくね	
久慈市	鼻館跡	Ｅ４－ｈ住：93	3.8×3.9	14.9	掘り込み	床面	4.4	1.8	1.0	指頭圧痕	坏	手づくね	平安〔Ⅲ－１～２〕?、（第Ⅳ期１０ｃ前～後）
〃	鼻館跡	G3－m住：189	7.3×7.2	52.6	掘り込み	床面	8.2	3.7	丸底	ハケメ/ナデ	坏	手づくね	奈良〔Ⅱ－２〕～、Ⅱ（８ｃ前～中）
安代町	上の山Ⅶ	ＨⅢ－2住：187	5.6×5.4	27	掘り込み	Ｐ７埋土	－	(5.0)	丸底	ヘラナデ/ヘラナデ、指圧痕	甕？	手づくね	Ⅱａ（９ｃ後～１１ｃ前）
〃	上の山Ⅶ	ＨⅢ－2住：189	5.6×5.4	27.9	掘り込み	Ｐ７埋土	－	(7.5)	－	ヘラナデ/-、指圧痕	甕？	手づくね	Ⅱａ（９ｃ後～１１ｃ前）
〃	上の山Ⅶ	ＮⅢ－１住：298	3.5×3.4	11.0	掘り込み？	埋土	3.6	3.4	2.2	ナデ/ナデ	甕	手づくね	Ⅱｂ（９ｃ後～１１ｃ前）
〃	扇畑Ⅱ	ＨⅡｃ6住：186	8.3×7.8	48.2	掘り込み？	埋土	6.8	3.2	4.0	ナデ/ナデ	坏	手づくね、内面に油脂状の付着物	平安〔Ⅲ－１〕？（ロクロ使用伴出）
松尾村	長者屋敷	ＤＶ－１住：12	(4.6×4.1)	15.3	刳り貫き	床面	(5.0)	(4.6)	4.3	ヘラケズリ/ナデ	甕？	手づくね?、口縁部欠損	平安〔Ⅲ－１〕？
盛岡市	台太郎15次	ＲＡ078住：88	3.4×2.7	9.1	掘り込み？	不明	4.5	2.8	丸底	指ナデ	坏	手づくね	奈良〔Ⅱ－２〕～、Ⅱ（８ｃ後半）

第10表　岩手県内出土の小型土器観察表（２）

市町村	遺跡名	小型土器が出土した住居跡について					小型土器について　計測値(cm)/調整				器種	成形、その他	時期（編年、報告書分類、実年代）
		遺構名：掲載No.	規模(m)	床面積(㎡)	煙道型式	出土地点	口径	器高	底径	調整（外／内）			
水沢市	石田II	13号住：9	4.0×3.9	13.9	掘り込み？	埋土	4.0	4.2	3.2	ミガキ/ナデ	甕	非ロクロ	奈良〔II－2〕～、国分寺下層（8ｃ後半）
〃	石田II	13号住：10	4.0×3.9	13.9	掘り込み？	埋土	4.6	3.0	丸底	-/-	甕	非ロクロ	奈良〔II－2〕～、国分寺下層（8ｃ後半）
〃	石田II	2号住：2	7.0×6.8	43.6	掘り込み？	埋土	5.9	4.6	3.7	ヨコナデ/ヨコナデ	甕	非ロクロ	奈良〔II－2〕～、国分寺下層（8ｃ後半）
〃	膳性	A－5住：12	4.4	(－)	掘り込み	埋土	9.6	5.1	4.6	ヨコナデ・ミガキ/-	片口	非ロクロ	奈良（ダンナシ）、IIB（8ｃ）
〃	膳性	B－7住：55	6.0	(－)	掘り込み	床直	3.7	5.3	4.0	-/ナデ	甕	巻き上げ痕あり	奈良〔II－2〕～、IIB（8ｃ）
〃	膳性	B－7住：56	6.0	(－)	掘り込み	床直	4.4	7.7	3.6	-/-	甕	巻き上げ痕あり	奈良〔II－2〕～、IIB（8ｃ）
〃	膳性	C－3住－１：93	5.8×6.8	31.9	掘り込み？	床直	6.4	3.5	丸底	ヨコナデ・ハケメ・ナデ/ヨコナデ・ナデ	坏	非ロクロ	奈良、IIC（8ｃ前半）
〃	膳性	C－3住－１：94	5.8×6.8	31.9	掘り込み？	床直	7.0	3.6	4.6	ヨコナデ/内黒・ミガキ	片口	非ロクロ	奈良、IIC（8ｃ前半）
〃	膳性	C－3住－１：95	5.8×6.8	31.9	掘り込み？	床直	(9.0)	5.2	4.3	ハケメ→スリケシ/ヘラナデ	甕	非ロクロ	奈良、IIC（8ｃ前半）
〃	膳性	D－4住－１：210	6.4×7.3	37.6	掘り込み	埋土	(5.0)	3.6	2.6	ナデ/ナデ・ハケメ	甕	輪積み痕あり	奈良〔II－2〕～、IID（8ｃ前半）
〃	膳性	D－8住－2：245	8.2×8.1	62.4	不明	埋土	3.8	5.7	丸底	ヨコナデ/ミガキ	壺	非ロクロ	奈良、IIB（8ｃ）
〃	膳性	F－3住－2：323	7.2×7.0	47.6	掘り込み	床面	－	－	3.4	ナデ・ミガキ/ハケメ	甕？	※集成図には不掲載	奈良、IIA（7ｃ後半）
〃	膳性	F－3住－2：324	7.2×7.0	47.6	掘り込み	カマド	5.2	－	－	ヘラナデ/ヘラナデ	甕？	輪積み痕あり	奈良、IIA（7ｃ後半）
〃	膳性	F－5住－１：360	6.5×7.0	(41.6)	不明	埋土	6.4	3.2	丸底	-/内黒・ミガキ	坏	非ロクロ	奈良、IIA（7ｃ後半）
〃	膳性	G－8住－2：492	6.9×7.1	(44.2)	掘り込み	床直	－	5.0	3.8	ケズリ・ヘラナデ/ナデ	壺？	非ロクロ	奈良〔II－2〕～、IIA（7ｃ後半）
〃	膳性	I－5住：638	4.1×4.1	13.7	掘り込み	床直	6.9	2.7	丸底	ヨコナデ	坏	非ロクロ	奈良〔II－2〕～、IIC（8ｃ前半）
〃	膳性	J－7住：708	6.8×6.7	42.4	掘り込み	床直	4.0	6.6	3.8	ヨコナデ・ナデ	壺	非ロクロ	奈良〔II－2〕～、IIA（7ｃ後半）
江刺市	松川	A28住－1：49	8.0×7.5	56.9	掘り込み	床直１１	4.3	3.9	2.5	ヘラケズリ/ヘラナデ	甕	手づくね	奈良〔II－2〕～平安〔III－1〕？（平安初期）
〃	松川	A28住－1：50	8.0×7.5	56.9	掘り込み	床直６	2.3	(4.5)	(2.3)	ヘラケズリ/-	壺	手づくね	奈良〔II－2〕～平安〔III－1〕？（ロクロあり）
〃	松川	A28住－1：51	8.0×7.5	56.9	掘り込み	埋土	－	3.0	(1.4)	-	甕？	※集成図には不掲載	奈良〔II－2〕～平安〔III－1〕？
宮古市	上村貝塚	G－2住：25	5.0×4.3	21.5	不明	埋土	3.5	2.3	2.8	指頭圧痕	坏	手づくね?、ロクロ不使用の土師器甕共	奈良〔II－2〕～
北上市	岩崎台地	B－36住：67	4.1×4.0	15.9	掘り込み？	床面	5.2	4.1	3.0	ナデ・ミガキ/ナデ・ハケメ	甕	手づくね	奈良〔II－2〕～平安〔III－1〕？
〃	岩崎台地	D－6住居状：22	3.2	(4.7)	なし	埋土	(6.0)	(5.0)	4.2	ハケメ・指頭圧痕/ハケメ	甕？	手づくね	平安〔III－1～2〕？
〃	岩崎台地	G－60－m住：175	4.4×5.0	24.1	両方	埋土	2.4	3.8	2.8	-/-	甕？	手づくね	奈良〔II－2〕～平安〔III－1〕？
遠野市	高瀬I	I－1住：2	3.3×3.3	10.9	刳り貫き	埋土	7.4	4.7	5.7	ナデ・ケズリ//ナデ・ケズリ	甕	手づくね	平安〔III－1〕～〔III－2〕、（9ｃ中）
〃	蓬田	16号住：161	(6.0)	－	不明	床面	7.6	6.2	丸底	ヨコナデ・ヘラナデ/ヨコナデ・ヘラナデ	甕	巻き上げ痕有り	小刀出土

参照した文献は、P73の引用・参考文献を参照のこと。

3．総括

(1) 遺跡の位置と立地

宮沢遺跡は、雪谷川の支流である宮沢川右岸の南向きの緩斜面に立地する。標高280～290mで、遺跡の現況は山林・畑地である。遺跡の面積は約32,100㎡で、遺跡のほぼ中央には宮沢川に注ぐ沢が入っており、現在も近隣の人々が鯉を飼う池を設置するなどして利用している。

(2) 検出された遺構

検出された遺構は、弥生時代の竪穴住居跡３棟、古代の竪穴住居跡６棟、竪穴状遺構１棟、土坑20基、焼土遺構８基、近世以降の掘立柱建物跡１棟、溝跡１条、現代の炭窯跡３基である。

(3) 遺構の占地

遺構の占地は、弥生時代の竪穴住居跡は中央を走る沢の北側の緩斜面に立地する。古代の竪穴住居跡は沢を挟んで、北側の急斜面から緩斜面にかけての広い範囲に分布し、沢の北側において分布の密度が高い。土坑は散在し、まとまった配置はみられないが、焼土遺構は古代の住居跡と同様のまとまりをもっている。調査区南西側で検出された溝跡・掘立柱建物跡は、近世以降の可能性を指摘できるにすぎない。直接の関連を確認することはできなかったが、現在、遺跡の西側の低地部で宮沢川の氾濫原にある集落の起源を遡りうる遺構の可能性がある。調査区北側の南斜面で検出された炭窯は現代のものである。

(4) 出土遺物

縄文土器・弥生土器・土製品・石器・土師器・須恵器・金属製品、鉄滓などが出土している。総量は大コンテナ（30×40×30㎝）で５箱である。各種遺物の内容は以下のようであった。

a．縄文土器は前期・晩期のものが出土している。弥生土器は前期・後期のものが出土している。

b．石器は、剥片石器では石鏃･尖頭器･不定形石器､その他剥片類､礫石器は凹石、石皿が出土している。

c．土師器・須恵器は平安時代、９世紀後半を中心とするものが出土している。

d．金属製品は、鉄製品で刀子・鉋など古代のものが出土している。

e．銭貨は、寛永通寶などの銅銭で近世のものが出土している。

f．自然遺物には炭化材がある。弥生時代のRA03住居跡からはクリ、古代のRA05住居跡からはスギ・クリ・ススキの樹種が出土している。RA05住居跡は、焼失住居で炭化材は家屋の部材であろうと考えられる。現代のRZ02炭窯の窯底の下に除湿のため敷かれていた材はイタヤカエデである。

おわりに

今回の調査で、宮沢遺跡は弥生時代・古代・近世以降の複合遺跡であることが明らかになった。遺構・遺物とも量的にそれほど多くはないが、弥生時代の竪穴住居跡、古代の小型手づくね土器、現代の炭窯など、いくつかの貴重な資料を得ることができた。

謝辞

本報告をまとめるにあたり、多くの諸先生、職場の先輩、同僚に沢山の貴重なご指導をいただいた。また拙い指示にもかかわらず的確・迅速に作業を進めていただいた野外・室内の作業員の方々、ご協力いただいた地元宮沢の地権者の方々、便宜を図っていただいた二戸地方振興局土木部・軽米町教育委員会にお礼申し上げたい。

註

(1) 小田野1988によれば、前期（A期）の住居跡の特徴として、平面形は円形基調・炉跡は石囲炉・主柱４本配置、壁柱穴などの特徴があり、また集落は２～４棟で構成されていた可能性を指摘している。今回、確認された３棟の住居跡の特徴も概ね該当し、時期差はほとんど無いものと思われる。弥生土器の編年は小田野1987、須藤1983を参考にした。

(2) 土師器の編年は、八木1993・岩手県立博物館1982を参考にした。

(3) イタヤカエデは暖帯および温帯の山地に生えるカエデ科カエデ属の落葉高木。材はスキー・ラケットなどに使われる。（佐竹・原・亘理・富成1989）。

(4) 窯底の作り替えは、窯底が崩壊したときに行う、底上げである。炭焼きを繰り返し行なうと炭を置いた部分(窯底との接地面）が陥没して窯底が凸凹するらしく、凸凹がひどくなると窯の底上げを行ったようである。聞き取り調査より。

(5) 小型土器について比較的まとまって出土し、検討を加えている遺跡に膳性遺跡・松川遺跡がある。そこでは「器種に関係なく器高10cm以下のもの、大型の土器（実用の土器）と用途が違うのではないかと考えられる」ことから小型土器を分類・定義している。また「これら小型のものは、何か特別な使用方法があったのではないだろうか。」（膳性遺跡）と類推している。なお集成図で小型の甕としたものに、報告書で「鉢」としているものを含めた。

(6) 「古代」『岩手の土器』岩手県立博物館。

(7) 「古代」『岩手の土器』岩手県立博物館。

引用・参考文献

佐竹・原・亘理・富成編　1989『日本の野生植物　木本』平凡社。

岩手県木炭協会　1991『岩手窯の栞』。

岩手県立博物館　1982『岩手の土器』。

二戸市教育委員会　1981『中曽根II遺跡発掘調査報告書』。

遠野市教育委員会　1991『蓬田遺跡』岩手県遠野市埋蔵文化財調査報告書第３集。

小田野哲憲　1987「岩手の弥生式土器編年試論」『岩手県立博物館研究報告』第５号　岩手県博　。

小田野哲憲　1983「岩手県出土の「蓋形土器」について」『岩手県立博物館研究報告』第1号　岩手県博。

小田野哲憲　1988「岩手県における弥生時代の住居址」『紀要VIII』第５号　（財）岩埋文。

佐久間　豊　1989「東北･関東地方の奈良・平安時代の土器様相」『考古学論叢II』。

佐々木清文　1994「岩手県における製鉄遺跡(2)」『紀要XIV』(財)岩埋文。

須藤　隆　1983「東北地方の初期弥生土器―山王III層式―」『考古学雑誌』第68巻第３号。

遠藤勝博・相原康二　1983「岩手県南部（北上川中流域）における所謂第Ｉ型式の土師器・前期土師器の内容について」『考古学論叢Ｉ』。

八木光則　1993「古代斯波郡と爾薩体の土器様相」『第18回古代城柵官衛遺跡検討会資料集』。

（財）岩文県埋蔵文化財センター　1982『水沢市膳性遺跡』岩埋文第34集。

（財）岩文県埋蔵文化財センター　1982『二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書　二戸市　長瀬Ｂ遺跡』岩埋文第36集。

（財）岩手県埋蔵文化財センター　1982『扇畑II遺跡発掘調査報告書』岩埋文第39集。

（財）岩手県埋蔵文化財センター　1983『上の山VII遺跡発掘調査報告書』岩埋文第60集。

（財）岩手県埋蔵文化財センター　1984『江刺家遺跡発掘調査報告書』岩埋文第70集。

（財）岩手県埋蔵文化財センター　1984『松尾村長者屋敷遺跡発掘調査報告書』岩埋文第77集。

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1986『駒板遺跡発掘調査報告書』岩埋文第98集。

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1988『飛鳥台地Ｉ遺跡発掘調査報告書』岩埋文第120集。

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1988『石田II・寺領・西光田Ｉ遺跡発掘調査報告書』岩埋文第130集。

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1989『駒焼場遺跡発掘調査報告書』岩埋文第133集。

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1990『松川遺跡発掘調査報告書』岩埋文第143集。

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1991『高瀬Ｉ遺跡発掘調査報告書』岩埋文第155集。

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1991『上村貝塚発掘調査報告書』岩埋文第158集。

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1992『鼻館跡発掘調査報告書』岩埋文第171集。

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1992『岩崎台地遺跡群発掘調査報告書』岩埋文第176集。

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1999『台太郎遺跡第15次発掘調査報告書』岩埋文第309集。

Ⅶ. 分析・鑑定

宮沢遺跡出土火山灰の分析鑑定

株式会社　古環境研究所

1．はじめに

岩手県域に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、岩手火山、秋田駒ケ岳火山、十和田火山など東北地方北部に分布する火山のほか、遠く北海道、中部、中国、九州、さらには、中国北朝鮮国境などに位置する火山に由来するテフラ(火山砕屑物，いわゆる火山灰)が数多く認められる(たとえば，早田・八木，1991など)。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、遺跡発掘調査の際に認められたテフラについて、発掘調査担当者により採取された試料（ＲＡ05竪穴住居跡カマド右・ＲＤ01土坑－２層）を対象に火山ガラス比分析、重鉱物組成分析(以上を合わせてテフラ組成分析と呼ぶ)、屈折率測定を行って、示標テフラとの同定を行うことになった。

2．分析試料

テフラ分析の対象となった試料は、軽米町宮沢遺跡において、発掘調査担当者により採取された合計２試料である。資料１：RA05竪穴住居跡カマド右、資料２：RD0１土坑－２層。

3．分析・測定方法

(1) テフラ組成分析(火山ガラス比・重鉱物組成分析)

テフラ組成分析の手順は、次の通りである。

1) 超音波洗浄により泥分を除去。
2) 80℃で恒温乾燥。
3) 分析篩により、１/４－１/８㎜の粒子を篩別。
4) 偏光顕微鏡下で250粒子を観察し、火山ガラスの形態色調別組成を求める(火山ガラス比分析)。
5) 光顕微鏡下で重鉱物250粒子を観察し、重鉱物組成を求める(重鉱物組成分析)。

(2) 屈折率測定

屈折率の測定は、温度一定型屈折率測定法(新井，1972，1993)による。

4．分析結果

宮沢遺跡におけるテフラ組成ダイヤグラムを図1に、火山ガラス比分析と重鉱物組成分析の結果を表1および表2に示す。RA05竪穴住居跡カマド右の資料に含まれる火山ガラスは少量(1.6%)で、軽石型(繊維束状，スポンジ状)からなる。色調としては、無色透明のほか、淡褐色、淡灰色、淡緑色などの火山ガラスが認められる。重鉱物としては、量の多い順に磁鉄鉱(41.6%)、斜方輝石(37.2%)、単斜輝石(20.8%)などが含まれている。RD01土坑－2層の資料に含まれる火山ガラスの割合は50.4%で、量の多い順に軽石型(繊維束状，スポンジ状：36%)、中間型(11.6%)、バブル型(平板状：2.8%)からなる。色調としては、無色透明のほか、淡褐色、淡灰色、淡緑色などの火山ガラスが認められる。重鉱物としては、量の多い順に斜方輝石(49.6%)、磁鉄鉱(35.6%)、単斜輝石(14%)などが含まれている。

屈折率測定の結果を表3に示す。RA05カマド右の資料に含まれる火山ガラス(n)と斜方輝石(γ) の屈折率は、各々1.502－1.506と1.706－1.709である。またRD01－2層の資料に含まれる火山ガラス(n)と斜方輝石(γ)屈折率は、各々1.498－1.506と1.706－1.708である。以上のことから、これらの試料には、To－aに由来するテフラ粒子が含まれている可能性が高いと考えられる。とくに後者の純度が高い。

なお、本試料に含まれるTo－a起源の火山ガラスの屈折率は、町田ほか(1981)や町田・新井(1992)などのテフラ・カタログに記載されているTo－aのそれより高い。これは、カタログに値が載せられている火山ガラスが給源である十和田火山近傍で採取されたもので、十分に水和が行われていない分厚い火山ガラスが多く含まれているためと考えられる。実際、十和田火山から遠い岩手県南部や、仙台市周辺さらに福島市周辺で検出されたTo－aに含まれる火山ガラスの屈折率については、今回の値と同じような値が得られる(古環境研究所, 未公表資料)。

5．まとめ

岩手県の発掘調査において認められたテフラ試料について、火山ガラス比分析、重鉱物組成分析(以上, テフラ組成分析)と屈折率測定を行った。その結果、十和田ａ火山灰(To－a, 915AD)のほか、十和田中掫テフラ(To－cu, 5,500年前)＊1や白頭山苫小牧火山灰(B－Tm, 800～900年前)＊2に由来する可能性の高いテフラ粒子が検出された。なおテフラが一時堆積層として認められたか否かについては、現地において土層断面を観察できなかったことから言及できない。

＊１　放射性炭素(^{14}C)年代.

＊２　B－Tmの噴出年代については、923－924年(町田・福沢, 1996)、937年(池田ほか, 1997)、944－947年(早川・小川, 1998)などの説がある。

文献

新井房夫(1972)　斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定－テフロクロノロジーの基礎的研究. 第四紀研究, １１, p. 254－269.

新井房夫(1993)　温度一定型屈折率測定法. 日本第四紀学会編「第四紀試料分析法－研究対象別分析法」, p. 138－148.

早川由紀夫(1983)　十和田火山中掫テフラ層の分布, 粒度組成, 年代. 火山, 28, p. 263－273.

早川由紀夫・小山真人(1998)　日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日. 火山, 第２集, 43, p. 403－407

池田まゆみ・福沢仁之・岡村　真・松岡裕美(1997)　青森県小川原湖と十三湖における過去2300年間の環境変動と地震津波. 平成８年度文部省科研費研究成果報告書「汽水湖堆積物を用いた過去2000年間の気候・海水準・降砂変動の解明」(研究代表者　福沢仁之)p. 124－159.

町田　洋・新井房夫(1992)　火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276p.

町田　洋・新井房夫・森脇　広(1981)　日本海を渡ってきたテフラ. 科学, 51, p. 562－569.

町田　洋・福沢仁之(1996)　湖沼堆積物からみた10世紀白頭山大噴火の発生年代. 日本第四紀学会講演要旨集, no. 26, p. 80－81.

大沼昭二・中川久夫・七崎　修・松山　力・米倉信之(1966)　馬渕川中・下流沿岸の段丘と火山灰. 第四紀研究, 5, p. 29－35.

早田　勉・八木浩司(1991)　東北地方の第四紀テフラ研究. 第四紀研究, 30, p. 369－378.

表１　宮沢遺跡における火山ガラス比分析結果

試料・採取地点	bw	md	pm	その他	合計
RA05　カマド右	0	0	4	246	250
RD01　２層	7	29	90	124	250

数字は粒子数. bw:バブル型，md:中間型，pm:軽石型.

表２　宮沢遺跡における重鉱物組成分析結果

試料・採取地点	ol	opx	cpx	ho	bi	mt	その他	合計
RA05　カマド右	0	93	52	0	0	104	1	250
RD01　２層	0	124	35	0	0	89	2	250

数字は粒子数. ol:カンラン石，opx:斜方輝石，cpx:単斜輝石，ho:角閃石，bi:黒雲母，mt:磁鉄鉱.

表３　宮沢遺跡における屈折率測定結果

試料・採取地点	火山ガラス(n)	斜方輝石(γ)
RA05　カマド右	1.502-1.506	1.706-1.709
RD01　２層	1.498-1.506	1.706-1.708

屈折率測定は，温度一定型屈折率測定法（新井，1792，1993）による.

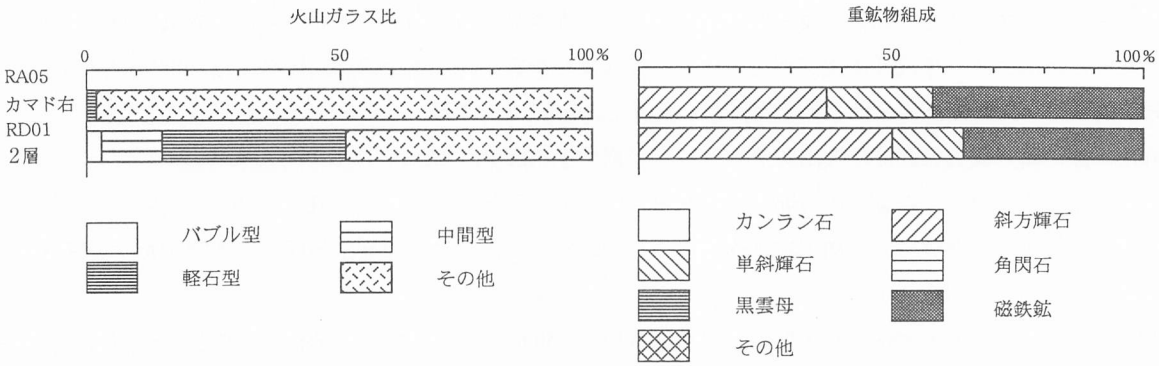


図１　宮沢遺跡におけるテフラ組成ダイヤグラム

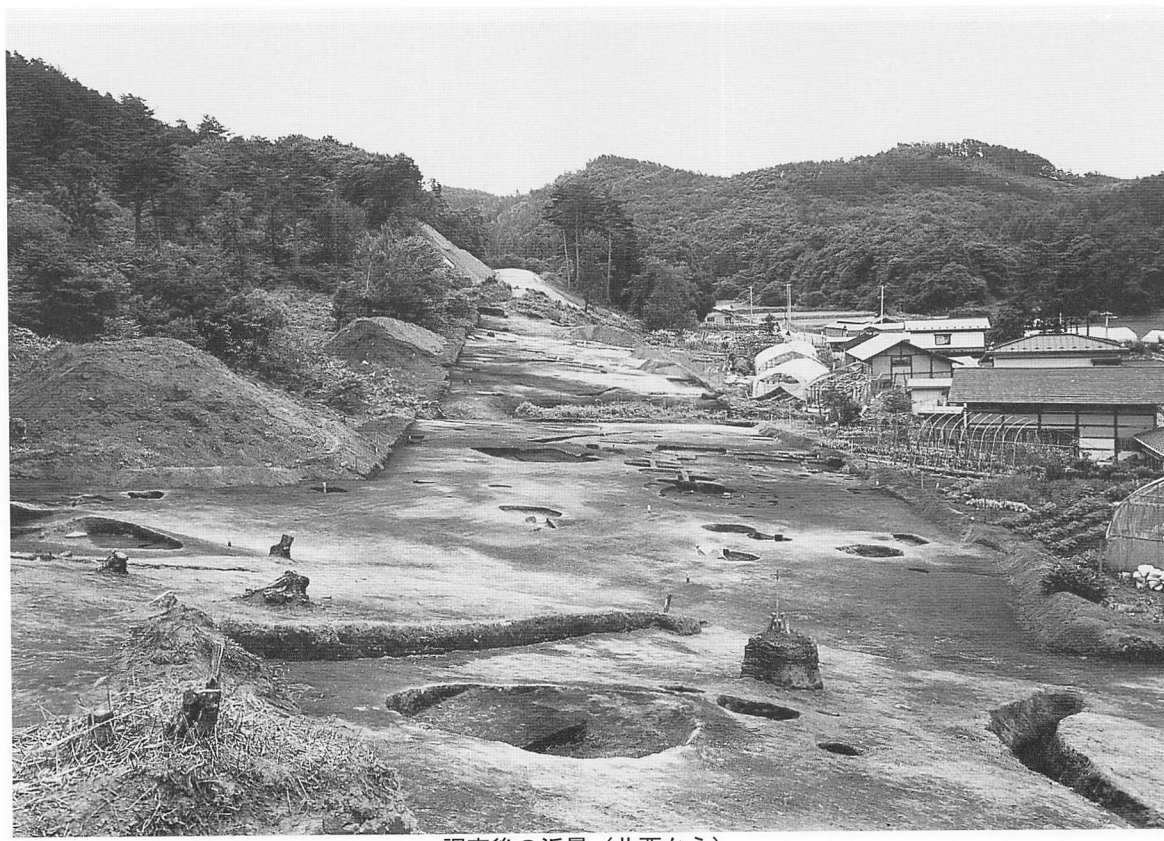
写　真　図　版

調査区遠景（北西から）

調査区全景（南西から）

写真図版１　調査区全景

調査前の近景（北西から）



調査後の近景（北西から）

写真図版２　調査区近景

10Ｆグリッド基本土層①

10Ｑグリッド基本土層②

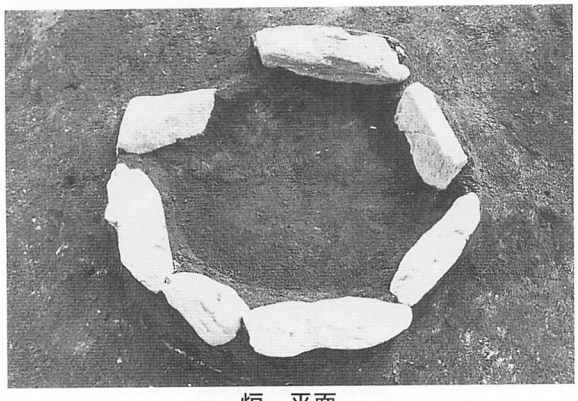
７Ｒグリッド基本土層③

基本土層観察地点

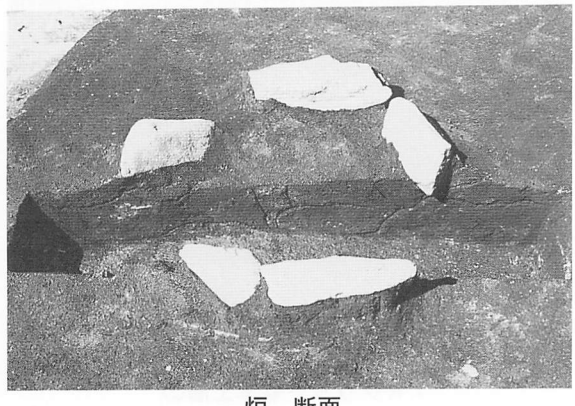
写真図版３　基本土層

ＲＡ01竪穴住居跡　平面

ＲＡ01竪穴住居跡　断面



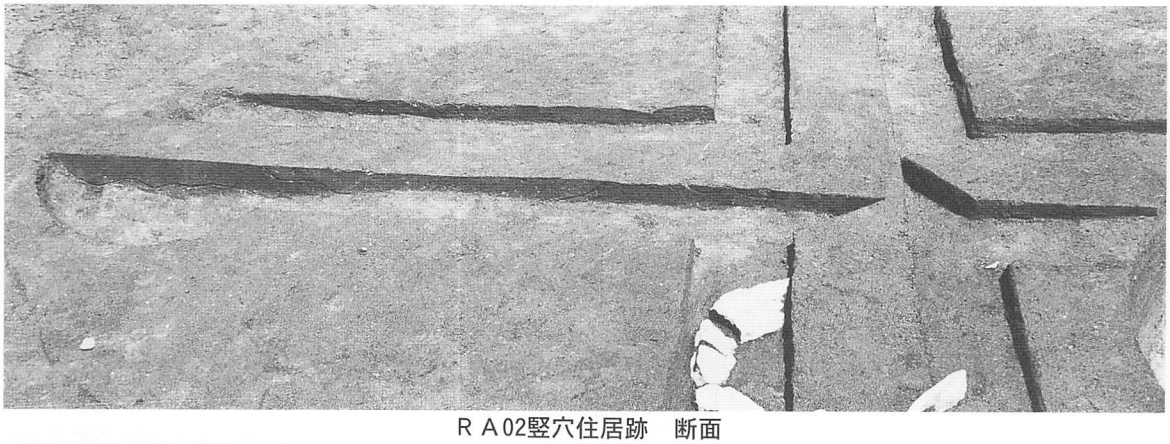
炉　平面



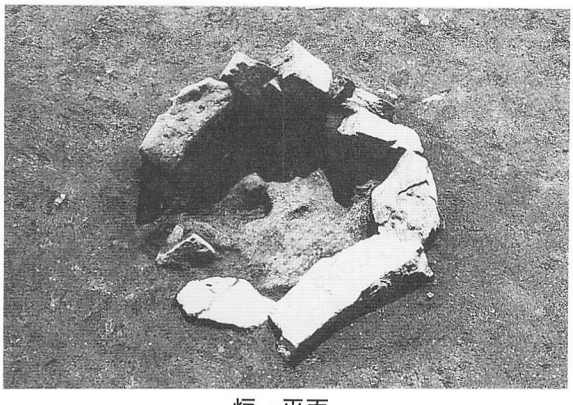
炉　断面

写真図版４　ＲＡ01竪穴住居跡

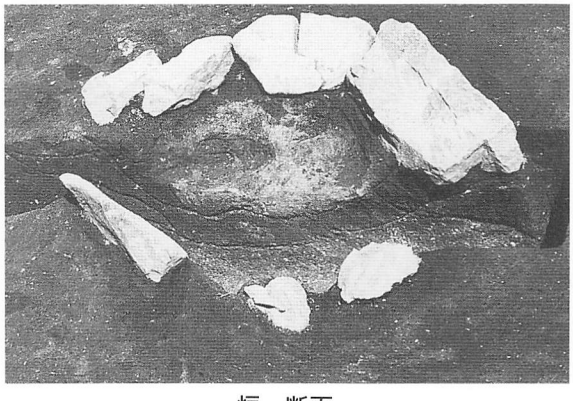
ＲＡ02竪穴住居跡　平面



ＲＡ02竪穴住居跡　断面



炉　平面

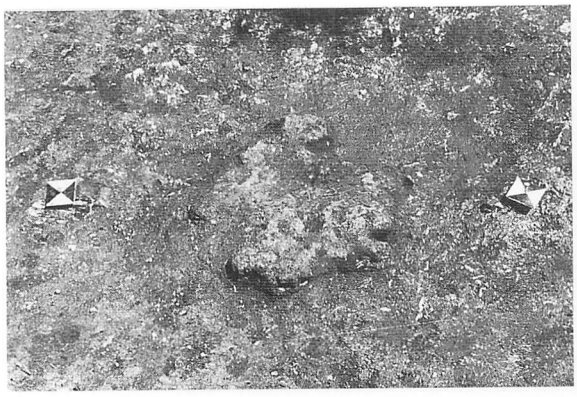


炉　断面

写真図版５　ＲＡ02竪穴住居跡

ＲＡ03竪穴住居跡　平面

ＲＡ03竪穴住居跡　断面

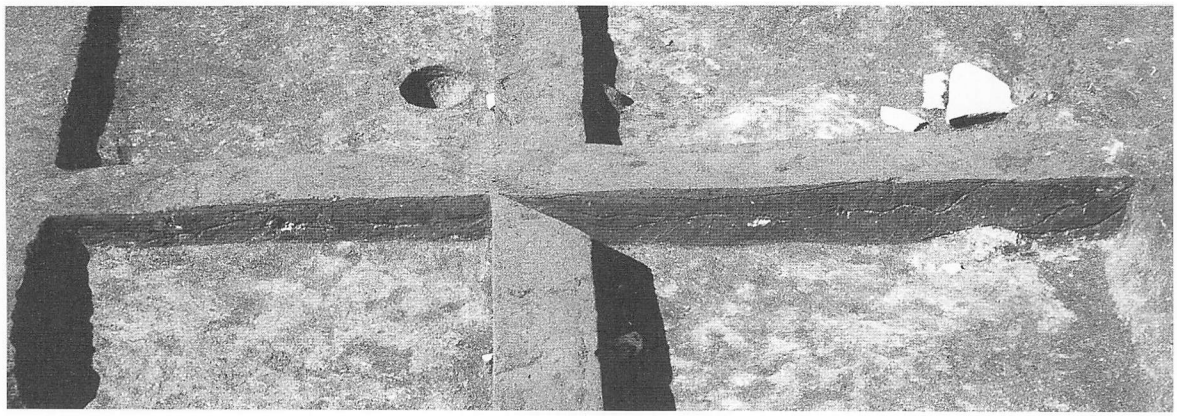


炉　平面

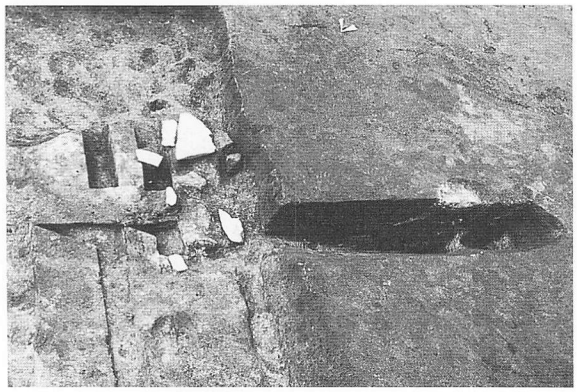
炉　断面

写真図版６　ＲＡ03竪穴住居跡

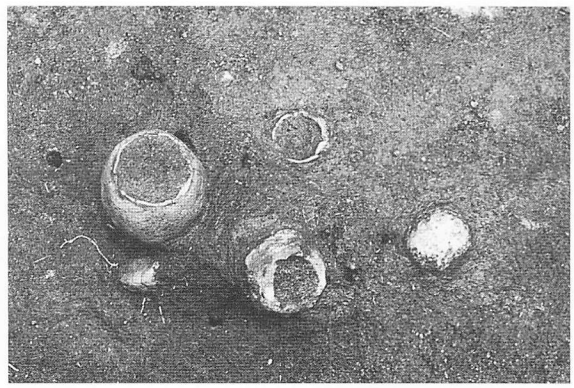
ＲＡ04竪穴住居跡　平面



ＲＡ04竪穴住居跡　断面



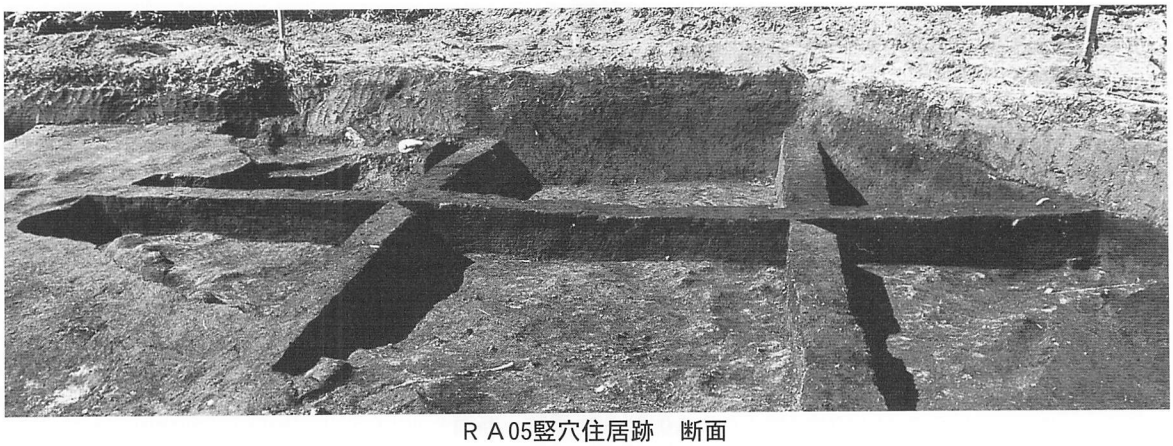
カマド燃焼部・煙道部　断面



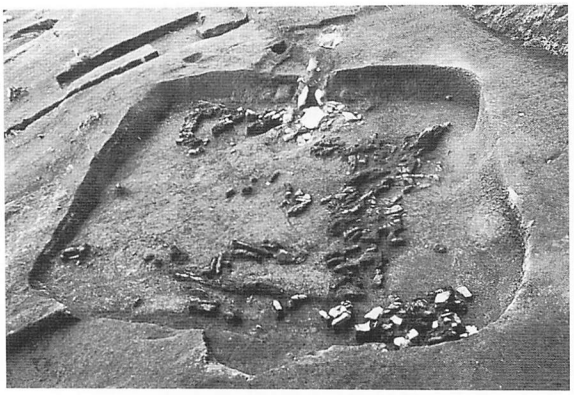
遺物（9～13）出土状況

写真図版７　ＲＡ04竪穴住居跡

ＲＡ05竪穴住居跡　平面



ＲＡ05竪穴住居跡　断面



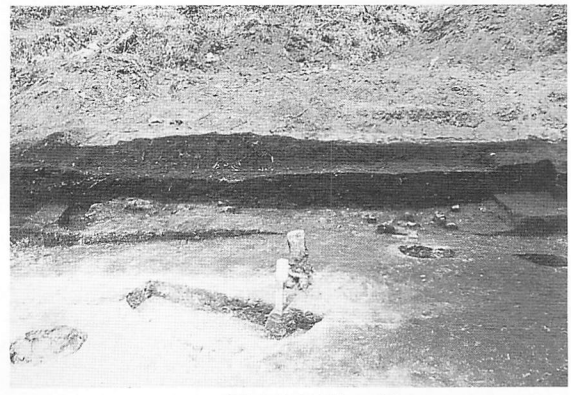
炭化材出土状況

カマド袖部・燃焼部　断面

写真図版８　ＲＡ05竪穴住居跡

ＲＡ06竪穴住居跡　平面

ＲＡ06カマド燃焼部・煙道部　断面



ＲＡ07竪穴住居跡　断面

ＲＡ07竪穴住居跡　平面

写真図版９　ＲＡ06･07竪穴住居跡

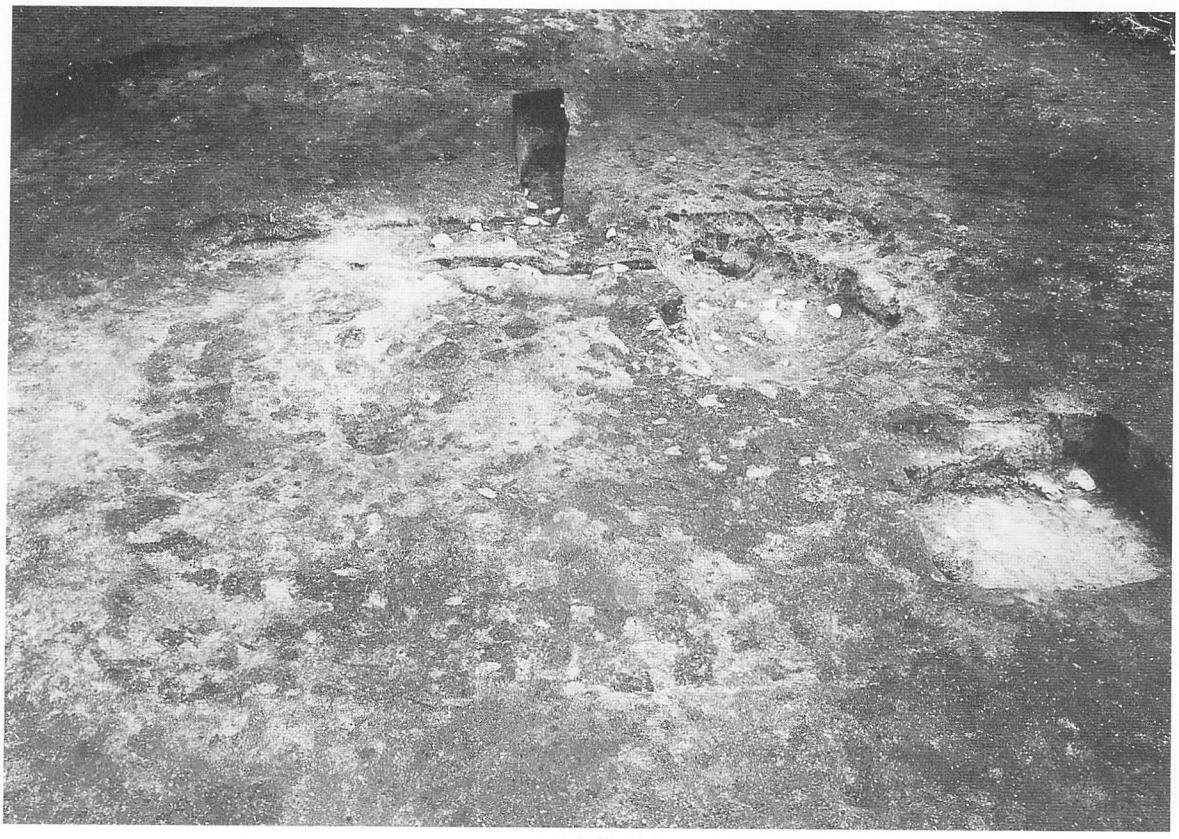
ＲＡ08竪穴住居跡　平面

ＲＡ08竪穴住居跡　断面

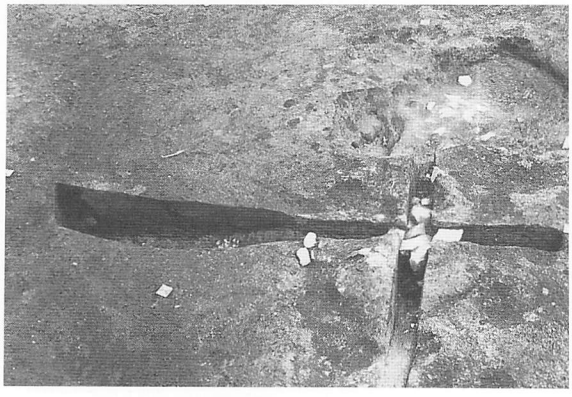
住居跡の南西側　平面

住居跡の南西側　断面

写真図版10　ＲＡ08竪穴住居跡



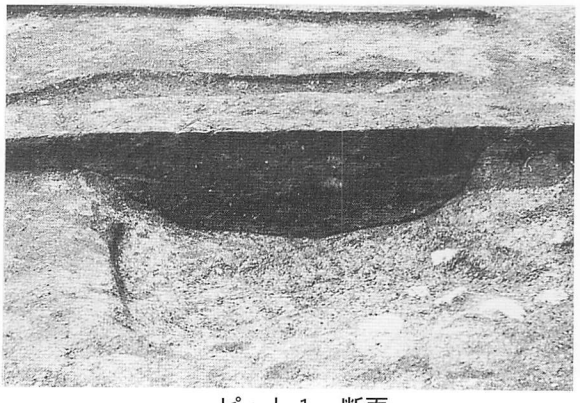
ＲＡ09竪穴住居跡　平面



カマド煙道部・燃焼部　断面

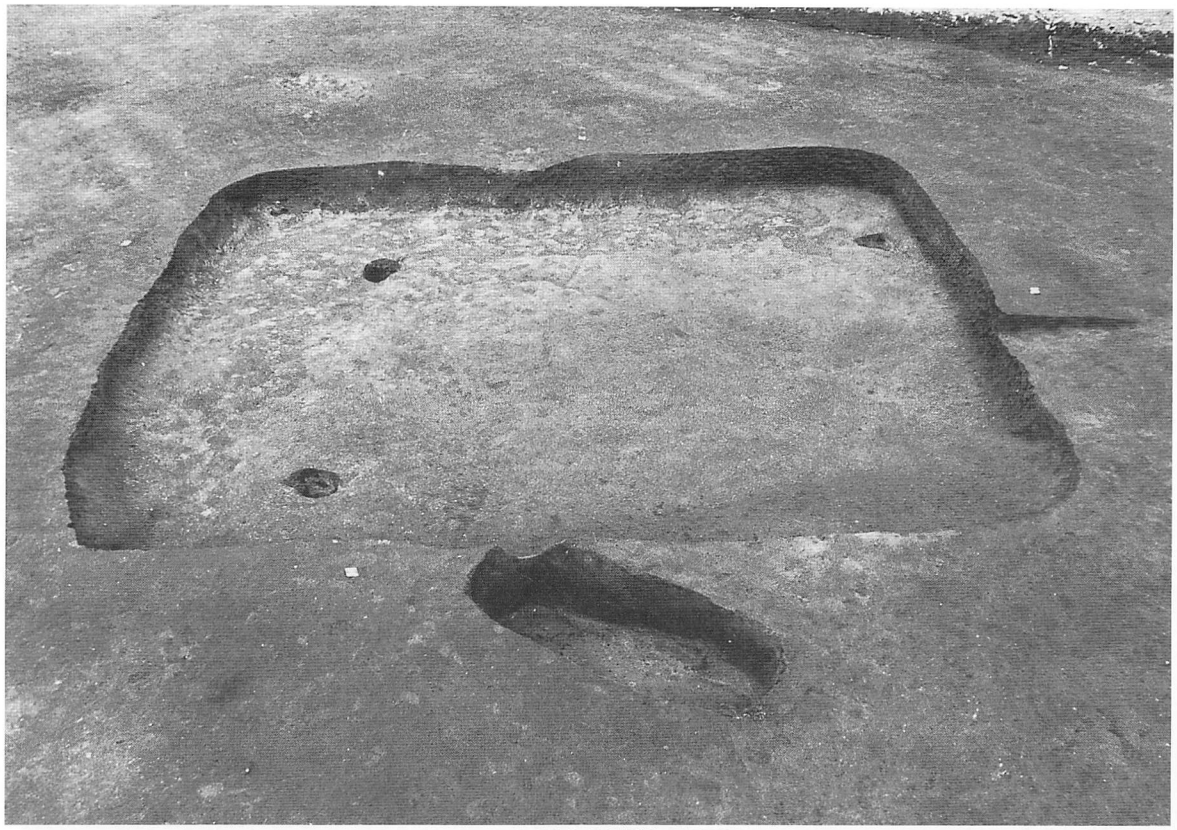
カマド袖部・燃焼部　断面

ピット１　平面

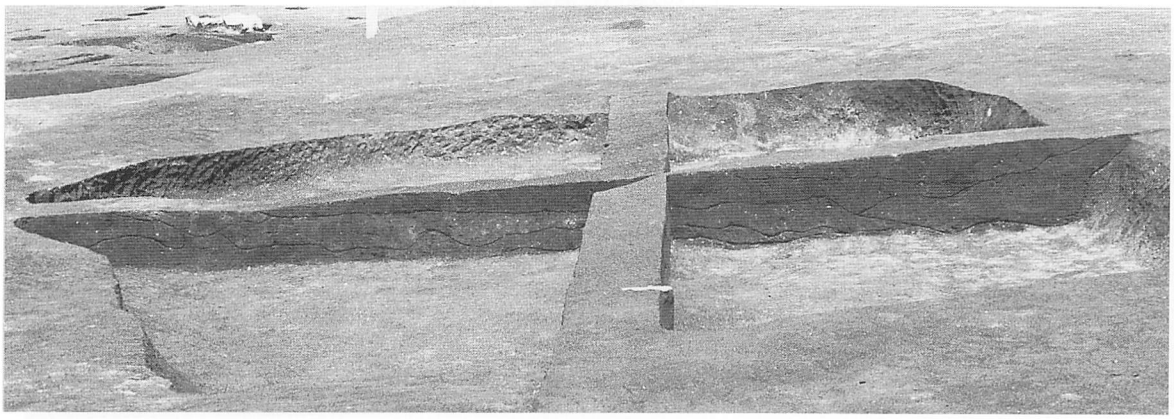


ピット１　断面

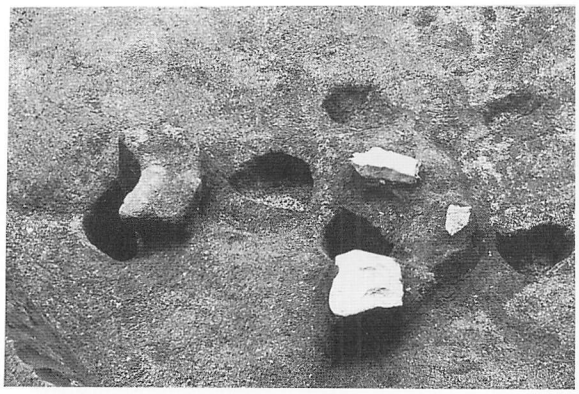
写真図版11　ＲＡ09竪穴住居跡



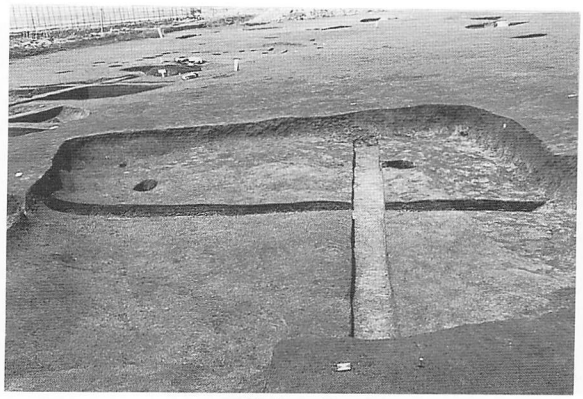
ＲＥ01竪穴状遺構　平面



ＲＥ01竪穴状遺構　断面

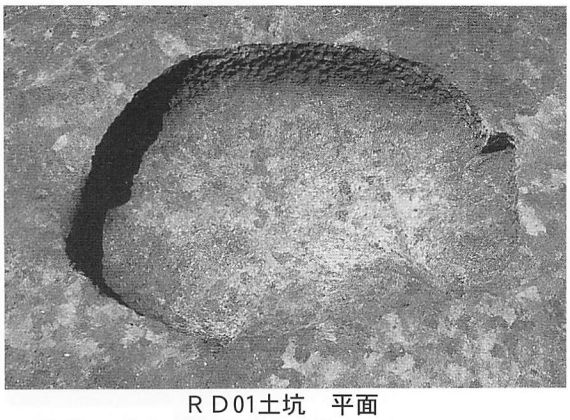


粘土出土状況

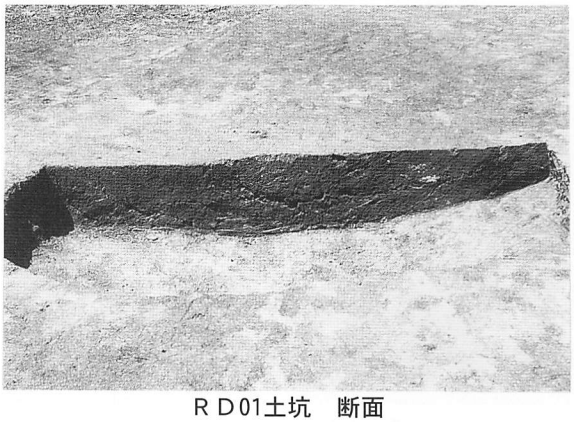


貼床　断面

写真図版12　ＲＥ01竪穴状遺構

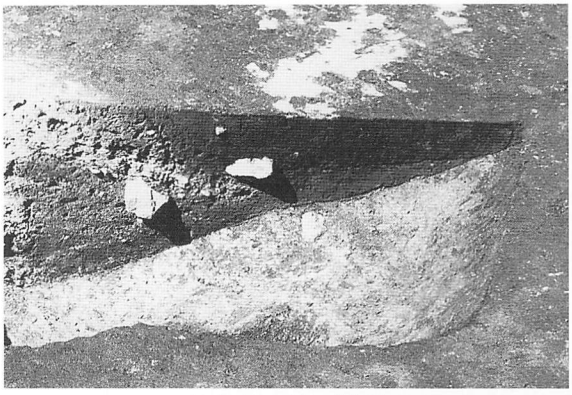


ＲＤ01土坑　平面

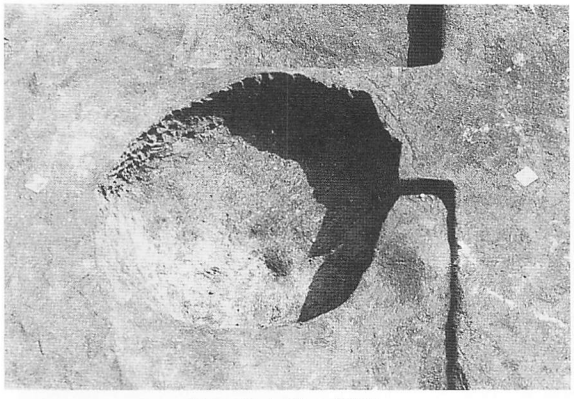


ＲＤ01土坑　断面

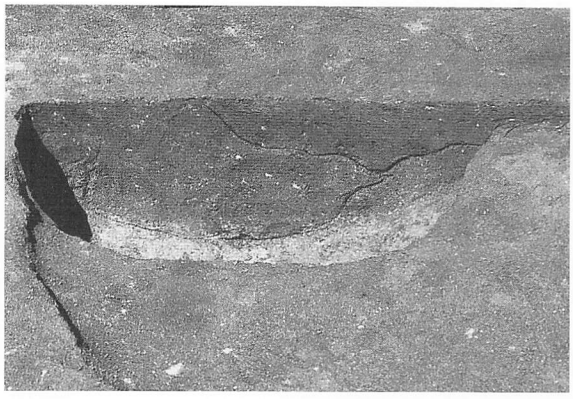
ＲＤ02土坑　平面



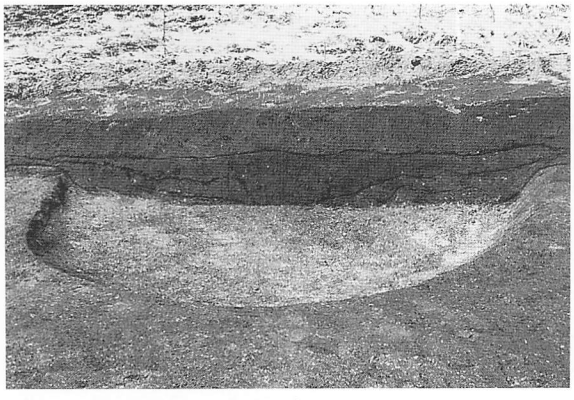
ＲＤ02土坑　断面



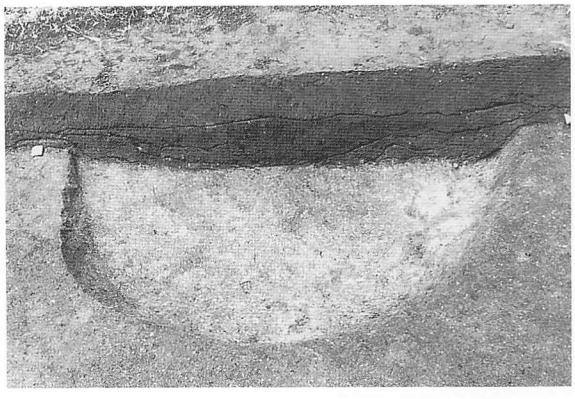
ＲＤ03土坑　平面



ＲＤ03土坑　断面

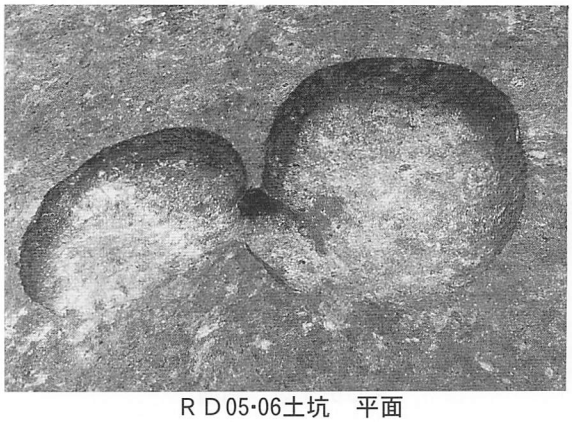


ＲＤ04土坑　平面



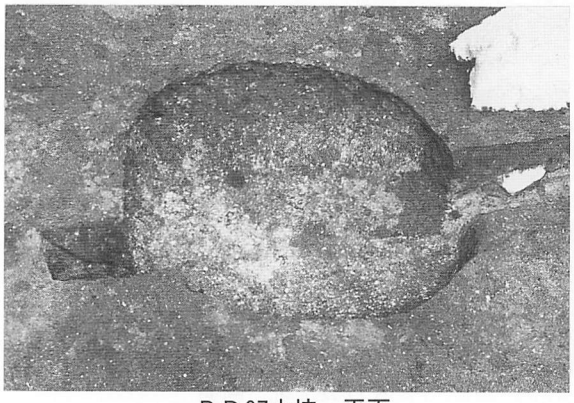
ＲＤ04土坑　断面

写真図版13　ＲＤ01～04土坑

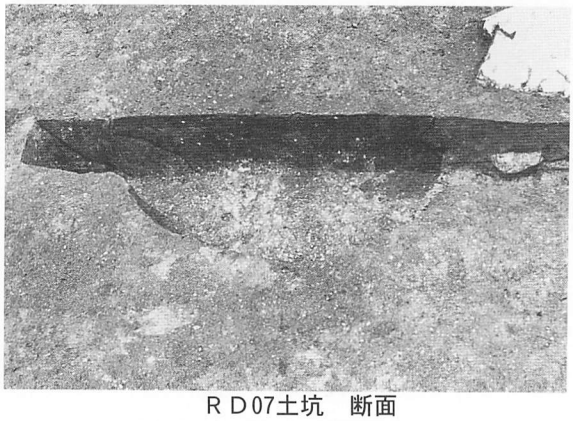


ＲＤ05･06土坑　平面

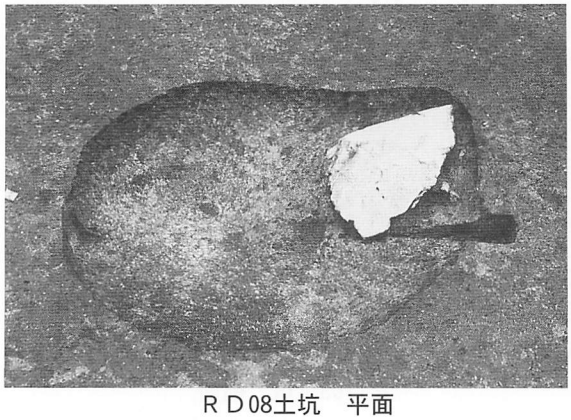
ＲＤ05･06土坑　断面



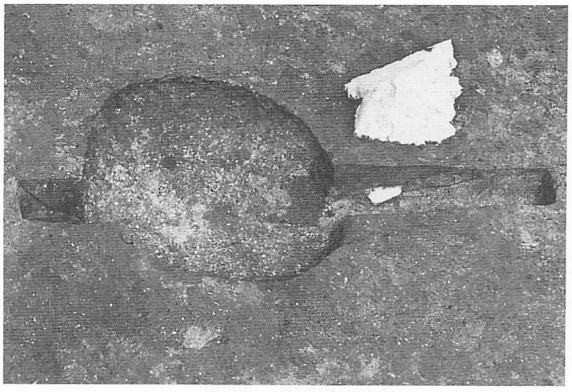
ＲＤ07土坑　平面



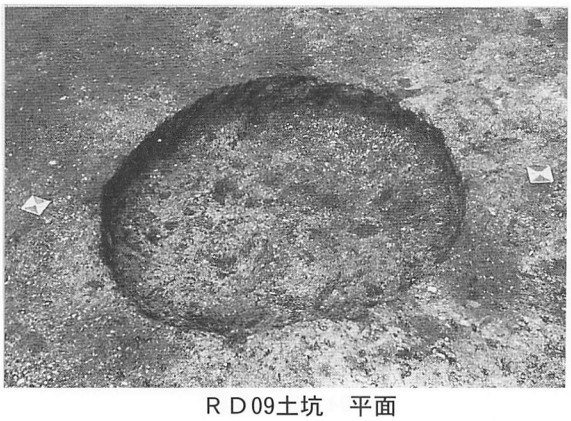
ＲＤ07土坑　断面



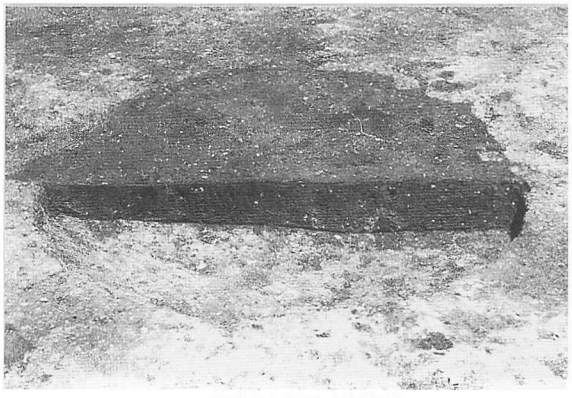
ＲＤ08土坑　平面



ＲＤ08土坑　断面

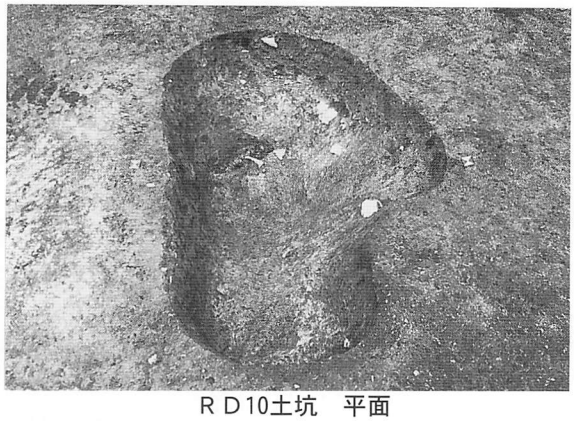


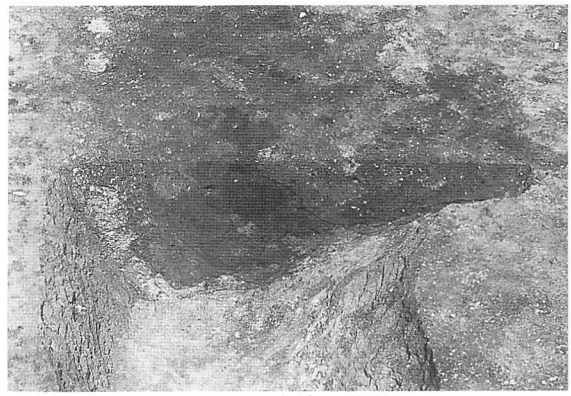
ＲＤ09土坑　平面

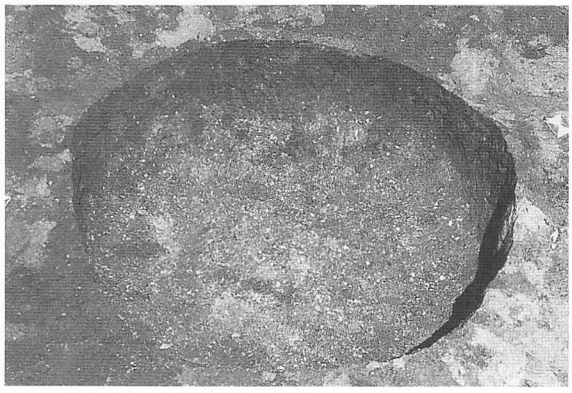


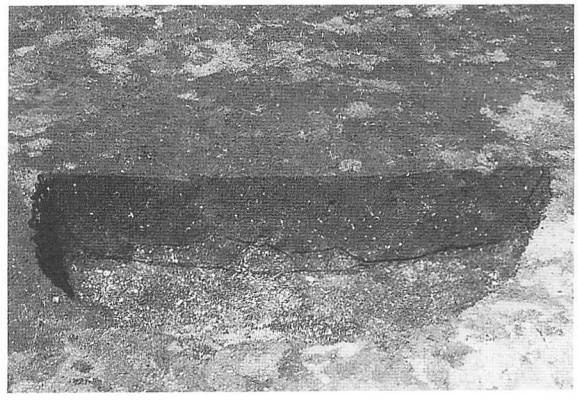
ＲＤ09土坑　断面

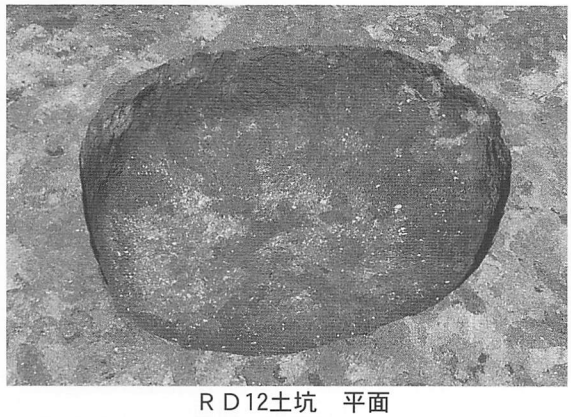
写真図版14　ＲＤ05～09土坑

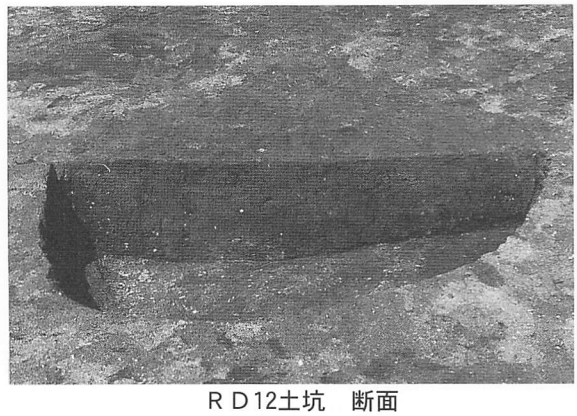

ＲＤ10土坑　平面


ＲＤ10土坑　断面


ＲＤ11土坑　平面


ＲＤ11土坑　断面

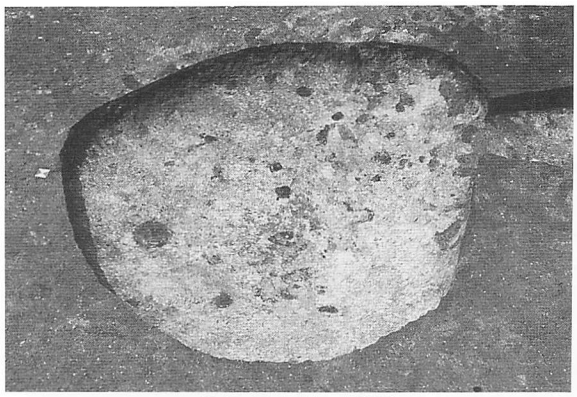

ＲＤ12土坑　平面


ＲＤ12土坑　断面

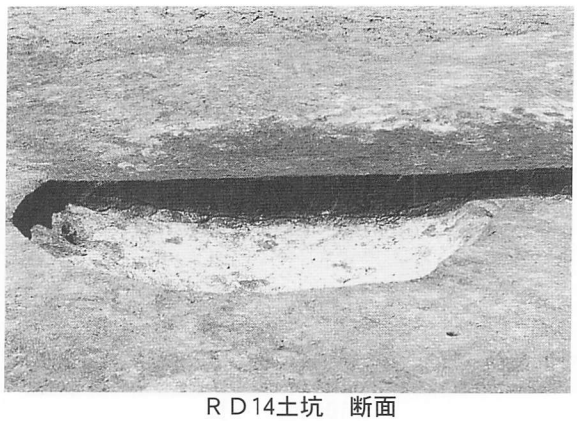
ＲＤ13土坑　平面

ＲＤ13土坑　断面

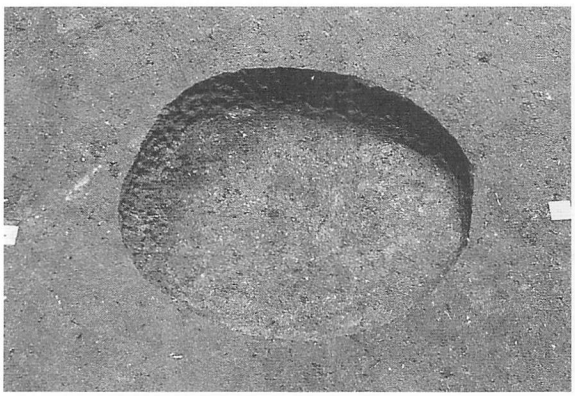
写真図版15　ＲＤ10～13土坑



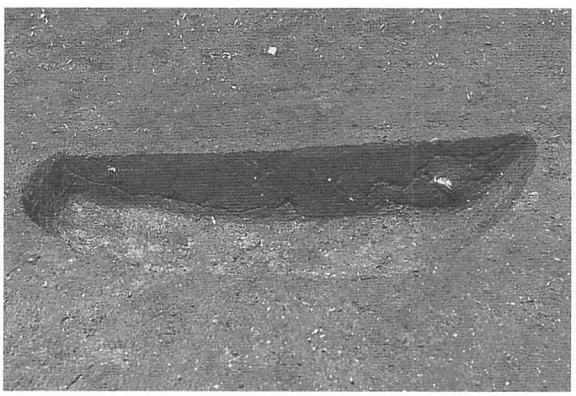
ＲＤ14土坑　平面



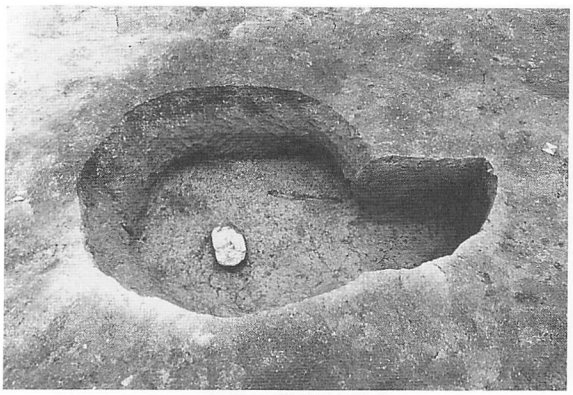
ＲＤ14土坑　断面



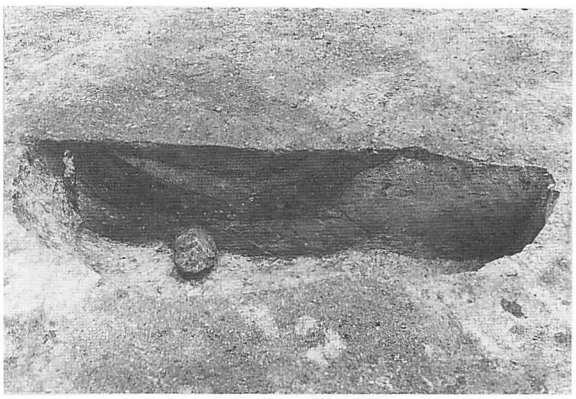
ＲＤ15土坑　平面



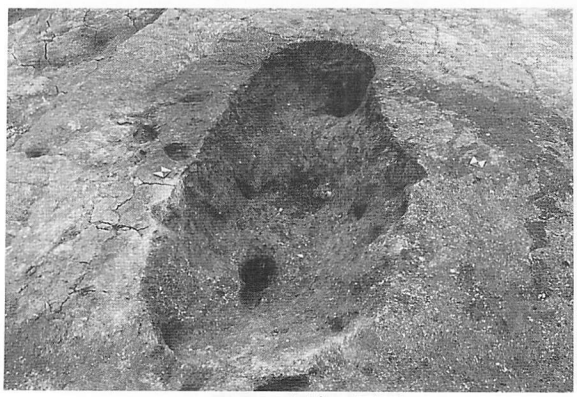
ＲＤ15土坑　断面



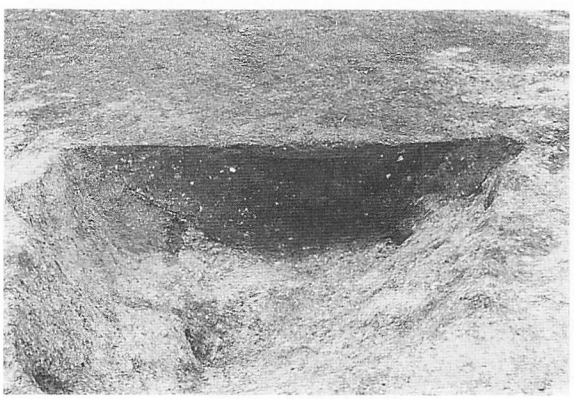
ＲＤ16土坑　平面



ＲＤ16土坑　断面

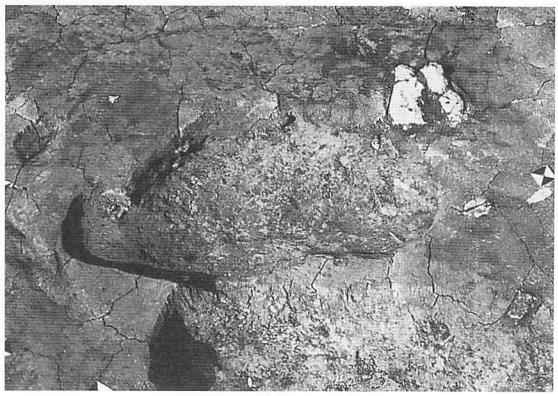


ＲＤ17土坑　平面

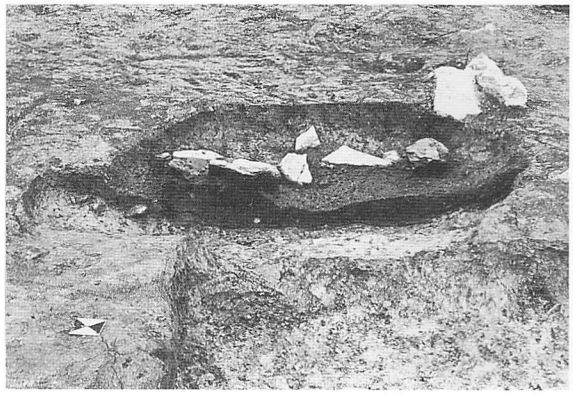


ＲＤ17土坑　断面

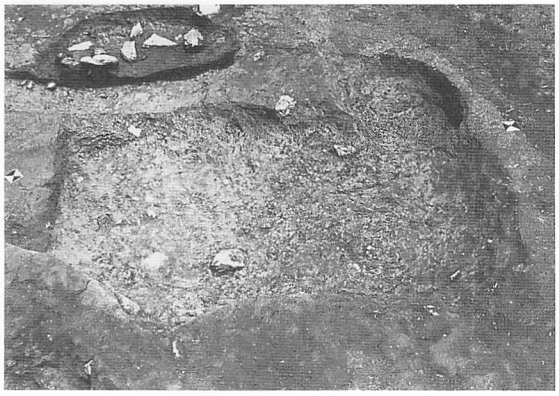
写真図版16　ＲＤ14～17土坑



ＲＤ18土坑　平面

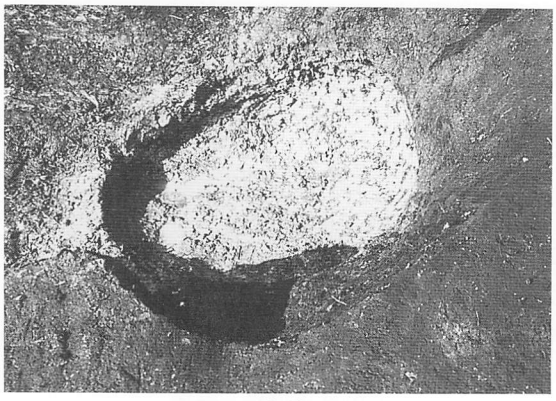


ＲＤ18土坑　断面

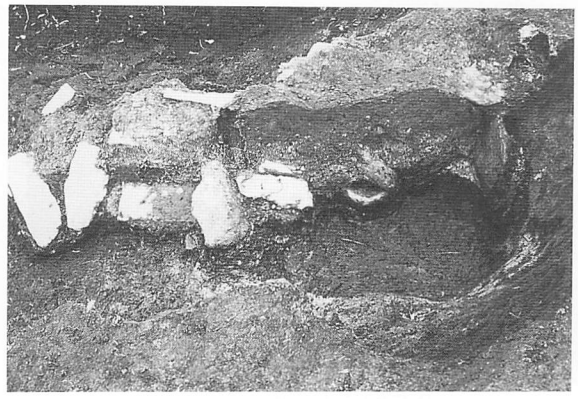


ＲＤ19土坑　平面

ＲＤ19土坑　断面



ＲＤ20土坑　平面

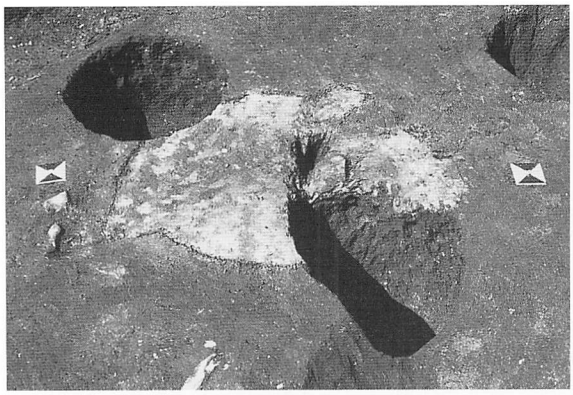


ＲＤ20土坑　断面

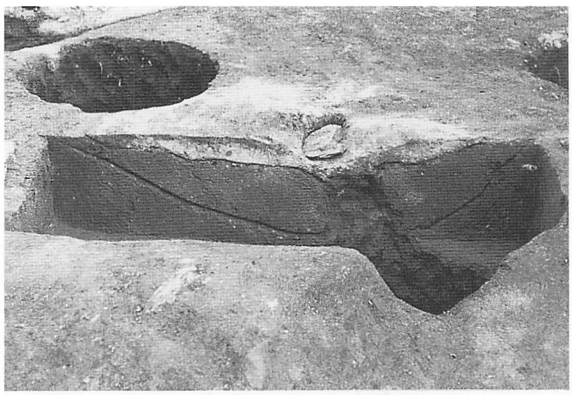
ＲＤ18土坑　礫の検出状況

調査区中央の沢を利用して作られていた池跡

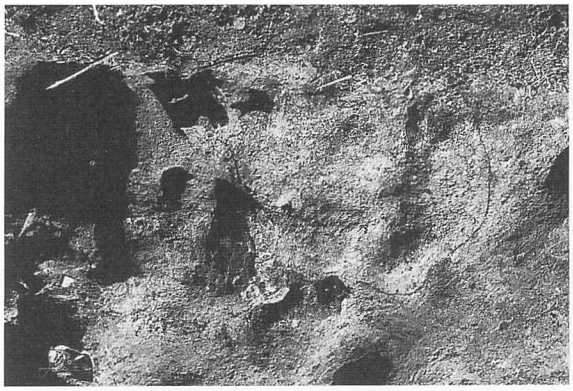
写真図版17　ＲＤ18～20土坑



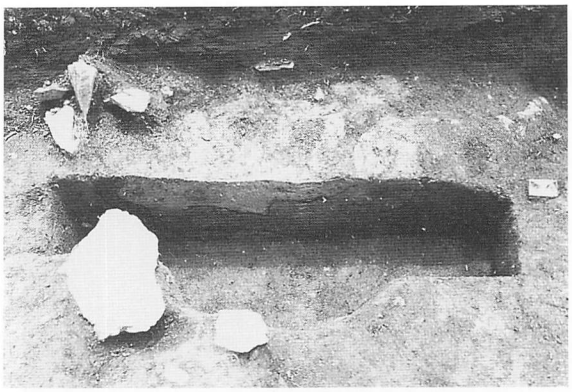
ＲＦ01焼土遺構　平面



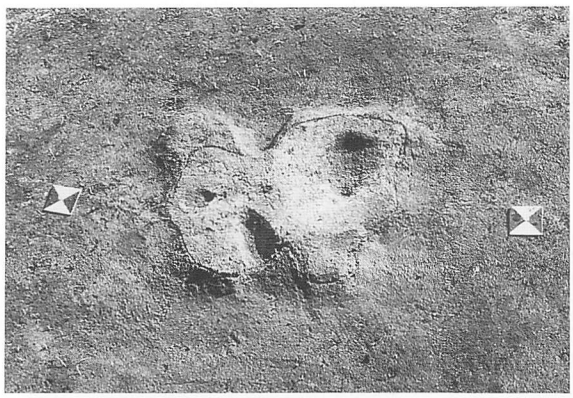
ＲＦ01焼土遺構　断面



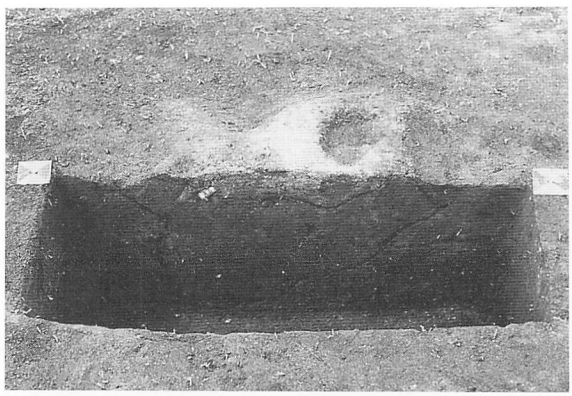
ＲＦ02焼土遺構　平面



ＲＦ02焼土遺構　断面

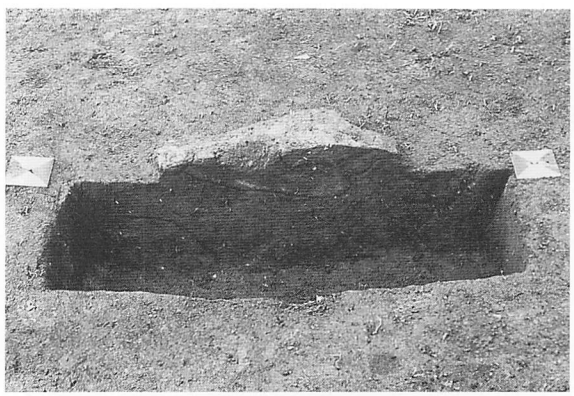


ＲＦ03焼土遺構　平面



ＲＦ03焼土遺構　断面

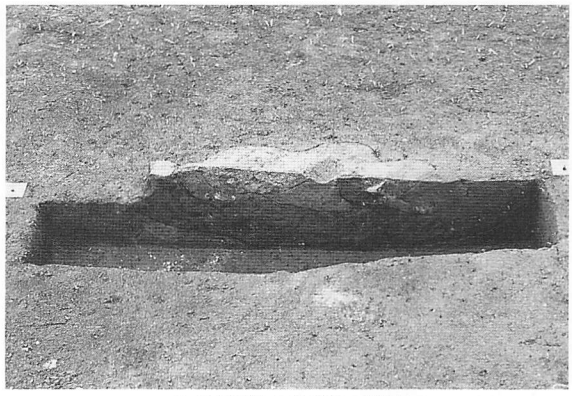
ＲＦ04焼土遺構　平面



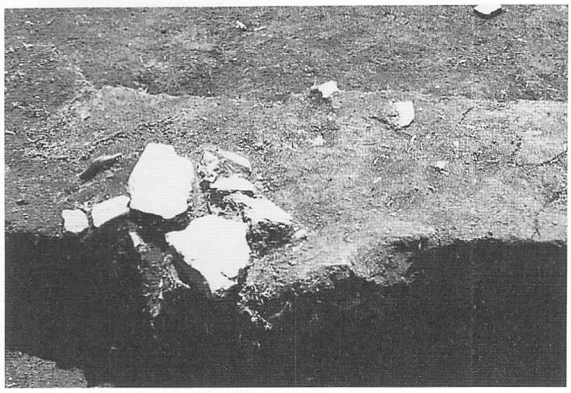
ＲＦ04焼土遺構　断面

写真図版18　ＲＦ01～04焼土遺構

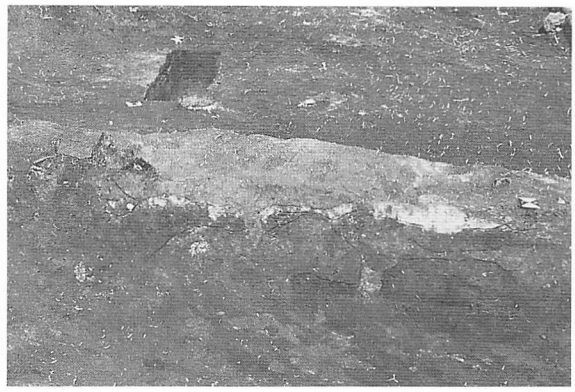
ＲＦ05焼土遺構　平面



ＲＦ05焼土遺構　断面

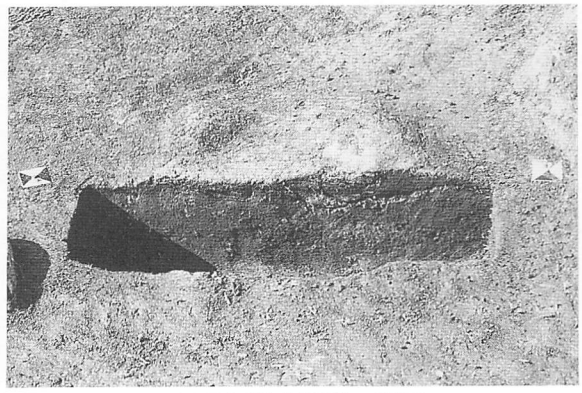


ＲＦ06焼土遺構　平面

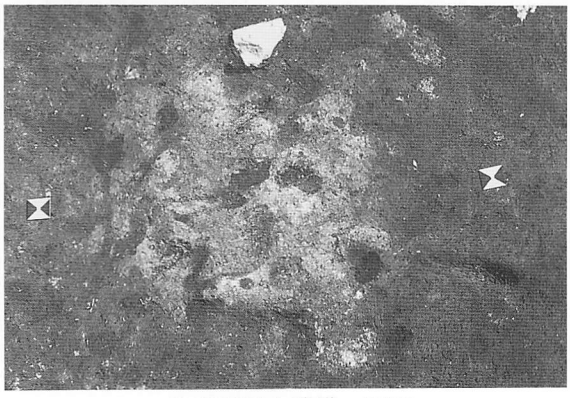


ＲＦ06焼土遺構　断面

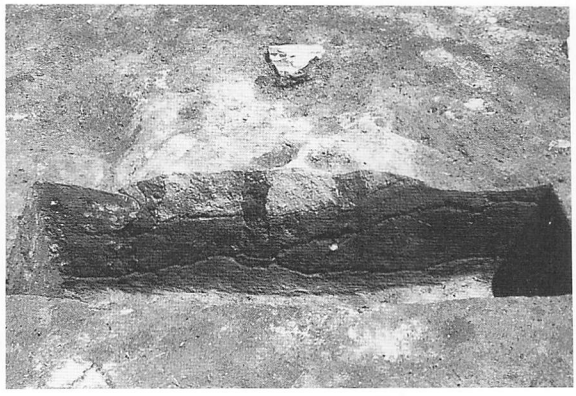
ＲＦ07焼土遺構　平面



ＲＦ06焼土遺構　断面



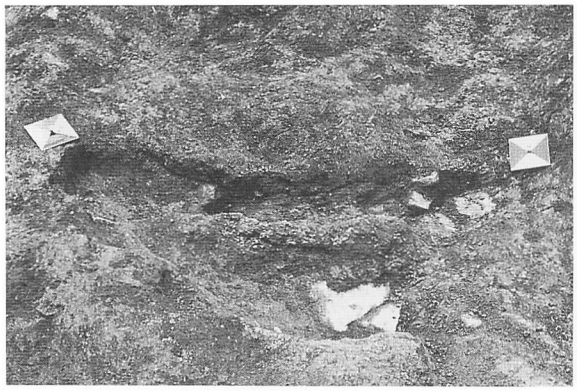
ＲＦ08焼土遺構　平面



ＲＦ08焼土遺構　断面

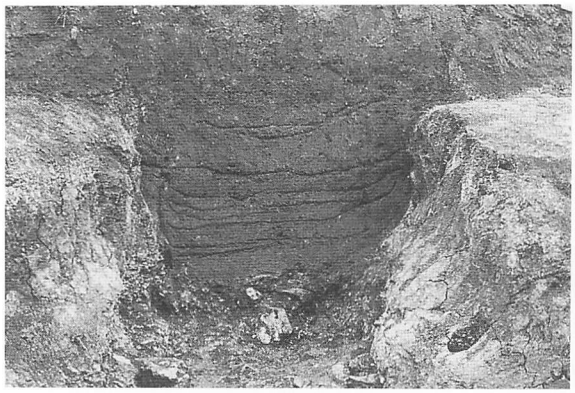
写真図版19　ＲＦ05～08焼土遺構

ＲＢ01掘立柱建物跡内の焼土　平面

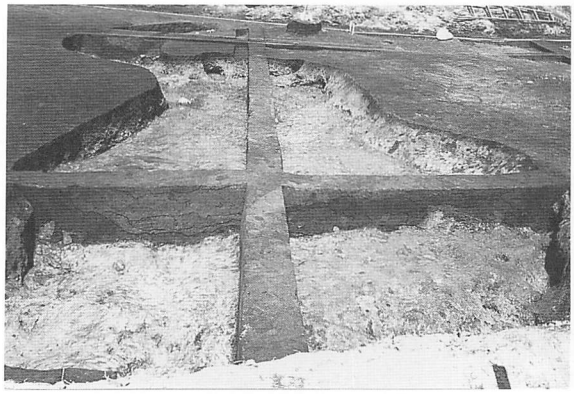


ＲＢ01掘立柱建物跡内の焼土　断面

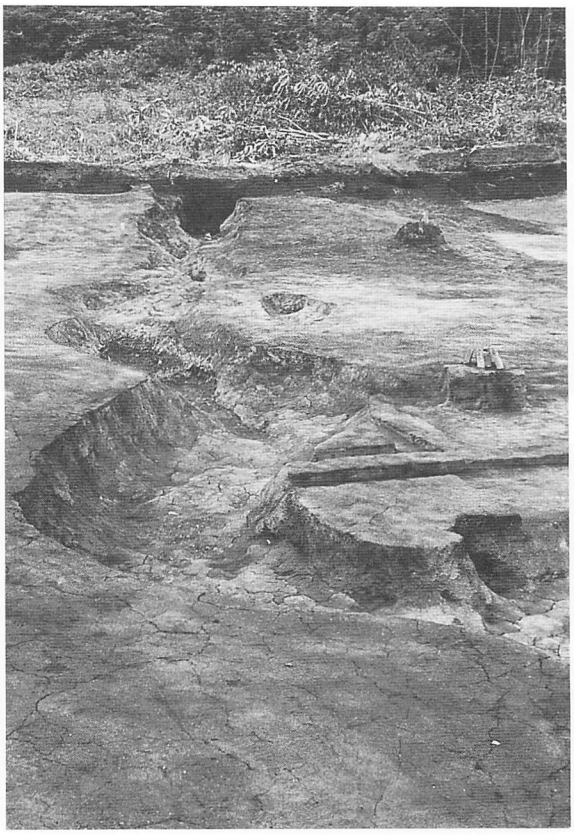
ＲＢ01掘立柱建物跡　平面



ＲＧ01溝跡　断面



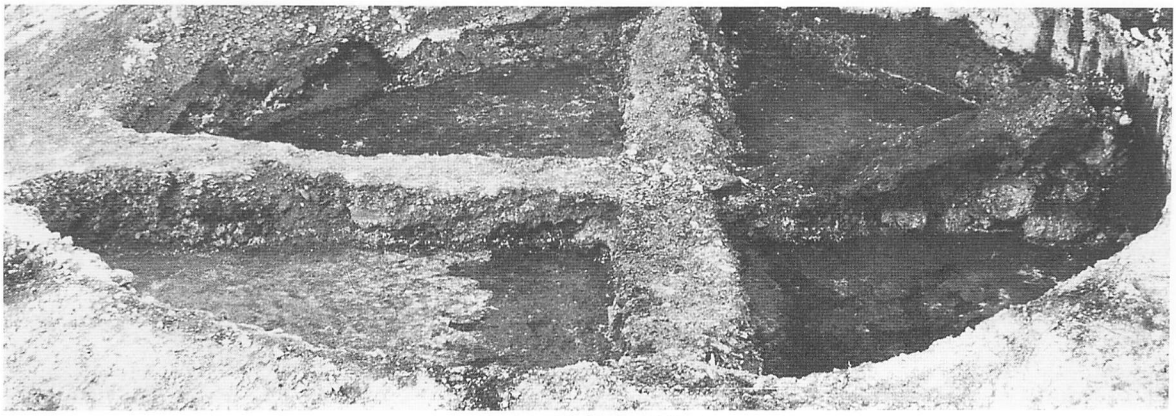
ＲＧ01溝跡　断面



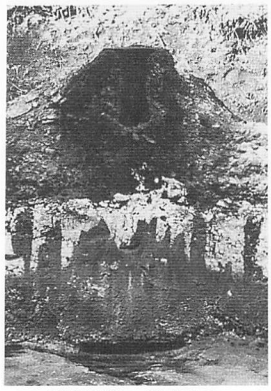
ＲＧ01溝跡　平面

写真図版20　ＲＢ01掘立柱建物跡・ＲＧ01溝跡

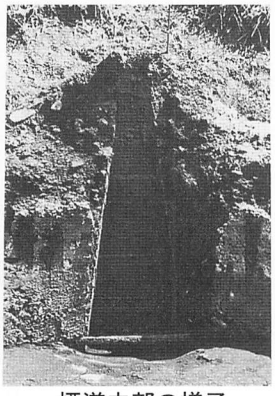
ＲＺ01炭窯跡　平面



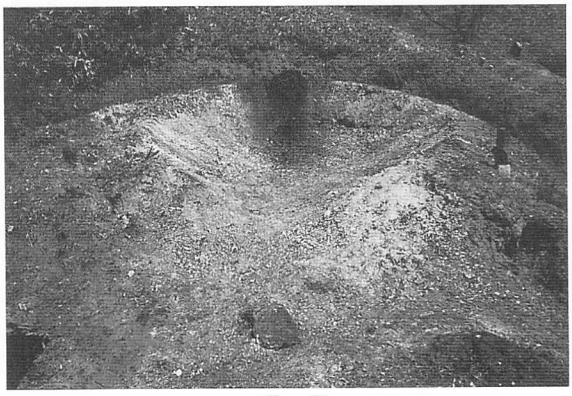
ＲＺ01炭窯跡　断面



煙道部・排煙口



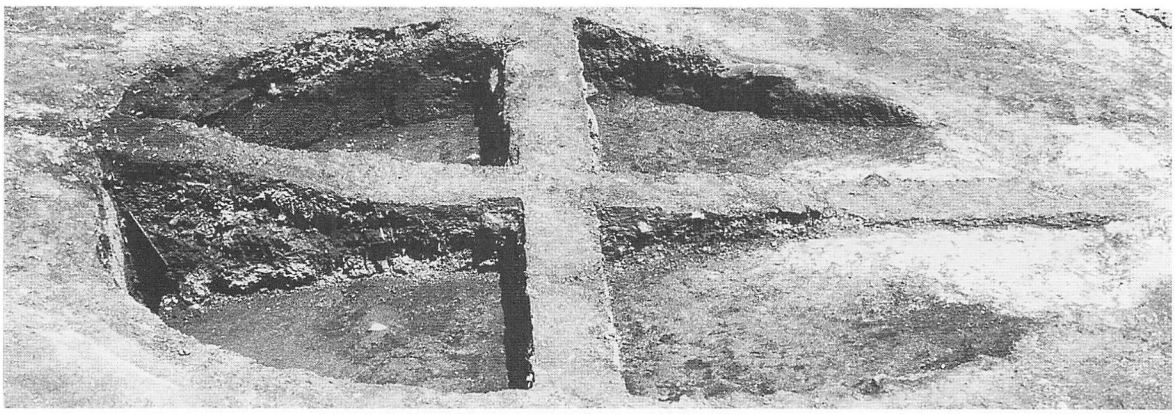
煙道内部の様子



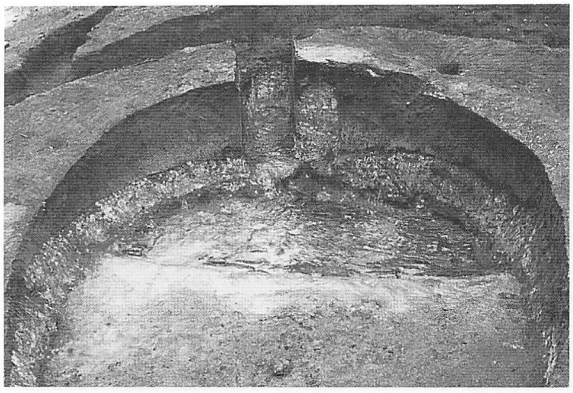
現　況

写真図版21　ＲＺ01炭窯跡

ＲＺ02炭窯跡　平面



ＲＺ02炭窯跡　断面

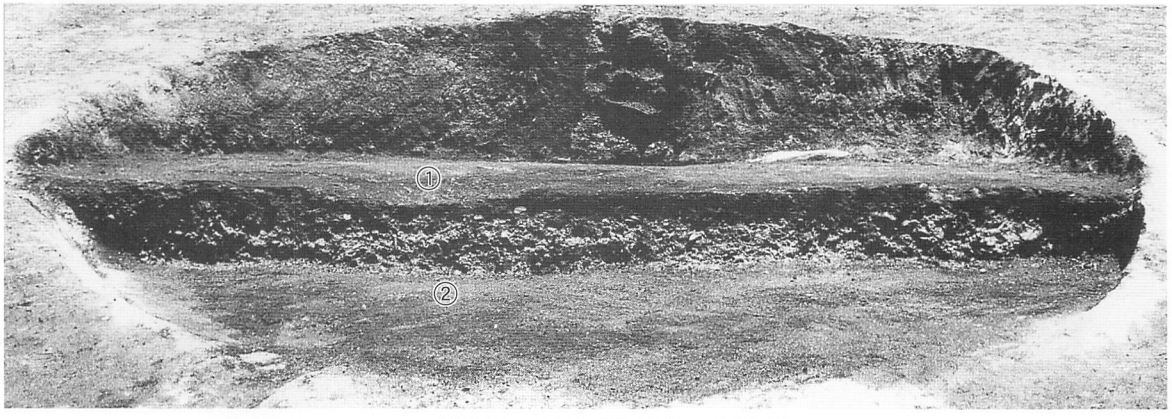


窯底下の炭化材出土状況

現　況

写真図版22　ＲＺ02炭窯跡

ＲＺ03炭窯跡　平面



ＲＺ03炭窯跡　断面（①新底・②旧底）

ＲＺ03炭窯跡　断面（①新底・②旧底）

作業風景

写真図版23　ＲＺ03炭窯跡

1

RA01

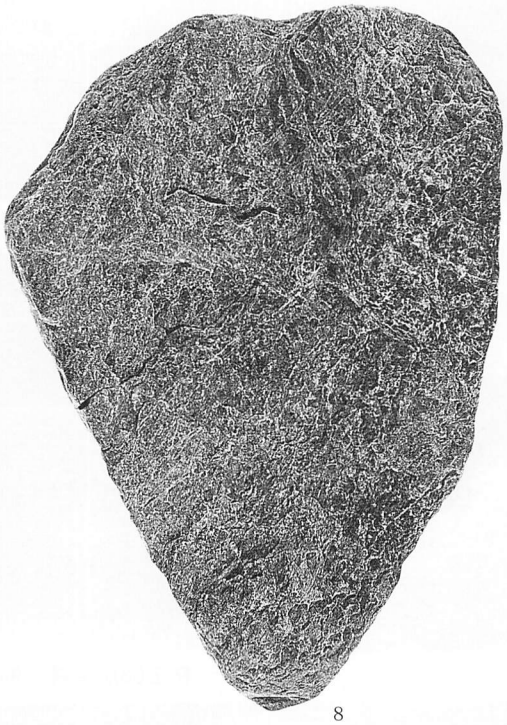
2

RA02

3

5

6



8

4

7

RA03

9

10

11

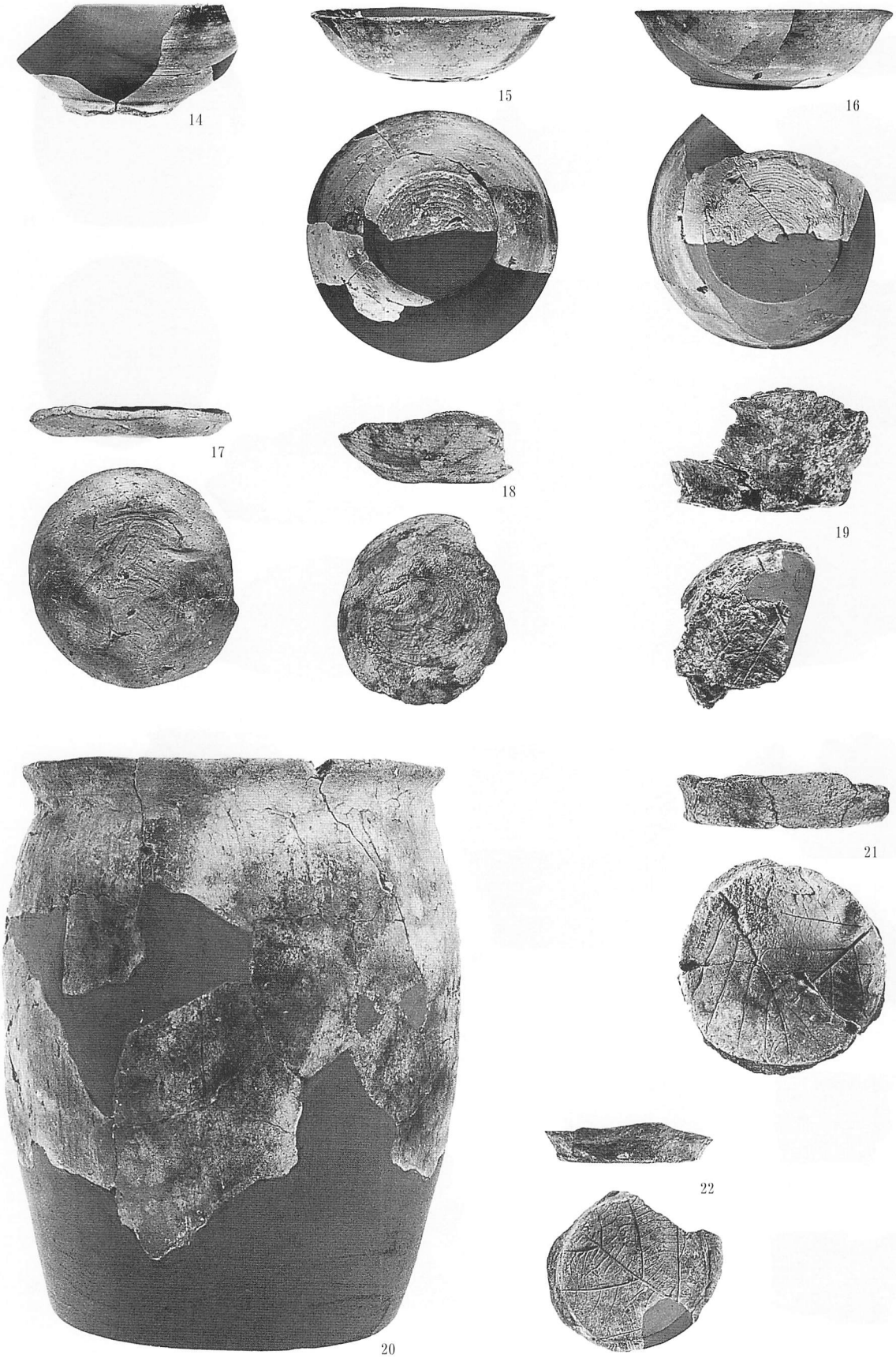
12

13

RA04

S＝1/3
S＝2/5(8)

写真図版24　ＲＡ01･02･03･04出土遺物



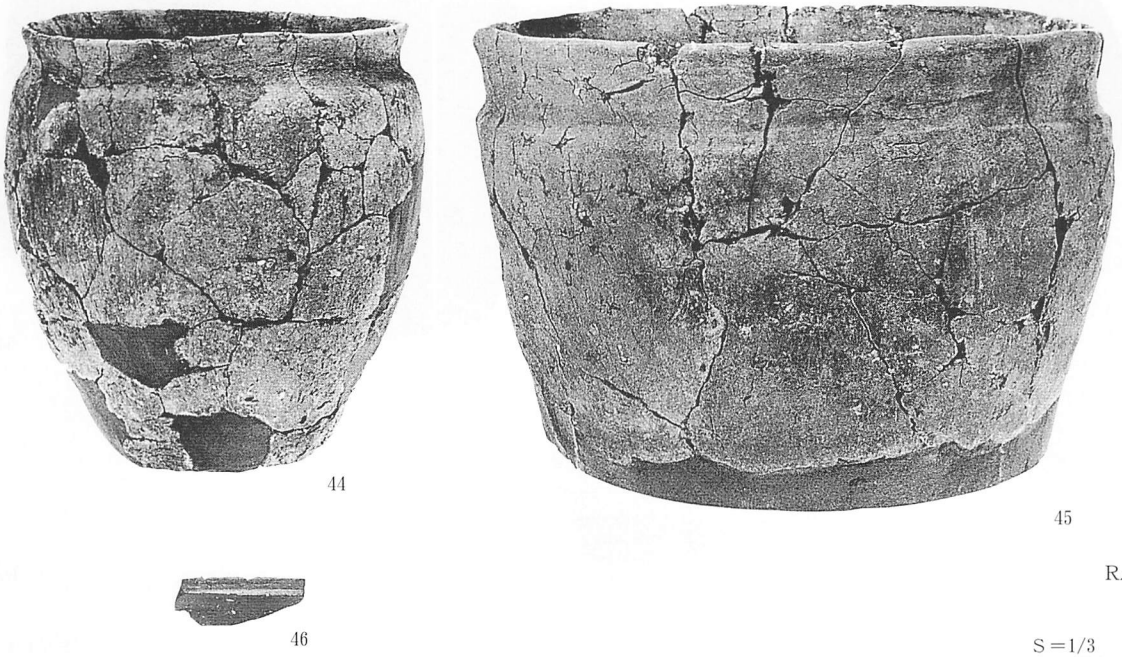
S＝2/3

写真図版25　ＲＡ05(1)出土遺物

S＝1/3

写真図版26　ＲＡ05(2)出土遺物

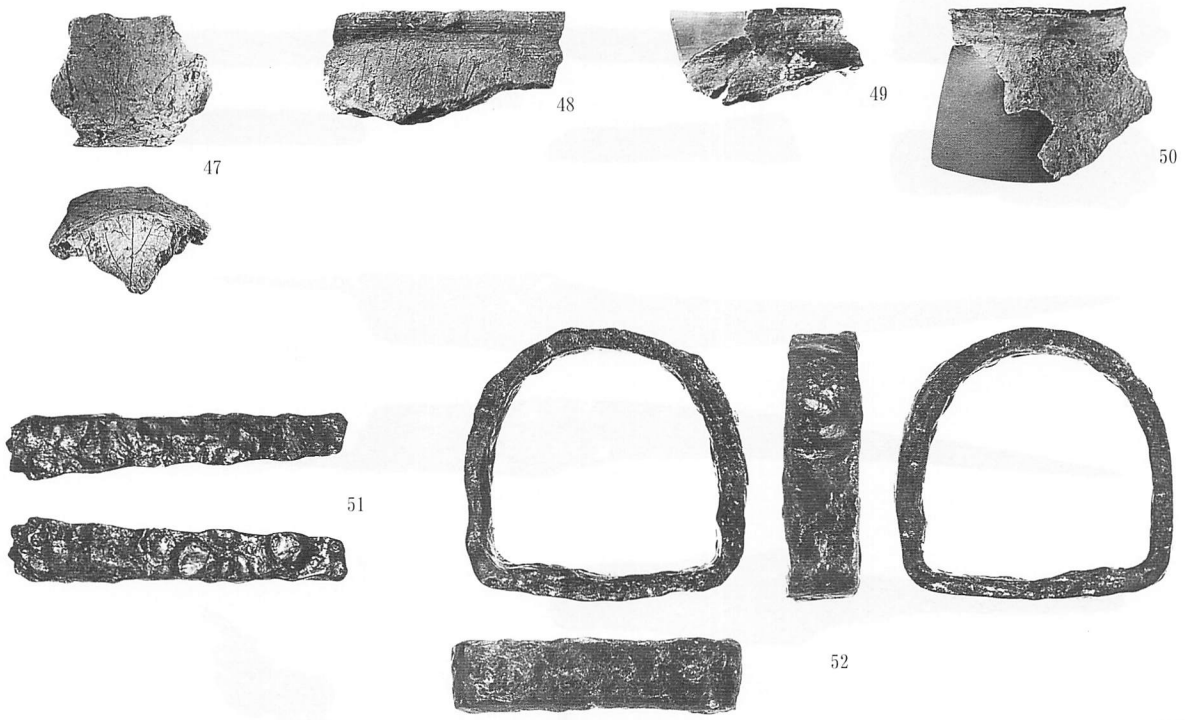
RA05(3)



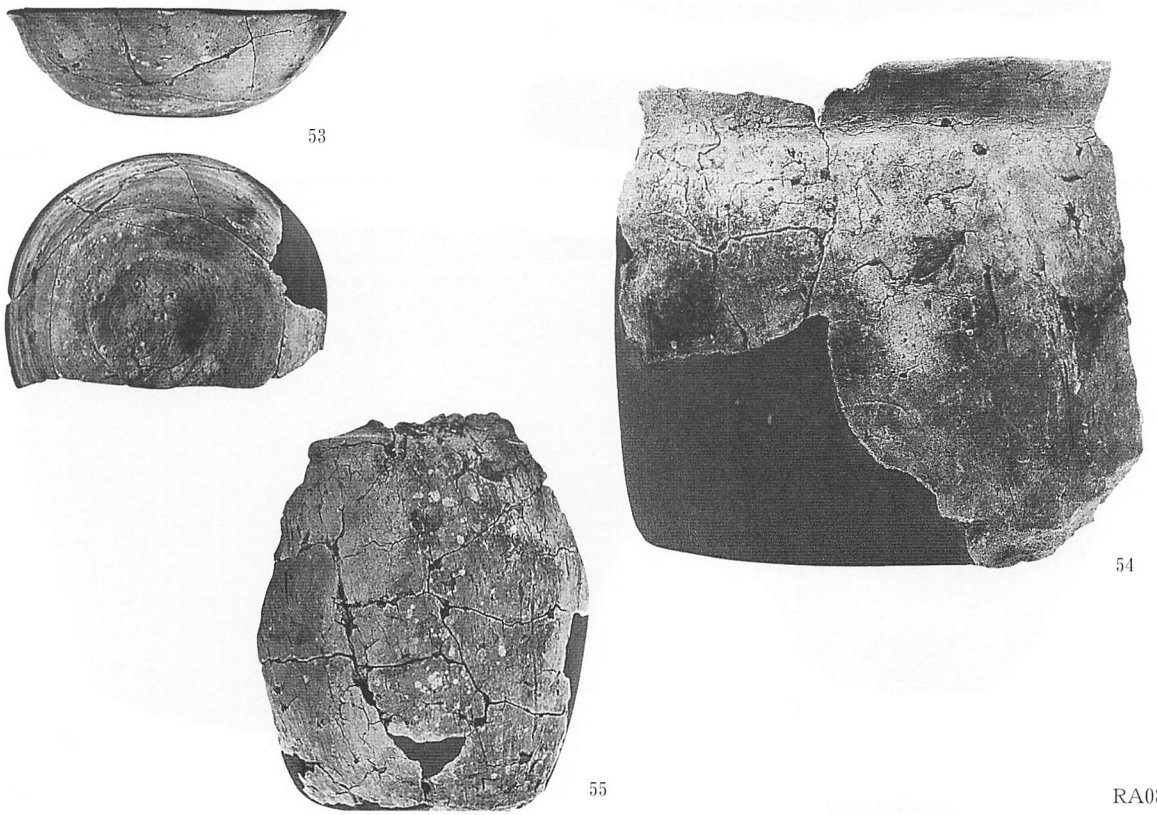
RA06

S＝1/3
S＝2/3(39～43)

写真図版27　ＲＡ05(3)・06出土遺物



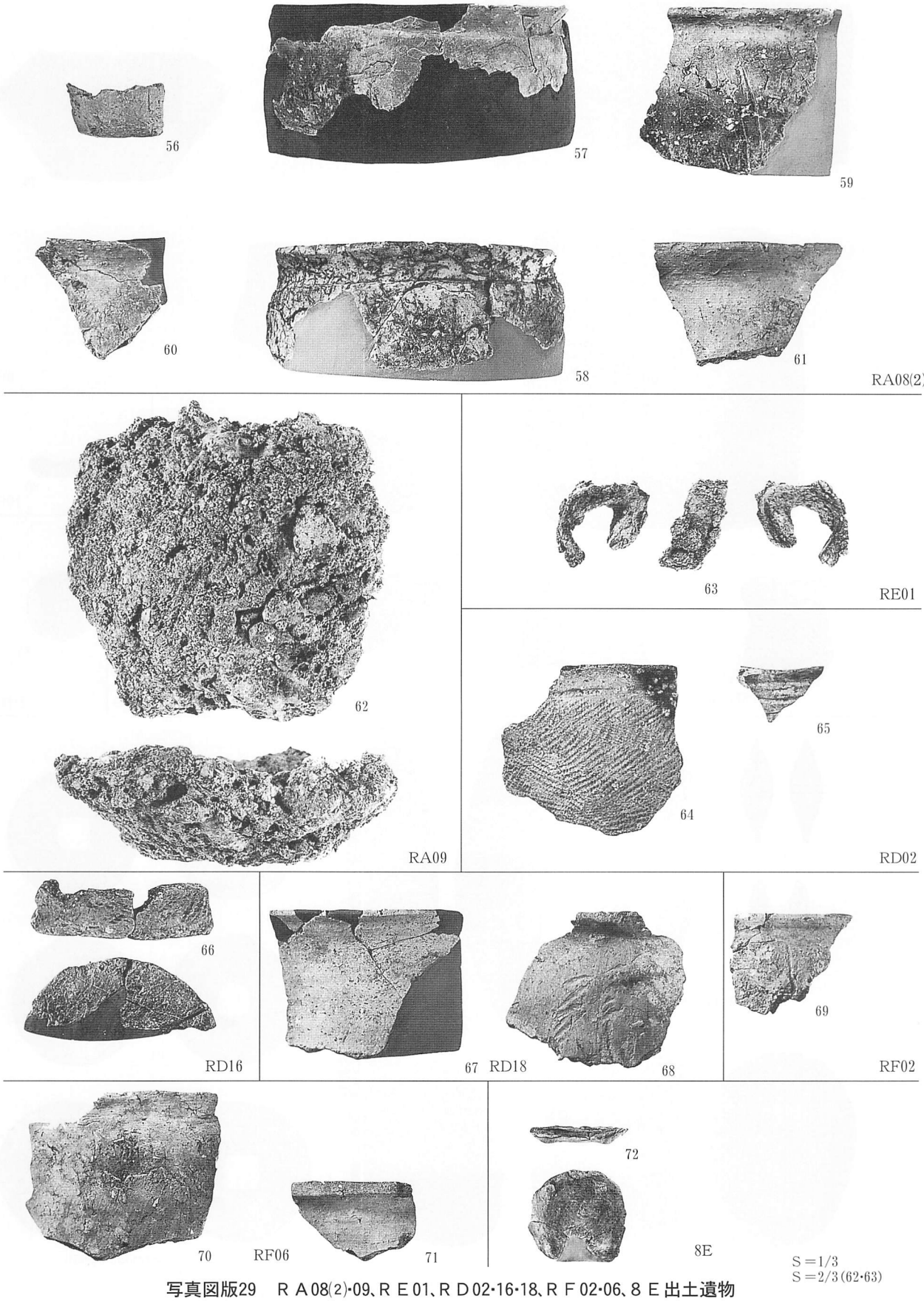
RA07



RA08(1)

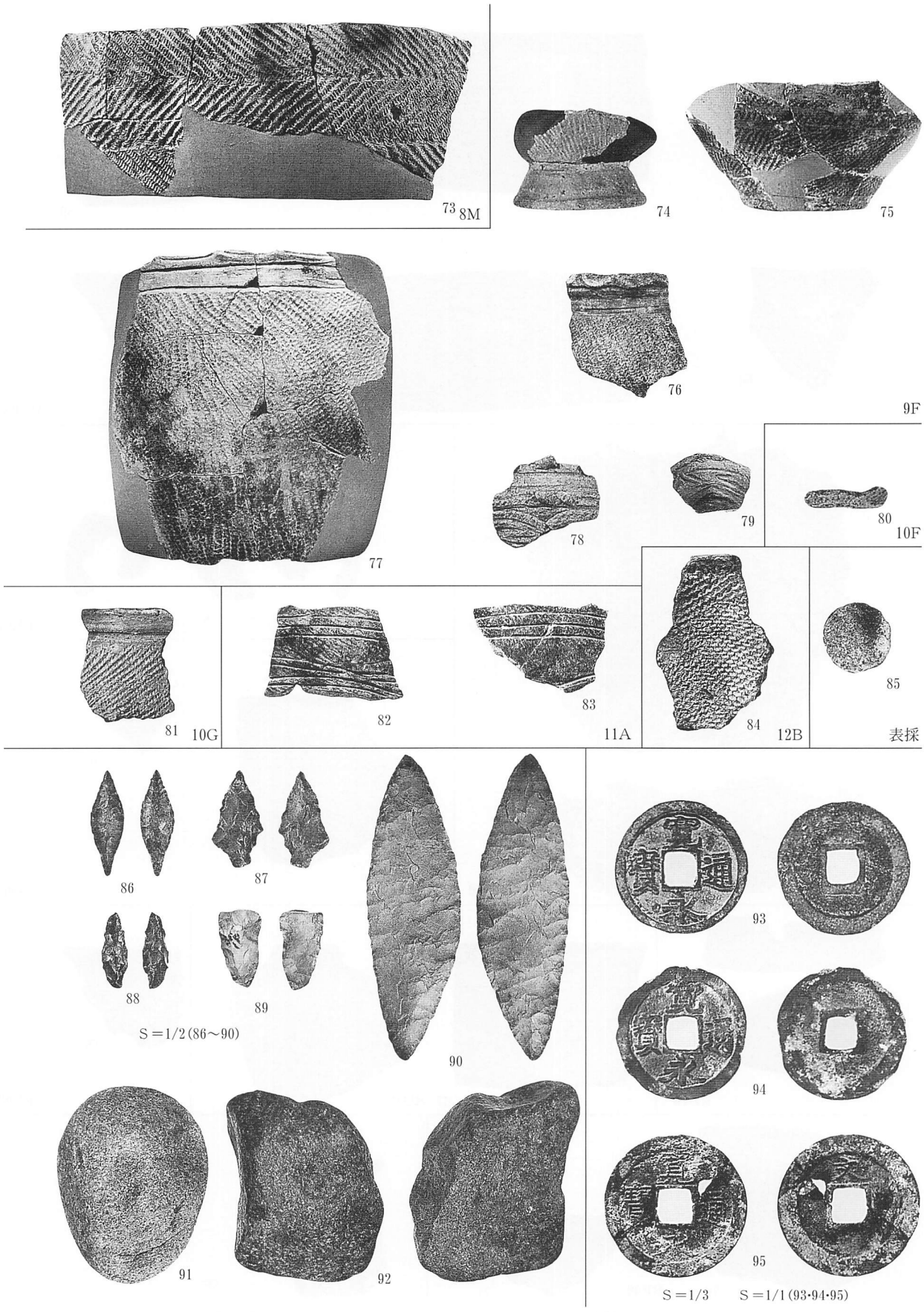
S＝1/3
S＝2/3(51･52)

写真図版28　ＲＡ07･08(1)出土遺物



S＝1/3
S＝2/3(62･63)

写真図版29　ＲＡ08(2)･09、ＲＥ01、ＲＤ02･16･18、ＲＦ02･06、８Ｅ出土遺物



写真図版30　8M・9F・10F・10G・11A・12B出土遺物、石器、銭貨

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所　　長	伊藤民也	副所長	櫻田次男
[管理課]			
管理課長	川浪清徳	嘱　　託	千葉芳夫
管理課長補佐	山崎善光	〃	藤島恵子
主　　査	立花多加志	〃	新田トヨ
主　　事	日影睦夫	〃	佐々木光重
[調査第一課]		[調査第二課]	
調査第一課長	佐々木勝	調査第二課長	高橋與右衛門
調査第一課長補佐	佐々木清文	調査第二課長補佐	中川重紀
主任文化財専門調査員	小山内透	主任文化財専門調査員	高橋義介
文化財専門調査員	赤石登	〃	金子佐知子
〃	吉田充	文化財専門調査員	中田迪
〃	小原眞一	〃	工藤道孝
〃	小笠原健一郎	〃	古舘貞身
〃	金野進	〃	阿部眞澄
〃	鳥居達人	〃	松尾芳幸
〃	金子昭彦	〃	工藤徹
〃	東海林淳美	〃	前田稔
〃	阿部勝則	〃	岩渕計
〃	羽柴直人	〃	早坂悟
〃	小野寺正之	〃	濱田宏
〃	菅原靖男	〃	安藤由起夫
〃	長村克稔	〃	高木晃
〃	溜浩二郎	〃	千葉正彦
〃	菊池貴広	〃	佐藤淳一
〃	村上拓	〃	半澤武彦
〃	本多準一郎	〃	杉沢昭太郎
〃	北村忠昭	〃	中村直美
〃	丸山浩治	〃	星雅之(研修派遣)
〃	村木敬		
期限付専門職員	小林弘卓	期限付専門職員	鈴木聡(12月退職)
〃	江藤敦	〃	吉川徹
〃	藤原賢徳（6月退職）	〃	北田勲
〃	菊池賢	〃	吉田里和
〃	井上信介	〃	原美津子
〃	川又晋	〃	斎藤麻紀子
〃	吉田真由美	〃	島原弘征
〃	北田博義（11月退職）		

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第358集

宮沢遺跡発掘調査報告書

主要地方道戸呂町軽米線建設事業関連遺跡発掘調査

印刷　平成13年３月13日
発行　平成13年３月19日

発行　財団法人 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020－0853　盛岡市下飯岡11－185
電話　(019)638－9001・9002
FAX　(019)638－8563
印刷　株式会社　白　ゆ　り
〒020－0122　盛岡市みたけ六丁目１番50号
電話　(019)643-6060
FAX　(019)643-6065

© ㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2001